西条古墳群

－兵庫県加古川市神野団地造成に伴う埋蔵文化財発掘調査（1963 ～ 1964 年）の成果－

2022 年 3 月

東播磨地域史懇話会

序文

当町内には古くから人々の生活した足跡が残されております。中でも城山の南斜面では数万年前の旧石器が採集されています。また城山の南側丘陵では弥生時代終わりころから古墳時代後期にかけての墳丘墓や多くの古墳がつくられました。

しかし、今から約 60 年前に神野団地造成に伴い行者塚古墳や尼塚古墳、人塚古墳、西条廃寺を除き約 40 基の墳丘墓や古墳が発掘調査され消滅しました。

私が小学 5 年生の時、ミイラが発掘されたと聞き、急いで現場に駆け付けました。20 歳前後の女性であるとのことでしたが今でもその姿を鮮明に記憶しています。

当町内会の「西条会館」には、その時の発掘調査で出土した須恵器や土師器、埴輪、鉄器などの遺物を 2 階ロビーや倉庫に保管していますが、これら遺物は、発掘調査終了後も歴史的位置づけのないまま今日に至っていました。

このたび、平成 30 年度から「東播磨地域史懇話会」の方々により、これら遺物の整理や実測作業などが始まり、歴史的位置づけも行われ令和 3 年度には「発掘調査報告書」が発刊される運びとなりました。

この報告書を通じて、西条地域の歴史的位置づけが行われ、私たちの祖先の姿がよみがえることになります。

当町内には国指定の史跡である行者塚古墳や尼塚古墳、人塚古墳、県指定の史跡である西条廃寺跡が保存されております。また、西条 4 号墳から出土した家形石棺の蓋が塚脇公園に保存されています。これ以外にも城山霊園内に家形石棺の蓋、寺本地蔵と呼ばれる家形石棺の蓋などがあります。

私たちはこれら貴重な歴史的遺産を大切に保存し活用していきたいと考えております。

関係各位にはこの報告書を通じまして私たちの祖先がつくった「西条古墳群」についての歴史的意義へのご理解を賜りますようお願い申し上げます。

また、今回、調査を行っていただいた「東播磨地域史懇話会」の方々に西条町内会を代表して敬意を表し感謝を申し上げます。

令和 4 年 3 月 31 日
加古川市神野町西条
町内会会長　佃　辰雄

ガラスケースに展示保管された土器（西条会館 2 階）

はしがき

加古川市神野町西条の丘陵には５世紀前半には国史跡に指定されている行者塚古墳、尼塚古墳、人塚古墳の大古墳が築かれました。これらは加古川下流域の王の墓と考えられています。

今から約 60 年前、城山に続く丘陵上の神野団地造成に伴って存在が確認されていた西条古墳群の調査が昭和 38 年 12 月から昭和 39 年３月末日まで行われました。当時の発掘調査で出土した遺物は西条町内会の「西条会館」に管理、保管されています。

これら遺物は、調査終了後も「発掘調査報告書」としてまとめられることなく今日に至っていました。そこで私たち「東播磨地域史談話会」のメンバーは、「西条町内会」様のご了解を得たうえで、当時の発掘調査を担当された是川長先生や地元永昌寺前住職中原敏定氏に、これら遺物の取り扱いについて相談し、種々のご助言をいただきました。その上で、当時の発掘調査に携われた方々に手紙をお送りして、ご意見をお聞きしました。その結果、「東播磨地域史懇話会」が「西条古墳群出土遺物調査報告書」としてまとめ発刊させて頂くことについてのご了解を頂くことができました。

私たちは調査者のご意思を受け継ぎ、何とかこれらの遺物、遺構を加古川下流域の歴史の中に位置付けたいと考え、兵庫県教育委員会、兵庫県立考古博物館のご指導、ご意見を賜りながら遺物整理を行ってきました。

またこれら遺物整理作業中に、発掘当時の遺構の実測図や調査日誌、写真などを保管されていた調査者のお仲間を通じて発掘調査時の図面や写真、日誌のご提供を頂くことができました。私たちは平成 30（2018）年３月から、「西条会館」と「陵北小学校」の教室をお借りして作業を行ってきましたが、令和３（2021）年３月には「加古川市教育委員会文化財調査研究センター」と連携することが出来、この報告書の発刊につながりました。関係各位にはこの報告書を通じて「西条古墳群」についてのご理解を賜りますようお願い申し上げます。

なお、今回の報告書作成にあたりご指導とご協力を頂いた方々は次の通りであり、お名前を記してお礼を申し上げます。（敬称略）

是川長・加藤保子・浅岡俊夫・中原敏定・中濱久喜・中村信義・松本智子
西条町内会　佃　辰雄・奥村正人
県立考古博物館　和田晴吾・藤田　淳
神戸市立博物館　山本雅和
加古川市立陵北小学校　高田万樹・堀之内健志・辻　浩樹

令和４年３月 31 日
東播磨地域史懇話会
会長　上月昭信

例言

1. 本報告書は調査の経緯で述べるとおり、1963 ～ 1964 年に発掘調査された西条古墳群の発掘調査報告書である。

2. 当時結成された発掘調査団が主体となり、地元町内会 (西条地区) の協力の下、発掘調査されたもので、以後、当該町内会管理の「西条会館」および一部の調査担当者により保管されていた資料（発掘調査時実測図面・写真・調査日誌・出土遺物等）を広く公開する目的で、有志（後述）により、地元西条町内会、加古川市教育委員会文化財調査研究センターおよび市民協働部市民活動推進課の協力を得て作成したものである。

3. 遺跡の現在所在地名は加古川市西条山手である。

4. 本報告書については、執筆・編集を通じて主に有志 5 名（岡本一士・上月昭信・友久伸子・森内秀造・山本祐作）による合議の下に行い、主たる担当・執筆については目次および各章末・各節末に記した。編集については主に友久が行った。

5. 調査時遺構写真・図面・日誌については主に調査団関係者より託されたもので、遺構図整理・製図は主に上月が行った。
   出土土器接合および実測については有志 5 名の他、田中幸夫・中島愛理・奥村孝子・萬代和明の協力を得て行い、製図は主に友久が新山王諒太・中島の協力を得て行った。
   出土金属製品実測については平尾英希・岡本、製図・執筆 (第 6 章第 4 節）は平尾が行った。
   拓本・遺物撮影は上月が行った。

6. 遺物番号の表示は各遺構・遺物の単位ごとに付し、本文・図版・写真図版を通して統一した。

7. 遺構図については、調査当時の原図に忠実に表し、未記載の事項（方位・座標・標高等）についての加筆を控えた。不備があることをお許しいただきたい。

8. 本文中の参考文献等の注記については各章・各節の執筆者単位で示し、各文末に記した。
   また、本文中挿図についても必要があるものについて、各章・各節の執筆者単位で示した。

目次

序文

はしがき

第１章 実測調査の経緯と経過 ……1 （山本）

第２章 周辺の歴史と環境 ……2 （岡本）

第３章 加古川下流域の古墳群と西条古墳群 ……4 （山本）

第４章 西条古墳群発掘調査の経緯と経過 ……7 （上月）

第５章 西条古墳群の各古墳について
第１節 Ａ群の古墳 ……8 （上月）
第２節 Ｂ群の古墳 ……13 （森内）
第３節 Ｃ群の古墳 ……20 （山本）
第４節 Ｄ群の古墳 ……23 （上月）

第６章 古墳群出土の遺物
第１節 土器（須恵器・土師器） ……25 （森内）
第２節 埴輪 ……47 （山本）
第３節 陶棺 ……49 （上月）
第４節 金属製品 ……52 （平尾）

第７章 弥生時代の遺物 ……57 （友久）
転載；「西条 52 号墓出土品」の共同研究『兵庫県立考古博物館研究紀要』第７号より
……62

あとがき

図版
写真図版

図版目次

図版１　西条古墳群位置図
図版２　１～４号墳と周辺の地形測量図
　３号墳 石室実測図
図版３　１号墳 石室実測図
図版４　２号墳 石室実測図
図版５　４号墳 石室実測図
図版６　５・６号墳と周辺の地形測量図
　５号墳 石材残存状況図
　６号墳 石室実測図
　７号墳 石室実測図
図版７　９・10 号墳と周辺の地形測量図
　９号墳 主体部実測図
　12 号墳 石室実測図
図版８　10 号墳 主体部と付設排水路実測図
図版９　13 号墳 a・b 主体部実測図
　14 号墳 石室実測図
　14 号墳 墳丘断面実測図
図版 10　21・25 号墳と周辺の地形測量図
　21 号墳 主体部（イ～ヘ）検出状況図
図版 11　21 号墳 家形埴輪他出土状況図
　21 号墳の２小石室実測図
　21 号墳の３小石室実測図
図版 12　25 号墳 主体部（１～３）実測図
　25 号墳 墳丘断面図
図版 13　31 号墳 石室実測図
　31 号墳 墳丘測量図
　32・34 号墳 墳丘測量図
　34 号墳 墳丘断面図
図版 14　34 号墳 石室実測図
図版 15　35・36 号墳 墳丘測量図
　35 号墳 石室実測図
　36 号墳 石室実測図
図版 16　37・38 号墳 墳丘測量図
　37 号墳主体部実測図
　38 号墓 壺棺出土状況図
　38 号墳 主体部実測図
　38 号墳 墳丘断面図
図版 17　39 号墳 石室実測図
図版 18　40 号墳 墳丘測量図
　40 号墳 主体部実測図
　51 号墳 主体部（箱式石棺）実測図
図版 19　53 号墳 墳丘測量図
　53 号墳 主体部実測図
　58 号墳 墳丘測量図
　58 号墳 石室実測図
　59 号墳 主体部実測図
図版 20　60 号墳 墳丘測量図
　60 号墳 主体部実測図
　60 号墓 土器棺出土状況実測図
　61・61 の２号墳 墳丘測量図
　61 号墳 小型石室実測図
　61 号墳の２石棺実測図
図版 21　１・２号墳出土土器実測図
図版 22　４・６号墳出土土器実測図
図版 23　７・11・13・14 号墳出土土器実測図
図版 24　21 号墳出土土器 (1) 実測図
図版 25　21 号墳出土土器 (2)・円筒埴輪実測図
図版 26　22・23・25(1) 号墳出土土器実測図
図版 27　25(2) 号墳出土土器実測図
図版 28　29 号墳出土土器実測図
図版 29　30・31・32・33・34 号墳出土土器実測図
図版 30　35・36・38・39・40 号墳出土土器実測図
図版 31　41・58 号墳・無注記土器実測図
図版 32　出土須恵器拓影
図版 33　土師質亀甲形陶棺片実測図
図版 34　出土金属製品実測図（1）
図版 35　出土金属製品実測図（2）
図版 36　出土金属製品実測図（3）
図版 37　出土金属製品実測図（4）
図版 38　出土金属製品実測図（5）
図版 39　出土弥生中期土器実測図
図版 40　出土弥生後期土器実測図（1）
図版 41　出土弥生後期土器実測図（2）

写真図版目次

写真図版１　１号墳石室
写真図版２　２号墳石室
　３号墳石室
写真図版３　４号墳石室
写真図版４　６号墳石室
写真図版５　７号墳石室
　９号墳主体部
　10 号墳箱式石棺出土状況
写真図版６　10 号墳箱式石棺人骨出土状況
　10 号墳石棺内鉄器出土状況
　10 号墳付設排水路出土状況
写真図版７　12 号墳石室
　13 号墳箱式石棺
写真図版８　14 号墳石室
　21 号墳主体部
写真図版９　21 号墳主体部
　21 号墳土器群出土状況
写真図版 10　21 号墳主体部と家形埴輪出土状況
写真図版 11　25 号墳第１主体と土器群
　31 号墳石室
　34 号墳石室
写真図版 12　35 号墳石室
　37 号墓壺棺出土状況
　39 号墳石室
写真図版 13　40 号墳主体部
　40 号墳主体部鉄器出土状況
　51 号墳箱式石棺
　52 号墓主体部検出状況
写真図版 14　52 号墓小石槨と壺棺
　52 号墓壺棺出土状況
　60 号墳主体部
写真図版 15　１・２・６・14・34・58 号墳出土土器
写真図版 16　21 号墳出土土器
写真図版 17　21 号墳出土家形埴輪・23 号墳出土土器
写真図版 18　25 号墳出土土器
写真図版 19　29 号墳出土土器

土器実測（西条会館）　2018.8.31

第１章　実測調査の経緯と経過

加古川市神野町西条に所在する西条会館には、昭和 38 年から 39 年にかけて兵庫県宅地開発課の実施する神野団地造成に伴う発掘調査によって出土した遺物が保存・展示されている。この団地造成地には、かつて 40 基以上の古墳が存在していたことから西条古墳群発掘調査団が編成され発掘調査が行われることになった。その調査成果は、調査団によって『西条古墳群調査略報』として、昭和 39 年にその概要が公表された。その後､調査団から古墳群の詳細について調査報告書が出されることがないまま、60 年が経過した。発掘調査によって出土した遺物は、遺物整理調査をするために調査団の調査員のもとにあったが、様々な経緯を経て、出土遺物のみ西条町内会の西条会館に返却され保存されてきた。

西条古墳群は、加古川下流域の古墳文化を考える上で重要な遺跡と考えられている。東播磨地域を中心に地域史研究を続けている東播磨地域史懇話会の考古部会では、このような貴重な考古遺物が調査されないまま埋もれてしまうことに危惧を感じ、何とか土器実測だけでもできないかと考えていた。平成 30 年５月に西条町内会に実態把握のための実測調査ができないか打診したところ､西条町内会より「西条会館の遺物を何とか現在に生かしてほしい｡」との意向を受け、実測調査に向けての準備を開始することになった。

調査を開始するにあたって、昭和 38・39 年に発掘調査を担当された方々に、遺物を実測の了承を得る必要があると考え、当時の主な調査員の方々に郵送で確認したところ、多くの方々より土器実測調査の了承を得ることができた。これを受けて、考古部会として実測調査を開始することになった。

西条古墳群から出土した遺物は、西条会館の２階のロビーの３つのガラスケースに 108 点が展示されている。さらに、会館内の別棟倉庫に木箱で 42 箱の遺物が保存されていた。なお、西条 52 号墓出土遺物については、現在、県立考古博物館に寄託されている。

調査は、西条会館の展示ケースの遺物実測から始め、未整理の木箱が保管されていた倉庫内の遺物の洗浄･乾燥から遺物台帳づくりを行っていった。その後､台帳をもとに木箱内の遺物の実測を行っていった。各古墳の出土遺物の実測が進む中で、遺物が出土した古墳の遺構との関連を知る必要を感じていたが、その時点では遺構図などの所在は明らかではなかった。その後、各古墳の遺構実測図や写真等の記録が元調査員の自宅に保存されていることが明らかになり、皆様のご尽力により遺構実測図･遺構写真･調査日誌を譲り受けることができた。その結果、出土遺物と遺構図・写真・調査日誌とを照合しながら各古墳の実態を検討することができるようになった。これらの諸資料は、発掘調査時の調査員が詳細に記録されたものであり、唯一当時の状況を知ることができる貴重な資料である。私たちは、出土遺物を実測しながら、当時の遺構図と遺構写真などを照合させつつ、西条古墳群の調査報告書としてまとめることができた。

（山本祐作）

実測調査参加者

東播磨地域史懇話会　考古部会

（岡本一士　　上月昭信　　田中幸夫　　友久伸子　　森内秀造　　山本祐作）

平尾英希　　奥村孝子　　中島愛理　　萬代和明

なお、その他本報告書作成実務にあたっての外部協力者・協力機関は以下に記す通りである。

兵庫県立考古博物館　　加西市教育委員会

永井信弘・新山王涼太・岩本めぐみ（安西工業株式会社）　　田中清美

第２章　周辺の歴史と環境

1.　加古川の地域を捉える

地域の歴史の経過を縦軸と横軸の時間で考えれば、地域はその場所で時間が経過していく縦軸と、中心から波紋が広がるような波の横軸との交差点にあると言えるのではないだろうか。地域の縦軸だけに重点を置くと、それは閉鎖性の強い地域史となり、また縦軸の広がりを意識して記述すれば、逆に地域の独自性が希薄なものになる。このように地域の縦と横の時間軸を総合的に把握しなければ、地域史の表現に歴史的相違を生むことになる。とくに古代の地域の動向は、現在にまで及ぶ歴史の原点であり基層でもある記述には難しいものがある。この地域の動的な脈動感を表現することは、加古川についていえば、これは大河「加古川」が育む地域とは何かということにも繋がるものである。

さて「加古川」によって形成される地域は、古代にあってはその川の両岸に多くの遺跡と古墳群が営まれてきた。とくに加古川市域に形成された古墳群は、地域の国造りの足跡を顕著に示してもいる。とくに加古川の東岸に古墳群が集中することは、西岸にたいして歴史的波動の力学が異なっていたとも考えられる。これは、この時に「加古川」を挟む東西という二つの地域が誕生したことでもある。「加古川」はその下流域を二つの地域に分ける境界であったのである。現在の加古川市は、この二つの地域が合体しているが、その基層には歴史的形成過程が埋没しているのである。この道筋を解明する材料として、西条古墳群の調査研究の意義があり端緒があるといえよう。

2.　旧石器時代から縄文時代へ

加古川が形成した沖積平野には、その複雑な流れと微高地があり、平野部の背後には山地が迫っている。ここに種々な時代の人々の営みの痕跡－遺跡がある。そして今、私達はその場所に住んでいる。
加古川の平野部が現在のように広くなかった二万年前から､人々は山地とその丘陵先端部を生活圏にし、狩りや木の実採集を中心に日々営んでいた。その場所では人達の使った石器が出土している。これを旧石器時代と呼んでいる。代表的な遺跡には、志方町西新池遺跡、岡山遺跡や平岡町の山之上遺跡がある。時代が経過し、彼らは一つの集団を作って台地上に定着した。この定着した集落周囲の季節の移り変わりの中で、狩りや木の実の管理と採集を定期的に繰り返し、それらを食用に土器を使って料理し暮らしていた。この時代を縄文時代という。この季節の移ろいとともに暮らす日々の生活は、7000 年ほど続いている。加古川市内では、八幡町宮山遺跡に住居の痕跡が残されている（遺跡分布図参照)。

3.　弥生時代から古墳時代へ

弥生時代が始まることが、加古川の二つの地域の誕生である。紀元前 500 年頃に稲作が伝わり、加古川の西神吉町岸遺跡が初期の集落である。その当時の人々は稲作の水田を作りやすいように、沖積平野部に生活の場を造り、集落を営んだ。いままでの山に囲まれた自然環境に依存した生活から、今度は自分達が稲という植物を栽培管理する生活が主になった。それは、春に種をまき秋に刈り取り、次の年もこのサイクルが繰り返されていく。生活の中に季節感がより身近なものになった。

弥生時代の中頃になると、集落の人口も増え、集落の領域も拡大した。この時代の遺跡は、加古川の西側に東神吉町砂部遺跡、志方町東中遺跡、加古川の東側には加古川町美乃利・溝之口、野口町坂元遺跡が代表的な集落跡として知られている。現在の加古川は、これらの集落が基礎となって発展してきたといえよう。

砂部遺跡から出土した器台、これは西の吉備地域に通じる形態が見られる。それに対し、東の溝之口遺跡出土の土器は、壺に線刻を多用し、土器技法に美を見せている。その土器は薄く仕上がり、洗練さ

れた技法で作られている。砂部遺跡の土器は、紋様も少なく器も厚手に仕上げている。そして、ここで注目されることは、それぞれの遺跡からは、この東西の遺跡の土器が混在して出土する状況はない。土器の出土が示すことは、東西の地域色に独自性があったことを推測されるのである。

弥生時代の集落の領域は、弥生時代後期に造られた墳墓から知ることができる。集落では、稲の作付や水路の管理の指示、他の集落との関係調停を行う代表者が選ばれた。彼は、集落の暮らしを順調管理するために選ばれた人である。彼が亡くなると、その人の墓が集落から離れた丘陵上に作られた。墳墓は、西では、神吉山、平荘の山地、東では西条の丘陵に造られた。この墳墓と遺跡の距離は 3 ～ 4km であり、これを半径とする範囲、これが一つの集落が管理する領域であったと考えられる。

この時代の墓は円形に盛り土をし、墳丘墓と呼ばれている。加古川西岸では、神吉山 5 号墓、また都台古墳群や上荘町見土呂の八ッ塚古墳群の 3 号墓があり、加古川東岸では西条古墳群 52 号墓である。そして、集落の人達は、自分達の代表への最後の奉仕として、さらに大きな墓－前方後円墳を造り葬った。古墳時代の始まりである。

加古川の東西は、集落で使用される土器に相違があるものの、集落が拡大し墳丘墓をつくるという同じような展開が見られる。しかし、次の古墳時代になると、この東西の地域異相が顕著になる。それは、加古川東岸の日岡山古墳群と西条古墳群が形成されたことである。とくに西条古墳群の研究は、その地域異相を考えるうえでの重要な古墳群であるといえる。

（岡本一士）

▲旧石器時代
1. 西山新池遺跡
2. 岡山遺跡
3. 山之上遺跡
4. 日岡山遺跡

■縄文時代
5. 岸遺跡
6. 宮山遺跡

◎弥生時代
7. 東神吉遺跡
8. 砂部遺跡
9. 東中遺跡
10. 溝之口遺跡
11. 美乃利遺跡
12. 坂元遺跡
13. 手末遺跡
14. 大中遺跡
15. 神吉山 5 号墓
16. 西条 52 号墓
17. 八ツ塚 3 号墓

●古墳時代
18. 長慶寺山 1 号墳
19. 天坊山古墳
20. 聖陵山古墳
21. 日岡陵古墳
22. 西大塚
23. 南大塚
24. 西車塚
25. 東車塚
26. 狐塚
27. 勅使塚
28. 北大塚
29. 行者塚
30. 尼塚
31. 人塚
32. 東沢 1 号墳
33. 西山大塚
34. 里古墳
35. 宮山大塚
36. 升田山 15 号墳
37. カンス塚古墳
38. 池尻 2 号墳 .
39. 池尻 16 号墳
40. 中山 1 号墳
41. 二塚古墳
42. 石の宝殿

加古川市内の主な遺跡分布図　　S = 1：100,000

第３章　加古川下流域の古墳群と西条古墳群

加古川下流域で古墳時代になると、日岡山丘陵には、５基の前方後円墳と３基の円墳が築かれる。調査された古墳がないため、埋葬形態など不明なことが多いが、東車塚古墳や南大塚古墳から舶載鏡の三角縁神獣鏡や石釧が発見されていることから、日岡山古墳群は古墳時代前期に築かれた古墳群であると考えられている。その中で日岡山の最高所にある日岡陵古墳は、全長 99 mの規模をもつ前方後円墳で、日岡山古墳群のなかで一番古く４世紀にさかのぼるのではないかと考えられている。この古墳については、『播磨国風土記』に記載する景行天皇の后とされる稲日太郎姫命を葬った墓に比定されている。このように日岡山古墳群は、日岡陵古墳を最古にして、長期間にわたり綿々と古墳を造り続けてきたことになる。この日岡山古墳群の被葬者たちは、副葬品から大和政権との強い結びつきをもっていたと考えられている。この日岡山古墳群も、北大塚古墳 (中期の前方後円墳) を最後に大型古墳は築かれなくなる。

その後、５世紀代になると墓域を移したかのように西条の台地上に行者塚古墳、尼塚古墳、人塚古墳の大型古墳が築かれていく。行者塚古墳は、前方後円墳で、後円部より朝鮮半島などとつながりがある鉄製品が多く出土している。４世紀代の日岡山古墳群が大和政権と強い結びつきをもった古墳群であるのに対して、５世紀代の西条古墳群は、大和政権下で朝鮮半島などとの結びつきをもった豪族に変化していることに注目したい。

日岡・西条の両古墳群の被葬者は同族であり、墓域のみを移動させたと考えることもできる。一方、両古墳群から出土した埴輪には、製作技法において継続性はないとされることから被葬者は系譜を異にすると考えることもできる。このような日岡から西条への墓域を移動したような現象は、加古川地域だけでなく、大和やその周辺地域でもみられ、大和政権における権力構造の変化に連動しながら地方豪族の栄枯盛衰を映しているのではないかと考えられている。

一方、西条古墳群内の墳丘形態にも変化が認められる。行者塚古墳は全長 99 mの前方後円墳であるが、尼塚古墳、人塚古墳は造り出し付円墳（帆立貝式古墳）と墳丘形態を変化させている。このような４世紀末から５世紀末にかけての古墳群では、有力な階層には前方後円墳を採用するが、５世紀中ごろになると造り出し付円墳や大型円墳を築くようになる。それは、古墳群の造営が階層性をもって築かれていたことや時期経過とともに豪族の身分秩序にも変化があったことのあらわれとも考えられている。

行者塚古墳

行者塚古墳の名の由来は、かつて墳頂に行者堂が建っていたことから付けられた名前といわれ、地元では「調子塚」とか「一本松古墳」とも呼ばれていた。墳丘の全長が 99 m、後円部径 68 m、後円部の高さ 9.1 mで、市内最大の前方後円墳である。墳丘は三段築成で段のテラス上には総数 2,500 本以上の円筒埴輪をめぐらせている。また、朝顔形埴輪、形象埴輪も出土している。さらに、墳丘の斜面には葺石を貼り付けていた。墳丘裾部の４か所で「造出し」とよばれる祭祀跡がみつかっている。そのなかで墳丘西のくびれ部でみつかった造出しは、上面に方形に円筒埴輪を並べ、その中央部に祭殿と思われる家形埴輪を配置し、その前で、高坏や籠状土器

行者塚古墳の造出し部の復元埴輪

と共に土で作った魚や木の実などの供物が置かれていた。墳丘北東の造出しでは武具の埴輪もみつかっている。このような造出しの状況は当時の死者に対して行っていた古墳のまつりの痕跡とされている。さらに後円部の墳頂からは、鉄製馬具や鉄鋌、鉄斧、帯金具、巴形銅器、鉄刀、鉄剣、農具などが出土している。これらの副葬品には、中国の西晋時代に出自が求められる帯金具や朝鮮半島との繋がりを示す鉄製馬具や鉄鋌などが含まれ、国際色豊かな副葬品をもっていたことがわかった。

人塚古墳

白鳳期の寺院とされる西条廃寺に隣接して築かれている古墳で、墳長 61.5 m以上、円丘部径 61.5 m、高さ 10.4 mで、西側に大型の突出部がつく造り出し付円墳である。さらに、最近の調査で、大型の突出部の近くに小型の突出部も付くことが確認されている。墳丘の周囲は幅約 10 mの周溝をめぐらせていた。墳丘は二段で構成され、基底部には、竜山石の割石を貼りつけ上部には川原石を貼りつけていた。墳丘の１段目には円筒埴輪列が確認されている。この古墳からは円筒埴輪とともに家形埴輪や盾形埴輪も確認されている。主体部は調査されてはいないが、出土した埴輪などから、行者塚古墳に続く時期に築かれた首長墓と考えられている。

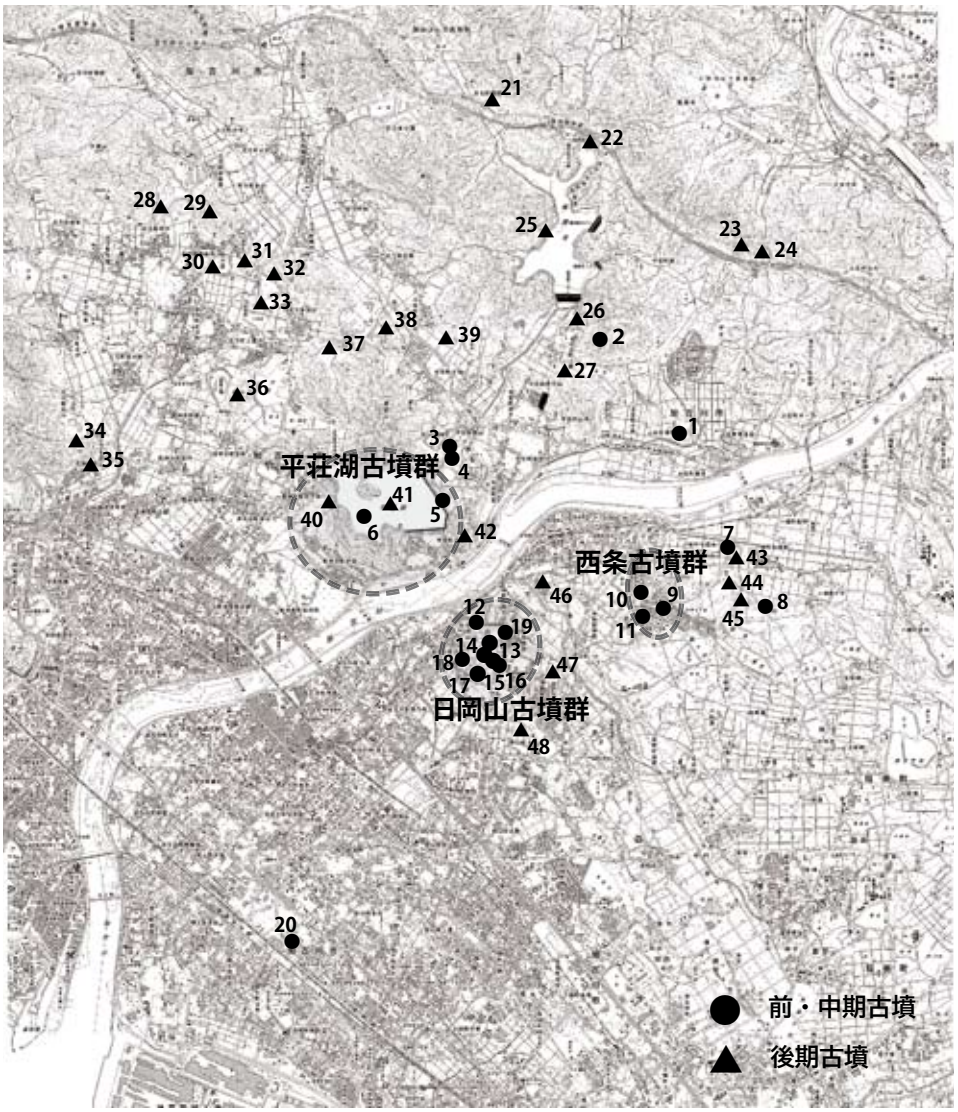
人塚古墳全景

尼塚古墳

尼塚古墳は、行者塚古墳と人塚古墳の間に位置する古墳で、墳長が 51 m、円丘部径約 45 m、高さ６m、南側に長さ７m、幅 13 m、高さ 1.2 mの造出しがついている。墳丘の周囲には幅７～８mの周溝をめぐらしている。墳丘は２段で構成され、２段目には葺石が施されていた。葺石は上段に川原石を中心にし、基底部には、竜山石を用いていた。さらに墳丘の１段目には埴輪列が確認されている。また形象埴輪の存在も確認されている。これらの出土した埴輪などの観察から西条古墳群の首長墓として最後に築かれた古墳と考えられている。

尼塚古墳全景

（山本祐作）



加古川市内の主な古墳

1 長慶寺山古墳群
2 天坊山古墳
3 里古墳
4 西山大塚
5 池尻２号墳
6 カンス塚
7 宮山大塚
8 東沢古墳群
9 行者塚
10 人塚
11 尼塚
12 日岡陵
13 西大塚
14 南大塚
15 西車塚
16 東車塚
17 狐塚
18 勅使塚
19 北大塚
20 聖陵山古墳
21 野尻古墳群
22 奥新田古墳群
23 カメ焼谷古墳群
24 神子ヶ谷古墳群
25 中山古墳群
26 上原古墳群
27 上原古墳
28 西中古墳群
29 天神山古墳群
30 志方大塚
31 志方宮山古墳
32 石打山古墳群
33 二子塚古墳
34 志方西山大塚
35 辻古墳群
36 神吉宮山古墳群
37 塚山古墳
38 広尾二塚古墳
39 八ツ仏古墳群
40 升田山 15 号墳
41 池尻 16 号墳
42 地蔵寺古墳群
43 八幡宮山古墳群
44 成福寺古墳群
45 新池古墳群
46 神野二塚古墳群
47 石守古墳群
48 水足古墳群

第４章　西条古墳群発掘調査の経緯と経過

西条古墳群の発掘調査の経緯や経過について書かれたものは調査団から発行された「西条古墳群発掘調査略報」（注１）や、調査参加者が書いた「発掘調査日誌」（注２）、責任ある立場で調査に参加された方が発掘の「契機と調査体制」を書かれたもの（注３）があり、直接、筆者も調査参加者から経緯、経過を聞き取ったことがあるので、これらをもとにそれを述べてみたい。

西条古墳群が破壊の危機にあることを最初に認識したのは葛野豊氏であった。葛野氏は兵庫県庁で加古川市神野町西条の台地一帯の開発計画を示す模型を見たことから、前年度（1962 年度）の遺跡分布調査（兵庫県教育委員会主導）で加古川市域を担当した松本正信氏に遺跡の有無を確認した。松本氏から工事予定地には４基以上の古墳があることを聞いた同氏は関西学院大学の武藤誠教授に問題を提起し、武藤氏の努力で急遽発掘調査をすることになった。発掘の費用は原因者（兵庫県）負担、調査団長は武藤誠氏、この呼びかけに応じて調査に参加した方は兵庫県文化財問題協議会（略称兵文協）メンバーと関西・関東の大学の学生、高校生ら 45 名以上にのぼった。調査担当者のうち武藤氏から現場を任されたのは葛野豊、是川長、松本正信他であった。

この調査は、兵庫県宅地開発課の施行する神野団地造成に伴う埋蔵文化財の発掘調査であった。発掘調査は昭和 38 年 12 月 25 日から昭和 39 年１月 12 日頃まで第一次調査が行なわれた。

年末のあわただしい時期に地元の永昌寺に強引に宿舎を提供して頂き、また、食事から風呂までお世話になった。調査責任者達は勤務しながら学校の冬休みをこれにあてた。調査は一次調査だけでは終わらず、昭和 39 年３月 10 日から４月 18 日まで第二次調査が春休みを利用して行われた。この時も永昌寺に宿舎を提供して頂き、また、食事から風呂までお世話になった。調査初日の昭和 38 年 12 月 25 日の夜には調査員で今回の調査の経過、調査の組織、目的、今調査の研究、問題点（古墳群と群集墳の関係、各埋葬の相違、形態の究明、地域の究明について）を出し合うなど細かい打ち合わせの会議が行なわれている。調査団としてノートを購入して古墳毎に毎日、各自が日誌を作成するなどの申し合わせも行われたようである。調査は、先ず、近々に破壊されるであろう１号墳から７号墳までの調査にかかることにしている。なお、調査開始日の 12 月 25 日には兵庫県教育委員会文化財係の島田清氏も同行して現地の古墳を見回っているときに人塚古墳の外堤がブルドーザーで削られつつあることを発見し、島田氏に中止の手続きをとってもらったり、西条廃寺跡にもブルドーザーが入ってきた時も中止要請などを行ってもらったりしたことが日誌に記されている。

いずれにしても、昭和 30 年代の文化財保護行政は現在のように整備されておらず、自治体の対応も十分でなく、調査もされずに破壊されていく古墳を見て調査参加者の悔しさや悩みも多かったものと思われる。結果的には調査団として約 40 基の墳丘墓や古墳の発掘調査を行い、図面も作成され、遺構写真も撮られ、遺物も保管され、これらが関係者の責任ある対応で今日まで保管されていたことから今回の我々の調査報告につながったものである。

（上月昭信）

注１　1964 年「西条古墳群調査略報」西条古墳群発掘調査団

注２　1963 年「発掘調査日誌」西条古墳群発掘調査団

注３　2009 年２月松本正信・加藤史郎「附・特別報告　兵庫県加古川市西条 52 号墳発掘調査の記録」『弥生墓からみた播磨』第９回播磨考古学研究集会実行委員会

第５章　西条古墳群の各古墳について

発掘調査団は古墳の所在する地形からＡ群、Ｂ群、Ｃ群、Ｄ群の４群に分類してそれぞれ群ごとに古墳の番号をつけている。

Ａ群は、大型古墳や寺院址の北側に、小さな西向きの谷を隔てて、ほぼ東西にならんで点在する西条古墳群で最も南に位置する。Ａ群には１号墳～ 14 号墳がある。

Ｂ群は、この台地の中央部に存する墓地の中に一群の古墳が分布しており、これをＢ群としている。この群には 21 号墳～ 30 号墳まである。調査不能の古墳もあり、主体部が不明の古墳もある。

Ｃ群はＢ群の北、台地に切り込んだ西向きの小さな浸蝕谷の北側に東西に点在する一群を呼び、Ｃ群には 31 号墳～ 39 号墳がある。

Ｄ群はこの台地の一番北にある小さな谷を利用して、西条と中西条を結ぶ道路が開削されており、この掘割の道路北側と南側に所在する一群の古墳をＤ群とする。Ｄ群には 40 号墳～ 60 号墳がある。

なお、本報告では中世の蔵骨器と土壙墓群が確認されたＥ群を除外している。

今回、この調査団から発行された『西条古墳群発掘調査略報』（1964）や当時の調査日誌、発掘調査時の実測図、写真、今回、我々が新たに実測した遺物実測図もあるので、これらをもとにして西条古墳群の各古墳を群ごとに説明する。なお、記述に当たって主に引用した上記『発掘調査略報』については文中で「略報」と記すこととする。

第１節　Ａ群の古墳

発掘調査の結果、Ａ群で古墳と確認されたものは、１・２・３・４・５・６・７・９・10・12・13・14 号墳の 12 基である。

このうち最も東の１号墳から南西に向かって２号墳、３号墳、４号墳の順に並んで所在していた。発掘調査の結果、古墳ではなく欠番となったのは８号墳と 11 号墳である。

１号墳（図版２・３・21・写真図版１・15）

略報によれば、「本群集墳中最も南東端に位置する。その位置のせいかやや目立つ程度に封土が残存していた。主体部は普通の無袖横穴式石室。主軸の長さは 6.40 m、幅 1.80 m、封土の遺存状況に比して石室の遺存状況は良好でなく、奥壁で２段、側壁も２段しか残っていなかった」と記されている。

墳丘は大きく改変されており、地形測量図（図版２）から判断して径 10 m程度の円墳であったと推測される。石室実測図（図版３）から無袖式の横穴式石室墳で、奥壁は２段（高さ 1.60 m）残存しており、側石は場所によっては４段ほど残存していたことがわかる。石室の長さは 8.70 m、石室の幅は奥壁部で 1.68 m、中央部で 1.90 m、羨道部で 1.70 m、側壁の高さは奥壁部で 0.95 m残存していた。

石室の１段目は比較的大きな割石（幅 0.6 ～ 1.0 m、高さ 0.3 m～ 0.5 m）を積み、２段目より上はそれよりやや小さい割石を積み上げて石室を構築している。

出土遺物には、須恵器と鉄器、金環がある。（図版 21・34）

須恵器は坏Ｈの蓋と身、高坏、長頸壺、壺、甕などがあり、鉄器には刀子 1、刀子片 (?)1、鉄鏃片 (?)1、があり、耳環も１点出土している。

時期は「陶邑編年」（注２）の TK217 形式、「中村編年」（注３）のⅡ形式６段階、「都城の土器集成」（注４）の飛鳥Ⅱ形式、時期は川原寺創建（655 年）以前でそう遠くない時期、７世紀第Ⅱ四半期と思われる。

２号墳（図版２・４・21・34・写真図版２・15）

略報によれば、「１号墳と裾を接して存在する古墳であるが、調査の結果より見ると、周辺の開墾に墳頂部を削平されており、裾部は相当埋められているようであった。主体部は本群集墳通有の無袖横穴式石室で、奥壁前幅 1.40 m、長さ 6.20 m。羨門閉塞装置が一部残存していたが、概して遺存状況は石室に関する限り、奥壁部の方が良好であった。しかし天井石は既になくなっており、石室の原高は求めるよしもないが奥壁の構造から推して、現存する高さ 1.80 mよりはさほど高くなく、或いは、この上に直接天井石が載っていたことも考えられる。床面には礫が敷いてあった。」と記されている。墳丘は地形測量図から判断して径 10 mぐらいの円墳であったと思われ（図版２）、１号墳と裾を接していたが開墾によって墳頂部は削平され、裾部も相当埋められていた。発掘調査の結果、周壕を持っていたことが確認された。

石室実測図（図版４）によれば横穴式石室で無袖式。石室の遺存状況は奥壁部のほうが良好で、天井石は失われていたが現存する側壁や奥壁の上に天井石が載っていた可能性が考えられた。石室は長さ 9.50 m、幅は奥壁部で 1.50 m、中央部で 1.65 m、羨道入口で 1.65 m、高さは奥壁部で 1.80 m、１段目は比較的大きな割石（幅 1.0 m・高さ 0.5 m程度）を並べ２段目から上はやや小さな割石を５段から６段積んでいる。羨道には閉塞石があり、床面には礫が敷かれていた。

なお、羨門付近に箱式石棺と思われる石材が存在し図面でも確認できた。薄く割った石を立て側石としており、両側に２石ずつ確認でき、小口にも１石を使用していた。このことから箱式石棺は幅 0.50 m、長さ 0.90 mまで確認できた。この箱式石棺にも遺体が埋葬されていたとすれば上記のものを含めると３体以上の被葬者がこの古墳に埋葬されていたことになる。

出土遺物のうち須恵器は坏Ｈの身と蓋、高坏、平瓶、長頸壺、坏Ａの身、椀、土師器甕がある（図版 21）。また、金属器には鏟 1，刀子 2、刀子片 2，鉄釘 8、鉄釘片 11?、耳環２が出土している（図版 34）。耳環は２ケ所から出土していることや木棺に使用された釘の出土位置から２体以上の埋葬があったものと考えられ、羨門近くの箱式石棺を併せれば３体以上の埋葬が行なわれたものと思われる。

時期は坏Ｈの蓋と坏Ｇ、土師器の甕は陶邑編年ＴＫ 217 形式、中村編年のⅡ形式６段階、「都城の土器集成」の飛鳥Ⅱ形式、時期は 655 年以前でそう遠くない時期、７世紀第Ⅱ四半期、長頸壺は陶邑のＭＴ２１，飛鳥編年の飛鳥Ⅴの８世紀前後、椀は平安時代のものと思われる。

３号墳（図版２・写真図版２）

略報には「南向の無袖横穴式石室。封土は耕作のため既に失われていた。奥壁部 1.34 m、羨道幅 1.55 m、長さ 6.10 m。天井石はなく、側壁も最も残存状態の良いところでも僅か２層程度しか遺存していない。遺物も既に殆んどなくなっており、石室内の随所に骨粉、骨片、鉄器（釘、鏃）、須恵器片、土師器片が散乱しているに過ぎなかった。尚、床面一帯に割石がアトランダムに散乱していたが、これは敷石とは異なるようであり、後世の所産と思われる。」と記されている。

墳丘は耕作のため既に失われていたが、図版２の敷地の範囲からして径 10 mぐらいの円墳と思われた。発掘調査の結果、横穴式石室で無袖式（図版２）。石室は長さ 6.20 m、幅は奥壁部で 1.35 m、中央部で 1.50 m、羨道部入口で 1.55 mである。側壁は１段目と２段目の一部が残存しており、高さは 0.4 ～ 0.6 mほど残されていた。石室の天井石は失われ、奥壁は１段目が残されており中央に幅 10 m、高さ 0.4 mの比較的大きな石を置きその両側にそれより小さな割石（幅 0.2 m、高さ 0.4 m）を置いて奥壁の１段目とする。側壁は１段目と２段目がかろうじて残存しており、１段目は奥壁に近い部分に比較的大きな割石（幅 0.5 ～ 0.6 m、高さ 0.5 mぐらい）を使用しており、側壁は石室入口付近は幅 0.6 ～ 0.7 m、高さ 0.1 ～ 0.2 mの扁平な石材を使用しており玄室相当部分と羨道部分を区別しているような感を呈している。

石室内からは人骨片のほか遺物として鉄釘片 8?、不明鉄器片 2? が出土している（図版２）。

４号墳（図版２・５・22・34・写真図版３）

略報には「本群集墳中 21 号墳（方形墳）と並ぶ最大の規模を持つ古墳で封土径約 15 mを測る。また、横穴式石室の構造を遺存する点で唯一のものである。石室は南向きで玄室の奥壁幅2.10 m、高さ 1.85 m、奥行 4 m、側壁は小さな割石を巧みに積み高さ 1.85 m、羨道部は数次の盗掘により天井石を失っており、もとの高さは不明である。両袖式で、袖幅は東側 19cm、西側 20cm、羨道の幅は 1.78 m、長さ 5 mである。床面には一面に礫を敷きつめており、朱が散乱していた。玄室内やや西よりに組合わせ式家形石棺の底石と蓋石が存する。側石は抜き取られ破片さえ残っていなかった。」と記されている。

地形測量図（図版２）から 21 号墳と並ぶ最大の規模を持ち径 20 mの円墳であったことが知られ、墳丘の東側と南側に盗掘壙が２カ所に見られた。石室実測図（図版５）によると、この古墳は南向きの横穴式石室墳で、西条古墳群の中では珍しく両袖式であった。石室は全長 9.50 m、玄室は長さ 4.25 m、幅は奥壁部で 2.0 m、玄室入口で 2.25 m、羨道部は長さ 5.25 m、幅は羨道入口で 1.66 m、玄室入口で 1.80 m、高さは奥壁部で 1.90 m、玄室入口で 1.66 mであった。袖部の幅は東側 0.19 m、西側 0.20 mであった。

奥壁の石材は１段目に幅 2.0 m、高さ 0.75 mの石材を１石置き、その上の２段目に幅 1.3 m、高さ 0.6 mの割石と幅 0.45 m、高さ 0.4 mの割石を２石積んで２段目とし、１段目と２段目のすき間を埋めるように小角礫を詰める。３段目は幅 0.9 m、高さ 0.2 mの石材と幅 0.6 m、高さ 0.2 mの扁平な石材を載せる。４段目からは天井石が乗せられるように小石材を用いている。側壁は１段目にある程度大きい割石を用いるが２段目以上は小さな割石を巧みに積む。

羨道と玄室の境界に高さ 1.1 m、幅 0.25 mの石が立てられていた。なお、図面には羨道入口付近のみに礫が敷かれている様子が描かれているが、この４号墳の図面には奥壁とか玄室左側石などが省略されており、略報では「一面に礫を敷きつめており、朱が散乱していた。」と記されていることから床面一面に礫が敷かれていたものと思われる。

なお、玄室内に石棺が置かれており、組合式石棺の底石（幅 1.2 m・長さ 2.0 m）と蓋石（幅 1.0 m・長さ 2.1 m）の２石が置かれていた。これら石棺は周辺の公園に置かれて保存されている。

遺物は略報では「若干の須恵器片」とあるが、最終的には図版 22 にあるように須恵器では坏Ｈの身、坏Ｇ，高坏、平瓶、長頸壺、坏Ｂ、台付短頸壺など多くが出土している。また鉄器は鉄刀片 1、鉄釘片(?)3、鉄滓３がある。時期は陶邑編年のＴＫ 217 形式～ＭＴ 21 形式、中村編年のⅡ形式６段階～Ⅲ形式２段階で、７世紀初めから７世紀後半の時期に相当すると思われる。また、製鉄と関係のある鉄滓が出土しており、古墳の被葬者の性格を考える上でヒントになる遺物である。

５号墳（図版６）

５号墳は略報によれば「我々が気付いた時は既にブルドーザーにかきまわされて局部的に石が残存している程度に過ぎず、構造、その他は不明。」とされている。５号墳は６号墳の東側に所在していた古墳で、周辺の地形測量図（図版６）から墳丘は円墳で径 10 mほどだったと思われる。石材残存状況図（図版６）から幅 1.4 m・長さ 2.0 m以上の横穴式石室墳であったと想定されるが、遺物は採集されなかった。

６号墳（図版６・22・写真図版４・15）

６号墳は４号墳をとりまくように分布していた低平な古墳の一つとされる。地形測量図（図版６）から４号墳の北西に位置し５号墳の西側に所在し、墳丘は円墳で径 10 mほどだったと思われる。

略報では「開墾のため奥壁は既に存在せず、抜き取られたあとが認められるにすぎず、側石も高さ１m程残っているのが良い方で、破壊著しい。石室の全長を推定すると長さ 6.02 m、奥壁幅 1.30 m、石室中央部 1.55 m、袖は存在せず、羨道部幅 1.50 mであった。羨門に近い程、残存状況が良く遺物も土器などの主だったものは石室の前半分から出土している。敷石（礫）あり」と記されている。

石室実測図（図版６）にあるように６号墳は無袖の横穴式石室墳であった。図面を精査すると石室の

全長は 5.80 m、石室の幅は奥壁部で 1.30 m、石室中央部で 1.55 m、羨門部で 1.40 mである。石室中央の床面に礫の敷石がある。

石室の奥壁は１段残っており、幅 0.7 mの石材と 0.4 mの石材が２石残存していることから奥壁の１段目は２石だったと思われる。また、側壁は高さ 0.95 mほど残っており、１段目は 10 個の石を並べ石室を構築する。１段目の石材は幅 0.3 ～ 0.95 m、高さは 0.10 ～ 0.35 mの割石で扁平なものが多い。２段目以上も同様な石材が使用されており天井部に近づくほど小さな割石が使用されている。

遺物は須恵器と土師器、鉄器片が出土している（図版 22）。須恵器は坏Ｈ蓋、坏Ｇ身、平瓶がある。土師器は甕などがある。鉄器は刀子１が出土している。

時期は陶邑編年のＴＫ 217 形式相当の時期で、中村編年のⅡ形式６段階、飛鳥編年の飛鳥Ⅱ～Ⅲの７世紀中頃前後の時期に相当すると思われる。なお、鉄片も若干出土している。

７号墳（図版６・23・写真図版５）

略報によれば「封土はこの地点が開墾された時に破壊されつくしており、僅かにそれと認められる程度、石室は南向きの横穴式石室であるが、既に奥壁を抜き取られてしまっており、石室の規模は不明であるが現存する部分は幅 1.20 ～ 1.35 m、長さは４mである。側石は最も良く残っていた所では四段位あったが遺物は既に消滅してしまっており、一物も認められなかった。」と記されている。しかし、後述のように須恵器が出土している。

石室実測図（図版６）によると横穴式石室で石室は破壊されており、規模は不明であるが、現存する部分の幅は奥壁部に近い所で 1.35 m、石室入口に近い部分で 1.20 m、長さは 4.0 mであった。出土遺物はすでに消滅してしまっていた。石室の石材の大きさは１段目は幅 0.30 ～ 0.65 m、高さは 0.2 ～ 0.4 mの比較的小さい割石を置いている。２段目から上も同様の大きさの割石を使用している。

出土した須恵器は坏Ｈ蓋、坏Ｇ蓋、坏Ｇ身、長頸壺がある（図版 23）。鉄器は刀子１が出土している。時期は陶邑編年のＴＫ 217 形式、飛鳥編年の飛鳥Ⅲ形式と思われ、７世紀中頃から少し後の時期と思われる。

９号墳（図版７・9・写真図版５）

９号墳は略報には「台地の西の縁辺部に位置していた円墳で、径約 17 mと推定されたけれども、はなはだしく封土を流失しており、ために、主体部の構造も大半損壊しているが、割竹形の木棺を直葬したものであることが、朱の痕跡をのこした棺底に接する床面の検出により判明した。墳丘は位置的に言っても、主体部構造の上から言っても他の群集墳中の古墳よりは一時期古い形を示すものと考えられるので注目に値する。木棺の長軸約 4.08 m、幅 0.8 m以上。遺物は棺底より鉄刀１、鉄鎌１、鉄鉋３」と記されている。

９号墳は地形測量図（図版７）から墳丘の径は 17 mと思われ、当古墳群中、比較的大きな墳丘を持っていた。図版７の「９号墳主体部実測図」や写真図版５の「９号墳主体部」の写真から主体部は割竹形木棺を直葬したもので、長軸 4.08 m・幅 0.8 mで割竹木棺としては小さな規模である。

棺底に朱の痕跡があり遺物は棺底から鉄剣 1、鉄鏃 1、鉋 2?、不明鉄器片２が出土している（図版 35）。

10 号墳（図版７・８・35・写真図版５・６）

略報には 10 号墳は「９号墳のすぐ北隣の古墳で封土は同様流出していたが径約 14 mと推定された。主体部は良好な粘土でまかれた完全な箱式石棺であった。棺の大きさは長さ 1.60 m、幅 0.50 mで内部には大略完全な形で人骨が遺存していた。被葬者は 20 才前後の女性。副葬品には鉄鏃、鉄刀、刀子、鉄斧、玉類（小玉）があった。尚、棺内には朱が一面に付着しており、棺底に小礫がしきつめてあった。又棺

外には礫をならべて作った排水溝が台地の中心の方向（東）に向かって築造されていた」とある。

周辺の地形測量図（図版７）からみて墳丘の径は不明である。箱式石棺の大きさは図版８の「10 号墳主体部実測図」から長さ 1.95 m、幅は頭蓋骨の付近で 0.50 m、足元付近で 0.40 m、棺内には朱が一面に付着しており、棺底に小石が敷き詰めてあった。また棺外には石棺の足元の左外側から台地の中心方向（東）に向かって、礫をならべて作った排水溝が長さ 2.8 mにわたって構築されていた（図版８）。

10 号墳出土ガラス小玉

現時点において棺内の足元に確認されている鉄製品は、、、鉄鏃 4、刀子 1、不明鉄器片 2 であるものの、図面や写真から判断すると、このほかに鉄刀もしくは鉄剣とみられるものも副葬されている。玉（ガラス小玉）は遺体の胸部付近から出土した（図版８）。

12 号墳（図版７・写真図版７）

12 号墳は略報には「墳丘は僅かにそれと判明する程度のもので、径は不詳、主体部は南向きの横穴式石室（無袖）で奥壁部幅 1.04 m、石室の長さ 3.70 mを測る。奥壁に 1 枚石を立てて使用している他は極めて小さな割石を使用している。しかし、かつてここを開墾した節に邪魔になった石をことごとく抜きとったと言う村人の話の如く、石室の東側の側壁は抜き取られ、僅かに奥壁より 80cm 程前方までしか残っておらず、あとは地山の上に点々と抜きあとの穴があったのみである。このように甚しい破壊のため、遺物は一物も存在しなかった」と記されている。

石室実測図（図版７）からは、南向きの横穴式石室墳で無袖、奥壁の幅は 1.0 m、石室の長さは残存する石材も含めると 3.8 m、奥壁に 1 枚石（幅 0.9 m、高さ 0.5 m）を立てて使用している。他は極めて小さな割石を使用している。石室の東側の側石は抜き取られ、僅かに奥壁より 0.8 m程前方までしか残っていなかった。なお、著しい破壊のため遺物はなかった。

13 号墳（図版９・23・写真図版７）

13 号墳は略報には「僅かに残存した封土をたよりに発掘したが主体部はやや封土とははずれた所に２つ存在した。それを a 主体、ｂ主体と名づける。

＜a 主体＞　墳丘のやや中央に近いところに若干の割石が散乱していたが、これらは殆んどが原位置を示しておらず、そのうちの僅か 2 個のみが、石の抜きあとらしきものの方向と合致したのみであった。従って主体部構造などは全く不明である。

＜ｂ主体＞　半分程になってしまった箱式石棺で封土の裾に当る部分に存在、現存部は幅 35 ｃm、長さ 71cm 程度で底石があったが、蓋石は勿論、遺物も存在しなかった。」とある。

13 号墳の主体部は 2 カ所に存在し、墳丘の中央に近い所のものを a 主体とされ、墳丘の裾近くのものがｂ主体とされた。

a･b 主体部実測図（図版９）からすると a 主体は基底部の石材の抜きあとから幅 0.50 m、長さ 1.50 mほどの石室が確認でき、ｂ主体と同様の箱式石棺墓、あるいは小石槨墓であったものと思われる。側石には 0.7 ～ 0.8 m、高さ 0.3 mの割石が使用されていたが、遺物は出土しなかった。

ｂ主体は遺構実測図から箱式石棺墓であったものと思われる。約半分が消滅していたが、石室の現存部は幅 0.75 m、長さは側石から 1.50 mである。側壁の石材に幅 0.6 m、高さ 0.3 mの割石が使われていたが、概報では遺物は出土しなかったと記されているが、甕の口縁部が出土している（図版 23）。

14 号墳（図版９・23・36・写真図版８・15）

14 号墳は略報には「南向きの横穴式石室（無袖）。封土は僅かにそれと認められる程しか残存してい

なかった。奥壁幅 1.2 m、羨道幅 1.1 m、長さ 4.4 m、床面一面に礫を敷きつめており、奥壁付近の一部を除いて概して残存状況は良好。しかし、側壁はあまり良好な遺存状態とは言えず、天井石は全く存在していなかった。遺物としては須恵器（台付長頸壺１、瑕１、坏３、破片若干）、土師器（小壺１、破片若干）、鉄器（釘 10 本、鉄片若干）が判明」と記されている。

石室実測図（図版９）を見ると南東向きの横穴式石室墳で無袖、奥壁の幅は 1.2 m・羨道幅 1.1 m・長さ 4.4 m・床面全面に礫を敷きつめていた。石室は１段目には比較的大きな石を使用しており、奥壁は１石で幅 1.1 m、高さ 0.7 mの大きな石を使用し、側壁も幅 0.6 ～ 0.8 m、高さ 0.3 ～ 0.8 mの比較的大きい石を使用している。

遺物として図版 23 に示したように須恵器は、台付長頸壺・はそう・坏があり、土師器は小壺、破片若干があり、鉄器は釘が８本、鉄釘片 10?、不明鉄器片 1? が出土している (図版 36)。

須恵器の高坏は陶邑編年でＴＫ 217、飛鳥編年で飛鳥Ⅱ、中村編年でⅡ形式６段階、時期は 655 年以前でそう遠くない時期と思われる。

（上月昭信）

注１　西条古墳群発掘調査団「西条古墳群調査略報」昭和 39 年６月
注２　田辺昭三「陶邑古窯跡群Ⅰ」平安学園考古クラブ 1966 年
注３　中村浩「和泉陶邑窯の研究」 1981 年
注４　小森俊寛「都城の土器集成」古代の土 器研究会　1992 年

第２節　Ｂ群の古墳

Ａ群の北の高まり、21・25 号墳を中心に 21-2・21-3・22・23・61・61-2 号墳が調査されている。

21 号墳 (図版 10・11・24・25・36
写真図版 8・9・10・16)

１. 古墳の位置と墳丘

北の城山に連接するいなみの台地突端部のもっとも高所に構築されている。墳丘の頂部で標高 36 mである。当該墳の北側に隣接して 25 号墳が構築されている。古墳は一辺約 16 m、高さ約３ｍの方墳で、墳丘の東側は土取りにより失われている。

２. 埴輪群と土器群

⑴　調査日誌記載の埴輪出土状況

当該墳からは家形埴輪および円筒埴輪が出土しているが、これらの埴輪の具体的な出土位置について記録した図面は残存していない。そこで出土位置等の情報を求めて、まず、調査日誌の中から埴輪出土に関する記

円筒埴輪基部出土状況

述を下記の通り要点にして抜き出した。

12 月 30 日；A、Dブロックで埴輪片出土。

１月３日；Dブロックより埴輪片多数と須恵器片出土。形の整った須恵器（器形未確認）を認める。
南辺の西トレンチで埴輪の基部又は大型土器を発見。

３月 28 日；Dブロックで発見された埴輪が家形埴輪であることが判明。

３月 29 日；家形埴輪の屋根が出土。その隣で意識的に置かれたと思われる須恵器甕や円筒埴輪を発見。

⑵　埴輪出土に関する整理

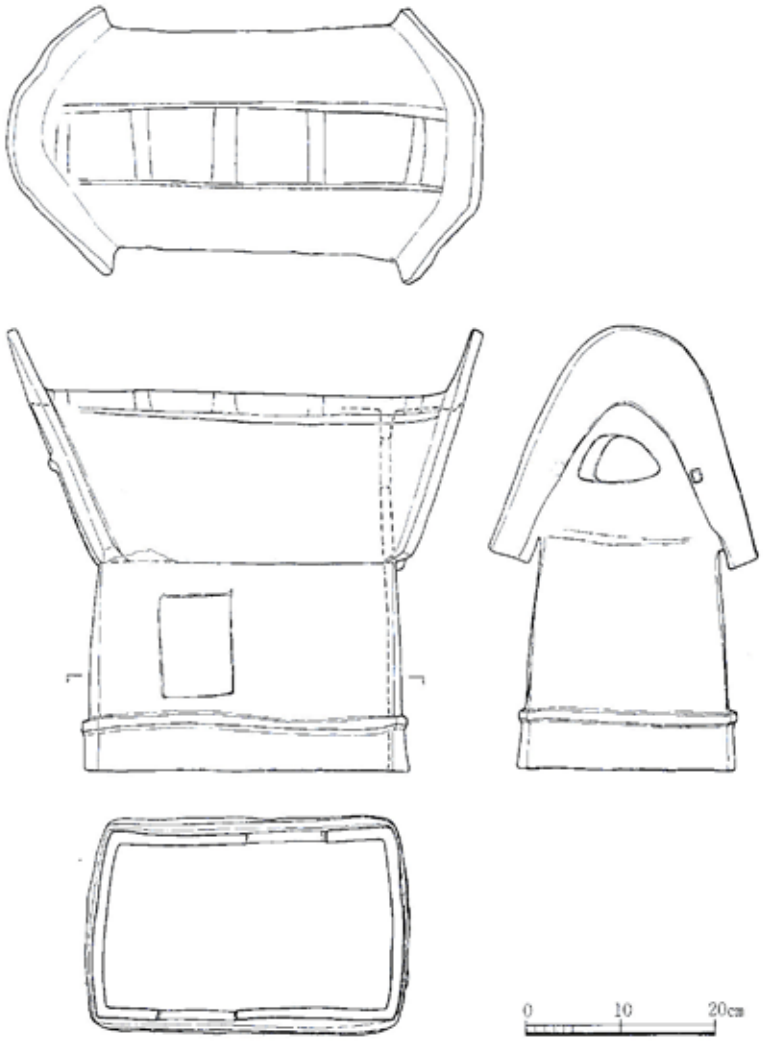
Aブロック出土埴輪

１月３日付調査日誌により、Aブロックすなわち墳丘の南側に円筒埴輪が配列されていたことがわかり、13 頁の写真はその発見状況を示している。写真のみでは埴輪の配置状況までは読み取ることができないが、墳丘南側に埴輪が配置されていたことは明らかである。なお、『加古川市史』では「円筒埴輪が墳丘を巡っていたとみられる」と記述されているが、調査日誌・写真等の記録からは埴輪の出土箇所は中央部と墳丘南辺部にほぼ限定でき、埴輪が全体に巡らされている状況は想定し難い。

D ブロック出土埴輪

３月 29 日付調査日誌よりDブロックから家形埴輪と円筒埴輪が出土したことがわかる。家形埴輪 (第１図) の出土状況は図版 11 に示した通りであるが、この家形埴輪の出土位置を記録した図面は残されていない。そこで、調査日誌の記録・写真資料を参考にして、出土位置等を割り出して作成したのが第２図である（※1）。その経緯を以下に記す。

まず、写真図版 10 の上段写真でハ主体とイ主体間の空間部から家形埴輪の一括破片が出土しているのが確認できる。この写真はCブロックとDブロック間の断面セクションを撤去し、家形埴輪を検出した状況を撮影したものであり、この状況から次のことがわかる。①家形埴輪がイ主体とハ主体の間の空間部に置かれていたこと、②家形埴輪はイ主体側に崩れ落ち、その一部は棺内上部に落ち込んでいた。③破片の一部はハ主体の検出面



21 号墳 - 第 1 図　21 号墳出土家形埴輪（『加古川市史』第 4 巻より転載）

に広がっていた（※2）。

次に、兵庫県埋蔵文化財包蔵地調査カードに「ホ主体部西から家形埴輪。封土からは円筒埴輪　須恵　土師がぎっしり詰まっていた中に家形埴輪　皆こわれていた」との記述がある。後述の通り、家形埴輪と土器群等の出土状況については調査日誌との間に齟齬はあるが、ホ主体の位置は記録に残されていないので、この台帳の通りとすると、イ主体とハ主体間の空間部東寄りにホ主体が位置することになり、家形埴輪はイ主体・ハ主体との間、ホ主体の西側に位置することになる。

以上の状況から、家形埴輪等はイ・ハ・ホ主体の検出上面から出土しているので、これらの主体部のいずれかの埋葬時か、あるいはイ・ハ・ホ主体埋葬後に時を置いて設置されたかのどちらかとなる。家形埴輪以外に土器類の供献も行われているが、同様の土器類の供献については隣の 25・29 号墳でも行われており、埋葬後のある時点で何らかの供養儀礼が行われた可能性が高いといえる。

※1　主体部は 6 つある。しかし、遺構実測図は個々の遺構図は現存するものの、全体の配置図は見当たらない。ただ、調査日誌にホ・ヘ主体を除くイ～ニ主体 4 基の位置関係を示す略測図やセクション設定図が記載されており、これらを合成して第 2 図を作成した。従って、これはあくまでも模式図もしくは想定図であり、正確なものではない。

※2　Ｃブロック内にある遺構が先行して掘り下げられている。このためＣブロック内にほとんどが含まれているイ主体はほぼ全掘されているのに対して、ハ主体はＣブロックとＤブロック間の断面セクションおよびＤブロック域に広がる主体部は未掘の状態で、埴輪の破片の一部が遺構上面に広がっている。

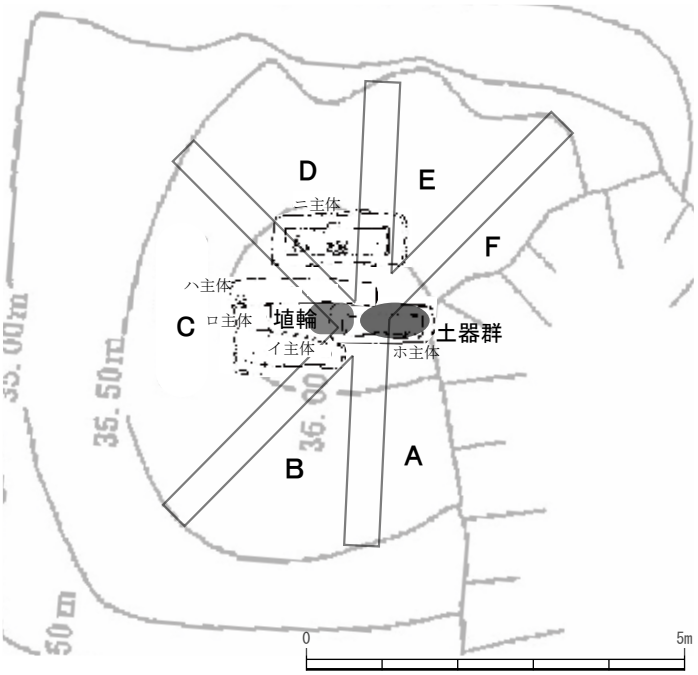
⑶　土器群

兵庫県埋蔵文化財包蔵地調査カードには「封土からは円筒埴輪　須恵　土師がぎっしり詰まっていた中に家形埴輪」と記述されているが、調査日誌にはそのような出土状況の記述は見当たらない。３月 29 日付調査日誌での「家形埴輪の隣での須恵器甕の発見」という主旨の記述および家形埴輪を取り上げた後の土器群の出土状況写真（写真図版９最下段）から土器群は家形埴輪の東に隣接した位置に置かれていたことが推測できる。土器群の詳細は第 6 章に譲るが、出土土器は須恵器が大半で、器種は杯類、高杯、甕類である

３．主体部

イ主体

図版 10 の主体部実測図は調査日誌に「掘方を掘り下げ」と記述されていることから棺ではなく掘方と考えられる。従って、主体部の西端に副葬されている土師器の長胴甕は棺内に置かれたものか棺外に置かれたものかは判断できない。掘方の幅は東端で 0.42 m、西端で 0.50 m、長さ 1.95 mを測る。なお、棺内からは「略報」では鉄鋤先１、鉄片２が出土していることになっているが、これらの製品は確認できない。また、調査日誌および実測図面上でも記録されていない。



21 号墳 - 第 2 図　主体部配置図（調査日誌より推定）

ロ主体

調査日誌では「2 棺（イ主体とハ主体）を 1 棺（ロ主体）が切っている。」と記述されているが、実測

図ではイ主体とハ主体がロ主体を切っているような線の描き方がされており、調査日誌の記述と図面では切り合い関係が逆になっているので、イ主体・ハ主体とロ主体の先後関係はわからない。主体部ラインは掘方を示しているものと思われ、幅 0.50 m、長さは 1.20 m以上 1.62 m未満となる。副葬品は出土していない。

ハ主体

本主体部も調査日誌の記述から主体部のラインは棺ではなく掘方のラインと判断される。幅は東端で 0.40 m、西端で 0.48 m、長さ 2.55 mを測る。主体部西端に須恵器壺（*2121*）が副葬されているが、副葬位置は棺外か棺内かは不明である。

ニ主体

本主体の位置を示した正式な図面が現存していない。第２図に示した位置は調査日誌記載の略測図から割り出したもので、ハ主体などとの距離関係は必ずしも正確なものではない。掘方は東端 0.98 m、西端 0.90 m、長さ 2.34 mを測る。棺は幅 0.48 m、長さ 1.80 mを測る。実測図では一部しか描かれていないが、棺底全体に小円礫が敷き詰められている。棺の西小口側に土師器壺（*2125*）1 個体を挟んで須恵器壺（*2122・2124*）２個体が横１列、その前に須恵器甕（*2123*）１個体が副葬されていた。また「略報」では鉄鏃３以上を副葬と記述されているが、現存して確認ができるのは、鉄鏃１点のみである。

ホ主体

イ・ハ・二主体との位置関係を示した図面は現存しないが、調査日誌や写真等から割り出したホ主体の位置についてはすでに述べた通りである。イ・ハ主体と同じ方向に主軸を向けているが、主体部同士の重なりはない。掘方の幅は東端で 0.65 m、西端で 0.70 m、長さ 1.71 mを測る。棺は幅 0.4 m、長さ 1.40 mを測る。東小口側の南側壁際に須恵器壺（*2126*）及び鉄製品が副葬されていた。また、実測図には掘方西の外側に２個体の副葬土器の図が描かれているが、土器の所在は不明となっており、種別・器種等は確認できない。なお、現存遺物で、確実にホ主体の出土遺物と断定できるのは須恵器壺 *2126* のみであり、高杯 *2127* が収められていた遺物袋には他の古墳出土遺物が混入しており、高杯 *2127* も破片であり、ホ主体出土のものかどうかはわからない。副葬の鉄製品は「略報」では鉄刀 1，鉄鏃 2，鉄片 1 と記述されているが、現在確認できるのは鉄刀１点、鉄釘７点？である。

ヘ主体

主体部の実測図面は現存するが、古墳上の位置については記した図面は現存しない。また、調査日誌にも記述が見えないので、位置については全くわからないが、主軸方位はイ・ハ・二・ホ主体と同じく東西方向にとる。トレンチまたは他の主体部と重なっていると思われ、実測図は複雑な線が重なっている。棺は幅 0.4 m、長さ 1.40 m以上である。副葬品は「略報」では鉄刀 1(長さ 85cm)，鉄製鋤先 1 と記述されているが、現存･確認できるのは、鉄刀１点、U 字形鍬鋤先１点、刀子１点、鉄釘片約１点である。

４．構築年代

ロ主体のみが主体部の主軸を異にしている。ロ主体はハ主体とイ主体と切りあっているが、すでに述べたように先後関係については不明である。その他の主体部については、出土土器からもハ主体に先行的な要素はあるものの断定は難しい。出土土器の詳細については第６章で述べるが、土器群のうち須恵器は陶邑 MT15 型式併行期（6 世紀前半）のものと判断してよい。主体部の出土遺物については、土器群より以前の埋葬と見なすならば、TK47 型式（6 世紀初め）を中心とした年代を想定しておきたい。

なお、埴輪の形態・技法および年代については第６章第２節を参照されたい。

21 号墳の 2 および 21 号墳の 3（図版 11）

21 号墳と 25 号墳の東側斜面に構築されていた小型石室墳である。この斜面は耕作地として利用されており、石材の一部が失われているが、墳丘があったかどうかは不明である。奥壁の棺の主軸はとも

に南北方向にとられている。ともに奥壁の対面側の石がないので、小石室墳のように見えるが、底に割石を敷いていることから小型石棺に分類する（※1）。

21 号墳の２は残存長 1.25 m、幅 0.34 mを測る。棺底は板石を敷き、石材の平らな面を内側に向けて側壁を形作っている。西側壁の大半は失われてわずかに１～２石程度残るのみである。奥壁は板石を1 枚立てている。石の材質は不明である。棺内からは遺物は出土していない。

21 号墳の３は残存長 1.14 m、幅 0.65 mを測る。21 号墳と同じく棺底は板石を敷き、石材の平らな面を内側に向けて側壁を形作っているが、西側壁の一部は失われている。奥壁は板石を 1 枚立てている。石の材質は不明である。棺内からは遺物は出土していない。

※1　主体部の分類名称については『西脇古墳群』（兵庫県文化財調査報告　第 141 冊）1995 年を参考にした。

61 号墳・61 号墳の 2（図版 20）

21 号墳の東側の斜面に構築されている。21 号墳の２および 21 号墳の３の南側に位置している。詳細は不明であるが、61 号墳の測量図には墳丘の高まりのような等高線が描かれている。

61 号墳主体部は棺底に板石がないので開口部を持つ小型の石室墳と見なされ、残存長 0.72 m、幅 0.52 ～ 0.64 mを測る。西側壁は、石材の平らな面を内側に向けて側壁を形作っているのに対して東側壁は割石を小口積みにして形作っている。また、奥壁は１枚の板石が立てられている。石の材質は不明である。室内からは遺物は出土していない。

61 号墳の２は棺底に割石が敷かれ、両小口に板石が立てられているので明らかに石棺の体裁を整えている。長さ 0.64 m、幅 0.40 mを測る。棺内からは遺物は出土していない。

22 号墳（図版 26）

調査日誌には「発掘の結果、古墳ではないことが確認された。」と記述されているが、出土遺物として記述のない完形の須恵器杯蓋が１点収蔵されている。杯蓋の時期には７世紀前後のものであり、５世紀から６世紀前半の造営が主体のＢ群の時期と乖離している。

23 号墳（図版 26・37・写真図版 17）

古墳の大きさは９～ 10 m、比高約 0.7 mで、墳丘は墓地として利用されていた。このため、墓地移転時に、立ち会い調査を実施したもので墳丘測量は実施していない。以下の記述は、調査日誌から要点のみをまとめたものである。

攪乱をまぬがれた箇所において、地表下約 0.5 mの主体部床面と思われる位置から須恵壺、瑯、鉄製品が出土した。鉄製品は「略報」では鉄鏃２、鉄鎌、鉄鋤、鉄斧と記述されているが、現在確認できるのは鉄鏃２点、鉄鏃片約３点、U 字形鍬鋤先１点、鉄鎌１点である。このほか盛土中より弥生式土器、須恵器壺片が出土している。

25 号墳 (図版 12・26・27・37・写真図版 10・11・18）

１. 墳丘

21 号墳と同じく北の城山に連接するいなみの台地突端部のもっとも高所に構築されている。墳丘の標高は 36.50 mである。一辺 10 m前後の方墳で、墳丘上には北から第３主体、第１主体、第２主体と平行して並ぶ３基の主体部が検出されているが、主体部の墳丘における位置および配置関係を示した全体図が残されていない。

２. 遺構

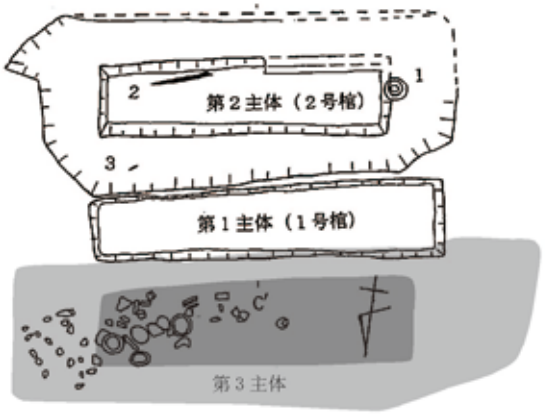
⑴　土器群

第３主体の遺構上面から杯類、瑳などの須恵器が完形品の状態で少なくとも 13 個体出土している。

⑵　主体部

第１主体

棺は長さ 2.46 m、幅は西小口で 0.34 m、東小口で 0.40 mを測る。棺の堀方は記録されていないので、実際の棺はもう一回り小さいのかもしれない。遺物は出土していない。



25 号墳 - 第 1 図　主体部配置図

（調査日誌より推定）　S=1:50

第２主体

第 1 主体の調査後に同主体部の北側にトレンチを設定して検出された主体部である。掘方の幅は東端で 1.06 m、西端で 1.21 m、長さ 2.85 mを測る。棺は幅 0.38 m、長さ 1.88 mを測る。棺外から瑳（*2519*）と棺内から鉄剣 1 点が出土している。なお、*2520* の杯Ｈ身は第２主体を縦断する東西セクションからの出土品である。恐らくは封土に含まれていたものと思われるが、第２主体の直近の出土という点から、ここでは第２主体関連の遺物としておく。

第３主体

第３主体の位置関係は正式な図は提示されていないが、第 1 主体と第２主体との位置関係を示したものが調査日誌に記されている。第 1 図はその調査日誌記載の略測図から位置を推測したものであり、位置関係については必ずしも正確なものではない。

掘方は長さ 3.44 m、幅は西端で 0.98 m、東端で 0.92 mを測るが、南側の長辺の東隅の掘方ラインをややカーブさせて東端部が広がらないように幅を調整している。棺は長さ 1.96 m、幅 0.40 m を測る。副葬品は棺外の掘方底東側に２個体、西側に２個体置かれている。このほか、調査日誌では「須恵器蓋（*2521*）と土師高杯（現在、所在不明）が棺上部と思われる位置より、土器群の土器とは約 10㎝の高さの差をもって出土した」と記載されている。しかしながら、蓋 *2521* と棺内の須恵器壺（*2522* ～ *2524*）と間の型式差や口縁部の４分の１が欠けている点など棺内の副葬品との整合性に欠けている。また、蓋 *2521* は高杯か短頸壺の蓋であり、一対となるべき対象物が存在しない。従って、この須恵器蓋（*2521*）について再度観察したところ、封土出土の短頸壺 *2516* の共蓋であることが両者の焼成痕跡の比較から判明し、棺上の副葬品である可能性が極めて低くなった。恐らくは封土出土の短頸壺 *2516* も棺上部の蓋 *2521* も土器群に含まれるべきもので、蓋 *2521* については棺蓋の腐食により土中内に沈みこんだものと考えられる。棺内からは鉄刀および不明鉄器 1 片、棺外より鉄鏃が出土している。

３．古墳の造営年代

⑴　遺構の切り合い状況

第 1 主体と第３主体の先後関係は、第 1 主体が第３主体の掘方を切っていることから、第 1 主体の埋葬時期のほうが新しい。また、第 1 主体と第２主体との先後関係については遺構の切り合い状況から求めるのは難しいが、第 1 主体の埋葬深度が墳丘表面から浅い位置にあることと副葬品を伴わないところから第２主体よりも後の埋葬主体と考えられる。

⑵　遺物の年代観

①第３主体の須恵器３点は、西条古墳群出土の須恵器としては最も古い陶邑 TK23 型式併行期（5 世紀後半）のものと思われる。

②第２主体の須恵器瓹は口縁部の波状文が消失している点を第３主体の瓹よりも新相の要素と見なすことができれば、年代を陶邑 TK47 型式併行期（6 世紀初め）に求めることが可能である。

③土器群については古相の *2501* と新相の *2506・2511* あるいはその中間の *2502* など古相･中間相･新相が混在している。古相は陶邑 TK23 型式、新相は同 MT15 型式に下る様相を示している。中間相が MT15 型式に含まれる可能性もあるが、ここでは陶邑 TK47 型式を中心として TK23 型式～ MT15 型式までの年代幅のある遺物群が含まれている可能性を考えておきたい。土器の詳細については第 6 章第 1 節で述べる。

⑶　主体部の埋葬順序

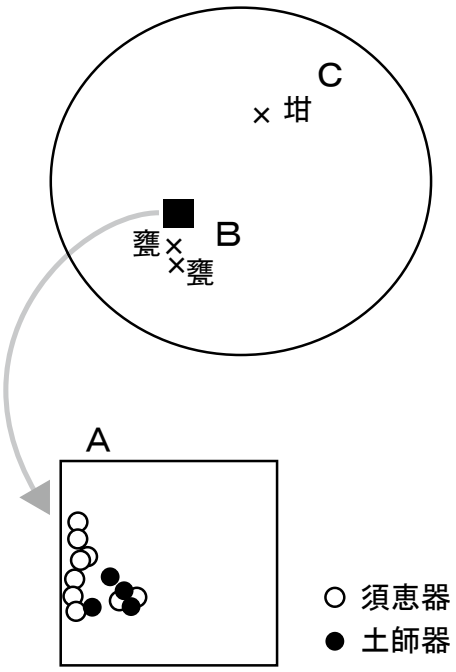
遺物の年代観からすると､第３主体､第２主体の順となる｡第１主体には副葬品は納められていないが、埋葬深度の浅さと無遺物の点から最終の主体部とみてよい。土器群の位置づけについては、すでに述べたように、21・29 号墳に墳丘上に土器群の供献が見られることから、25 号墳についてもすべての主体の埋葬後に何らかの供献儀礼を行ったものと解しておきたい。

29 号墳（図版 28・写真図版 19）

墳丘のほとんどが墓地に転用されていたことから、墓地移転時の立ち合い調査にとどまり、正式な発掘調査は行われていない。以下の概要は調査日誌の記述に基づく。

墳丘は約 10 ～ 11 mの規模で、マウンドの高さは 1.2 ～ 1.5 mである。墳丘中央より西側に約 1 mはずれた地点で須恵器甕片が多数出土した（B 遺構）。また、墓地造成による撹乱を免れた箇所から東西幅 0.7 m、南北幅 1.5 mの土坑（A 遺構）が発見されたが、この土坑については木棺の痕跡は確認されていない。内部から須恵器杯(蓋付）約 15 個体・高杯 1 個体、土師器 6 個体（杯 1 個体、壺 4 個体、椀 1 、長頸壺 1 個体）がまとまった状態で発見された（第 1 図)。現在、須恵器は 23 個体、土師器 6 個体が保管されている。このうち須恵器杯は 22 個体あり、すべて完形品で、うち 9 組が焼成時のままのセット関係、残る蓋 2 個体、杯身 2 個体は焼成時のセットではないが、杯身と蓋が同数であるのでセットと見なせば、11 組のセットとなる。調査日誌では「須恵器杯（蓋付）約 15 個体」と記述されているが、一部のセットが崩れてのカウントであろう。主体部については墳丘の中央北寄り部分の表土も掘り下げて調査を実施したが、無縁仏の埋葬などにより撹乱されて確認されなかったとしている。従って、墓地造成によって主体部そのものは検出されなかったが、土坑内に納められた土器群については、21 号墳・25 号墳の土器群と同様、供養儀礼に伴うものと推察される。

（森内秀造）



29 号墳 - 第 1 図
遺構検出状況模式図
（調査日誌より）

第３節　Ｃ群の古墳

Ｂ群の北、台地に切り込んだ西向きの小さな浸蝕谷の北側に東西に点在する一群の古墳群をＣ群と呼び、31・32・34・35・36・37・38・39 号墳がある（図版１）。

31 号墳（図版 13・29・写真図版 11）

31 号墳は、Ｃ群のなかで東端に位置する古墳で、略報によれば、「以前に道路工事によって墳丘と石室共に前半部を削り取られており、墳丘径約８m、横穴式石室の幅 1.5 m、長さ現存５m。敷石があり、遺存状況は良好でなく、遺物も見当たらなかった。」と記されている。

石室実測図（図版 13）によれば南東向きの無袖式の横穴式石室で、石室の奥壁部は横に２石が１段だけ据えられている。右側石は２段だけで、１段目は比較的大きな割石（幅 0.7 m、高さ 0.2 m程度）を並べ、２段目も同程度の割石を積んでいた。石室中央部で４段まで確認できる。側壁の高さは石室中央部で 0.6 m、石室の長さは、左側で、4.95 m、右側で 3.9 m、石室の幅は奥壁部、中央部、羨道部では、いずれも 1.6 mである。石室床面の奥壁付近に敷石がみられるが、全面に敷かれていた可能性はあるが、盗掘を受けていたようで、はっきりしない。

遺物として須恵器の坏Ｈ蓋、坏Ｈ身がある（図版 29）。いずれも陶邑編年のＴＫ 217、飛鳥編年で７世紀前半頃と思われる。

なお、調査日誌には、蓋杯、土師器、壺口縁部、釘が出土したことが記されている。

32 号墳（図版 13・29）

32 号墳は、34 号墳の東方に位置し、略報によれば、「封土のかすかな遺存に注意して調査したが、既に石組みはほとんどなく、石の抜き跡を調査した。幅 90cm 長さ 2.50 mの石室の存在を推定でき、遺物は須恵器（壺）の破片のみ採集された」と記されている。

遺物としては、突帯付壺の肩部と体部がある（図版 29）。平安時代のものである。

34 号墳（図版 13・14・29・38・写真図版 11・15）

34 号墳は、32 号墳の北西に位置し、略報によれば、「南向きの無袖式の横穴式石室（幅 1.7 m・長さ６m）で、既に奥壁は抜き取られていたが、石室中央部のやや奥寄りの所に棺台かとも思われる主軸方向に直交する２列の石列があり、この周囲からはかなり良好な状態で土器が出土した。また、石室の前５分の２程度のみにぎっしりと平らな割石が敷石として敷き詰められていた。遺物は須恵器（瑳 2、平瓶 1、提瓶 1、高杯 1、破片若干）、土師器片若干、金環 3，鉄釘６が出土した」と記されている。

墳丘は地形測量図（図版 13）から判断して径 10 m程度の円墳であったと考えられる。

石室実測図（図版 14）によれば、南西向きの無袖式の横穴式石室で、石室の奥壁は抜き取られていた。右側石は１段で、石室中央部で２段を残している。左側壁は、奥壁側で１段だけ残るが、石室中央部で３段が積まれていた。左側石中央部の高さは 1.0 mで、残存石は、1 ～２石である。右側壁中央部の高さ 0.8 mである。石室の長さは、右側で 7.75 m、左側で 6.90 m、石室の幅は奥壁部で 1.65 m、石室中央部 1.7 m、羨道部付近で 1.8 mになり、わずかに羨道部が広くなっている。

石室床面の奥壁側で敷石が確認できる。石室中央部には２列の列石が確認できる。羨道部付近には敷石が密集して敷き詰められており、閉塞石の可能性がある。

遺物は、須恵器類が石室内に点在している。鉄釘が奥壁部と石室中央部の列石近くと羨道部外に検出されている。奥壁及び石室中央部については木棺があったことを示している。石室外のものについては盗掘などによって運び出されたものと考えられる。さらに金環３の検出場所は奥壁部と石室中央部であったことから、鉄釘と金環の位置から考えて、石室内には２か所以上の埋葬施設が存在していたこと

が考えられる。

遺物としては、須恵器の坏Ｈ身、甕、高坏、瑳、平瓶、提瓶、鉄釘、耳鐶がある（図版 29・38）。須恵器の陶邑編年のＴＫ 47、ＴＫ 209、ＴＫ 217 形式のものを含むが、概ね 7 世紀初めから 7 世紀中頃のものである。

35 号墳（図版 15・30・写真図版 12）

略報によれば、「比較的小形の横穴式石室（幅 1.40 m、長さ 4.50 m)、奥壁には薄い割石を 2 枚並べている。著しく撹乱された痕跡があり、遺物は土師器（盌 2、壺 2)、須恵器片若干、銀環 1 が出土した。」と記されている。

石室実測図 (図版 15) によると、南東向きの横穴式石室で無袖式である。奥壁は扁平な割石を横に並べ、1 段だけ残す。右側石は奥壁部で 1 段だけ残すが羨道部付近では 4 段積まれている。左側石は奥壁部で、やや大きい割石の上に小石を 2 段積み上げている。羨道部付近も同様な積み方がみられる。石室の左側石の残存高は 0.6 m、右側石の残存部で 0.5 mで、石室の長さは、左側で 3.6 m、右側で 4.5 mである。石室幅は奥壁部で 1.2 m、中央部 1.35 m、羨道部 1.3 mである。

出土遺物としては、奥壁部で台付長頸壺、石室中央部の左側壁付近で須恵器（平瓶)、土師器、銀鐶が出土している（図版 30)。台付長頸壺は陶邑編年の TK217、飛鳥編年で 7 世紀前半頃と思われる。

36 号墳（図版 15・30・38）

墳丘測量図（図版 15）によれば、36 号墳は、35 号墳の西に位置している。

略報によれば、「横穴式石室をもつ推定径 14 mほどの円墳であったらしいが、実にはなはだしく撹乱されており、石室は全く存在せず、石室築造の際の掘り方を追求することにより、かつての石室の規模を推定せざるを得なかった。それによると、石室の幅は約 1.2 m、長さ約 7 mであったらしい事が判明した。遺物は須恵器 (高杯 1 、破片若干)、土師器片若干、鉄器 (鏃 1 、釘 1) を発見することが出来た。」と記している。

石室実測図（図版 15）には、石材抜き跡として、奥壁部で 3 か所、左側石で 11 か所、右側石で 9 か所が記されている。

出土遺物としては、杯 H 蓋身、杯 G, 壺、高坏、直口壺がある（図 30)。杯 H 蓋身は陶邑編年の MT85 で、6 世紀中頃にあたる。高杯、杯 G は陶邑編年の TK217 段階 , 直口壺は中村編年で 7 世紀前半頃にあたる。なお、奥壁部付近で鉄鏃、鞍金具など鉄器類が出土している。

37 号墳（図版 16・40・写真図版 12）

37 号墳は、C 群のなかで最も西に位置する。略報によれば「西南に切り込んだ谷により出来た台地の西端の縁辺部にあり極めて展望のきく位置に存在する。封土の中心からややはずれた所より粗い波状文のついた口縁部をもつ土師器壺棺を発見した。上になっていた部分は既に流出してしまっていたが、丸底の土器を使った合わせ口の壺棺墓と推定された。精査したところ、遺物は何も伴出しなかったが、朱を一面に塗布していたと思われる木棺を埋葬した主体部（幅 40cm、長さ 1.60 m）を検出した。」と記されている。

37 号墳主体部実測図 (図版 16）によると、幅 0.45 m、長さ 1.7m の主体部であるが、木棺の短側部が狭まる矩形を呈しているが、詳細は不明である。なお、37 号墳付近より弥生時代後期の大型の広口壺が出土している（図版 40)。

38 号墳（図版 16・30・40）

略報によれば「37 号墳のすぐ上に道路ひとつを隔てて存在する。封土の南側の裾近くに、僅かに高くなったところがあり、ここから２個の弥生式土器（甕）を使用した合わせ口棺が出土した。封土の中央部には幅 60cm、長さ 1.65 mの木棺直葬主体があったが副葬品は出土しなかった。」と記されている。

38 号墳実測図によると幅 0,7m、長さ 1..85m の掘り込みの内部に（幅 0,4 ～ 0,6 m、長さ 1.5 m）の主体部が確認できる。さらに粘土ブロックが２か所に記されている。

なお、38 号墳付近より、土師器甕と弥生時代の壺棺が出土している（図版 30・40）。

39 号墳（図版 17・30・写真図版 12）

略報によれば、「発掘にとりかかる前から石室が露出していたことや羨道部と思われるあたりから亀甲形陶棺の破片がかなり出土したとあるが、石室内からは陶棺は確認されず、遊離した土中から数片の須恵器片を発見したのみであった。石室の保存状況について、天井石は存在しなかったが、他のＣ群の古墳より良好であった。横穴式石室（幅 1.7 m・長さ 10.7 m)」と記している。

石室実測図（図版 17）によれば、南東向きの無袖式の横穴式石室である。奥壁は扁平な石が据えられているが、右側の床面上に小石を詰めて奥壁としている。左側石は基底部で 12 石、右側石で８石が確認できる。左側石では、基底部に比較的大きい割石を配置する。石室中央部よりで３石を積んでいる。高さ 0.8 m。石室中央部では扁平な割石を３～４段ほど積み上げている。右側石では、奥壁部で２段、基底部はやや大きい割石を据え、その上には扁平な割石を４段積み上げている。石室の高さ 0.7 m。石室の長さは 7.8 mである。石室幅は奥壁で 1.7 m、中央部 1.65 m、羨道部入口付近で 1.6 mである。

出土遺物としては、須恵器の杯蓋、杯Ｈ身、高坏、甕がある（図 30）。杯蓋と杯Ｈ身は、陶邑編年で TK217 段階、高杯は中村編年Ⅱ形式６段階で概ね７世紀前半頃にあたる。その他、口径 17.5㎝の甕と石室外から土師質亀甲形陶棺が検出されている（図版 33・第６章第３節)。

（山本祐作）

39 号墳石室

第４節　Ｄ群の古墳

この台地の一番北にある小さな谷を利用して西条と中西条を結ぶ道路が開削されており、この道路の北側と南側に存在する一群の古墳群をＤ群とする。

発掘調査の結果、Ｄ群で墳丘墓や古墳と確認されたものは、40・51・52・53・58・59・60 号墳の７基である。

また、発掘調査の結果、古墳とは認められず欠番となったものは 41 ～ 50 号墳、54 ～ 56 号墳である。

40 号墳（図版 18・30・写真図版 11）

略報には「木棺直葬による古墳。当初２棺あるかと推定されたが、墳頂よりやや北にはずれた所に一つだけ主体部があった。」と記されている。墳丘測量図（図版 18）からは墳丘は南側を半分ほど土取りで削平されていたことがわかる。墳頂からやや北にはずれた所の地表下約 40cm で主体部実測図 (図版 18）にあるように木棺直葬墳を１基確認した。墓壙の両側には床面から 0.10 mの高さにベッド状の施設（幅 0.30 m、長さ 0.18 m）がそれぞれ一対あった。墓壙は幅 0.50 m、長さ 1.65 mで主体部床面には小さな礫を全面に敷いていた。

遺物は発掘の途中に五輪塔などとともに須恵器の皿が出土している。また墓壙内で被葬者の腰付近に鉄剣 1、鉄刀か鉄剣 1 が副葬されていた。須恵器の皿（図版 30）は平安時代後期のものである。

41 号墳と名づけられた高まりから出土した須恵器（図版 31）

当初 41 号墳と名づけた高まりから須恵器や中世の骨壺や甕棺が出土している。中世墓地造成による攪乱が激しく主体部が確認できなかったため古墳と判断されなかった。

器台、高坏、坏、甕や高台付坏がある。時期は陶邑編年（注2）のＴＫ 209 形式の６世紀末のものと奈良時代のものがある・

51 号墳（図版 18・写真図版 13）

略報には「封土は既に流失してしまっており、発掘前に箱式石棺の端が一部のぞいていた。石棺の幅 46cm、長さ 1.80 m、副葬品は管玉３個のみしか出土しなかったが、一部に骨片らしきものが出土したことから言っても余り攪乱されていないものと思われる。尚、封土中より、弥生式土器の破片が出土した。」と記されている。

主体部（箱式石棺）実測図（図版 18）にあるように、割石を側壁にそれぞれ４石立て、小口にはそれぞれ１石を立てた箱式石棺で東西方向を向いて築造されていた。幅は幅 46cm、長さは 1.80 mで副葬品として管玉３個が出土した。なお、封土中より弥生式土器の破片が出土している。

52 号墓（写真図版 13・14）

略報には「発掘以前は道路開さく時の土が積み上げられており、封土の様子は一切わからなかった。発掘の結果、当地方では初めての弥生時代の様式の遺物をもった墳墓であることが判明したので、原形状の検出に努めた結果、後記の如く、円形の土盛りを確認した。」とあり、加古川地域における新たな発見であったことが記されている。

なお、本墳については、2009 年に『弥生墓からみた播磨』―附・特別報告「西条 52 号墓発掘調査の記録」として第９回播磨考古学研究集会実行委員会から報告されている。また平成 26 年にも『兵庫県立考古博物館紀要第７号』に本墳についての記述があり、本報告書にその一部を転載している。

53 号墳（図版 19）

略報には「封土は僅かしか残っていなかった。調査の結果、一部朱のついた幅 0.55 m、長さ 2.09 m の木棺を埋葬した木棺直葬墳と判明、遺物は封土に混入した弥生式土器片のみ判明」とある。

墳丘測量図（図版 19）から径 10 mほどの円墳であったと思われる。

主体部実測図（図版 19）によると地表から深さ約 0.5 mの位置に、長さ 3.15 m、幅 1.50 mの長方形の墓壙を掘り、幅 0.6 m、長さ 2.10 mの木棺を埋葬したものであり、朱が確認された。層序は表土である黒色土層、褐色土層、黄色土層（砂質）、地山は黄褐色土層であった。

なお、遺物は封土に混入した弥生式土器片があった。

58 号墳（図版 19・31・写真図版 15）

略報には「発掘にかかる前、既にブルドーザーによって破壊されてしまっていた。その為、横穴式石室は殆んど壊滅状態になっており、いろいろと努力したが、その規模は推定しようもなかった。しかし、遺物は割合よく残っており、須恵器（盌、平瓶 1 、坏破片）、土師器などを確認することができた。」とある。

墳丘測量図（図版 19）によると、略報のように墳丘は削られてしまっており、石材が点在しており墳丘を失っていることがわかる。

また、石室実測図（図版 19）には石室の側壁に使用された石材が両側にそれぞれ 5 石確認できる。これによると石室は幅 0.7 mで、長さ 1.5 mまで確認できることから比較的小さな横穴式石室墳であったと思われる。

遺物として須恵器（平瓶 1 ・台付椀）、土師器があり、陶邑編年のＴＫ 209 形式の時期に相当する。

59 号墳（図版 1 ・19）

略報には「この古墳と次の 60 号墳は台地の東側の縁辺部、丁度 52 号墳とは逆の地点に存在する。小円墳で主体部は木棺直葬墳であった。遺物は全く出土しなかった。」とある。

西条古墳群位置図（図版 1 ）によるとＣ群の東北端に所在する古墳で 58 号墳と南北に対面する位置関係である。

59 号墳主体部実測図によると地表から深さ約 0.17 m、長さ 1.00 m、幅 0.4 mの小さな長方形の墓壙を掘り、幅 0.22 m、長さ 0.85 mの木棺を埋葬したものである。層序は赤褐色土層、地山は赤褐色土層（礫混じり）であった。小円墳で主体部は木棺直葬であったが遺物は全く出土していない。

60 号墳（図版 20・41・写真図版 14）

略報には「59 号墳に近接して 2 ヶ所に渉って弥生式土器（壺棺）が出土した。何れも合わせ口になっていたが、西側のものは小さく、はたして壺棺として使用できたか疑問の点もある。」と記されている。

墳丘測量図（図版 20）から径は 10 mほどの円墳であったと思われる。また主体部実測図（図版 20）には木棺直葬墳の検出状況図もあり、また、土器棺の出土状況図（図版 20）もあることから、本来、弥生時代の壺棺墓の墳丘に古墳時代になって木棺直葬墳が構築されたものと思われる。木棺直葬墳は主体部実測図（図版 20）によると幅 0.80 m、長さ 1.80 mの墓壙に幅 0.5 m、長さ 1.5 mの木棺を直葬したものと思われる。

また、壺棺は 2 組の棺身と蓋にあたる土器が出土している。

（上月昭信）

注 1　西条古墳群発掘調査団「西条古墳群調査略報」昭和 39 年

注 2　田辺昭三「陶邑古窯跡群Ｉ」平安学園考古クラブ 1966 年

注 3　篠宮正・友久伸子ほか「西条 52 号墓出土品の共同研究」
『兵庫県立考古博物館研究紀要第 7 号』 2014 年 3 月

第６章　古墳群出土の遺物

第１節　土器（須恵器・土師器）

１．遺物の出土と整理

⑴　遺物の保管状況

遺物は完形品については展示ガラスケースにて保管展示、破片等については木箱にナイロン袋に入れて倉庫内で保管されていた。

Ａ．展示ガラスケース保管遺物

遺物には出土古墳名・出土位置・出土年月日等の注記が施されている。但し、一部の遺物に誤記または無記入のものが存在する。これについては、写真・図面等の照合によって出土古墳を特定したものもあるが、特定できなかったものもある。

Ｂ．収蔵木箱

袋ごとに遺物カードが納められ、個々のカードには通し番号が記されていた。通し番号は遺物台帳での管理番号と推測されるが、番号が未記入のものもあり、また、台帳そのものが紛失している。このため、遺物収納袋ごとに新たに通し整理番号を付し、台帳を作成した。そのうえで、実測可能な遺物を抽出し、最終的に報告番号を付した。但し、本来の出土古墳とは異なる古墳のラベルが挿入されているものもあり、また、まったく地点の離れた古墳同士の遺物が接合するなど、取り上げ時にすでに誤記や取り違えなどが生じているものもあった。明らかな誤りが判明したものについては精査のうえ修正し、その旨を台帳に記したが、それ以外については基本的には遺物ラベルの表記に従っている。

Ｃ．未実測遺物と未整理遺物

時間的制約の中で、接合不十分な遺物などについては実測を断念したものや実測可能でありながら作業を実施できなかったものもある。また、出土古墳不詳の木箱も多数存在しているが、これらの遺物についても整理までは及んでいない。この中には、各号墳の中で所在不明の遺物も含まれている可能性もある。

⑵　杯の分類の問題

７世紀にはいると、いわゆる杯Ｇと呼ばれる金属器模倣の器種が出現するとともに、播磨では比較的早くに杯Ｈ（立ち上がりのある杯身）が消失し、それまでの蓋の天地を逆転させて無蓋の杯身とした形態が、一時期、生産の主体を占める。三木市の年ノ神１号古墳（『兵庫県文化財調査報告第 298 冊』2006 年）のように杯Ｈ身を蓋に転用して杯Ｇ身に被せている例もあり、また、南淡路市の汁谷窯（『兵庫県文化財調査報告第 234 冊』2002 年）では杯Ｈ身を逆さにして蓋のようにして焼成する一方で、従来蓋としていたものを無蓋の杯身として重ね焼きしている。従って、古墳時代から歴史時代への過渡的段階の杯蓋形態は、蓋と身とセットで焼成するものと無蓋の杯として重ね焼きするものが共存する過渡的時期があり、該当物について蓋にするか身にするかで判断に迷うものも多く、西条古墳群においてもその例に漏れない。

蓋と身の識別の目安として、杯Ｈが蓋と身をセットにして焼成されていることを前提にして、蓋としての識別は①天井部全体に降灰若しくは自然釉がかかっている。②口縁端部に焼成時における杯身との

融着痕や剥離痕が残る。③焼成時にセットとなる杯身に被せた形状変化の特徴として、口縁部の両端が収縮して楕円状を呈する。以上の３点であり、逆に無台の身としての識別は、口縁端部に重ね焼きを示す降灰状況を示している場合となる。

以上が区分の目安であるが、それでも区分が難しい場合もある。この場合は、蓋と認定できるものが含まれていれば、その他も蓋とし、逆に重ね焼きの痕跡を示すものが含まれていれば、その他も無台の杯身として仮区分している。ただこれも絶対的なものではなく便宜的な識別であることを断っておく。

⑶　初葬と追葬遺物の識別

横穴式石室は追葬が行われていることが多い。本調査は緊急調査でもあり、ほとんど初葬と追葬の遺物の識別が行われていない。従って提示した遺構および遺物実測図も初葬と追葬の区分は行い得ていない。

２．各古墳出土土器の概要

1 号墳出土土器（須恵器）：図版 21・写真図版 15

⑴　石室・石室入口出土須恵器

杯Ｈ蓋（*0101* ～ *0104*）

杯Ｈの身の出土はないが、*0104* は天井部全体に自然釉がかかり、口縁端部も焼成時における杯身との融着痕や剥離痕が残り、確実に杯Ｈの蓋と認定できる。また、*0102* も、口縁端部に杯身との融着による剥離痕が見られる。*0101*･*0103* も蓋か身の区分は難しいが､蓋とした *0104* と *0102* の存在により、ここでは蓋として扱う。口径 10.8cm ～ 11.8cm。天井部と体部の境は稜をもち､底部外面はヘラ切り後、なで調整を行っている。

無蓋高杯（*0105*）

口径 10.5㎝、脚径 8.7cm、器高 10.2cm。杯体部中央に 1 条、脚部下位に 1 条の沈線を巡らす。杯体部と底部の境は突出し、稜をもつ。脚底部は緩く開き、端部は上方を向く

無蓋高杯（*0106*）

口径 12.4cm。脚部を欠くが、短い脚部を伴うと思われる。体部中央に沈線を施し、底部外面はヘラ削りを行う。

その他の遺物（*0107* ～ *0110*）

0107 は体部を欠くが、口縁部が大きく開く 8 世紀前半代の長頸壺で、内外面とも焼成時の降灰による灰釉の発色が著しい。*0108* は直口壺で体部から底部までの破片が残存しているが、接合には至っていないので口縁部のみ実測を行った。内外面とも降灰による自然釉の発色が著しい。このほか平瓶（*0109*）の口縁部が破片の状態で出土している。*0110* は口縁部を欠くが、体部に 2 条の沈線と列点文を巡らす長頸壺で、底部には外側に踏ん張る短い脚を付す。

⑵　盛土出土須恵器

古墳築造時の盛土に混入したものと思われ、*0111* 以外は当該古墳築造以前の遺物である。*0112* は透かしが長方形の 4 方透かしである。甕 *0114* は頸部上半に削り出しの段、その下に 2 本の沈線を巡らす。*0111* はロクロ調整などからみて 8 世紀代の杯Ａとなろう。

２号墳出土土器（須恵器）：図版 21・写真図版 15

杯Ｈ蓋（*0201* ～ *0206*）

0203・0205 は両端が収縮して楕円状を呈する。これは焼成時にセットとなる杯身に被せた形状変化の特徴である。*0201・0202・0204・0206* も蓋か身の区分は難しいが、蓋とした *0203* と *0205* の存在により、ここでは蓋として扱う。口径は 12cm 前後のもの（*0201・0202・020*6）と 10cm 弱のもの（*0203 ～ 0205*）に大別される。底部外面はヘラ切り後、なで調整を行っている。

無蓋高杯（*0207・0208*）

0207 は短脚の無蓋高杯で口径 12.0cm、高さ 7.2cm、脚径 8.3cm である。脚部底部が水平に開き、端部は上方に向く。*0208* は口径 8.4cm、高さは 9 ㎝余りと推定される。杯部中央に段がつく。

台付椀（*0209*）

コップ形の体部に外側に踏ん張る脚部を付す。胎土は精良である。体部は全体をヘラで削り調整を施し、上部に 2 条の沈線を巡らす。脚部は側面中央に段を付け、三角形の透かしを 5 ヶ所穿つ。

※当該椀は 21 号墳のラベルが挿入された破片と接合したが、21 号墳の記載を誤記と見なして 2 号墳出土遺物に帰属させた。

長頸壺（*0210*）

８世紀代の長頸壺で、口縁部を欠くが、算盤玉形の体部に外側に踏ん張る高台をもつ。

小皿・椀（*0211 ～ 0214*）

石室入口付近から当該資料を含め、平安時代以降の再利用時の遺物が多数出土しているが、時間的な制約もあり、すべては図化しておらず、ごく一部の掲載にとどまっている。*0211* は平安後期の小皿で底部に糸切り痕を残す。*0212 ～ 0214* は糸切りの椀で、このうち *0212* は側面をヘラで整形した平高台を有する。糸切り椀として播磨に導入初期の 10 世紀代に位置づけられる。*0213・0214* は高台を消失しており 12 世紀代に位置付けられる。

４号墳出土土器（須恵器）：図版 22

杯Ｈ身（*0401 ～ 0404*）

0401 と *0402* はそれぞれ口径 10.9cm、10.4cm。立ち上がりは低く内傾する。天井部と体部の境は屈曲する。底部はヘラ切り後、なで調整を行う。*0402* はヘラ切り後、板なで調整を行った痕跡を残す。

杯Ｈ蓋（*0405 ～ 0407*）

0405 と *0406* はそれぞれ口径 10.5cm、11.8cm。天井部と体部の境は屈曲する。天井部外面はヘラ切り後、なで調整を行う。

無蓋高杯（*0408 ～ 0410*）

３点出土している。脚部はいずれも長脚で、透かしを有せず、端部は水平に大きく開く。杯部は体部と底部の境が丸いが、深手のもの（*0408*）と浅手のもの（*0409・0410*）がある。

平瓶（*0412・0413*）

口頸部はやや中央寄りにつき、直上方向に向く。頸部側面には 1 条の沈線を巡らす。肩部は体部との境は稜をもち、体部下半はヘラ削りを行う。肩部内面に径 1.5cm の閉塞円孔が残る。肩部外面には自然釉が発色し、小窯壁片が付着する。*0415* は扁平な体部にやや直立する口頸部を持つ。底部は平らである。体部外面に板なでによる調整痕を顕著に残す。

その他

直口壺（*0414・０415*）や長頸壺（*0417*）のほか、8 世紀前後に位置付けられる長頸壺（*0418*）・

杯Ｂ（*0416*）などの石室再利用の遺物が出土している。

６号墳出土土器（須恵器・土師器）：図版 22・写真図版 15

須恵器

杯Ｈ蓋（*0601*・*0602*）

杯Ｈの身の出土はないが、降灰の状況や口縁端部の剥離の状況から杯Ｈの蓋と判断した。口径 10.6cm・11.3cm。天井部外面はヘラ切り後、丁寧ななで調整を行う。

杯（*0603* ～ *0606*）

0604 は蓋か身かの識別は難しいが、重ね焼きらしき痕跡を残すという点で杯に分類した。口縁部と体部の境は稜を持ち、口縁部は直上方向に立ち上がる。底部外面はヘラ切り後、なで調整を行う。*0603* は口径 9.4cm で、当古墳群中で最小口径である。底部外面はヘラ切り後、なで調整を行う。*0606* は口縁部に重ね焼きの痕跡を有する。底部は平らで体部は斜め上方に開く。口径 11.8cm。底部外面はヘラ切り後、丁寧ななで調整を行う。野新村 1 号窯に似た形状のものがある。

平瓶（*0608*）

斜め上方に開く頸部と稜のない体部をもつ。肩部には自然釉が発色している。×印のヘラ記号が刻まれている。

杯Ａ（*0609*）

口径 12.3㎝、底径 8.8cm。体部は直上方向に立ち上がり、底径も広いことから８世紀の杯Ａに分類した。体部内外面にロクロ調整の痕を残し、底部外面も丁寧な調整を施している。

土師器（*0610* ～ *0612*）

土師器椀（*0610*）は口径 16.6cm、器高 10.1cm、高台径 7.0cm。外方に踏ん張る高台をもつ。体部は丸みをもって立ち上がる。内面の暗文は表面が荒れているため確認できない。長胴甕（*0612*）は口径 11.5cm、高さ 21.7㎝。口縁は「く」の字状に短く屈曲する。体部外面は縦方向のハケ目調整、内面は指抑えとなで調整を行う。

7 号墳出土土器（須恵器）：図版 23

0702 と *0704* は床面出土と遺物カードに記載されているが、*0701* と *0703* はそれぞれ 7 号墳盛土トレンチ・西側とのみ記されているだけで、正確な出土箇所は不詳である。

0701 はかえりの径 8.0cm で、つまみを欠く。天井部はヘラ切りの後、なで調整を施すのみで、ヘラ削りは施されていない。*0702* は *0701* とセットになる器形である。直上方向に立ち上がる体部をもち、体部と底部の境は丸く、底部は平らで、ヘラ切り後、なで調整を施すのみである。*0703* は杯身の可能性もあるが、形状から杯蓋と判断した。口径 11.2㎝。*0704* は提瓶で直上方向に立ち上がる口頸部を持つが、口縁部を欠く。

11 号墳出土土器（須恵器）：図版 23

古墳番号としては抹消されている。出土遺物は破片である。*1101* は杯の底と注記されているが、大振りで厚みがあるので、壺か瓶類の底部であろう。*1102* は長頸壺。このほか、杯Ｂの蓋のつまみと思われる遺物も採集されている。

13 号墳出土土器（須恵器）：図版 23

甕（*1301*）は口径 17.8cm。大きく外反する頸部をもち、口縁端面は平坦である。体部片も出土しているが、接合には至っていない。

14 号墳出土土器（須恵器）図版 23・写真図版 15

調査日誌や遺構図面には多数の遺物が記録されているが、保管遺物の中で 14 号墳出土の注記が確認できるのは *1401* と *1402* の 2 点だけである。これとは別にガラス展示ケース内には注記のない遺物群があり、このうち *1403* ～ *1407* を遺構図面および日誌の出土状況図と照合して 14 号墳の遺物群に特定した。また、平瓶も平面図上では 1 点出土していることになっているが、無注記の平瓶が *0004*・*0005*（図版 31）の 2 点存在しており、どちらが 14 号墳出土の平瓶に該当するかは現時点では特定できなかった。なお、小型の台付長頸壺は盗難にあったと日誌に記述されているので現存しない。

須恵器

高杯（*1401*）

初葬のものと判明している唯一の遺物である。口径 10.7cm、器高 9.9cm、脚径 8.3cm。杯部は体部下位に段を有する。脚部中央には 2 条の沈線を巡らす。

杯（*1402*）

杯H身の底部か無台の杯身かはわからない。あるいは蓋の可能性もあるが、ここでは杯身の底部として見なしておく。ヘラ切り後、板なで調整を行った痕跡を残す。

蓋（*1403* ～ *1405*）

記録では石室内から 3 点の蓋の出土が確認できる。いずれも宝珠つまみを持ち、天井部のヘラ削りを行う。*1403*・*1404* は天井部から口縁部の境に段が付く。

瓊（*1406*）

口径 3.4cm、高さ 8.7cm。口縁部と頸部の境は沈線によって区分されている。頸部中央と体部中央に沈線を巡らす。底部外面は手持ちのヘラ削りを行う。火襷の痕を残す。

台付短頸壺（*1407*）

脚台付の短頸壺である。体部中央には波状文を巡らす。脚台側面に 5 個の台形の透かしを穿っているが、透かしの大きさは一定ではなく、形も不揃いである。脚端部は丸く収めるが、雑な成形である。口径 9.8cm、高さ 17.5cm。

土師器

甕（*1408*）

口径 7.2cm、高さ 6.7cm の小型壺である。短く直上に立ち上がる頸部をもつ。体部外面に横方向のハケ目を残す。

21 号墳出土土器（須恵器・土師器）：図版 24・25・写真図版 16

⑴　土器群出土須恵器

杯H蓋（*2101* ～ *2106*）

口径は 12.8cm ～ 13.5cm。いずれも器壁は内外面ともに暗青灰色、断面はすべてセピア色を呈する。

ヘラ削りは蓋で天井部の約２分の１。Ａ類とＢ類の２つの形態がある。Ａ類は体部が内側にはいる一群である。天井部と体部の境は沈線状の凹部を巡らして区分している。器壁はＢ類に比べて厚みをもつ。Ｂ類は体部が外方に開き、天井部と体部の境は鋭い稜をもつ。器壁は薄く、口縁端面の内側に明瞭な段をもつ。

杯Ｈ蓋（*2115*）

口径 12.5cm、高さ、4.3cm。天井部と体部の境は沈線状の凹部を巡らして区分している。上記の *2101* ～ *2106* の蓋群と比較して小さく色調も青灰色で全く異なる。

杯Ｈ身（*2107* ～ *2110*）

杯の立ち上がりは内傾し、口径は 9.6cm ～ 11.2cm である。口縁端部は内側に段を設ける。いずれも蓋と同様、器壁は内外面ともに暗青灰色、断面はセピア色を呈する。器壁は極めて薄手である。

高杯（*2111*）

杯部を欠くが有蓋の可能性が高い。脚端部を上方に突出させる。小片であり、透かしの数は不明であるが、おそらく３方透かしになろう。

無蓋高杯（*2112*）

口径 14.2cm、器高 10.9cm、脚径 9.0cm。脚端部を丸く収める。杯部上部に沈線状の段を設ける。３方透かし。

瑠（*2113*）

口縁部は太い頸部から外上方へ立ち上がるが、口縁部と頸部の境の稜線はなく、沈線で区分されている。23 号墳 *2302* のような外面の装飾は施されていない。

甕（*2114・2118*）

2114 は口縁部の下方に削り出しの突帯を巡らす。断面はセピア色を呈する。頸部外面にヘラ状工具による刻みが認められるが、記号か単なる焼成前の傷かはわからない。

2118 はやや斜め上方に立ち上がる頸部にやや肥厚した口縁が取りつく。口縁部内面はやや強くなでており、図面よりもややシャープに作る。体部外面は叩きの後、掻き目調整を行い、内面の当て具痕は消されている。

台付長頸壺（*2117*）

丸い体部に長い頸部と底部に脚台がつくが、両方とも欠けている。体部には上下２本の沈線の間に列点文を施す。21 号墳の時期のものではなく６世紀後半～７世紀代の遺物が混入したものである。

台付甕（*2119*）

出土箇所はＤブロック土器群・南トレンチ（64 年４月 17 日付）、南中央トレンチ（64 年１月３日付）、第５棺棺内とある。但し、第５棺（ホ主体）棺内については誤記または混入の可能性があり、現時点では出土箇所から除外しておく。脚台付の甕である。甕本体は大きく外反する口縁部をもち、頸部に１段、体部に２段の波状文を巡らす。脚台部は端部を上方に折り曲げ、側面に５個の方形透かしを穿つ。胎土は比較的精良で灰白色を呈し、他の須恵器とは質が異なる。

⑵　Ｂブロック出土須恵器

杯Ｈ身（*2116*）

ガラスケース内で保管されていた須恵器である。「Ｂブロック」と注記されているが、古墳名の注記はない。他の古墳でＢブロックの区割り名称を使用しているのは当該墳のみであり、遺物年代も問題が

ないのでここでは21号墳出土遺物として扱う。口径10.2cm、高さ5.0cm。立ち上がりはわずかに内傾し、口縁端部は内側に小さな段が付く。体部外面は丁寧なヘラ削りが行われており、黒い粒子が墨流しのようにロクロ回転により流れている。器壁は厚く色調は青灰色を呈する。

⑶　主体部出土土器

イ主体出土土器（土師器）

甕（*2120*）

口径 10.7cm、器高 15.6cm。やや細長い体部に短く立ち上がる頸部を持つ。外面は縦方向のはけ目調整。内面はなで上げ調整を行う。

ハ主体出土土器（須恵器）

広口壺（*2121*）

頸部は斜め上方に立ち上がり、口縁部は屈曲して短く立ち上がる。口縁部内外面とも比較的シャープに仕上げる。頸部は上下２段に波状文を巡らし、その間を突帯で区切る。体部外面は叩きの後、掻き目調整を行い、内面は当て具の痕をなで消している。口径 14.5cm、器高 21.0cm。色調は暗青灰色を呈する。

二主体出土土器（須恵器・土師器）

広口壺（*2122*・*2124*）

体部叩きの痕を残すが、形状から壺に分類する。*2122* はやや直上に開く頸部と上方に摘まみ上げる口縁部を有する。体部外面は叩き成形を行った後、上半部は掻き目調整を行い、叩きの痕を消しているが、下半部は叩き痕をそのまま残している。内面は当て具痕を消している。*2124* は斜めに開く頸部と上方に小さく摘まみ上げる口縁部を有する。体部内外面の成形・調整は *2122* と同様である。

甕（*2123*）

頸部は大きく外反し、口縁下端部をわずかに垂下させる。外面は叩きの痕をきれいになで消す。色調は灰白色を呈する。口径 15.9cm、高さ 19.9cm。

土師器甕（*2125*）

口径 11.0㎝、器高 10.9㎝。「く」の字状に外反する口縁部をもつ。体部は表面の摩滅著しく、調整痕の観察は難しい。内面には粘土紐の痕をなで消す。

ホ主体出土土器（須恵器）

広口壺（*2126*）

ニ主体 *2122* と同形態の壺で、直上に開く頸部と上方に摘まみ上げる口縁部を有する。体部外面は叩き成形を行った後、上半部は掻き目調整を行い、叩きの痕を消しているが、下半部は叩き痕をそのまま残している。内面は当て具痕を消している。口径 10.8cm、器高 14.5cm。

高杯（*2127*）

第５棺（ホ主体）の遺物カードが挿入されているが、遺物袋には墳丘上の台付甕（*2116*）の破片も含まれている。しかも当該高杯は破片であり、副葬品としては考え難いので、当該遺物がホ主体からの出土かどうかは疑問である。ここでは、今のところ、ホ主体の副葬品としての扱いは保留しておきたい。底径 9.2cm。台形の透かし３個を持つ。外面は掻き目痕を残す。

22 号墳出土土器（須恵器）：図版 26

調査日誌には「発掘の結果、古墳ではないことが確認された。」と記述されているが、杯蓋（*2201*）

が表土下から出土している。ほぼ完形で口径 10.5cm、高さ 3.1cm。

23 号墳出土土器（須恵器）：図版 26・写真図版 17

広口壺（*2301*）

口径 12.8cm、高さ 18.7cm。斜めに開く頸部と端部を下方に垂下させる口縁部を有する。体部外面は叩き成形を行った後、上半部は掻き目調整を行い、叩きの痕を消しているが、下半部は叩き痕をそのまま残している。内面は当て具痕を消している。暗青灰色を呈する。

瓹（*2302*）

口縁部は太い頸部から外上方へ立ち上がる。口縁部と頸部の境は突出し、稜線をもつ口縁部・頸部・体部に波状文を巡らす。口縁から体部全体に降灰があり、暗緑灰色に窯変している。底部外面に火襷の痕を残す。

25 号墳出土土器：図版 26・27・写真図版 18

⑴　土器群（須恵器）

杯Ｈ蓋（*2501 ～ 2508*）

調整や形態的特徴から以下の３つのタイプに分けることができる。

Ａグループ（*2501・2508*）

天井部と体部の境は鋭い稜を持ち、突出する。器壁はうすく仕上げる。口縁端部の内側に段をもつ。口径 12.7cm（*2501*）と 12.0㎝（*2508*）。天井部のヘラ削りは２分の１程度行う。

Ｂグループ（*2502 ～ 2505*）

天井部と体部の境は沈線状の凹部を巡らして区分している。稜線は甘くわずかに突出する。口縁端面は平坦で段をもつ。口径 11.3cm ～ 12.0cm。天井部のヘラ削り２分の１から３分の１程度の範囲で行う。

Ｃグループ（*2506・2507*）

天井部と体部の境は屈曲するが、Ａ・Ｂグループのような明瞭な段をもたない。口縁端面は丸く収めるかわずかの段をもつ。口径 12.0cm（*2506*）と 12.0㎝（*2507*）。天井部のヘラ削りは３分の１程度の範囲で行う。

杯Ｈ身（*2509 ～ 2512*）

蓋と同様調整や形態的特徴から以下の３つのタイプに分けることができる。

Ａグループ（*2510*）

口縁端部はシャープで内側に傾斜し、段を持つ。器壁はうすく仕上げる。口径 12.2cm。

Ｂグループ（*2509・2511*）

口縁端部は内側に傾斜し、小さな段を持つ。器壁はうすく仕上げる。口径 10.8cm（*2509*）と口径 10.4cm（*2511*）。

Ｃグループ（*2512*）

口縁端面は平坦で、小さな凹部を持つ。器壁はやや厚い。口径 10.7cm。

瓹（*2513*）

口縁部は太い頸部から外上方へ立ち上がる。口縁部と頸部の境は段をもつ。頸部に波状文を巡らす。口径 12.6cm、高さ 17.5cm である

⑵　封土（須恵器）

蓋（*2514・2515*）

口径 11.5cm と 11.0cm である。小片であるので復元口径が小さく出ている可能性もあり、杯蓋か有蓋高杯あるいは短径壺の蓋かは判断できない。ただ、*2514* については体部の高さから壺蓋の可能性が高い。

短頸壺（*2516*）

口径 7.8cm、高さ 9.5cm。頸部直下に共蓋の痕跡を残し、その痕跡が蓋 *2521* と一致した。肩部に降灰。口縁端面は平坦で凹部を作る。肩部に掻き目調整を行う。

甕（*2517*）

口縁部直下に 2 本の断面三角形状の削り出し突帯を巡らす。

⑶　主体部出土土器

第 2 主体出土須恵器

瑙（*2519*）が出土している。口径 11.0cm、高さ 12.5cm。口縁部と頸部の境は突出する。口縁端面は平坦に仕上げ口端面に凹部をもつ。

東西セクション出土須恵器

杯身（*2520*）が出土している。口径 11.0cm、高さ 5.0cm。立ち上がりはやや内側に傾き、口縁端部は平坦で端面に小さな凹部を設ける。器壁が厚い。

第 3 主体棺上部出土須恵器

短頸壺蓋（*2521*）が出土している。短頸壺 *2516* の共蓋である。天井部と体部の境の稜は甘い。口縁端面は平坦であるが、内側を向き、小さな凹部を持つ。口径 7.8cm、高さ 3.5cm。

第 3 主体棺内出土土器

瑙（*2522*）

頸部から口縁部へは屈曲して続く。口縁部外面に波状文を巡らす。口径 12.6cm、高さ 17.5cm。口縁部から体部下半まで自然釉がかかる。体部上半は板状工具での調整痕を残すが、下半から底部にかけて叩きの痕を残す。口縁端面は平坦で小さな段を設ける。

直口壺（*2523・2524*）

2523 は口径 10.8cm、高さ 15.0m。間隔の狭い断面三角形の突帯を 2 条巡らし、その下に波状文を巡らす。体部下半は叩きの痕を残すが、上半部は板状工具で調整している。肩部外面に自然釉が緑色に発色する。共蓋の痕跡は認められない。*2524* は口径 10.6cm、高さ 14.6cm。頸部中央に 2 条の突帯、その下に波状文を巡らす。内面および口縁部外面には降灰がなく、共蓋の痕跡を残す。肩部外面に自然釉が緑色に発色する。体部下半は叩きの痕を残すが、上半部は板状工具で調整している。

土師器直口壺（*2525*）

口径 9.9cm、高さ 14.5cm。頸部はやや斜め直上方向に立ち上がる。頸部の突帯はないが、須恵器 *2523・2524* を模倣したものと思われる。

埴輪（*2526*）

封土から埴輪の基部が出土しているが、当該古墳に配されたものではない。

29 号墳出土土器：図版 28・写真図版 19

⑴　土坑（A遺構）出土土器

須恵器

杯H身・蓋

Aグループ（*2901 ～ 2910*）

内面に当て具痕を有する一群で、杯身が 5 個体、蓋が 5 個体ある。焼成時の蓋と身のセットがそのままの組み合わせで納められており、計 5 組のセットとなる。杯蓋の口径 11.6cm ～ 12.0cm、杯身の口径 10.0cm ～ 10.3cm で大きさが揃う。焼成は全体に甘い。蓋は天井部と体部の境は稜をもち、わずかに突出するが、稜線は甘い。口縁端面は水平で段をもつ。杯身は立ち上がりが内傾し、口縁端面は内面側に傾き、小さな段を持つ。

29 号墳須恵器杯類の組み合わせ

グループ	杯蓋	杯身
A	2901	2902
	2903	2904
	2905	2906
	2907	2908
	2909	2910
B	2911	2912
	2913	2914
	2915	2916
	2917	2918
その他	2919	
	2920	
		2921
		2922

Bグループ（*2911 ～ 2918*）

表の通りすべて蓋と身が組み合う。Aグループとは異なり、自然釉が発色する硬質の仕上がりである。内面の当て具痕は見られない。蓋は天井部と体部の境はわずかに突出する。口縁部は端面が水平に開き小さな段をもつ。杯身は立ち上がりが内傾し、口縁端部を丸く収めるもの（*2912・2914*）と口縁端面が水平に開き小さな段をもつもの（*2916・2918*）がある。杯蓋の口径 12.0cm ～ 12.5cm、杯身の口径 10.3cm ～ 10.6cm で、Aグループの一群よりわずかに大きい。

Cグループ（*2919 ～ 2922*）

Aグループ・Bグループ以外のものを一括した。蓋（*2919・2920*）は天井部が平らで丸みを持たない。口縁端部はわずかに内側に向き、小さな段をもつ。身（*2921・2922*）は口縁端部を丸く収める。*2921* は土師質の仕上がりである。この蓋 2 個体と身 2 個体は焼成時のセット組ではないが、供献時に互いに組み合わせて埋納されたと思われる。口径は蓋が 12.4cm と 12.8㎝、身が 11.0cm と 10.0cm である。

土師器

椀（*2924*）

口径 11.0cm、高さ 6.0cm。底部からゆるやかに立ち上がり、上半部で直上方向に立ち上がる。口縁端部は内側に面をもつ。内外面に磨きの痕跡を残す。

鉢（*2925*）

平らな底部に湾曲しながら直上方向に立ち上がる体部を持ち、口縁部はわずかに内傾し、端面を内側に向ける。内面にハケ目調整の痕跡を残す。口径 11.1cm、高さ 7.0cm

直口壺（*2926*）

残存高 9.7cm。調査日誌に長頸壺と記載されているが、口頸部を欠いており、長頸壺となるのか直口壺形態になるのかはわからない。体部外面にハケ目調整、内面になで調整の痕を残す。

甕（*2927 ～ 2929*）

2927 の口縁は直上方向に立ち上がる。内外面ともにハケ調整を行う。口径 11.0cm、高さ 10.5cm。*2928* は口径 12.7cm、高さ 13.6cm、*2929* は口径 13.2cm、高さ 14.8cm でともに口縁部を「く」の

字状に外反させる。内外面ともにハケ調整を行う。

⑵　C遺構出土須恵器

短頸壺（*2930*）

口径 8.0cm、高さ 9.0cm。口縁部は短く立ち上がりわずかに内傾する。口縁端面は平坦で、わずかに内側に傾ける。底部外面は手持ちのヘラ削りを行う。肩部に自然釉がかかるが、口頸部には釉がかかってないので共蓋を伴っていたことがわかる。

30 号墳出土土器（須恵器）：図版 29

器台（*3001*）

杯部と脚端部を欠く。３段に分割され、各段に２条または３条の波状文を配する。透かしは三角形で各段千鳥状に配する。４方透かし。

31 号墳出土土器：図版 29

須恵器杯Ｈ蓋・身と土師器の甕が出土している。須恵器杯身 *3101* は口径 8.7cm、高さ 2.4cm で、当古墳群の杯では最小である。また、蓋 *3102* は口径 10.4cm、高さ 3.5cm である。ともにヘラ切り後、板なで調整を行った痕跡を残す。

32 号墳出土土器（須恵器）：図版 29

須恵器 *3201* と *3202* が出土しているが、*3201* は平安時代の突帯壺、*3202* も壺の体部で奈良時代～平安時代のものであろう。

33 号墳出土土器（須恵器）：図版 29

33 号墳は古墳とは認定されていない。壺の底部につく脚部（*3301*）が採集されているが、破片であり、全体の形状については不明である。

34 号墳出土土器（須恵器）：図版 29・写真図版 15

杯Ｈ身（*3401・3402*）

3401 は口径 10.7cm、*3402* の口径は推定で 9.6cm であるが、ともに小片で復元口径は正確を期し難い。

高杯（*3403* ～ *3405*）

3403 は小片で体部下半に段を持つ無蓋の高杯である。*3405* は口径 9.6㎝、高さ 8.0cm、脚径 7.4cm の無蓋高杯で杯体部と底部の境を沈線で分けている。

瓊（*3406・3407*）

3406 は口径 8.9cm、高さ 10.5cm。体部径 7.0cm、口縁部と頸部の境はわずかに稜をもつ。体部には 1 条の沈線を施すが、穿孔は施されていない。底部外面は手持ちのヘラ削りが施されている。*3407* は口縁部を欠く。口縁部と頸部の境は突出し、明瞭な稜をもつ。体部には 1 条の沈線を施すが、穿孔は施されていない。底部外面は手持ちのヘラ削りが施されている。

平瓶（*3409・3410*）

3409 は口径 6.8cm、高さ 13.2cm。口頸部はラッパ状に斜めに開く。肩部と体部の境は丸く、体部径に比して高さが高い。肩部から体部にかけて自然釉がかかるが、カセの状態になっている。底部外面はヘラで調整している。*3410* は 35 号墳出土の破片と接合した。口径 6.4cm、高さ 15.6cm。頸部は斜めに立ち上がるが、口縁部付近で屈曲させてやや直上方向に立ち上がらせる。頸部と肩部境には２㎝弱の閉塞円孔が確認できる。底部外面は回転のヘラ削りを行う。

提瓶（*3411*）

口径 7.8cm、高さ 24.7cm。頸部に２本の沈線を施す。体部の片側が掻き目調整を行い、もう片側は閉塞円板の痕跡を残し、なで調整を行う。

その他

3408 は体部下半のヘラ削りが行われており、壺か瓿と思われる。*3412* は口径 15.2cm の甕で、口縁部は肥厚し、下端部は垂下する。*3413* は高杯の脚部である。透かしは縦長の方形透かしになると思われるが幅・数は不明である。

35 号墳出土土器：図版 30

須恵器

長頸壺（*3501*）は口径 9.8cm の口頸部の破片である。体部に３条の沈線を巡らせている。内外面は降灰により緑灰色に窯変している。平瓶（*3502*）は口径 6.7cm。体部を欠く。

土師器甕（*3503*）

球体の体部にやや水平方向に開く口縁部をもつ。口縁端部は上方に摘まみ上げられている。体部外面は摩滅が著しいが、一部にハケ目調整の痕が残る。胎土に砂粒を多く含む。口径 17.2cm、高さ 13.5cm。

36 号墳出土土器（須恵器）：図版 30

杯蓋（*3601・3603・3604*）

3601 は天井部と体部との境に明瞭な稜をもち、口縁端部にも段があり、*3603* や *3604* とは異なり、古い様相をもつ。

3603・3604 は天井部が平坦で、径が広いので、無蓋の杯身の可能性もあるが、杯Ｈ身（*3602*）の存在によりここでは蓋として扱う。口径は *3603* が 11.5cm、*3604* が 10.6cm で、ともにヘラ切り後、なで調整を行う。

杯Ｈ身（*3602*）

口径 11.8cm、高さ 3.4cm、受部径 14.2cm。体部は直線的に立ち上がり、立ち上がりは低く内側に倒れる。底部外面には蓋の口縁部の小破片が融着している。内面には降灰が見られるので、蓋を被せた状態で焼成したのではなく、蓋を下に置いて重ね焼きしたと思われる。

無蓋高杯（*3605・3606*）

3605 は口径 10.2cm、高さ 10.1cm、脚径 7.8cm。脚は上端の径と下端の径の差が小さく、底面近くで大きくほぼ水平に開く。

短頸壺（*3607*）

短い頸部に外反する口縁部をもつ。口縁部は図よりももう少し厚みが薄く、焼けひずんでいる。肩部には自然釉がかかり体部との間に沈線を巡らす。体部は全体にヘラ削りによって整形している。口径 10.8cm、高さ 11.0cm。

直口壺（*3608*）

頸部に 2 条の沈線を巡らし、体部に平行叩きの痕を残す。口径 6.9㎝。

その他

高杯の脚と思われるもの（*3609*）や土師器甕（*3610*）が出土している。

38 号墳出土土器（土師器）：図版 30

土師器甕 *3801* は「く」の字状に外反する口縁部をもち、内外面ともはけ調整を行う。口径 21.7㎝。

39 号墳出土土器（須恵器）：図版 30

杯H蓋（*3901*）

口径 11.8cm、高さ 11.8cm。天井部が高く、天井部と体部の境は屈曲して稜をもつ。

杯H身（*3902*）

口径 10.8cm、受部径 13.0cm、高さ 3.5cm で、立ち上がりは極めて低い。体部外面はヘラ切り不調整。底部外面に自然釉がかかる。自然釉は底部から体部への流れが認められるので、杯身の天地を逆にして焼成したと思われる。

高杯（*3903*）

底径 7.1㎝。脚部は中央に 1 条の沈線を巡らせ、ハの字状に開き、端部では水平となる。

甕（*3904*）

やや斜めに立ち上がる頸部から外反する口縁部を持つ。口縁端部は下方に垂下する。頸部には掻き目調整を行う。

40 号墳出土土器（土師器）：図版 30

40 号墳は古墳とされているが、出土遺物は手づくねによる土師器小皿（*4001*）で中世のものである。

41 号墳出土土器（須恵器）：図版 31

高杯（*4101* ～ *4103*）・器台（*4104*）・壺（*4105*）などが出土しているが、古墳とは判断されていない。

58 号墳出土土器（須恵器）：図版 31・写真図版 15

短脚高杯（*5802*）は 21 号墳Dブロック出土のものと接合したが、58 号墳では石室内からの出土が確実であるので、ここでは 58 号墳の遺物として扱う。口径 13.8cm、高さ 10.2cm の杯部に短い脚部を付す。脚部は高さ 2.5cm、底部径 9.0cm で、脚端部は水平に開く。一辺 1cm 前後の方形透かしが 2 方につく。

平瓶（*5801*）は口径 8.0cm、高さ 13.5㎝。丸い体部にラッパ状に開く口頸部をもつ。肩部と体部の境には沈線を巡らす。底部はヘラ削りで仕上げる。

無注記遺物（須恵器）：図版 31

蓋（*0001*）

高杯か短頸壺の蓋である。灰白を呈し、天井部には別の器物を載せて焼成した痕跡を残す。天井はヘラ削りを施しているが、器壁は厚く、口縁端部の段はみとめられない。天井部と体部の境の仕上がりも稚拙で、非熟練工による模倣的製品の色彩が強い。口径 13.3cm。

高杯（*0002*）

杯部中央に段を設ける。脚部は中央に 1 条の沈線を施す。ハの字状に開き、端部で水平となる。口径 9.5cm、高さ 9.0cm、脚径 7.0cm。

短頸壺（*0003*）

完形。口径 8.5cm、高さ 8.3cm。体部下半から底部にかけてヘラ削りされている。肩部に共蓋の痕跡を残す。

平瓶（*0004・0005*）

いずれかが 14 号墳出土のものである。*0004* は口径 6.1cm、高さ 12.0cm。頸部から口縁部にかけては漏斗状に広がる。体部外面は板状工具による調整痕跡を残す。底部外面はヘラ削りを行う。*0005* は口径 5.8cm、高さ 12.1cm。頸部から口縁部にかけてはわずかに広がる程度である。頸部には 1 条の沈線を巡らす。頸部内面中央には接合痕跡を残す。体部は板状工具による調整痕跡を残す。底部外面は手持ちヘラによる削りが行われている。

無頸壺（*0006*）

口径 7.6cm、高さ 9.5cm。体部中央と下位に削り出しの段をもつ。口縁部から下位の段まで掻き目調整を行い、下位から底部にかけて手持ちのヘラ削りを行う。

糸切り椀（*0007*）

平安時代後期の椀である。口径 13.6cm、高さ 5.2cm、底径 6.6cm。体部は直線的に斜め上方に開く。高台の側面の高さはほとんど消失している。

３．小結

西条古墳群は古墳時代の須恵器編年に基づけば、（Ａ）5 世紀後半から 6 世紀前半（TK23 型式～MT15 型式段階）、（Ｂ）7 世紀代（TK217 型式段階 / 飛鳥Ⅰ・Ⅱ）以降の 2 つの時期に大きく 2 つに分かれる。

5 世紀後半から 6 世紀前半の遺物群と古墳

⑴　土器群の特徴

21・25・29 号墳のいずれもの墳丘に土器群が供献されていた。土器群の存在は西条古墳の中で最も古く位置づけられる 3 基の古墳に共通している点、さらに各主体部の検出上面に置かれていた状況から、各主体部埋葬後の供養に伴う供献物と判断している。この 3 つの土器群には多くの須恵器杯類が出土しているが、それぞれの須恵器は古墳ごとに異なる様相を呈しているので、ここで簡単にまとめておくことにする。

まず、21 号墳の土器群の須恵器杯（*2101*～*2110*･*2115*）は *2115* の 1 点を除き、すべて器面が暗灰色、断面がセピア色を呈しており、同じ窯での一括製品と考えてよい。蓋の口径 12.8cm ～ 13.5㎝、身の口径は 10.7cm ～ 11.2cm である。口径の拡大化や立ち上がりの内傾化などの特徴から MT15 型式のも

のと推定される。器壁の薄さ・細部の調整などに関しては熟練度が高く、色調から見て陶邑窯製の可能性が高いが、陶邑窯からの工人の移動による在地窯での生産の可能性もある。いずれにしても陶邑窯の工人の手によるものと考えてよい。これに対して 29 号墳土坑（A 遺構）埋納の杯には３つのグループがあり、それぞれ蓋と身をセットにして埋納されていたようである。このうち２つのグループは焼成時の蓋と身の組み合わせ関係そのままが持ち込まれていることから、これらの埋納製品は近隣の在地窯から運ばれてきたと考えてよい。蓋の口径 11.6cm ～ 12.8cm、身の口径 10.0cm ～ 11.0cm で、21 号墳より一回り小さいが、21 号墳よりも器壁も厚く、細部の調整の熟練度などに関しては 21 号墳よりも低い。この点について一般的に MT15 型式は杯の口径の拡大に位置付けられるが、口径の小さいものも存在している（田中清美氏のご教示による）とのことであり（※ 1)、21 号墳・29 号墳の土器群ともに MT15 型式段階の製品としても矛盾はない。ただ、29 号墳の土器群については *2921* や *2922* のように口縁端部の段を消失した新しい要素を持つものもあり、21 号墳の土器群よりも後出ということになる。従って、21 号墳の土器群を陶邑窯産とし、29 号墳の土器群を在地産とすれば、加古川での須恵器生産の開始は MT15 型式段階となる。ただ、東沢 1 号墳出土の TK23 型式とされる須恵器の胎土分析結果は神野大林窯の分析値と一致することが報告（『東沢 1 号墳』（兵庫県文化財調査報告第 431 冊　2012 年）されており、先に述べたように 21 号墳の土器群が陶邑窯産ではなく、陶邑窯の工人による在地産の可能性もあり、当地域の須恵器生産の開始を巡る問題については今後検討が必要である。

なお、25 号墳土器群は蓋の口径 12.0cm ～ 12. 7 ㎝、身の口径 10.4cm ～ 10.7cm であり、３基の古墳の土器群の中で最も口径が小さいが、TK23 型式から MT15 型式までの古相から新相までの幅広い型式差を含んでいる。ここでは、古い時期の杯蓋が後年に使用されたものと判断し、土器群の供献時期を MT15 型式の年代に合わせておく。

※１　21 号墳から出土している *2115* は色調・胎土も *2101* ～ *2110* とは異なり、口径が 12.5㎝と一回り小さい。

⑵　主体部の須恵器

25 号墳

遺物年代と埋葬時期に時間差がないということを前提とすると、西条古墳群の中では 25 号墳第３主体が最も古く、TK23 型式併行期に位置付けられる。同じく第２主体出土の瑞は第３主体の瑞よりも新しく位置付けられ、TK47 型式相当になろうか。いずれにしても、25 号墳主体部副葬の各須恵器は陶邑窯の製品の可能性が高い。

21 号墳

ハ主体の壺が先行する要素があるが､それ以外の主体部出土須恵器は形態や製作技法が共通しており、各主体部間において、それほどの時間幅はないものと思われる。遺物年代については TK23 型式まで遡ることは難しく、土器群が MT15 型式段階とされるので、その間をとって TK47 型式相当としておきたい。当該主体部副葬の須恵器も陶邑窯の製品の可能性が高い。

23 号墳

主体部と思われる箇所から壺と瑞が出土している。瑞は古い要素をもつが、壺は 21 号墳出土のものと共通しており、TK47 型式併行期と考えておきたい。当該古墳出土須恵器も陶邑窯の製品の可能性が高い。

7 世紀代の古墳群と出土須恵器

西条古墳群の造営は 5 世紀後半頃に B 支群で始まり、6 世紀前半ころまで続けられるが、その後、6 世紀半ばから 7 世紀前後までの時期の古墳の造営がみられない。もちろん、緊急調査や墓地転用に伴う消失という側面もあり、すべての古墳の悉皆的な調査が行われたというわけではないが、この時期の遺物がほとんど出土していないということは古墳の造営が 6 世紀半ばまでに一旦終わったということになる。

7 世紀前後になると　A・C 群でそれぞれ横穴石室古墳の造営が行われるようになる。この中で年代の指標となる杯Hの出土状況をみると、杯Hの蓋と身ともに出土しているのは、4 号墳・31 号墳・34 号墳・36 号墳・39 号墳のみで、しかも出土点数はごくわずかである。以外の古墳は蓋のみか、蓋が逆転した形態の無蓋の杯身のみである。この中で、杯Hの身の大きさをみると、最も大きな 39 号墳 *3602* で口径 11.8cm、高さ 3.4㎝で、最小は 31 号墳 *3101* で口径 8.7cm、高さ 2.4㎝である。これを西条古墳群の南の台地に展開する神野大林窯跡群中で最も新しい 2 号窯（TK209 型式）と比較すると、2 号窯第 2 次窯体出土の杯身の口径が 13.6cm ～ 16.1cm で、平均 14.2cm、器高の平均が 3.6cm、第 1 次・第 2 次窯体床面間出土の杯蓋の口径が 13.2㎝～ 13.6cm で平均 13.4cm、器高の平均が 4.1cm である。従って TK209 型式とされる 2 号窯よりも一回り小さいことが明らかで、それまで主力器種として存続してきた杯H形態としての最終末様相を呈している。最終的には副葬品は杯Hに代わって無蓋の杯身などが主体となり、7 号墳や 14 号墳のようなかえりを持つ蓋と身の新しいセット（杯G）も導入される。また、各古墳に平瓶の副葬が目立つのも当古墳群の特徴と言えるかもしれない。このほか、石室内外からの 7 世紀末～ 8 世紀代の遺物の出土も少なくない。このあたりの状況は西条廃寺の存在も関係しているのであろうか。また、今回、整理はできなかったが、平安時代末から中世にかけての遺物も数多く出土している。

古墳群出土須恵器からみた加古川東岸の須恵器生産の開始と継続

当地域の生産地として西条古墳群の南にある神野大林窯跡群と東に所在する八幡町の野村・野新村窯跡群がある。神野大林窯群は現在のところ 4 基からなる窯跡群で 2010 年に兵庫県教育委員会によって発掘調査が行われている。窯跡の操業時期は TK10 ～ TK209 型式段階である。しかしながら、神野大林窯跡群の稼働期には西条古墳群で古墳が造営されておらず、同窯の製品はほとんど出土していない。ただ、当古墳群では 29 号墳出土須恵器のように在地産と見られる須恵器が供献されており、神野大林窯跡群に先行する須恵器窯が存在したことはほぼ確実であろう。

7 世紀代の古墳出土の須恵器の生産地については、加古川市八幡町の野村窯・野新村窯群が有力である。野村窯は 6 世紀後半から 7 世紀世紀にかけて 4 基以上からなる窯跡群であるが、発掘調査は行われておらず、実態は明らかではない（『加古川市史』第 7 巻 1985 年）。また、野新村窯跡群については 7 世紀半ばから 8 世紀にかけて 3 基以上からなる窯跡群（『加古川市史』第 7 巻 1985 年）で、このうち 1 号窯の発掘調査が行われている（『野新村 1 号窯発掘調査報告書』2010 年）。

追記

5 世紀後半から 6 世紀前半の遺物群については、田中清美氏から数多くご教示をいただいた。

記して感謝申し上げたい。

（森内秀造）

報告番号	古墳名称	出土位置	種別	器種	大きさ（cm）		
					口径	器高	底径
0101	1号墳	入口底（前の方）	須恵器	杯H蓋	10.8	4.5	
0102	1号墳	石室中央西側壁	須恵器	杯H蓋	11.1	4	
0103	1号墳	中央西側壁-139	須恵器	杯H蓋	11.6	9	
0104	1号墳		須恵器	杯H蓋	11.8	4.6	
0105	1号墳	盛土・石室西側壁	須恵器	無蓋高杯	10.0	10.2	8.7
0106	1号墳	石室東側壁	須恵器	無蓋高杯	12.4		
0107	1号墳	石室中央	須恵器	長頸壺	15.9		
0108	1号墳	石室入口攪乱層	須恵器	直口壺	10.4		
0109	1号墳	石室入口地上28cm上の攪乱層	須恵器	平瓶	6.8		
0110	1号墳	石室入口-131	須恵器	長頸壺		(18.5)	10.8
0111	1号墳	盛土内	須恵器	杯H蓋	11.6		
0112	1号墳	1号盛土	須恵器	高杯			8.8
0113	1号墳	盛土	須恵器	器台	35.4		
0114	1号墳	盛土内	須恵器	壺口縁部	23.2		
0201	2号墳		須恵器	杯H蓋	12.5	4.6	
0202	2号墳	P11-259	須恵器	杯H蓋	11.6	3.4	
0203	2号墳	P10-147	須恵器	杯H蓋	9.9	4.3	
0204	2号墳	P11	須恵器	杯H蓋	9.9	3.6	
0205	2号墳	石室内（崩落石内側）	須恵器	杯H蓋	9.7	7.5	
0206	2号墳		須恵器	杯H蓋	12.9	(3.5)	
0207	2号墳		須恵器	無蓋高杯	12.0	7.3	8.3
0208	2号墳	P9. p19石室内（崩落石内側	須恵器	無蓋高杯	8.4	(8.1)	7.8
0209	2号墳	石室内（崩落石内側）	須恵器	台付椀	10.1	14.3	10.1
0210	2号墳	P3-153	須恵器	長頸壺			6.8
0211	2号墳	P1石室入口付近一括	須恵器	小皿	8.3	1.9	4.7
0212	2号墳	p12	須恵器	糸切り椀	14.6	5.5	6.5
0213	2号墳	p17	須恵器	糸切り椀	14.3	6.0	4.5
0214	2号墳	p17	須恵器	糸切り椀	13.3	4.9	4.6
0401	4号墳	奥壁	須恵器	杯H身	10.9	3.7	
0402	4号墳	奥壁	須恵器	杯H身	10.4	3.0	
0403	4号墳	奥壁・羨道上床面	須恵器	杯H身			
0404	4号墳	奥壁・羨道上床面	須恵器	杯H身			
0405	4号墳		須恵器	杯H蓋	10.5	3.1	
0406	4号墳	奥壁	須恵器	杯H蓋	11.8	2.8	
0407	4号墳		須恵器	杯H蓋	10.7		
0408	4号墳	奥壁	須恵器	高杯	11.0	10.0	8.1
0409	4号墳	奥壁	須恵器	無蓋高杯	9.2	9.2	8.2
0410	4号墳	奥壁	須恵器	無蓋高杯	9.5		
0411	4号墳	奥壁	須恵器	壺			

出土土器一覧表（1）

報告番号	古墳名称	出土位置	種別	器種	大きさ（cm）		
					口径	器高	底径
0412	4号墳	右側玄室内床面	須恵器	平瓶	4.7	10.4	
0413	4号墳		須恵器	平瓶	4.8	10.2	
0414	4号墳	右側玄室床面	須恵器	直口壺	7.4		
0415	4号墳		須恵器	直口壺	6.5		
0416	4号墳		須恵器	杯B	15.9		
0417	4号墳	奥壁	須恵器	長頸壺			
0418	4号墳	奥壁	須恵器	長頸壺	14.3以上	37.5以上	
0601	6号墳	P6	須恵器	杯H蓋	10.6	4.0	
0602	6号墳	浮土	須恵器	杯H蓋	11.3	3.4	
0603	6号墳	P4	須恵器	杯	9.3	2.8	
0604	6号墳	P6	須恵器	杯	10.0	3.5	
0605	6号墳	P9	須恵器	杯	11.1	3.9	
0606	6号墳	浮土	須恵器	杯	11.8	3.4	
0607	6号墳	浮土	須恵器	杯			
0608	6号墳	P2	須恵器	平瓶	6.5	11.5	
0609	6号墳	P3	須恵器	杯A	12.3	3.1	8.8
0610	6号墳	P9	土師器	椀	16.6	7.0	10.1
0611	6号墳	P8	土師器	甕			
0612	6号墳	P1	土師器	甕	11.5	21.7	
0701	7号墳	盛土トレンチ	須恵器	杯G蓋	8.0		
0702	7号墳	床面	須恵器	杯G	8.9	3.2	
0703	7号墳	西側	須恵器	杯H蓋	11，2	3，3	
0704	7号墳	床面	須恵器	提瓶			
1101	11号墳		須恵器	壺・瓶			
1102	11号墳	表土	須恵器	長頸壺			
1301	13号墳	床上A主体部	須恵器	甕	17.8		
1401	14号墳		須恵器	高杯	10.7	9.9	8.3
1402	14号墳		須恵器	杯底			
1403	14号墳		須恵器	杯G蓋	10.8・9.0	4.0	
1404	14号墳		須恵器	杯G蓋	8.8・10.7	3.1	
1405	14号墳		須恵器	杯G蓋	9.5・11.3	3.8	
1406	14号墳		須恵器	甑	3.4	8.7	
1407	14号墳		須恵器	台付短頸壺	9.8	17.5	
1408	14号墳		土師器	壺	7.2	6.7	

出土土器一覧表（2）

報告番号	出土遺構	出土位置	種別	器種	大きさ（cm）		
					口径	器高	底径
2101	21号墳	土器群	須恵器	杯H蓋	12.8	4.5	
2102	21号墳	土器群	須恵器	杯H蓋	13.5	5.0	
2103	21号墳	土器群	須恵器	杯H蓋	12.4	4.7	
2104	21号墳	土器群	須恵器	杯H蓋	13.0	4.7	
2105	21号墳	土器群	須恵器	杯H蓋	13.0	4.7	
2106	21号墳	土器群	須恵器	杯H蓋	13.0	4.8	
2107	21号墳	土器群	須恵器	杯H身	11.1	5.0	
2108	21号墳	土器群	須恵器	杯H身	11.3	4.7	
2109	21号墳	土器群	須恵器	杯H身	10.7	4.6	
2110	21号墳	Dブロック土器群	須恵器	杯H身	11.1	4.7	
2111	21号墳	Dブロック	須恵器	高杯脚			8.4
2112	21号墳	土器群	須恵器	無蓋高杯	14.2	10.9	9.0
2113	21号墳	土器群	須恵器	壺	9.5	10.0	
2114	21号墳	Dブロック	須恵器	甕	22.0		
2115	21号墳	土器群	須恵器	杯H蓋	12.5	4.3	
2116	21号墳	Bブロック	須恵器	杯身	10.2	5.0	
2117	21号墳	Dブロック	須恵器	台付長頸壺			
2118	21号墳	土器群	須恵器	甕	16.1	22.5	
2119	21号墳	第5棺棺内・南中央トレンチ	須恵器	台付甕			
2120	21号墳	イ主体	土師器	甕	10.7	15.6	
2121	21号墳	ハ主体	須恵器	広口壺	14.5	21.0	
2122	21号墳	ニ主体	須恵器	広口壺	10.5	15.0	
2123	21号墳	ニ主体	須恵器	甕	15.9	19.9	
2124	21号墳	ニ主体	須恵器	壺	12.0	14.5	
2125	21号墳	ニ主体	土師器	広口壺	11.0	10.9	
2126	21号墳	ホ主体	須恵器	広口壺	10.8	14.5	
2127	21号墳	第5棺棺内	須恵器	高杯			9.2
2201	22号墳	表土下	須恵器	杯蓋	10.5	3.1	
2301	23号墳		須恵器	広口壺	12.8	18.7	
2302	23号墳		須恵器	壺	9.0	10.4	
2501	25号墳	土器群	須恵器	杯H蓋	12.7	4.8	
2502	25号墳	土器群	須恵器	杯H蓋	12.0	4.6	
2503	25号墳	土器群	須恵器	杯H蓋	11.7	4.5	
2504	25号墳	土器群	須恵器	杯H蓋	11.5	5.0	
2505	25号墳	土器群	須恵器	杯H蓋	11.3	4.5	
2506	25号墳	土器群	須恵器	杯H蓋	12.0	4.4	
2507	25号墳	土器群	須恵器	杯H蓋	12.0	4.4	
2508	25号墳	墳頂	須恵器	杯H蓋	12.1	4.5	

出土土器一覧表（3）

報告番号	出土遺構	出土位置	種別	器種	大きさ（cm）		
					口径	器高	底径
2509	25号墳	土器群	須恵器	杯H身	10.8	4.9	
2510	25号墳	土器群	須恵器	杯H身	12.2	4.5	
2511	25号墳	土器群	須恵器	杯H身	10.4	5.0	
2512	25号墳	土器群	須恵器	杯H身	10.7	4.7	
2513	25号墳	土器群	須恵器	甕	10.2	10.7	
2514	25号墳	封土	須恵器	杯H蓋	11.5		
2515	25号墳	盛土中	須恵器	杯H蓋	11.0		
2516	25号墳	封土	須恵器	短頸壺	7.8	9.5	
2517	25号墳	封土	須恵器	甕	34.4		
2518	25号墳	封土	土師器	甕	9.6	残7.9	
2519	25号墳	第2主体	須恵器	甕	11.0	12.5	
2520	25号墳	東西ｾｸｼｮﾝ西側	須恵器	杯H身	11.0	5.0	
2521	25号墳	第3主体　棺上部	須恵器	有蓋高杯蓋	11.9	5.4	
2522	25号墳	第3主体	須恵器	甕	12.6	17.5	
2523	25号墳	第3主体	須恵器	直口壺	10.8	15.0	
2524	25号墳	第3主体	須恵器	直口壺	10.6	14.6	
2525	25号墳	第3主体	土師器	直口壺	9.9	14.5	
2901	29号墳	土坑（A遺構）	須恵器	杯H蓋	11.8	4.4	
2902	29号墳	土坑（A遺構）	須恵器	杯H身	10.3	4.5	
2903	29号墳	土坑（A遺構）	須恵器	杯H蓋	11.6	4.5	
2904	29号墳	土坑（A遺構）	須恵器	杯H身	10.0	4.6	
2905	29号墳	土坑（A遺構）	須恵器	杯H蓋	12.6	4.0	
2906	29号墳	土坑（A遺構）	須恵器	杯H身	10.0	4.3	
2907	29号墳	土坑（A遺構）	須恵器	杯H蓋	12.0	4.5	
2908	29号墳	土坑（A遺構）	須恵器	杯H身	10.0	4.6	
2909	29号墳	土坑（A遺構）	須恵器	杯H蓋	11.9	4.2	
2910	29号墳	土坑（A遺構）	須恵器	杯H身	10.2	4.3	
2911	29号墳	土坑（A遺構）	須恵器	杯H蓋	12.0	4.1	
2912	29号墳	土坑（A遺構）	須恵器	杯H身	10.6	5.1	
2913	29号墳	土坑（A遺構）	須恵器	杯H蓋	12.0	4.4	
2914	29号墳	土坑（A遺構）	須恵器	杯H身	10.3	4.8	
2915	29号墳	土坑（A遺構）	須恵器	杯H蓋	12.3	4.9	
2916	29号墳	土坑（A遺構）	須恵器	杯H身	10.4	4.6	
2917	29号墳	土坑（A遺構）	須恵器	杯H蓋	12.5	(4.1)	
2918	29号墳	土坑（A遺構）	須恵器	杯H身	10.6	4.9	
2919	29号墳	土坑（A遺構）	須恵器	杯H蓋	12.4	4.5	
2920	29号墳	土坑（A遺構）	須恵器	杯H蓋	12.8	4.5	
2921	29号墳	土坑（A遺構）	須恵器	杯H身	11.0	5.0	
2922	29号墳	土坑（A遺構）	須恵器	杯H身	10.0	5.5	

出土土器一覧表（4）

報告番号	出土遺構	出土位置	種別	器種	大きさ（cm）		
					口径	器高	底径
2923	29号墳	土坑（A遺構）	須恵器	無蓋高杯	12.7	8.5	
2924	29号墳	土坑（A遺構）	土師器	杯	11.0	6.0	
2925	29号墳	土坑（A遺構）	土師器	鉢	11.1	7.0	6.9
2926	29号墳	土坑（A遺構）	土師器	直口壺		(9.7)	
2927	29号墳	土坑（A遺構）	土師器	甕	11.0	10.5	
2928	29号墳	土坑（A遺構）	土師器	甕	12.7	13.6	
2929	29号墳	土坑（A遺構）	土師器	甕	13.2	14.8	
2930	29号墳	C遺構	須恵器	短頸壺	8.0	9.0	
3001	30号墳	墓地内出土遺物	須恵器	器台			
3101	31号墳	NO.3	須恵器	杯H	8.7	2.4	
3102	31号墳	NO.16	須恵器	杯H蓋	10.4	3.5	
3103	31号墳	NO.4	土師器	甕	11.9		
3201	32号墳	盛土中	須恵器	双耳壺			
3202	32号墳	石室内	須恵器	壺底部			
3301	33号墳	No.1	須恵器	壺脚部	8.7		
3401	34号墳	石室内	須恵器	杯H身	10.7		
3402	34号墳	石室内	須恵器	杯H身	9.6		
3403	34号墳		須恵器	無蓋高杯	10.0		
3404	34号墳	石室内	須恵器	高杯			9.2
3405	34号墳	石室内ｐ6・No.36	須恵器	無蓋高杯	9.6	8.0	7.4
3406	34号墳	P2-67	須恵器	甕	8.9	10.5	
3407	34号墳	石室内	須恵器	甕			
3408	34号墳	P8NO,73	須恵器	壺または甕			
3409	34号墳	P1No.66	須恵器	平瓶	6.8	13.2	
3410	34号墳	P9　No.74(35号破片)	須恵器	平瓶	6.4	15.6	
3411	34号墳	P3-68	須恵器	提瓶	7.8	24.7	
3412	34号墳		須恵器	甕	15.2		
3413	34号墳		須恵器	高杯			8.8
3501	35号墳	S1　No.56	須恵器	長頸壺	9.8		
3502	35号墳		須恵器	平瓶	6.7		
3503	35号墳	H4-No.62	土師器	甕	17.2	13.5	
3601	36号墳	S1－No.47	須恵器	杯H蓋	13.4		
3602	36号墳	石室内（浮）	須恵器	杯H身	11.8	3.4	
3603	36号墳	石室内（浮）	須恵器	杯H蓋	11.5	3.6	
3604	36号墳	石室内（浮）	須恵器	杯H蓋	10.6	3.6	
3605	36号墳	S4－No.50	須恵器	無蓋高杯	10.2	10.1	7.8
3606	36号墳	S4－No.50	須恵器	無蓋高杯			
3607	36号墳	S3-49	須恵器	短頸壺	10.8	11.0	
3608	36号墳	盛土中No.46	須恵器	直口壺	6.9		

出土土器一覧表（5）

報告番号	出土遺構	出土位置	種別	器種	大きさ（cm）		
					口径	器高	底径
3609	36号墳	盛土中No.46	須恵器	高杯			9.9
3610	36号墳	盛土中No.46	土師器	甕			
3801	38号墳		土師器	甕	21.7		
3901	39号墳	No.32	須恵器	杯蓋	11.8	5.0	
3902	39号墳	No.32	須恵器	杯身	10.8	3.5	
3903	39号墳	No.32	須恵器	高杯	7.1		
3904	39号墳	No.32	須恵器	壺	17.6		
4001	40号墳		土師器	小皿	12.3		
4101	41号墳	西南部・浮土	須恵器	高杯			
4102	41号墳	No.5	須恵器	高杯	12.3		
4103	41号墳	西南部・浮土	須恵器	高杯			13.1
4104	41号墳	浮き土	須恵器	器台	32.8		
4105	41号墳	石室内	須恵器	壺			11
5801	58号墳	No.18	須恵器	短脚高杯	13.8	10.2	
5802	58号墳	No10	須恵器	平瓶	8.0	13.5	
0001			須恵器	壺・高杯蓋	13.3	4.7	
0002			須恵器	無蓋高杯	9.5	9.0	7.0
0003			須恵器	短頸壺	8.5	8.3	
0004			須恵器	平瓶	6.1	12.0	
0005			須恵器	平瓶	5.8	12.1	
0006			須恵器	無頸壺	7.6	9.5	
0007			須恵器	糸切り椀	13.6	5.2	6.6

出土土器一覧表（6）

ガラスケースに展示された土器（西条会館）

第２節　埴輪

21 号墳より埴輪が木箱５箱分出土している (図版 25）が、大多数で摩耗が著しく、埴輪内外面の調整が確認できない破片が多いが、内外面の調整と突帯が確認できる資料 11 点を図化した。なお、これらのうちで突帯をもつ体部片を中心として、黒斑が確認できる体部片４点と朝顔型埴輪片１点、底部片３点、突帯を持つ胴部片３点をとりあげている。色調は褐色、淡褐色および黒斑のために黒色を呈している。

2128 は、朝顔形または壺形埴輪の口縁部である。大きく外反して広がる口縁部の突帯を挟む屈曲部分である。突帯部の復元径は 26㎝、突帯の形態は台形で幅 1.9㎝、高さ 1.1㎝、突帯部分の器壁厚さ 2.4㎝、胴部で 1.1 ～ 1.4㎝、外面は突帯の上部の一部と下部に縦ハケ調整がみられ、器壁断面より粘土接合痕が確認できる。内面は摩耗のため調整が確認できない。色調は褐色である。

2131 は、突帯部での復元径は 20㎝、突帯の幅 1.6㎝、高さ 0.7㎝で、突帯の形はM字形を呈し、ナデ調整をしている。外面の調整は縦ハケをする。さらに突帯下部には板状の工具による圧痕（板オサエ）がみられる。内面は斜め方向のハケと横ハケで、静止痕がみられる。色調は褐色である。

2132 は、２条の突帯が残る胴部片で、上部の突帯部での復元径で 22㎝、上下とも突帯幅 1.1㎝、高さ 0.9㎝、胴部厚さ 0.8㎝で薄手である。突帯はM字形になる。２条の突帯間の幅は 5.5㎝で、突帯部の一部に黒斑が見られる。調整はヘラ削りの後に横ナデ調整をしている。内面は摩耗しているため不明であるが、わずかに横ハケの痕跡もある。多くの埴輪片のなかで、薄手ながら良質なつくりである。色調は淡褐色である。

2133 は突帯１条が残る胴部片で、縦長に黒斑が確認できる。突帯部での復元径は 21.6㎝で、突帯幅 2㎝、高さ 0.6㎝で台形を成すが扁平である。突帯下部で粘土接合痕が確認できる。胴部厚さ 1.2㎝で厚手である。突帯下部に板オサエがみられる。調整は、突帯部は横ナデ調整をし、突帯上下に粗い縦ハケ調整をする。さらに突帯下部に横方向の 2.3 条の沈線（ハケ目か）が確認できる。内面は、斜めハケと横ハケで静止痕が確認できる。また突帯下部にわずかに板オサエ痕とナデ調整がみられる。色調は淡褐色である。

2136 は、突帯が残る底部である。自重によって底部端がわずかに外部に肥厚する。器形は底部から上部かけて外反する。底部から突帯下部まで 7.8㎝、突帯部での径 18㎝、突帯幅 1.6㎝、高さ 0.9㎝で台形である。突帯下部には板オサエがみられる。調整は突帯部が横ナデ、突帯上下は縦ハケ調整をする。底部端は内外面ともナデ調整をする。

2137 は底部片で１条の突帯がみられる。自重でわずかに外部に肥厚する。突帯部径 17.8㎝、突帯幅で 1.8㎝、高さ 0.6㎝で扁平な台形である。外面は、板オサエと縦ハケでナデ調整をする。底部端はヘラ削りの後に斜めハケの痕跡が認められる。突帯部の下部で粘土接合痕が確認できる。

2138 は底部片で、底部復元径 20㎝、底部端はわずかに外に肥厚する。底部端面はナデ調整でM字形になる。外面調整は縦ハケと底部端でナデ調整をしている。内面は横ハケと斜めハケと底部端で横ハケがみられる。自重による肥厚をハケ目とナデによって調整している。

2134 は胴部片で、１条の突帯をもつ破片である。突帯部での復元径 18.4㎝、突帯幅 1.8㎝、高さ 0.7㎝である。突帯部での器壁厚さ 1.7㎝、胴部で 1.3㎝である。調整は突帯上部と下部に縦ハケが認められる。突帯の下部に板オサエとナデ調整をする。内面は斜め方向のハケ目が見られる。色調は褐色である。

2135 は突帯部片で、突帯の幅 1.5㎝、高さ 0.8㎝で台形を呈する。調整は突帯を挟んで上下には縦ハケが認められる。突帯下部は板オサエをし、突帯の上部 3㎝幅で横ナデ調整、突帯上もナデ調整をする。内面はヘラ削りの後にナデ調整をする。さらに突帯下部に円形の透かしの一部が確認できる。

2129 は突帯のある胴部片で、突帯部での復元径で 23㎝、突帯の幅 1.3㎝、突帯高さ 1.4㎝で、突出

度も高い。突帯部の器壁厚さ 1.8㎝、胴部厚さ 0.7㎝、胴部の突帯部に黒斑が確認できる。外面はナデ調整をし、ハケ調整はみられない。内面もヘラ削り後ナデ調整をする。突帯下部に一辺 2.4㎝で斜めに傾いた長方形の線刻が認められる。短辺の線刻はやや外にはみ出している。

2130 は、2129 と同一個体になる可能性のある口縁部片で、全体に黒斑がみられる。口縁部径は 23㎝、厚さ 0.4㎝で、わずかに外反する。外面は縦方向の叩き目が見られる。2129 と同様に 2 辺のみが残る方形の線刻がみられる。線刻は短辺 2.2㎝、長辺 2.6㎝が確認できる。内面はヘラ削りがみられるが調整は不明である。

21 号墳出土の円筒埴輪の特徴

円筒埴輪としては、焼成があまく色調も褐色を呈するものと、黒斑がみられ色調も淡褐色を呈するものに分けることができる。段数の全体を確認できるものはなかった。透かしは円形のものが確認できた。底部径は 18 ～ 20㎝、突帯間隔は 5.5㎝のものがあった。底部は端部を自重で肥厚させるものがあったが、ナデないしハケによって調整されていた。突帯形状は断面の台形が退化し扁平なものが多いが、薄手の埴輪の突帯で突出度の高いものもあった。突帯の下部で板状の工具によるオサエがみられ、突帯上はナデ調整がみられた。外部表面は縦ハケ調整を中心とし、横ハケ調整は確認できなかった。内面に横ハケによる 2 次調整があることも考慮すると、外面にもみられた可能性は残る。内面の横ハケは静止痕がみられた。また突帯割付のための沈線も確認できた。21 号墳の埴輪の特徴として、野焼きによる焼成が考えられるが、黒斑部分が限定的である。外面調整が縦ハケのみで 2 次調整がみられない。突帯に板オサエ調整をおこない、底部の内外面とも調整があることなどを考えると埴輪の廣瀬編年の V 段階新相にあたり、共伴した須恵器の年代の MT15 段階と符合する。

（山本祐作）

円筒埴輪出土状況

円筒埴輪復元作業（陵北小学校）

第３節　陶棺

（１）西条古墳群出土の土師質陶棺について（図版 33）

西条古墳群の 39 号墳の周辺から土師質の亀甲型陶棺の破片が出土している。

略報には「発掘に取り掛かる前から、石室が露出しており、しかもその羨道部と思われるあたりから、従来姫路以西にしか分布しないとされていた亀甲型陶棺の破片が可成り出土していたので、大いに期待されていた。しかし、発掘結果、最早、石室内には遺物は存在せず、僅かに遊離した土中より、数片の須恵器を発見したのみであった。」と記されている。また、略報の各古墳の概要を記した一覧表には 39 号墳の欄は行をかえて備考欄に「亀甲型陶棺片」と記されている。

39 号墳の発掘調査は 1964 年３月 11 日から 17 日にかけて行われているが、調査日誌には陶棺のことは触れられておらず、図面にも記載がない。したがって、発掘調査の結果、陶棺の破片が出土した場所は古墳の羨道内ではなく石室外であったため記録されずに取り上げられたことから図面や日誌にも記載がないことになったものと思われる。なお、39 号墳の横穴式石室は南向きの石室で、陶棺片の出土した場所は羨道の少し外側（南側）であったと思われ、早くから陶棺は石室内から運び出され、耕作の邪魔になり壊され長い年月の間に大半は失われたものと思われた。

現在、西条会館には発掘調査時に取り上げられた 23 点の破片が保管されており、復元を試みたが接合できるものはなく復元はできなかった。破片は大きなもので 27㎝× 34㎝、最も多かった破片は 18㎝× 20㎝程度のもので、小さなものは 12㎝× 15㎝、6㎝× 7 ㎝ぐらいであり、陶棺の各部の厚さは 3.5㎝～ 4.0㎝である。

破片を個々に見ていくと陶棺には蓋に相当するもの（図版 33；1・2・3・4）と身に相当するもの（図版 33； 5）があり大半は蓋の破片であった。蓋に相当する破片には突起のあるもの（図版 33； 1）が２点、縦や横に突帯をもつもの（図版 33；1・2・3・4）が４点あった。また、身の破片も少量あり、その中には身の底部で脚部が剥がれた痕跡のあるもの（図版 33；5）が１点あった。突帯の形状は台形、突起の形状は先端を丸くした球形で断面は楕円形である。

これら破片が陶棺のどの部分に相当するのか類似例として岡山県久米郡中央町打穴下に所在した「塚の前古墳２号陶棺」（注 1）に当てはめてみたのが図版 33 の下端の図である。

蓋はカマボコ状を呈するものと思われ、大きさは不明。下端には突帯がめぐり、稜線上には突起が貼り付けられその間を区画する縦と横に突帯がめぐらされていたものと思われる。なお､外面は刷毛調整、内面はナデ調整で仕上げられている。

身は隅丸長方形の箱型と思われ、大きさは不明。脚部は剥離の痕跡から幅 17㎝、長さは不明、身の底の厚さは 3.5㎝である。脚部の接合にあたっては粘土を締め付けた痕跡が認められ、身の外面の脚部周辺にはヘラで削った痕跡が認められた。

なお39号墳から須恵器の杯Ｈ蓋と身､高杯が出土しており､それらは７世紀初め頃のものと思われる。

（２）播磨地方における陶棺の出土状況について

播磨地方では土師質の陶棺と須恵質の陶棺が各地から出土しており、調べた結果、筆者が知りうる限りでは 12 例あることがわかった。

大半は西播磨地方からの出土例で９例が知られる。これを列記すれば、吉備に隣接する赤穂郡上郡町域（注 2）では惣尻古墳（土師質亀甲形陶棺）、丸尾古墳（土師質吉備型亀甲形陶棺）、竹万山田古墳（須恵質陶棺）、赤岩鼻古墳（須恵質陶棺）の４例があり、また、相生市域（注 3）では那波野塚森古墳（土師質亀甲形陶棺）の１例、佐用郡佐用町（旧南光町）では土井（注 3）（土師質亀甲形陶棺）の１例、龍野市域（注 3）では揖西町土師（須恵質四注式陶棺）の１例、姫路市域（注 4）では飾西向山出土陶棺（土師質吉備型亀甲形陶棺）、今宿津古根山古墳（土師質吉備型亀甲形陶棺）の２例がある。

東播磨では加古川市神野町周辺で２例の陶棺の出土が知られており、北播磨でも東山古墳群 12 号墳からの 1 例の出土例がある。

加古川市神野町の出土例は前述の西条古墳群 39 号墳の石室外出土例（土師質亀甲型陶棺）であり、もう 1 例は「神野町石守字上の岡」から出土した土師質陶棺の出土例である。この「神野町石守字上の岡」出土例については、神野町石守在住の石見完次氏の『東播磨の民俗』（注 5）によると「昭和 45 年に宝泉寺藪の下に防火用水溜めを掘る工事の際、渋谷重雄の田の深溝側の地下 1 メートルばかりの底から出てきたものである」と記され同書には土師質陶棺の破片の写真が 1 点掲載されている。また、この付近から採集された土師質陶棺の破片が数十点以上あり、いずれも小片であるが蓋とわかるものがあり身との接合部分の破片である。採集当時のラベルには「神野町石守字上の岡 646 の 102」と記されており、石見完次氏の報告されたものと同一場所と思われ、現在の寶塔寺の所有地から出土したものと思われる。この場所は西条古墳群から南西に 1.2㎞離れた場所に位置する。

一方、北播磨の多可郡中町でも東山古墳群 12 号墳石室から須恵質で切妻の屋根をもち蓋と身から成り突帯を施した陶棺が出土している（注 6）。

（３）なぜ西条古墳群とその周辺から土師質陶棺が出土するのか

陶棺は畿内と吉備で多数発見されているが、当播磨地方でも吉備地方に隣接し関係が深かった西播磨では陶棺が多数確認されている。しかし、吉備から遠く離れた東播磨の西条古墳群とその周辺からなぜ土師質陶棺が出土するのであろうか。

加古川市域は畿内と吉備の中間地帯にあたることから、『播磨風土記』（注 8）や『日本書紀』（注 9）、『古事記』（注 10）には加古川下流域を舞台にして畿内と吉備の関係を示す説話が多く見られる。『播磨風土記』には賀古郡の条に「昔、大帯日子命、印南の別嬢を誂ひたまひし時、（中略）、賀毛の郡の山直等が始祖息長命　一の名は伊志治　を媒として誂ひ下り行でまししし」とあって大帯日子（景行天皇）が印南の別嬢との婚姻に際して、山直等が始祖息長命（伊志治）を媒酌人にして結婚を申し込んだ」との説話がある。また、印南郡の条には「丸部臣等が始祖比古汝茅を遣りて、國の境を定めしめたまひき。その時、吉備比古・吉備比賣二人参迎へき。ここに比古汝茅、吉備比賣に娶ひて生める兒、印南の別嬢」とあり、印南の別嬢は吉備氏（比古汝茅、吉備比賣）の娘であることが記されている。

つまり、畿内の大王（景行天皇）が吉備氏の娘と婚姻をすることによって加古川下流域の有力豪族との関係を強化しようとしたことがわかり、また併せて吉備氏への対策が行われたことがわかる内容である。

また、『古事記』（注 9）には「大倭根子日子國供玖琉の命は、天の下治らしめしき。大吉備日子の命と若建吉備津日子の命とは、二柱相副ひて、針間の氷河の前に忌瓮を据ゑて、針間を道の口と為て吉備国を言向け和したまひき」とある。この「氷河」が『播磨風土記』や『日本書紀』の記述から考えて、「加古川」であると考えられることから、加古川下流域が吉備への「道の口」として位置づけられ「吉備國を言向け和したまいき」の拠点となっていたものと思われる。

『日本書紀』（注 8）には、「大足彦忍代別天皇　景行天皇（中略）二年の春三月の丙寅の朔戊辰に、播磨稲日大郎姫　一に云はく　稲日稚郎姫といふ　郎姫、此をば異羅菟咩と云ふ。を立てて皇后とす。后、二の男を生れます。第一をば大碓皇子と曰す。第二をば小碓尊と曰す　（中略）是の小碓尊は、亦の名は日本童男。童男、此をば鳥具奈と云ふ。亦は日本武尊と曰す。（後略）」とあり、稲日稚郎姫の子供に熊襲を討ち、東国を鎮定した日本武尊がいることが記されている。

以上、見たように加古川下流域は畿内と吉備の文化の交わる地域であり、陶棺文化は本来、畿内の文化であり、それが吉備地方に伝わったと考えればその中間の加古川下流域に陶棺文化があっても不思議ではないと思われる。つまり、畿内勢力の吉備地方の支配の拠点としての役割を担ったのではないかと思われる。

宮岡昌宣氏の論文（注7）によると「備前中部・熊山地区は山間の約２ｋｍの狭隘な範囲に、後期の小型前方後円墳が４基存在する。それらを含む５遺跡９例の陶棺は注目に値する。その存立基盤を農業生産のみによっては説明できない。弥上古墳や土井遺跡から精錬滓および鍛冶滓が検出されている。また、同地域内では猿喰池製鉄遺跡で古墳時代後期の製鉄炉５基が確認され、吉井川右岸丘陵上には須恵器窯跡群が所在する。この地域には、窯業生産とともに鉄製産を行なっていた集団の存在が推測され、これらの生産基盤の掌握に関わった有力在地勢力の存在が想定される。想像を逞しくすればヤマト王権は、こうした地方の有力在地勢力を掌握し取り込むことによって、吉備の地方支配を確実なものにしようとした」とされる。

この西条地域は『播磨風土記』の「望理里」に相当する地域であり、『播磨風土記』はこの里を簡単な記述しかしていない。しかしこの「望理里」では多くの遺跡が知られており弥生時代の望塚出土の銅鐸、西条52号墓や壺棺墓、5世紀前半の行者塚古墳や尼塚古墳、人塚古墳など大型の前方後円墳や帆立貝式古墳があり、5世紀後半から6世紀にかけての西条21・25号墳などの方墳、成福寺古墳群、東沢1号墳、古墳時代後期の神野大林窯跡群と中ノ池窯跡、野村古窯跡群、飛鳥時代以降の野新村古窯跡群、西条廃寺、奈良時代の雁土井地区（上村池遺跡や古堂遺跡）の倉庫や建物群などがあり多くの遺跡が所在しており、加古川下流域の先進地域であったと云える地域である。

また、特筆することは西条4号墳の石室内から鉄滓が出土していることである。

この鉄滓はたたら製鉄の過程で生じる「のろ」とか「スラグ」と云われる不純物のかたまりである。加古川下流域の丘陵には鉄分を含んだ土壌（花崗岩の風化土）の層があることから、今でも雨後に鉄分が地表に固まって露出することがある。おそらく古代にはそれらの土壌の中から鉄分の純度を高めるための作業が行われ鉄分を取り出す「たたら製鉄」がこの地域でも行なわれていた可能性がある。

この「望理里」では、須恵器生産が活発に行われ、また製鉄なども行なわれたと思われ、宮岡氏の云う「備前中部・熊山地区」と加古川下流域の「望理里」は同じような条件の地域であったと思われ、ヤマト王権が土師質陶棺の文化を持ち込むことによって有力在地勢力を取り込もうとしたことのあかしと思われる。

（上月昭信）

注１　岡山県埋蔵文化財発掘調査報告44「塚の前古墳」岡山県教育委員会文化課　1981年３月
注２　松本正信「上郡町史第　三巻　史料編１」平成11年　上郡町
注３　松岡秀夫「赤穂市史」第一巻　昭和56年　兵庫県赤穂市
注４　加藤史郎・松本正信ほか「姫路市史第７巻下考古資料編」平成22年３月　姫路市
注５　石見完次「東播磨の民俗」昭和59年
注６　中町文化財報告25「東山古墳群Ⅱ」2001年兵庫県多可郡中町教育委員会・京都府立大学考古学研究室
注７　宮岡昌宣「陶棺からみる畿内と吉備」『考古学研究　第59巻第１号』2012年６月
注８　日本古典文学大系２「風土記」坂本吉郎　昭和33年
注９　日本古典文学大系67「日本書紀上」坂本太郎　家永三郎ほか　昭和42年
注10　日本古典文学大系１「古事記祝詞」倉野憲司　武田祐吉　昭和33年

木箱に保管されていた陶棺片

第４節　金属製品

現在、西条会館には木箱５箱程度の金属製品が残っている。西条古墳群から出土した金属製品については、『西条古墳群調査略報』（以下「略報」という）においてその種別や出土点数が報告されているものの（西条古墳群発掘調査団 1964）、実測図などは掲載されていなかったため、各古墳出土金属製品の詳細は不明であった。

そこで今回これらの資料について若干の整理を行うとともに、可能な限り資料の実測作業などを行い、その資料化に努めた。その際、基本的に同封の出土古墳などが記されたメモに基づいて整理を行ったが、略報の報告内容と整合しないところもあった（文末一覧表）。以下ではひとまず今回の整理で確認された情報をもとに西条古墳群出土金属製品について出土古墳ごとにみていく（※１）。

１号墳（図版 34）

Ｍ１は、銅芯金張りの耳環で、外径 2.4cm である。断面形は楕円形を呈しており、長径 0.7cm、短径 0.5cm である。芯部は中実とみられ、重さは 12.8 ｇを測る。

２号墳（図版 34）

Ｍ２は、鏟とみられる。完形のものであるが、全体的に銹化剝離が著しい。形態的には、台形状の刃部に袋部をもち、全長 10.2cm、刃部長 5.6cm 前後、刃部幅 8.4cm、袋部長 4.6cm 前後を測る。袋部の断面形は円形とみられ、外径 2.8cm 前後である。袋部内には目釘と考えられる径 0.4cm 前後の棒状鉄が袋部端から 0.7cm 内側の位置にある。

Ｍ３は、刀子の刃部片である。残存長は 8.5cm、刃部の最大幅は 1.6cm である。

Ｍ４・５は、鉄釘である。Ｍ４は、棒状の鉄の一方を叩き延ばして折り曲げる頭部形態のものとみられ、残存長 7.5cm である。体部断面形は隅丸方形で、幅と厚さは 0.7cm 前後を測る。Ｍ６は、笠状の頭部をつくりだす頭部形態のもので、残存長 4.2cm である。体部断面形はほぼ円形で、径 0.6 ～ 0.7cm を測る。Ｍ４・５ともに、体部に木質の付着が認められる。

Ｍ６・７は、耳環である。Ｍ６は、銅芯金張りとみられる耳環で、外径 1.9 ～ 2.0cm である。断面形はほぼ円形を呈しており、長径 0.5cm、短径 0.4cm である。芯部は中実とみられ、重さは 4.8 ｇを測る。Ｍ７は、銅芯金張りとみられる耳環であるが、表面被覆材の大部分は剝離している。外径 1.4 ～ 1.5cm、断面形は直径 0.2cm の円形である。芯部は中実とみられ、重さは 0.7 ｇを測る。

４号墳（図版 34）

Ｍ８は、鉄刀の切先部に近い破片とみられる。残存長 5.9cm であるが、刀身部は長軸に平行する木質に覆われているため、その幅と厚さの詳細は不明である。

Ｍ９･10 は鉄滓で、いずれも鍛冶滓とみられる。Ｍ９は、残存長 5.7cm、残存幅 5.1cm、厚さ 2.0cm、重さ 83.6 ｇの鉄滓で、下面が緩やかに弧を描いていることから椀形鍛冶滓の可能性がある。Ｍ 10 は、残存長 3.5cm、幅 2.5cm、厚さ 0.9cm、重さ 7.7 ｇの扁平な鉄滓で、椀形鍛冶滓の一部である可能性がある。いずれも磁着反応がないことから含鉄物質はほとんど含まれていないと考えられる。

９号墳（図版 35）

Ｍ 11 は、鉄剣である（※２）。完形のものであるが、全体的に銹化が著しいため、細部の形態などは不明である。推定全長 16.9cm 前後、推定剣身部長 11.3cm 前後、推定剣身部最大幅 2.1cm 前後、推定茎部長 5.6cm 前後、推定茎部幅 1.1cm 前後である。目釘孔の有無は不明である。茎部には一部有機質痕とみられる付着物がある。

M 12 は、鉄鎌である。曲刃鎌で、推定全長 12.1cm である。刃部は、その中程から先端部にかけて緩やかに湾曲する。推定基部幅 2.7cm で、基部端は鈍角に折り返している。厚さは 0.2cm 前後を測る。

M 13 は、鉈である。各破片は直接接合しないものの、その幅や厚さから同一個体とみられる鉈で、各破片を合わせた残存長は 15.4cm である。推定刃部長 3.0cm 前後、推定刃部最大幅 1.1cm 前後の柳葉形の刃部をもつものとみられる。身部断面形は長方形で、幅は 0.8cm 前後、厚さは 0.3cm 前後を測る。

10 号墳（図版 35）

M 14・15 は、鉄鏃である。M 14 は有頸平根式で、鏃身部に深い腸抉をもつものである（※ 3）。腸抉端部と頸部から茎部を欠いており、残存長 6.4cm、鏃身部残存長 6.1cm である。鏃身部は残存幅 3.2cm、最大厚 0.3cm で、断面は両丸造とみられる。頸部は幅 0.7cm、厚さ 0.2cm、断面形は長方形である。M 15 は、先刃大型定角式で、明確な茎関をもたずに茎部に至るものとみられる。刃部関の一部、茎部端を欠くものの、ほぼ完形の鉄鏃で、残存長 10.2cm、推定刃部長 3.3cm である。刃部は残存幅 2.8cm、最大厚 0.4cm で、断面は両丸造である。茎部は幅 0.6cm 前後、厚さ 0.3cm 前後、断面形は長方形である。

M 16 は、鉄鏃と刀子が銹着したものである。鉄鏃は、M 15 と同形態の先刃大型定角式で、全長 8.8cm の完形のものである。刃部は推定幅 2.4cm、最大厚 0.3cm を測り、断面は両丸造である。刀子は、茎部の一部を欠く片関式のもので、残存長 12.3cm、刃部長 8.4cm、茎部残存長 3.9cm である。刃部最大幅は関部において 1.5cm を測り、厚さは刃部、茎部ともに 0.4cm 前後を測る。

14 号墳（図版 36）

M 17・18 は、鉄釘である。M 17 は、棒状の鉄の一方を叩き延ばして折り曲げる頭部形態のもので、残存長 2.7cm である。体部断面形は方形で、幅と厚さは 0.6cm 前後を測る。M 18 は、笠状の頭部をつくりだす頭部形態のもので、残存長 3.1cm である。体部断面形は隅丸方形で、幅と厚さは 0.7cm 前後を測る。

21 号墳（図版 36）

M 19・20 は鉄刀である。M 19 は、切先部、関部及び茎部端部を欠く鉄刀で、全体的に銹化剥離が著しい。残存長 80.8cm、刀身部残存長 65.6cm、刀身部幅 3.0cm 前後、茎部残存長 15.2cm である。現状では茎部に目釘孔らしき痕跡が 1 つ確認される。刀身部の一部には鞘のものとみられる木質が付着しているほか、茎部には把木と考えられる木質が付着している。「ヘ主体」から出土したものの可能性がある。M 20 は、切先部のみを欠くほぼ完形の鉄刀である。残存長 92.8cm、刀身部残存長 76.0cm、刀身部幅 3.2 ～ 3.6cm、茎部長 16.8cm である。茎部には、茎部端部から 3.2cm、11.5cm の位置に目釘孔がある。刀身部には鞘のものとみられる木質が付着し、茎部には把木と考えられる木質が付着している。また、関部付近には把縁装具や鞘口装具に由来するものとみられる有機質痕が認められる。「ホ主体」から出土したものの可能性がある。

23 号墳（図版 37）

M 21・22 は、鉄鏃である。M 21 は、鏃身部が長三角形で、深い腸抉をもつ短茎長三角式鉄鏃である。腸抉部の一部と短茎部を欠いており、鏃身部長 6.0cm、鏃身部残存幅 5.1cm である。破断面のみの観察であるが、短茎部の幅は 0.6cm 前後とみられる。M 22 は、鏃身部が長三角形で、深い腸抉をもつ短茎長三角式鉄鏃とみられる。腸抉部と短茎部の一部を欠いており、鏃身部残存長 6.4cm、推定鏃身部幅 3.3cm、推定短茎部残存長 2.6cm である。鏃身部の断面は平造とみられる。短茎部は幅 0.6cm、厚さ 0.3cm、断面形は長方形である。

M 23・24 は、鉄鎌である。M 23 は曲刃鎌の先端部とみられ、残存長 5.3cm、残存幅 2.9cm 前後を

測る。M 24 は鉄鎌の基部で、残存長 4.0cm、基部幅 3.3cm を測り、基部端は直角に折り返している。これらのものは同一個体の鉄鎌である可能性がある。

25 号墳（図版 37）

M 25 は、鉄刀の刀身部であるが、全体的に銹化剝離が著しい。残存長 60.0cm、刀身部幅 3.2cm 前後である。刀身部の一部には鞘のものとみられる木質が付着している。

M 26 は、鉄剣の切先部片である。残存長 6.9cm、剣身部幅 1.8cm、剣身部厚 0.4cm である。剣身部の一部には鞘のものとみられる木質が付着している。

M 27 は、長頸式鉄鏃で、柳葉形の鏃身部をもつものである。完形のものとみられるが、全体的に著しく銹化しているため、細部の形態などは不明である。推定全長 17.3cm 前後、推定鏃身部長 1.8cm 前後、推定頸部長 10.5cm 前後、推定茎部長 5.0cm 前後とみられる。鏃身部は幅 0.8cm、厚さ 0.2cm で、断面は片丸造である。頸部は断面長方形とみられ、推定幅 0.5cm、推定厚 0.3cm である。茎部は断面正方形とみられ、幅、厚さともに推定 0.3cm である。

M 28・29 は、いずれも両関式刀子である。M 28 は、刃部と刃関の一部を欠いているものの、ほぼ完形のもので、全長 15.7cm、刃部長 10.5cm、茎部長 5.2cm である。最大残存幅は関部付近において 1.6cm を測り、厚さは刃部、茎部ともに 0.2cm 前後を測る。茎部には柄のものとみられる木質が付着している。M 29 は、完形のもので、全長 8.9cm、推定刃部長 5.8cm、推定茎部長 3.1cm である。最大幅は関部において推定 1.1cm を測り、刃部厚は 0.3cm 前後、茎部厚は 0.2cm 前後である。茎部の一部には柄のものとみられる木質が付着している。

34 号墳（図版 38）

M 30 ～ 32 は、耳環である。M 30 は、銅芯金張りとみられる耳環で、外径は 2.2 ～ 2.4cm である。断面形はやや楕円形を呈しており、長径 0.6cm、短径 0.5cm である。芯部は中実とみられ、重さは 11.9 g を測る。M 31 は、銅芯金張りの耳環で、外径は 1.9 ～ 2.2cm である。断面形は楕円形を呈しており、長径 0.7cm、短径 0.4cm である。芯部は中実とみられ、重さは 9.9 g を測る。M 32 は、表面全体の遺存状態が悪いため、表面被覆材などの詳細は不明であるものの、その一部において銀色を呈する箇所がみられる。外径は 2.0cm である。断面形はやや楕円形を呈しており、長径 0.4cm、短径 0.3cm を測る。芯部は中実とみられ、重さは 3.4 g を測る。

36 号墳（図版 38）

M 33 は、馬具の鞍金具とみられる。全体的に銹化が著しいため、細部の形態などは不明であるが、鈹具の基部に脚片とみられる鉄片が銹着している。鈹具の輪金は凸字形をしており、長軸推定 5.8cm、短軸推定 4.7cm である。

出土古墳不明（図版 38）

M 34 は、鉄鏃である。有頸平根式で、鏃身部に深い腸抉をもつものとみられる。腸抉部の一部と頸部から茎部を欠いており、鏃身部残存長 8.1cm である。鏃身部は残存幅 3.3cm、最大厚 0.3cm で、断面は両丸造とみられる。頸部幅は 0.7cm 前後とみられる。

M 35 は、有肩鉄斧である。全体的に銹化剝離がみられ、特に袋部の欠損が著しい。なだらかに広がる肩部をもつ有肩鉄斧で、残存長 10.9cm、刃部長 4.7cm 前後、刃部残存幅 5.5cm、袋部残存長 6.2cm である。袋部の断面形は円形で、外径は 3.2cm 前後とみられるが、欠損のためその合わせ目は不明である。

以上、西条古墳群出土金属製品のうち、今回整理のなかで実測作業を行った資料について報告してきた。出土金属製品には、鉄刀や鉄剣、鉄鏃といった鉄製武器類、U字形鍬鋤先、鉄鎌、鉄斧、刀子といった鉄製農工具類、耳環といった装身具類のほか、木棺に使用されたと考えられる鉄釘などが確認される。また、これまで認識されていなかったものとして鏟や鉄滓があり、前者はあまり類例のないものとして、後者は被葬者の性格などを考えるうえで注目される。

その出土傾向をみると、木棺直葬や箱形石棺では少量の鉄製武器類と鉄製農工具類がセットとなって副葬される傾向がみられる。その一方で、横穴式石室では金属製品の出土が総じて少なく、また本来の副葬品組成をどれだけ反映しているのかは不明といわざるを得ないのが現状であり、その傾向の特徴などを指摘することは困難である。

今回の報告では、西条古墳群出土金属製品の資料化を目的とした概要報告に終始してしまい、詳細な検討を行うまでには及ばなかった。今後、各金属製品の個別的検討をさらに進めていき、各資料の位置づけを明らかにしたうえで、西条古墳群出土金属製品について検討していく必要がある。また、これらの金属製品については、当時の調査から長い年月が経っていることもあり、資料の状態は必ずしも良好とはいえないため、今後適切な措置を取っていく必要があろう。

なお、今回の金属製品の報告はおもに報告者の肉眼観察によるものである。そのため、報告内容の誤りなどの責はすべて報告者にあることを付言しておく。また、今回の報告は、あくまでも現時点での暫定的なものであり、今後の詳細な整理作業によってその内容、例えば出土古墳や数量に変更が生じる可能性があることをご容赦いただきたい。

（平尾英希）

註

（※１）なお、西条 25 号墳では複数の埋葬施設から鉄製品が出土しているものの、今回確認できた鉄製品がどの主体部から出土したものであるのか、出土古墳などが記されたメモから判断することができなかった。

（※２）この鉄剣については、出土古墳などが記されたメモから出土古墳を特定することは出来なかったが、同一の袋に別袋で入っていた鉄鎌（M12) が西条９号墳から出土したものの可能性があることから、今回の報告では９号墳出土鉄製品として扱った。

（※３）鉄鏃の分類にあたっては、おもに川畑純氏による分類を参考にした（川畑 2015)。

参考文献

川畑　純　2015『武具が語る古代史 – 古墳時代社会の構造転換 – 』京都大学学術出版会
西条古墳群発掘調査団　1964『西条古墳群調査略報』西条古墳群発掘調査団
高田恭一郎　1998「第４章論説（３）鏟形金銅製品と鏟について」近藤義郎・河本清編『大谷一号墳』北房町埋蔵文化財発掘調査報告７　北房町教育委員会
野島　永　2013「鉄製農工漁具」『副葬品の型式と編年』古墳時代の考古学４　同成社
村上恭通・山村芳貴　2003「農工具」千賀久・村上恭通編『考古資料大観』第７巻　小学館
村上　隆　2003『金工技術』日本の美術第 443 号　至文堂

古墳	埋葬施設	金属製品（西条古墳群発掘調査団1964）	金属製品（今回報告）
西条１号墳	横穴式石室	鉄鏃２、刀子１、金環１	鉄鏃片？１、刀子１、刀子片？１、耳環１
西条２号墳	横穴式石室	鉄鏃８、手斧１、刀子１、金環３	鏃１、刀子２、刀子片２、鉄釘８、鉄釘片11？、耳環２
西条３号墳	横穴式石室	鉄鏃、鉄釘	鉄釘片８？、不明鉄器片２？
西条４号墳	横穴式石室	鉄器片	鉄刀片１、鉄釘片？３、鉄滓３
西条６号墳	横穴式石室	鉄片	刀子１
西条７号墳	横穴式石室	－	刀子１
西条９号墳	木棺直葬	鉄刀１、鉄鎌１、鉄鉈３	鉄剣１、鉄鎌１、鉈２？、不明鉄器片２
西条10号墳	箱形石棺	鉄刀１、鉄鏃１、鉄斧１、刀子１	鉄鏃４、刀子１、不明鉄器片１
西条14号墳	横穴式石室	鉄鋤先１、鉄釘10、鉄片	鉄釘８、鉄釘片10？、不明鉄器片１？
西条21号墳（イ主体）	木棺直葬	鉄鋤先１、鉄片２	
西条21号墳（ニ主体）	木棺直葬	鏃３～	鉄鏃１
西条21号墳（ホ主体）	木棺直葬	鉄刀１、鉄鏃２、鉄片１	鉄刀１、鉄釘７？
西条21号墳（ヘ主体）	木棺直葬	鉄刀１、鉄鋤先１	鉄刀１、U字形鍬鋤先１、刀子１、鉄釘片？１
西条23号墳	不明	鉄鏃２、鉄鋤先１、鉄鎌１、手斧１	鉄鏃２、鉄鏃片３？、U字形鍬鋤先１、鉄鎌１
西条25号墳（第２主体）	木棺直葬	鉄剣１	鉄剣１、鉄刀１、鉄鏃２、刀子２
西条25号墳（第３主体）	木棺直葬	鉄刀１、鉄鏃１	
西条34号墳	横穴式石室	鉄釘６、金環３	鉄釘片１、不明鉄器片２？、耳環３
西条35号墳	横穴式石室	銀環１	
西条36号墳	横穴式石室	鉄鏃１、鉄釘１	鉄鏃２、鞍金具１、不明鉄器片１
西条40号墳	木棺直葬	鉄剣２	鉄剣１、鉄刀or鉄剣１
西条52号墳	竪穴式石槨	内行花文鏡１、鉄剣１	内行花文鏡１、鉄剣１
出土古墳不明	－	－	鉄鏃５？、U字形鍬鋤先１、有肩鉄斧１、鉄釘３？、不明鉄器片１、鉄片

西条古墳群出土金属製品一覧表

第７章　弥生時代の土器

第１節　弥生時代中期の土器　（図版 39）

西条古墳群の存する城山に向けて伸びる尾根上から、古墳時代の遺物に混じって弥生時代中期後半の土器が出土している。量は多くはないが、4・21・23・25 号墳墳丘周辺の尾根中程の発掘調査された地域から出土している。いずれも破片で散乱しており、遺構との関係を追えるものではないが、実測図は各出土位置単位で掲載し、器種ごとに解説していく。

広口壺（Y01 ～ 04・09・10・13 ～ 16）

確認できる広口壺の口縁部はいずれも口縁端部を肥厚して垂下気味の端面に A 種凹線文を施している（Y01 ～ 03・09・13）。Y09・13 ではその上に円形浮文を貼り付け、Y13 ではさらに口縁内面の外縁にも並べ加飾している。Y09・14 では頸部に B 種凹線文、Y04 では指頭圧痕文突帯をめぐらしている。Y10・15・16 の体部破片にも櫛描き文、円形浮文の貼り付けの加飾があり、この地域当該時期の広口壺の優勢傾向を示している。

甕（Y11・17）

いずれもくの字に屈曲する口縁の端部を肥厚し凹線文を施す。

高坏（Y05・18）

Y05 では坏部外面屈曲部に凹線による境界線がめぐり、水平方向に肥厚される。Y18 の坏部と脚部は連続一体成形され、坏底部を塞いだ円板状粘土は剥落している。ハの字状に拡がる脚端部を上方に肥厚する。外面はヘラ磨きされ、鋭利な工具によるヘラ描き平行沈線がめぐる。

台付鉢（Y06）

上下端部を欠くが、大型の台付鉢の鉢部と台部をつなぐ部分である。外面はヘラ磨きで丁寧に仕上げられ、ハの字に開く台部に小さな円孔を 4 方に穿つ。鉢部と台部は連続成形され、円板状粘土で鉢底部を形成する。

器台（Y07・08）

Y07・08 ともに比較的大型の脚部である。Y07 外面には凹線文が連続してめぐるこの時期の典型的な器台脚部である。Y07 は 4 条のヘラ描き沈線文の下方にヘラ状工具による先端の尖った刻みを並べたもので、あまり類例を見ないタイプである。

脚台（Y19 ～ 21）

いずれも脚端部のみであるが、脚端部は上方に跳ね上がる。高坏または台付土器に続くものであろう。

以上のように、壺・甕・高坏・器台いずれも弥生中期でも後半の凹線文最盛期の土器様相を示している。後世の古墳群造成による攪乱を受け、遺物は散乱し、遺構等の確認もされていないが、この丘陵上にこの時期の人々の生活があったことが伺える。

出土地周辺から南の西条廃寺下層遺跡からも同じくこの時期の壺・甕などの出土、円形住居跡の確認があり（注 1）、続いて東に延びるいなみの台地北端部の段丘崖上の縁辺部には、望塚銅鐸 (扁平紐式、６区袈裟襷文）の出土伝承地（注 1）なども知られる。また近年発掘調査のあった片山遺跡からも溝や土坑、周溝墓・木棺墓から遺物が確認されている（注 2・3）。比高 20 m余りの台地上は、近代になって新田開発が進んだものの当時は主に水利面で生産域とはしがたく、眼下の氾濫原で生産活動をしつつ、生活域を洪水などの影響のない安定した台地上に求めていたのであろう。

第２節　弥生時代後期の土器　（図版 40・41）

古墳群の墳丘上や周辺から、壺または甕と大型鉢がセットになった土器棺と思われる弥生土器が出土している。

城山に近い北寄りの一群の 32・37・38・60 号墳の墳丘またはその周辺で、C 群～D 群にまたがる「西条 52 号墓」を含む一帯からの出土である。遺構図や日誌・写真から、多くが原形を残し埋葬時の状況を保った状態で出土している。そのため各出土地点を「○号墓」と呼称し、古墳と区別した。

土器の時期については「西条 52 号墓」で出土の土器棺をはじめとする土器群とほぼ同時期に該当するものと思われる。

32 号墓（Y22・23）：図版 40

横穴式石室を持つ 32 号墳の墳丘土から大型の二重口縁壺と合わせ口の鉢が出土している。

Y22 は棺身にあたると思われる口径 32.0cm を測る大型の二重口縁壺で、棺上層部より出土している。口縁部が屈曲して開き立ち上がり、口縁部上端面にはヘラ刻み目、立ち上がり部外面には櫛描き波状文をめぐらせる。さらに波状文の上に径 2.8cm 前後の円形浮文が 2 個 1 対で推定 4 方または 5 方に貼り付けられ、浮文の中央に竹管押捺があり、そのうちの 1 つにはその周囲 4 方に花びら状に押捺される。またそれらの浮文の間に 2 個 1 対で竹管文押捺があり、多様で特殊な加飾が際立っている。厚手で体部もかなり大きくなり、器高は Y28 以上には復元できると思われる。

Y23 は棺の蓋にあたる大型鉢と思われ、口径は Y22 と同じ 32.0cm を測り、図上での復元高は約 20cm になる。口縁部がくの字状に屈曲し、口縁端部は上下に肥厚され、端面には凹線文状に凹む。体部内外面はヘラ磨きで丁寧に仕上げられる。底部は中央部粘土充填で平底である。

37 号墓（Y24）：図版 40

37 号は木棺直葬墳との想定の下に掘り進められたが、略報（注 4）に「封土の中心からやや外れたところより粗い波状文のついた口縁部をもつ土師器壺棺を発見した。上になっていた部分は既に流出してしまっていたが、丸底の土器を使った合わせ口の壺棺墓と推定された。」とある。表土下約 10cm で長径約 60cm の範囲に土器片が散布していた。

Y24 は厚手でしっかりとした作りの口径 31.6cm を測る大型の広口壺で、調査時に「37 号壺棺（弥生）」とされている棺身にあたる。朝顔状に大きく広がる口縁端部を上下に肥厚し、その端面に櫛描き波状文を施す。さらに円形浮文を 8 方に貼り付け、その中央部には竹管押捺がある。口縁内面はヘラ磨き後、外縁部に櫛描き波状文をめぐらしている。外面は刷毛調整により丁寧に仕上げられる。Y22 と同様に Y28 以上の器高には復元できると思われる。

38 号墓（Y25・26）：図版 40

略報（注 4）によると「封土の南側の裾近くに、僅かに高くなったところがあり、ここから 2 個の弥生式土器（甕〉を使用した合わせ口棺が出土した。封土の中央部には幅 60cm・長さ 1.65 mの木棺直葬主体があったが副葬品は出土しなかった。」（「38 号墳東部のわずかなマウンドを有する木棺直葬墳と推定した地点の頂上部で弥生の壺棺らしき 2 個の甕の破片群が確認された。」とある。）おそらくここで言う「合わせ口棺」は 3801 の土師器甕（図版 30）と思われるが、主体部（木棺直葬）脇から壺棺が出土したともある。ここで図化したいずれかが、その土器ではないかと思われる。

Y25 は口縁部が屈曲して立ち上がる二重口縁壺である。口径は 18.2cm を測る。立ち上がり外面には粗い櫛描き波状文がめぐる。前述のものほど大型にはならず薄手で、頸部は屈曲せずカーブを描いて体部に続く。体部下半部外面にはタタキ成形の後、粗いヘラ磨きを施す。底部は他と同様に粘土充填され

た平底である。図上復元による器高は約 29cm である。

Y26 の壺はより大型で、径 17.6cm を測る頸部に断面三角形突帯を貼り付け、その直下にヘラ刻み目がめぐる。大きく肩の張る体部が続くと思われ、これも Y28 を凌ぐ器高の大型壺であったと推定する。底部は粘土充填により平たく収まる。

60 号墓（Y27 ～ 30）：図版 41

墳丘上主体部に近接して 2 組の土器棺を検出。略報によれば、「59 号墳に接近して 2 か所に渉って弥生式土器（壺棺）が出土した。いずれも合わせ口になっていたが、西側のものは小さく、はたして壺棺として使用できたか疑問の点もある。」と記されている。

大型の広口壺と甕を棺身とし、それぞれに鉢が蓋として共伴する。土坑に埋葬された壺棺の「出土状況実測図」（図版 20）はこの前者の広口壺の方と思われる。

Y28 は棺身にあたる大型の広口壺で、口径 25.4cm を測る。朝顔状に開く口縁部の肥厚した端面に 3 条の擬凹線文を施し、頸部下端には断面三角形突帯を貼り付ける。肩部は大きく張り、蕪形の体部から粘土充填された平底に続く。口縁部内外面はヘラ磨きにより丁寧に仕上げられ、体部外面はタタキ成形、刷毛調整後ヘラ磨き、内面は強い指ナデによる成形の後、刷毛調整される。図上復元高は約 59cm で、底部は小さい平底である。

Y27 は外反口縁を持つ大型鉢で口径 29.6cm を測り、Y28 に組み合わされる棺蓋になる。体部外面はタタキ後刷毛調整、内面はヘラ磨きで仕上げられる。復元高は約 19cm で粘土充填による平底である。

Y30 は中型の甕で口径 17.4cm を測り、略報にある「西側の土器棺」の棺身にあたると思われる。この時期の通常の集落内で実用的に使われるくの字口縁を持つタタキ甕で、体部外面・肩部内面には刷毛調整が見られる。外面底部近くは粗いヘラ磨きが見られ、底部は平底で粘土充填による。図上復元高は約 28.6cm となる。

Y29 は Y30 の棺の蓋にあたると思われる鉢で、口径 24.2cm、器高 12.0cm を測る。外反する口縁の端部は上方に引き上げられ、体部外面は丁寧に刷毛調整され、底部はやはり粘土充填された平底である。

小結

今回の調査で確認できた土器棺のうち、棺身として使用されたのは大型の広口壺・二重口縁壺に混じって通常サイズの壺・甕各 1 点を含む 6 点で、蓋として使用された鉢は 3 点、いずれもくの字または外反口縁を持つ鉢である。土器棺として土坑内に埋納されていたものとみられ、各古墳の中心部からは外れた位置で出土している。「52 号墓」の小石槨とされるような石組の埋葬施設は他には確認されていない。古墳築造時との時期差から考えると、認識・記憶の可能性は低く、たまたま築造時の破壊から免れたものが残っていたと言ってもいいかもしれない。

以上の土器は「西条 52 号墓」の小石槨周辺から出土した土器棺とされる一群の大型土器と比較して一回り小ぶりの感はあるが、器形や厚み、作りや調整等の特徴が近似している。

棺身となる大型の壺は波状文や円形浮文で加飾され、無花果形に肩の大きく張る体部に粘土充填した小さく不安定な平底が付く。破片は多数ではあったが特に体部の復元は困難で、「52 号墓」の土器棺に見られる焼成後穿孔などは確認できなかった。棺蓋となった鉢は大型でしっかりとした作りでヘラ磨きにより内外面共丁寧に仕上げられ、底部は壺と同様の平底である。

大型の広口壺については川除・藤ノ木遺跡からも類似するものが出土しており、また棺蓋とされた鉢も含めて、同じく川除 3 期～ 5 期に相当するほぼ同時期の弥生時代後期後半に該当するものと思われる（注 5）。32 号墓の大型壺は二重口縁で、より新しいとされる様相を示してはいるが、棺蓋となる鉢は他との近似した特徴を示し、時期差を認めがたい。いずれも土器棺として土坑に埋置され、この周辺が「西条 52 号墓」を含んで当時の埋葬区域とされていたことが伺える。

「52 号墓」では小石槨内に落ち込んだ円礫堆内などから壺や高坏など出土しているが、今回の出土遺物調査ではそれに類似するような当該時期の土器類は確認できなかった。

城山に向かって北に突き出す丘陵の東側に続くいなみの台地の北縁辺の段丘崖上には中期と同様、この時期、播磨堂遺跡 (甕棺墓)（注 1）、猫池遺跡、東沢 1 号墳下層 (竪穴住居跡・溝等)（注 6）、大日山遺跡 (壺棺墓)（注 1）、片山遺跡（竪穴住居跡・掘立柱建物等）（注 2・3・7）が続き、眼下の低位段丘上（野口段丘）には下村遺跡（注 1）、同じく西側には手末遺跡（注 8）などがある（右上図）。

西条古墳群周辺の弥生遺跡　S=1:50,000

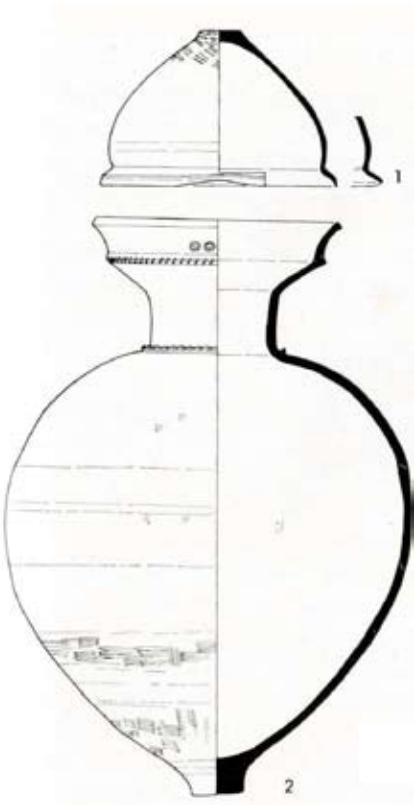
1. 手末遺跡　2．西条 52 号墓ほか　3. 西条廃寺下層遺跡
4. 播磨堂遺跡　5. 猫池遺跡　6. 望塚（東沢 1 号墳下層）
7. 大日山遺跡　8. 片山遺跡　9. 下村遺跡　10. 野村遺跡
11. 宗佐遺跡　（参考：A. 行者塚　B. 人塚　C. 尼塚）

大日山遺跡の壺棺 (右下図）は大型の二重口縁壺と大型の鉢を組み合わせたもので、壺は大きな無花果形の体部で口径 31.6cm・器高 75.4cm、鉢はくの字状に屈曲する口縁を持つ口径 20.3cm・器高 31.2cm で、いずれも小さな平底を持つ。棺身の大型壺は 32 号墓の Y 22 と同じく二重口縁という新しい要素は持つが、同じく蓋となる鉢の形状を見ても、やはり器形・作り共に西条 52 号墓等から出土の一連のものと概ね同時期に比定できる (注 9)。

両側の低地は加古川支流の草谷川・曇川の本流への合流地点で、現在も大規模洪水の際の浸水想定区域となっている。当時の加古川による不安定な氾濫原を水田などの生産域とし、住居等の集落（生活域）は台地縁辺部や裾周りの低位段丘・自然堤防上に求めたのであろう。特に墓域としてはより安定した台地上を選んだようで、こうした意識は古墳時代にまで引き継がれていったようである。

西条 52 号墓は、発掘調査としては本報告書掲載の古墳群と同時期に行われたものではあるが、石組みの埋葬施設や内行花文鏡等の出土品など、発掘調査当初から播磨地域のみならず広く考古学会から注目を集めていることもあり、52 号墓に限定して前述のように既に調査担当者などによる近年の詳細な報告がある。

第 9 回播磨考古学集会「弥生墓から見た播磨」記録集（注 10）に松本正信・加藤史郎両氏の執筆による西条古墳群発掘調査団の特別報告「西条 52 号墓の記録」として掲載され、調査報告の公表がなされた。またその後、 出土遺物は兵庫県立考古博物館に寄託・保管されることとなり、『兵庫県立考古博物館研究紀要』第 7 号に「西条 52 号墓出土品の共



大日山遺跡の壺棺　S-1:10
（『加古川市史』第 4 巻より転載）

同研究」として公表されている（注 11）。これは同博物館の活用のための基礎調査の一環として「東播磨における青銅器の共同研究」を構成する対象として調査された成果であり、当時同館勤務であった筆者（友久）も加わって、青銅器のみならず、出土土器についても再接合・再実測を行い再検討を加えたものである。いずれの報告も加えてすべてを掲載できれば良いのではあるが、今回調査の主目的は未公表の部分を公表することであり、紙面の都合もあり、このうち本章記述と関連性の高い「概要」「出土土器」「まとめ」の 3 項目を抜粋して参考資料として本章末（P62 ～ P72）に転載させていただくことにした。

当該紀要においては西条 52 号墓の主な出土土器は庄内期直前の弥生時代後期後半に位置づけられており、又、内行花文鏡の出土、主体部の小石槨の構築などから、発生期の古墳につながる重要な意味を持つ墳墓として、今後も注目される対象であり続けるであろう。今回調査でも同時期の類似遺物が複数発見されたことで、この丘陵の持つ意味への所見も深まっていけばと思う。

加古川右岸地域でもこの時期の壺棺による埋葬は神吉山 5 号墓（注 1）・八ツ塚 3 号墓などで確認されており、葬送様式のみならず、当時の生活基盤・社会構成についての総合的な研究が進むことを願う。また周辺集落の実態が明らかになれば、日岡古墳群につながり、再び西条丘陵に築造される行者塚をはじめとする大型古墳群や、西条廃寺にもつながるこの地域の重要性を裏付けることが出来るのを期待したい。

また、篠宮　正氏には出土土器の所属時期についてのご助言をいただいた。記して感謝いたします。

（友久伸子）

注 1 ：『加古川市史』第 1 巻（本編 1）1989 年・第 4 巻（史料編 1）1996 年
注 2 ：『平成 29 年度　埋蔵文化財調査年俸』 兵庫県立考古博物館　2018 年 10 月
注 3：平尾英希・西岡巧次『片山遺跡発掘調査報告書』 加古川市文化財調査報告 3　2021 年 3 月
注 4：『西条古墳群調査略報』 西条古墳群発掘調査団　1964 年 6 月
注 5：高瀬一嘉ほか『川除・藤ノ木遺跡』兵庫県文化財調査報告　第 104 冊　兵庫県教育委員会　1992 年
注 6：山田清朝『東沢 1 号墳』兵庫県文化財調査報告　第 431 冊　2012 年 3 月
注 7：『平成 30 年度　埋蔵文化財調査年俸』 兵庫県立考古博物館　2019 年 12 月
注 8：『手末遺跡発掘調査報告書』加古川市教育委員会　2003 年 3 月
注 9：篠宮正氏 (兵庫県まちづくり技術センター) のご助言による。
注 10：松本正信・加藤史郎「西条 52 号墓発掘調査の記録」『弥生墓からみた播磨』
第 9 回播磨考古学研究集会の記録　2009 年 2 月
注 11：篠宮正・友久伸子ほか「西条 52 号墓出土品の共同研究」『兵庫県立考古博物館研究紀要第 7 号』
2014 年 3 月

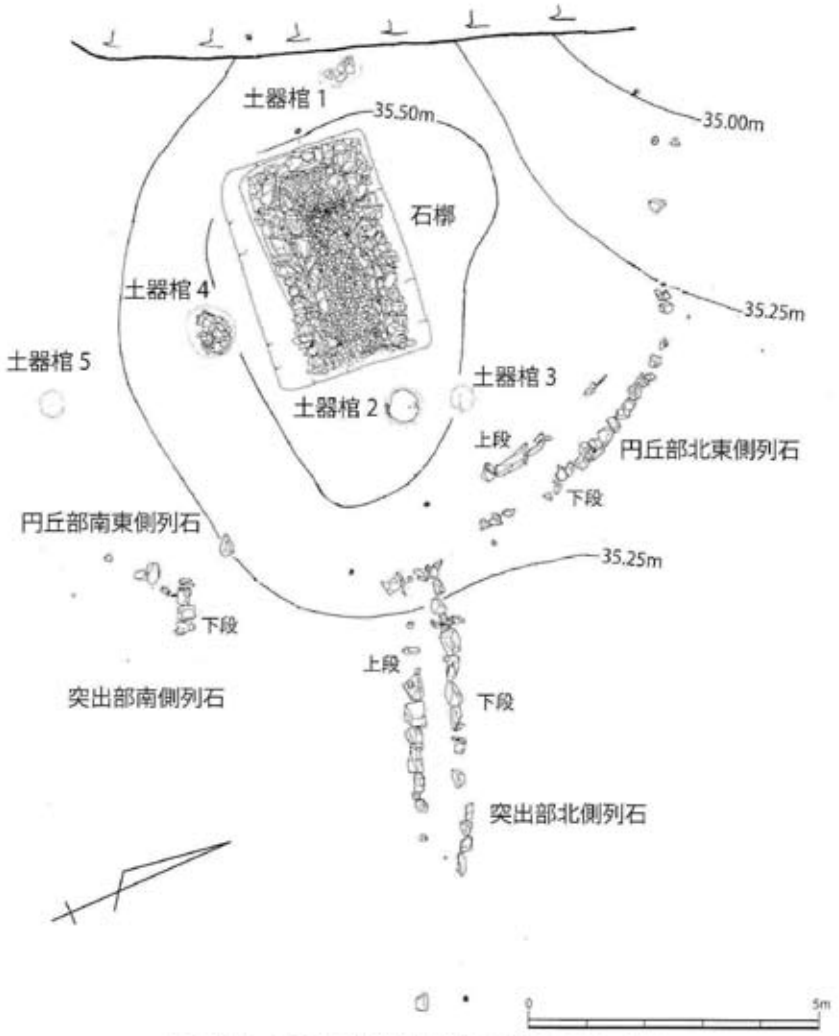
弥生土器（Y22）

（3）西条52号墓の概要

墳丘は直径約11.5mの円丘部の南東側に幅約5.5m、長さ6.6mの突出部が存在する。墳丘には、盛土が存在し、裾部には列石を巡らしている。列石の東側部分は上下二段になっており、突出部の先端の列石の状況は明らかではない。

埋葬施設は、東西方向に主軸をとる長さ3.7m、幅2.0mの墓壙に、角礫で東方向の一辺を欠くコ字形の竪穴式石槨を築いている。底面には円礫を敷いており、天井石は存在しない。石槨内では西側小口寄りの礫面上から鉄剣が出土している。上層には円礫堆が存在し、内行花文鏡が割れた状態で出土している。この円礫堆内からは、壺や高坏などの土器も出土している。

石槨の周囲の墳丘内には、5基の土器棺が埋置されていた。石槨の西側に土器棺1、東側に土器棺2・3、南側に土器棺4・5が位置する。



第2図　西条52号墓遺構配置図（前報告書を改変、加筆）

『兵庫県立考古博物館研究紀要第7号』2014年3月
―「西条52号墓出土品」の共同研究―より抜粋転載
2－(3)－P33　（篠宮　正）

３．西条52号墓の出土遺物の再整理と検討

（1）西条52号墓出土の土器

西条52号墓からは、石槨の周囲の墳丘に埋置された土器棺、および石槨内に落ち込んだ円礫堆の中から、壺・鉢・高坏などが出土している。

１：土器棺１（石槨西側）

石槨土坑の北西隅外側に近接した浅いピットから出土した大型壺の底部である。器壁は厚く、胎土には直径１～３㎜の砂粒が多く含まれる。底部は突出するが、やや不安定な平底である。下端の周囲に輪状の剥離痕があり、底部補強のため粘土紐を貼り付けていたと思われる。体部下半は土器棺２・３に比して丸みを帯びている。外面にはハケ調整の後ヘラミガキ、内面にはハケ調整を施す。前報告では外面に化粧土、内面に赤色顔料を塗布しているとの記載があったが、今回の分析で断面との比較により鉄（Fe）を顕著に検出したため、ベンガラを塗布した可能性が高い。

２：土器棺２（石槨東側）

石槨土坑の東辺外側に近接して出土した大型の壺である。口縁部を欠くが以下はほぼ完存する。前報告の実測図では、筒状にやや内傾して立ち上がる頸部下端に刻み目を施した断面方形の突帯を巡らせているが、現況では剥落し所在不明である（実測図では先の図を手掛かりに図上復元した）。欠損している口頸部は土器棺４のそれに類似するものであったと思われる。体部に比してやや小さめの突出する底部から体部下方は直線気味に開き、重心はやや上方にある無花果形の体部である。底部に近接して焼成後穿孔が１個みられる。外面はハケのちやや粗いヘラミガキ、内面はハケのちナデによる。体部の容量は61.80リットルである。前報告では赤色顔料の塗布ありとの記載があったが、現状では認められなかった。

３～５：土器棺３（石槨東側）

土器棺２のすぐ北側、石槨土坑の北東隅外側に近接して出土した。

３：片口の注口を持つ大型の鉢である。口縁部はくの字状に屈曲して開き、端部をわずかに上方に引き上げる。体部は上寄りに重心をおいてやや丸みを帯びている。内外面ともにヘラミガキにより整える。前報告では土器棺の蓋として使用された可能性があるとの記載がある。赤色顔料の塗布ありとの記載もあったが、現状では認められなかった。底部は平底ではあるがやや不安定で、口縁部端面も明瞭ではなく、後期でも後半以降のものである。土器全体の容量は20.89リットル、体部の容量は15.90リットルである。

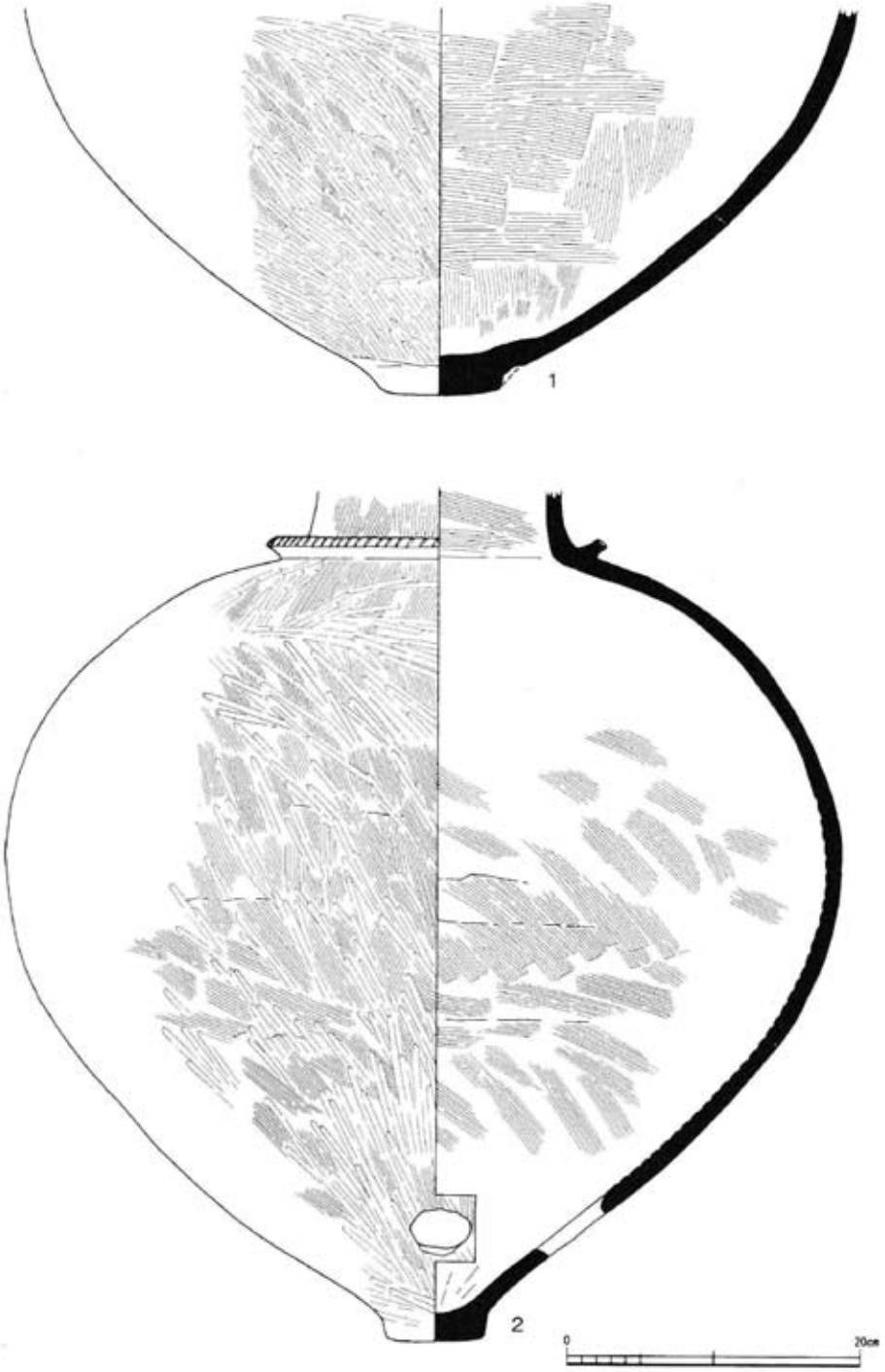
４：器壁が厚く、おそらく大型の壺の底部である。安定感のある平底で、外面ヘラミガキ、内面ハケ・ヘラミガキで整える。

５：壺または鉢の底部である。内面にハケ調整が残る。胎土やつくりが、他と違和感があり、混入の可能性もある。

７：土器棺４（石槨南側）

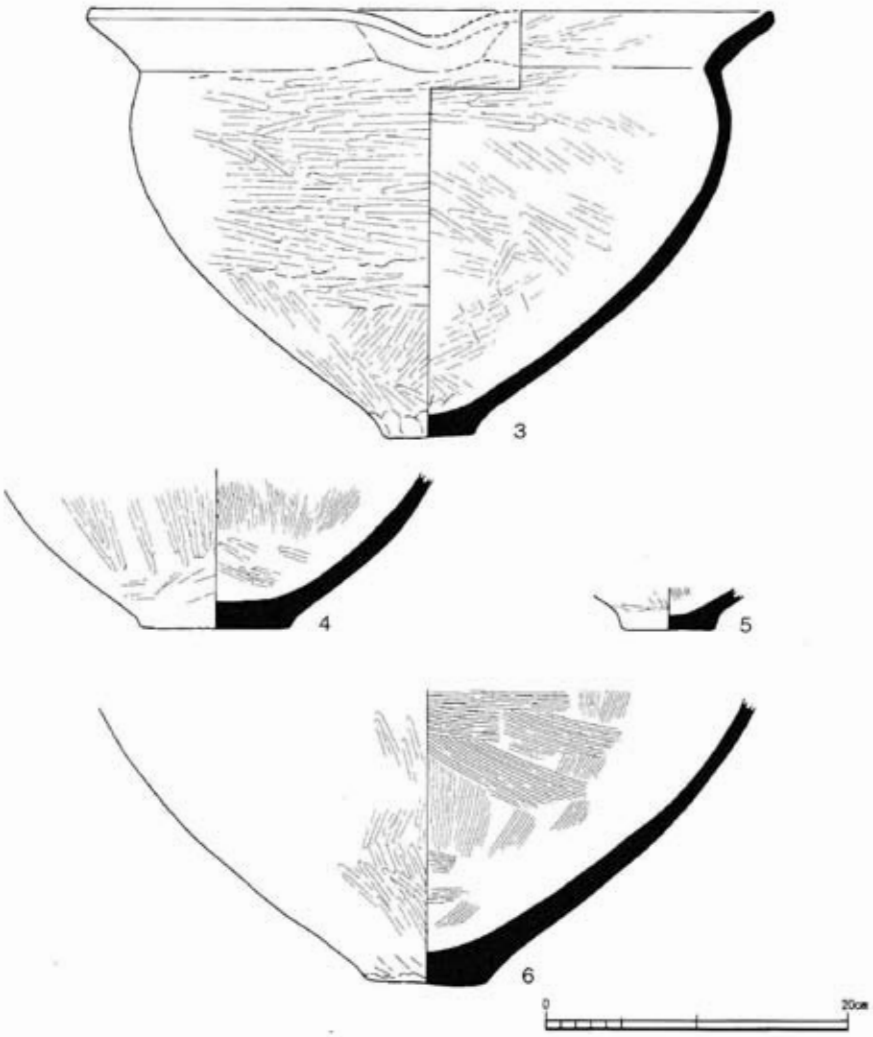
石槨土坑の南辺外側に近接して出土した大型の広口壺である。前報告では口縁部・頸部下端部～肩部・体部下半～底部の３部分を図上で復元されていた。他にも同一個体と思われる破片が多数あり、今回も

『兵庫県立考古博物館研究紀要第７号』2014年３月
―「西条52号墓出土品」の共同研究―より抜粋転載
３－(1)－P34　（友久伸子・篠宮　正）



第3図　土器実測図（1）

『兵庫県立考古博物館研究紀要第７号』2014年３月
―「西条 52 号墓出土品」の共同研究―より抜粋転載
３－(1)－P35　（友久伸子・篠宮　正）



第４図　土器実測図（2）

接合を試みたが叶わなかった。前回と同じく無花果形の体部の広口壺とし、同一個体として図上復元した。

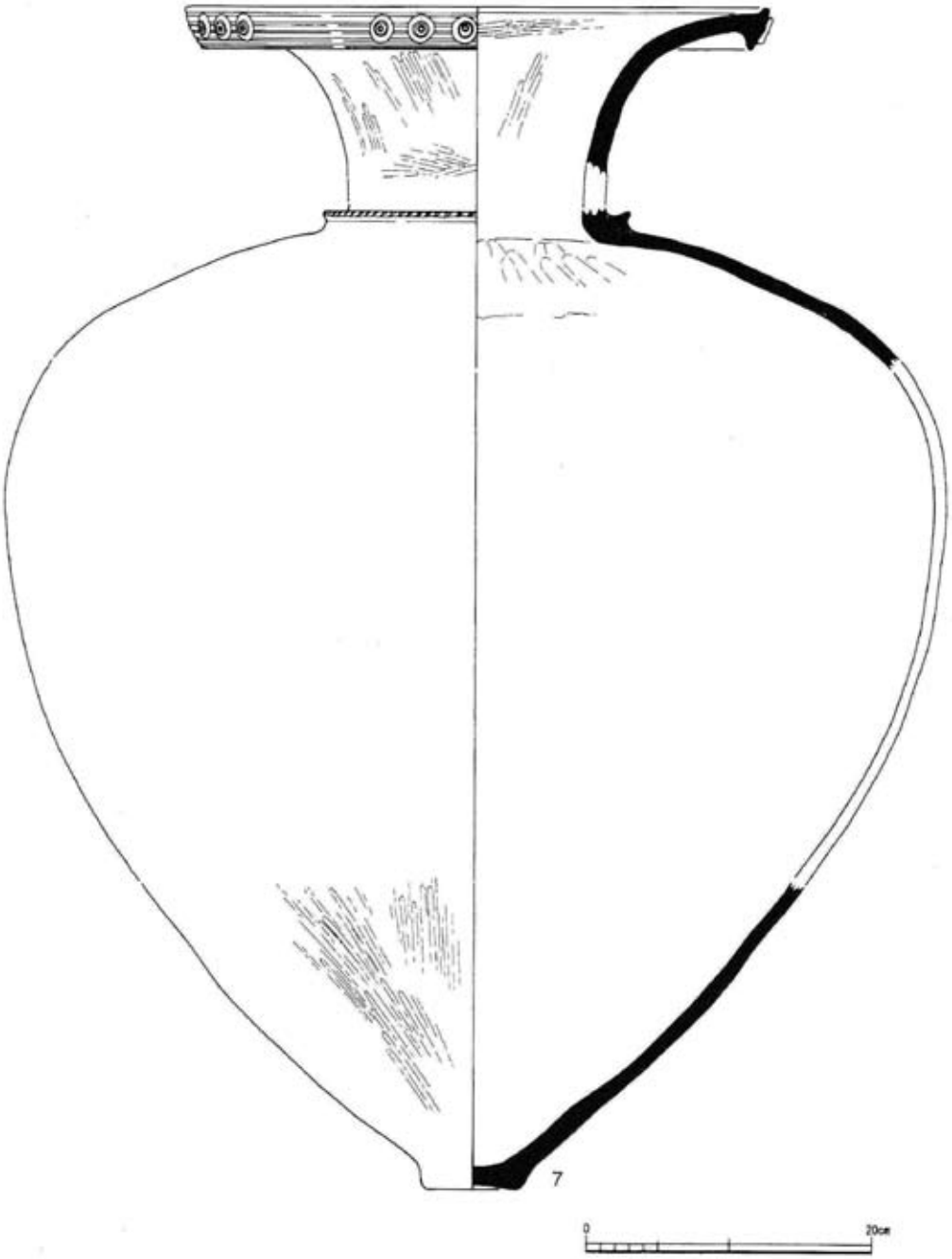
大きく外反して開く口縁部は、端部を上下に拡張し、端面に５条の平行する沈線を巡らせる。その上には３個一対の大小二重に竹管文を押捺した円形浮文を貼り付ける。それらの間隔から５単位存したと推定できる。内外面はヘラミガキで整える。

頸部下端には突帯を貼り付け、その端部にはヘラによる刻み目をめぐらせる。肩部内面は強い指ナデで整形し、外面の残りは悪いが、おそらくヘラミガキであろう。

底部は全体の器形からすると小振りで、安定感を欠き、わずかに上げ底気味である。風化が顕著ではあるが、直線気味に開いて立ち上がる体部外面にはヘラミガキが残る。口縁部から肩部の広い範囲に赤

『兵庫県立考古博物館研究紀要第７号』2014 年３月
―「西条 52 号墓出土品」の共同研究―より抜粋転載
３－(1)－P36　（友久伸子・篠宮　正）

色顔料が残り、分析の結果、水銀朱であることが判明した。土器全体の推定容量は87.91リットル、体部の推定容量は84.87リットルである。



第5図　土器実測図（3）

『兵庫県立考古博物館研究紀要第７号』2014年３月
―「西条52号墓出土品」の共同研究―より抜粋転載
３－（1）37P　友久伸子・篠宮　正

前報告で図化表記されている土器棺4-2は4-1の底部と同一と考えられる。

６：土器棺５（石槨南側）

土器棺４からさらに南に３m、おそらく推定円丘部裾近くから出土した大型の壺または鉢の底部である。底部は安定感のある平底で、体部は少し丸みを帯びて立ち上がる。器壁は厚く、外面はヘラミガキ、内面はハケで整える。前報告では外面に赤色顔料の塗布ありとの記載があったが、現状では認められなかった。

８～15：円礫堆内出土土器

壺（８～10）・器台（11）および高坏（12～15）が、鏡と共に石槨内に落ち込んだ円礫堆内から出土している。

８は広口壺である。口縁は筒状の頸部から屈曲してほぼ水平に開き、その端部の上下に粘土紐を付加して拡張する。浅い凹線で画した上下端には半截竹管により半円形の押捺をめぐらし、その間にはヘラ描き沈線による鋸歯文を施す。頸部下端には突帯を貼り付け、口縁端部と同じ半円形の押捺を施す。肩部は大きく張って開き、体部中位を欠くものの、ほぼ平らに開く底部に続くものと思われ、扁球状の体部であったと推定される。外面はヘラミガキ、内面はハケ調整を施し、全体的に丁寧なつくりである。口縁部に赤色顔料の付着があり、分析の結果水銀朱であった。土器全体の推定容量は11.00リットル、体部の推定容量は8.85リットルである。

11は器台の口縁部片である。８と同様に口縁端部の上下に粘土紐を付加して拡張し、上端は平らに整えられる。端面にはヘラ描き沈線による鋸歯文を施し、文様構成も類似している。ただ、口縁端部の施文には刻み目がなく、鋸歯文の内側は格子になっていて幾分の違いが認められる。残存部分は少ないものの、８の口縁よりかなり大きく、器台としてセットになるものとも考えられる。

９は細頸壺である。筒状に長く立ち上がり、緩やかに少し開く口頸部のみで体部を欠く。口縁上方部には３条の凹線文をめぐらせ、以下をヘラミガキで丁寧に仕上げる。胎土は他の出土土器に比して精良である。肩部はほぼ水平に広がり、扁球状の体部が続くものであったと思われる。

10は口縁端部・底部を欠いているが、ほぼ直立する頸部が続き、長頸壺と思われる。全体に薄手で丁寧な作りである。外面頸部～体部上半はハケ調整、体部下半はヘラミガキにより仕上げている。内面はナデで、体部中位には指押さえ痕が顕著に残る。

12は小型の坏部を持つ高坏である。口縁部は屈曲して立ち上がるが外反はわずかである。連続成形技法により、坏中央部には粘土板が充填される。ヘラミガキ・ヨコナデで丁寧に作られるが、坏部外面のミガキは若干粗く、砂粒の動きが顕著に残る。脚部は坏部に比して大きく開き、裾径は口径をしのぐ。脚柱部の縦方向のヘラミガキは幅広で強く、稜線を残している。小円孔が上下２段に互違いに穿たれ、上段は２個残存し推定３方向、下段は１個のみの残存である。脚部内面は上部に絞り目が残り、以下はヘラケズリにより薄くするが、端部は厚く残して端面がしっかりと形成される。坏部の容量は0.42リットルである。

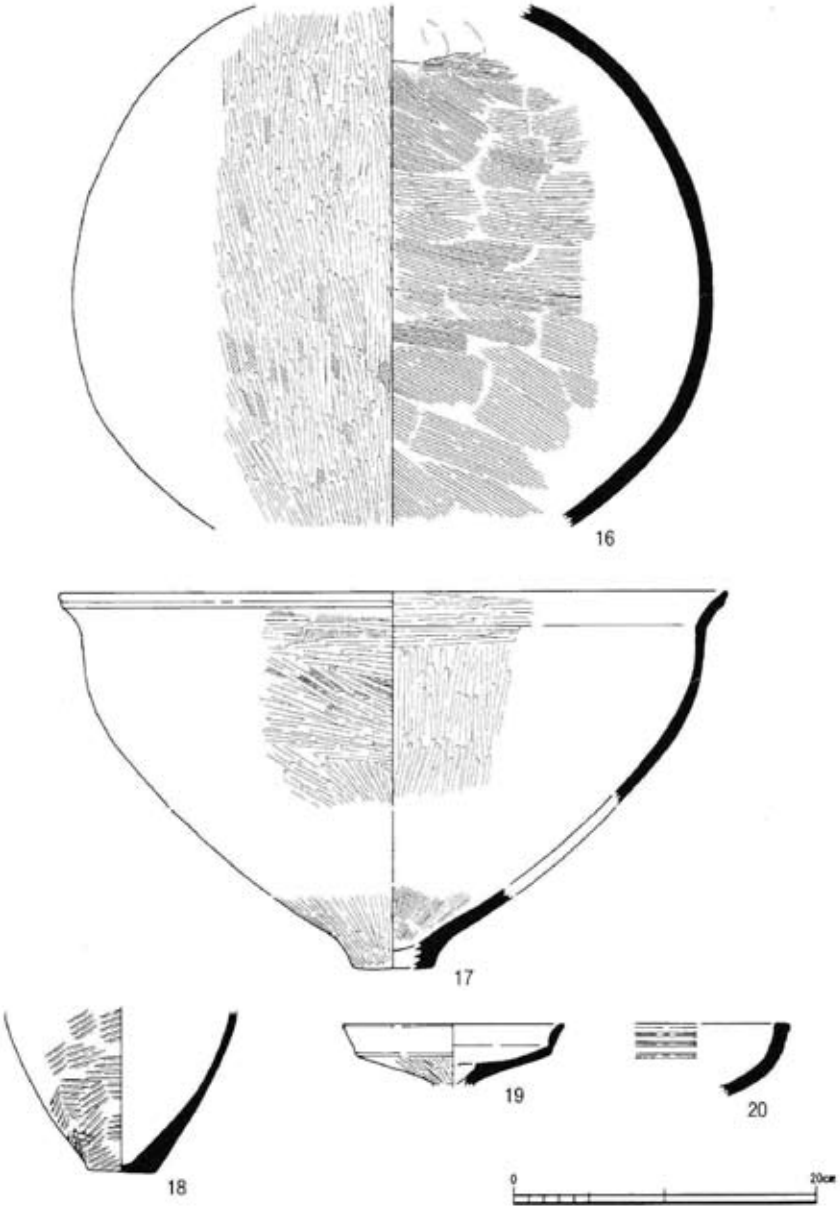
13～15は浅い皿状の受け部から屈曲、外反して開く口縁部を持つ高坏である。いずれも図上復元によるものが、ヘラミガキにより丁寧に仕上げられ、筒状の脚柱部から脚端部が屈曲気味に大きく開く。13の坏部は他に比して深く、脚部とのバランスに違和感があるが、精良な胎土・とりわけ丁寧なヘラミガ

『兵庫県立考古博物館研究紀要第７号』2014年３月
ー「西条52号墓出土品」の共同研究ーより抜粋転載
３－（1） 38P　友久伸子・篠宮　正

第6図　土器実測図（4）

キが他の個体と区別されることから、同一個体とした。14·15についても、胎土・調整技法等から同一個体と判断して図上復元した。坏部の推定容量は、13が2.16リットル、14が1.56リットル、15が1.28リットルである。

『兵庫県立考古博物館研究紀要第７号』2014 年３月
―「西条 52 号墓出土品」の共同研究―より抜粋転載
３－(1)－P39　（友久伸子・篠宮　正）



第７図　土器実測図（5）

16・17：突出部北側出土土器

16は壺であるが、口縁・底部を欠き、ほぼ球形の体部のみである。厚手・大型で、土器棺に使用されたものかと思われる。外面はハケのちヘラミガキで丁寧に仕上げられ、内面はハケ調整による。前報告で「突出部北側東端付近（正確な位置は不明）で出土した土器棺の可能性のある一群の土器片で、図示できず」との記載のあるものであろう。分析を行ったが、表面と断面の差が認められず、赤色顔料は認

『兵庫県立考古博物館研究紀要第７号』2014 年３月
―「西条 52 号墓出土品」の共同研究―より抜粋転載
３－(1)－P40　（友久伸子・篠宮　正）

められなかった。

17は鉢である。くの字状にゆるやかに屈曲して開く外反口縁を持つ。大きさの割に薄手で、内外面ともに丁寧にヘラミガキされた精製品である。突出する底部は平底で内面には蜘蛛の巣状のハケメがみられる。胎土・調整技法等から同一個体と認定し、図上復元した。土器全体の推定容量は17.60リットル、体部の推定容量は14.51リットルである。

18：石槨肩部出土土器

18は外面にタタキを施した甕である。「石槨の南長側壁の西より地点の上部に近い石壁に引っかかるようにして」出土したものである。底部は平底であるが不安定で、内面からの刺突により薄く作られている。

19・20：出土位置不明

19は12と同様、小型の坏部を持つ高坏である。口縁部は屈曲して立ち上がるが外反しない。連続成形技法による粘土板の充填の剥離が坏中央部に残る。ヘラミガキ・ヨコナデで丁寧に仕上げている。

20は内湾して立ち上がる坏部で、端部は水平方向に肥厚させ、外面に３条の凹線をめぐらせる。弥生時代中期の混入物であろう。

前報告としたものは、松本正信・加藤史郎「西条52号墓発掘調査の記録」西条古墳群発掘調査団（『弥生墓からみた播磨』第９回考古学研究集会の記録　同実行委員会刊行　2009）に特別報告として収録されたものである。

第２表　土器一覧

報告番号	出土位置	器種	残存部位	法量（cm）				赤色顔料分析	前報告		
				口径	器高	腹径	底径		土器	挿図	写真図版
1	石槨西側	壺	底部		26.3＋		7.6	◎	土器棺１	26	－
2	石槨東側	壺	頸部・体部		58.0＋	57.0	6.8		土器棺２	28	PL31・32
3	石槨東側	鉢	全	(45.0)	26.1	39.2	6.2		土器棺3-1	29上	PL33
4	石槨東側	壺	底部		10.3＋		10.0		土器棺3-2	29下	
5	石槨東側	壺	底部		2.7＋		(6.2)		土器棺3-3	－	
6	石槨南側	壺	底部		19.4＋		8.2		土器棺５	33	PL35
7	石槨南側	壺	口縁・肩・底部	(40.0)	(83.0)		6.8	●	土器棺4-1	31	PL34
8	円礫堆内	広口壺	口縁・肩・底部	(15.8)	(26.8)		6.4	●	壺１	35	PL25
9	円礫堆内	細頸壺	口頸部	6.6	15.9＋				壺２	36-9	PL26
10	円礫堆内	長頸壺	頸部・体部		13.0＋	(16.0)					
11	円礫堆内	器台	口縁部	(27.8)	3.0＋						
12	円礫堆内	高坏	全	15.0	13.8		19.1		高杯１	36-1	PL27
13	円礫堆内	高坏	全	(25.6)	(19.0)		(18.0)		高杯3・8	36-3・6	PL29
14	円礫堆内	高坏	全	(28.0)	(17.1)		(18.0)		高杯2・4・6	36-4・5・7	PL28・29
15	円礫堆内	高坏	坏・脚柱部	(26.8)	13.6＋				高杯5・7	36-2・8	PL29
16	突出部北側	壺	体部		(34.5)	(42.4)		○			
17	突出部北側	鉢	口縁・底部	(44.0)	(25.0)		(5.5)				
18	石槨肩部	甕	底部		10.7＋	15.3	4.0		甕	37	PL30
19	不明	高坏	坏部	(14.4)	4.2＋						
20	不明	高坏	口縁部		4.9＋						

● 水銀朱　◎ ベンガラの可能性

『兵庫県立考古博物館研究紀要第７号』2014年３月
―「西条52号墓出土品」の共同研究―より抜粋転載
３－(1)－P41　（友久伸子・篠宮　正）

５．まとめ

今回の西条52号墓出土品の調査研究は、土器および鏡の再整理を行うとともに、自然科学的分析を行い、基礎的な資料提示を行った。土器については、前回、報告されている個体の再分類･再接合を行い、接合により明らかになった個体の再実測・復元を行い、赤色顔料等の付着物の分析を行った。

内行花文鏡は、銅鏡の形状・文様を正確に記録化するために三次元デジタル計測を行い、鏡片の配置の復原を行った。直径は約17.6cmである。また、鏡の成分分析および赤色顔料等の付着物の分析を行った。

ここでは、遺物などから西条52号墓の位置付けを行う。

（１）西条52号墓の時間的位置付けについて

西条52号墓から出土した土器の再整理によって、製作時の調整を追加した他、新たに全体の様相が判明したもの（８・13・14）と、新たに実測を行ったもの（10・11・16・17）がある。

石槨内に落ち込んだ円礫堆から出土した壺８は、体部が扁球形で頸部は短く直立し、口縁部を鋸歯文帯で飾る特徴的な土器である。類例には黒宮大塚墳丘墓A地点から出土した壺（*図18.8*）があり[1]、エビ上東とし、鬼川市Ⅲ式に位置付けている。口酒井遺跡１号円形周溝墓から出土した壺*G51*は頸部が外傾するが、口縁部の加飾は著しい。弥生時代後期末から古墳時代初頭に位置付けられている[2]。また、久宝寺遺跡・竜華地区の第６－１面（弥生時代後期後半）の07001落込からは壺８と同様に頸部は長いが扁球形の体部を持つ壺（*図130.4*）が出土している[3]。口縁部や肩部を同心円文等で加飾しており、ミニチュア土器も共伴していることから祭祀に使用されたと考えられている。頸部形態や体部最大径の突帯の有無、胎土などの差異はあるものの、口縁部を拡張させ鋸歯文帯を施文することや、体部の扁平率の特徴などから、特殊壺との関連性がうかがえる。

器台11は壺８とセットになると考えられる。口縁部を拡張させ鋸歯文帯を施文する器台は備中南部地域を中心として分布しており[4]、その時期は弥生時代後期後半（後・Ⅱ・Ⅲ期）に位置付けている[5]。

細頸壺９・10は細頸壺dに分類しており、弥生時代Ⅴ－３期から庄内1期までの後期後半を中心に出土している[6]。９・10に類似するものには、明石川流域の日輪寺遺跡SH03から出土した*47*があり[7]、口頸部の形状・長さ・太さはほぼ同一であり、Ⅲ期（弥生時代後期後半）に位置付けている[8]。また、百間川原尾島遺跡６の井戸１から出土した*345*も口頸部の法量･形状が同一であり、百･後･Ⅱに位置付けられている[9]。

高坏12は小型有稜高坏で、東播磨地域では客体的である。類似するものに、西播磨地域の新宮宮内STD01から出土した*Y619*[10]があり、Ⅴ－４期に位置付けられている[11]。

土器棺２に類似するものには、川除・藤ノ木遺跡SK63から類例が出土している[12]。二重口縁壺*739*は底部を欠き、一回り小振りであるが、口頸部まで残っている。川除５期に位置付けられている[13]。また、SH52からは*874*・*875*が出土しており、*874*はやや細身であるが、底部の形態や突帯の位置が土器２と同一である。*874*・*875*とも口頸部が残存しており、頸部の傾きは緩やかである。口縁端部は拡張し、円形浮文を貼り付けており同一の属性を有する。川除３期に位置付けられている。川除３期・５期は弥生時代後期後半に位置付けられており、庄内期より前に位置付けられている[14]。

主要な土器から見ると、西条52号墓は弥生時代後期後半に位置付けることができる。

播磨地域で同時期の遺構から内行花文鏡が出土している遺跡には、西条52号墓の他に、岩見北山１号墓があり竪穴式石槨から採集されている[15]。集落からは大中遺跡で、7－A号住居跡から内行花文鏡の破鏡が出土[16]し、双孔を穿たれている。大中Ⅱ式（古）に位置付けられている[17]。いずれも後期後半である。

『兵庫県立考古博物館研究紀要第７号』2014年３月
－「西条52号墓出土品」の共同研究－より抜粋転載
５－P52　（篠宮　正）

（2）西条52号墓の空間的位置付けについて

遺物などから、弥生時代後期後半の年代を位置付けたが、西条52号墓の被葬者が掌握した空間領域はどうであろうか。母体と考えられる集落には眼下に広がる平野部の手末遺跡[18]があり竪穴住居が調査され、讃岐地域の甕が搬入されており注目される。しかし、漢鏡を入手し得たことを考えると、より広域的に掌握していたと考える必要がある。加古川下流を広域的にとらえ、中期から継続して営まれる溝之口遺跡[19]や美乃利遺跡[20]などの遺跡が、その中心であると考えられる。

遺物から交流を見ると、壺８・器台11などは吉備地域、高坏12は西播磨地域、壺７は東からの影響を受けており、広域からの影響が読み取れる。

以上のように、西条52号墓の出土遺物の再整理により、初期古墳出現前夜に位置付けられる重要な弥生時代の墳墓であることを、あらためて提示できたのではないかと思う。

なお、本調査研究にあたり、西条町内会、佃正晴、奥村正人、松本正信、加藤史郎、岸本道昭、奥山誠義、持田大輔、増永光令、森岡秀人をはじめ多くの方々にお世話になった。記して感謝申し上げます。（敬称略）

註

1　間壁忠彦・間壁葭子・藤田憲司「岡山県黒宮大塚古墳」『倉敷考古館研究集報』第13号　倉敷考古館1977年
　間壁忠彦「土器片年から見た各地の初期古墳」『歴史公論』第７巻第２号　雄山閣出版　1981年
2　六甲山麓遺跡調査会『口酒井遺跡－第１次～第10次・第12次～第16次調査の概要－』伊丹市教育委員会　2000年
3　（財）大阪府文化財センター『久宝寺遺跡・竜華地区発掘調査報告書Ⅵ』　2007年
4　福井優「吉備の弥生器台－器台の展開から見た吉備弥生社会－」『古代吉備』第23集　古代吉備研究会　2001年
5　大橋雅也「器台形土器」『吉備の考古学的研究』（上）　山陽新聞社1992年
6　篠宮正「東播磨地域の土器編年」『弥生土器集成と編年－播磨編－』大手前大学史学研究所　2007年
7　神戸市教育委員会『日輪寺遺跡発掘調査報告書』　2002年
8　山田清朝「弥生時代後期～古墳時代初頭の土器」『日輪寺遺跡発掘調査報告書』神戸市教育委員会　2002年
9　岡山県埋蔵文化財センター『百間川原尾島遺跡６』岡山県教育委員会他　2004年
10　新宮町教育委員会『新宮宮内遺跡』新宮町文化財調査報告30　2005年
11　長友朝子・田中元浩「西播磨地域の土器編年」『弥生土器集成と編年－播磨編－』大手前大学史学研究所　2007年
12　兵庫県教育委員会『川除・藤ノ木遺跡』兵庫県文化財調査報告104冊　1992年
13・14　高瀬一嘉「弥生時代～古墳時代前期の土器」『川除・藤ノ木遺跡』兵庫県文化財調査報告104冊　兵庫県教育委員会　1992年
15　松本正信「龍野市とその周辺の考古資料」『龍野市史』第４巻　1984年
16　播磨町教育委員会・播磨町郷土資料館『播磨大中遺跡の研究』　1990年
17　山本三郎「大中遺跡の後期・終末期弥生土器」『播磨大中遺跡の研究』播磨町教育委員会・播磨町郷土資料館　1990年
18　加古川市教育委員会『手末遺跡発掘調査報告書』　2003年
19　加古川市教育委員会『溝之口遺跡発掘調査報告書Ⅰ』　1992年
　兵庫県教育委員会『溝之口遺跡』兵庫県文化財調査報告309冊　2006年
20　兵庫県教育委員会『美乃利遺跡』兵庫県文化財調査報告165冊　1997年

全体にかかわる参考文献

松本正信・加藤史郎「西条52号墓の記録」『弥生墓からみた播磨』第９回播磨考古学研究集会の記録　第９回播磨考古学研究集会実行委員会　2009年
西条古墳群発掘調査団『西条古墳群調査略報』1964年
喜谷美宣『兵庫の古墳』神戸市立考古館　1973年
穂定淳介「播磨における弥生時代青銅器の特質」『今里幾次先生古希記念播磨考古学論叢』1990年

『兵庫県立考古博物館研究紀要第７号』2014年３月
―「西条52号墓出土品」の共同研究―より抜粋転載
５－P53　（篠宮　正）

あとがき

東播磨地域史懇話会の考古部会として遺物調査をはじめてから半日ごとの作業でしたが３年が過ぎました。その間、コロナ渦の影響を受け遅々として調査は進まない時期が続きましたが、ようやくその成果を公表する運びとなりました。今回の遺物調査では多数の遺物が確認できましたが、実測図として公表できたのは、弥生時代から古墳時代にかけての遺物になり、中世の遺物は公表することができませんでした。

西条古墳群調査報告書をまとめるにあたって、多くの方々および関係団体のご支援やご協力がありました。皆様方からいただいたご厚意に深く感謝いたします。

まず、遺物の保管者である西条町内会の皆様方には、調査を行うことに対してご理解をいただき、さらに西条会館の一室を長期間にわたり使わせていただきました。また陵北小学校の一室も遺物整理の場所として使わせていただきました。

次に本調査事業を遂行するにあたっては、平成 30 年度には、兵庫県の東播磨流域文化協議会の地域活性化事業の助成をいただきました。その成果は「西条古墳群　―出土遺物の実測調査報告―」として報告をさせていただきました。さらに、令和３年度には加古川市協働のまちづくり推進事業補助を活用させていただき本調査報告書の刊行に結びつけることができました。その過程で市の関連機関として加古川市教育委員会文化財調査研究センターとの連携を図りながら事業が遂行できたことも大きな力になりました。

そこで、私どもは、当時の調査に関わられた方々のお名前を本報告書に載せたく思い、昭和 39 年６月に発刊されました「西条古墳群調査略報」、当時の「調査日誌」、「遺構の実測図や墳丘測量図」にお名前のある方、また「第９回播磨考古学研究集会の記録」の特別報告「西条 52 号墓発掘調査の記録」に記載されたお名前を本報告書に載せさせて頂き、当時の労をねぎらいたいと思います。

調査参加者について

○昭和 39 年６月「西条古墳群調査略報」西条古墳群発掘調査団に記載のある「調査員及び調査参加者」の方々（31 人）

是川　長・葛野　豊・松本正信・上田哲也・喜谷美宣・松岡秀樹・正木明男・河野通哉・村上紘揚・加藤史郎・多渕敏樹・伊藤久嗣・岡村　穣・葛原克人・奥崎保子・丸山竜平・堀江門也・福西康至・大井邦明・細川真樹・萩原儀征・平村友明・庄司　克・福井英治・尾崎泰子・和田敏子・木川幸二郎・土井伸一郎・溝渕耕三・山下　健・立花由和

○発掘調査日誌にお名前のある方々（順不同）（４９人）

是川　長、村上紘揚、葛原克人、堀江門也、奥崎保子、葛野　豊、松本正信、福西康至、大井邦明、丸山竜平、河野通哉、松岡秀樹、尾崎泰子、加藤史郎、中原敏定・正木明男、福井英治、庄司　克、伊藤久嗣、和田敏子、喜谷美宣、岡村　穣、奥田哲通、佐田　茂、中島　泰、野上丈助、磯田義賢、吉田茂樹、熊倉房明、大塚ひろみ、小田君子、萩原儀征、吉田雅子、平村友明、萩本　勝、吉岡信丈 .
田中・市村、井口・大工大高生６人（畑間・蘇・永谷・上田・三上・山形）
協力者・・・松岡秀夫・島田　清・野地修左・多淵敏樹

○遺構実測図にお名前のある方々（順不同）（３７人）

是川　長、村上紘揚、葛原克人、堀江門也、奥崎保子、葛野　豊、松本正信、福西康至、大井邦明、

丸山竜平、河野通哉、松岡秀樹、尾崎泰子、加藤史郎、中原敏定・正木明男、伊藤久嗣、和田敏子、喜谷美宣、岡村　穣、佐田　茂、中島　泰、野上丈助、福井英治、磯田義賢、吉田茂樹、熊倉房明、大塚ひろみ、小田君子、萩本　勝、細川、都藤、立花、西谷、山形・大工大高生（三上）

○ 2009 年「弥生慕からみた播磨」―附・特別報告「西条 52 号墓発掘調査の記録」―　第 9 回播磨考古学研究集会実行委員会に氏名の記載のある方々（団長 1 人・調査員 13 人・調査参加者 31 人・支援者 10 人と 1 寺院）

調査団長　武藤　誠

調査員（順不同）

多淵敏樹、是川　長、葛野　豊、松本正信、上田哲也、喜谷美宣、松岡秀樹、正木明男、河野通哉、村上紘揚、伊藤久嗣、加藤史郎、中原敏定

調査参加者（順不同）

岡村　穣、葛原克人、奥崎保子、丸山竜平、堀江門也、福西康至、大井邦明、細川真樹、萩原儀征、平村友明、庄司　克、福井英治、尾崎泰子、和田敏子、伊藤　晃、日野朝子、磯田義賢、奥田哲通、佐田　茂、吉田茂樹、熊倉房明、大塚ひろみ、小田君子、吉田雅子、中島　泰、野上丈助、吉岡信丈、岡村　礼、西阪義雄、田中、徳岡

調査支援者（順不同）

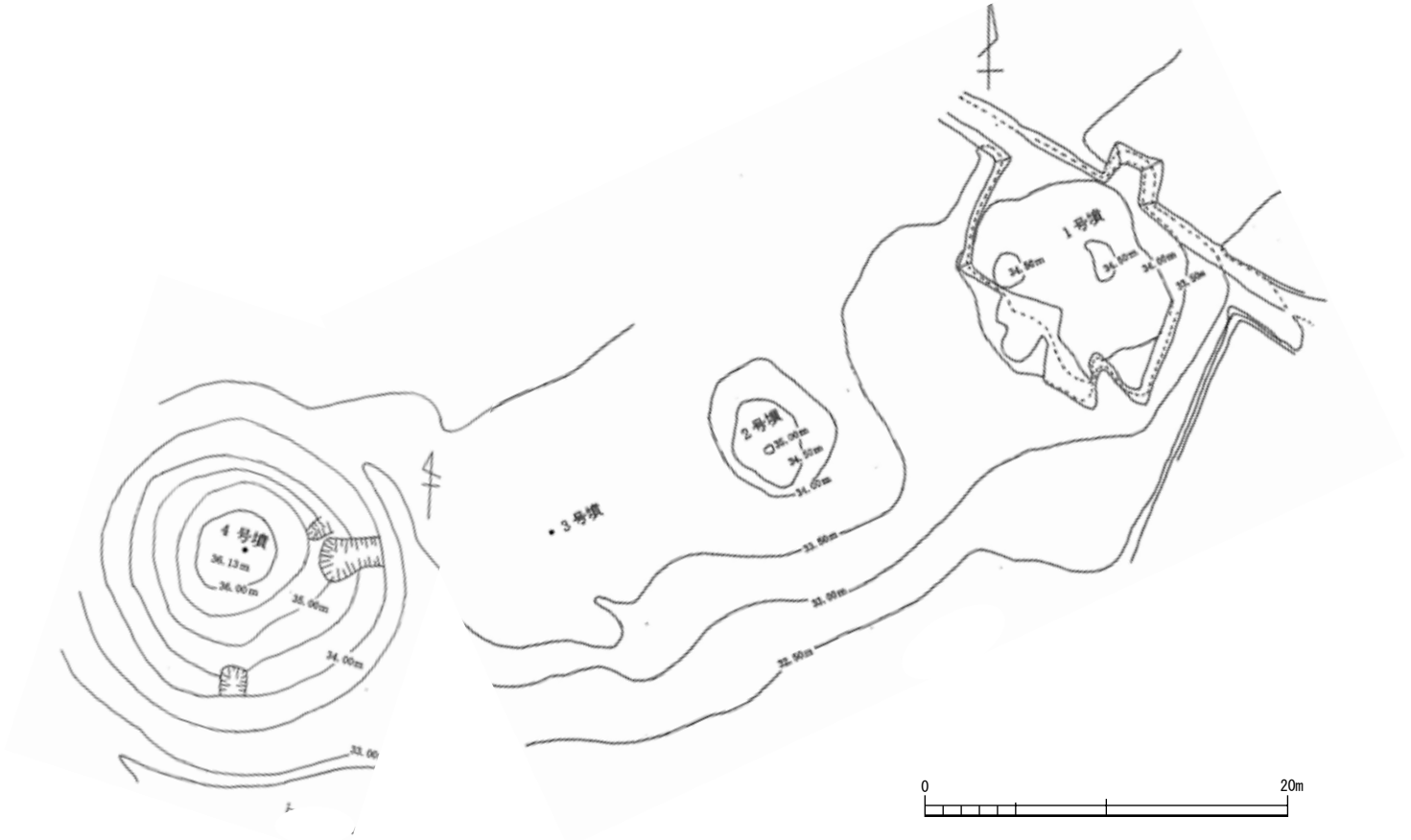
和島誠一、野地脩左、永江幾久二、赤松啓介、松岡秀夫（有年考古館）、黒崎基一、檀上重光、島　五郎、今里幾次、永昌寺、奥村俊治氏をはじめとする地元自治会役員各氏および自治会会員のみなさま

図版

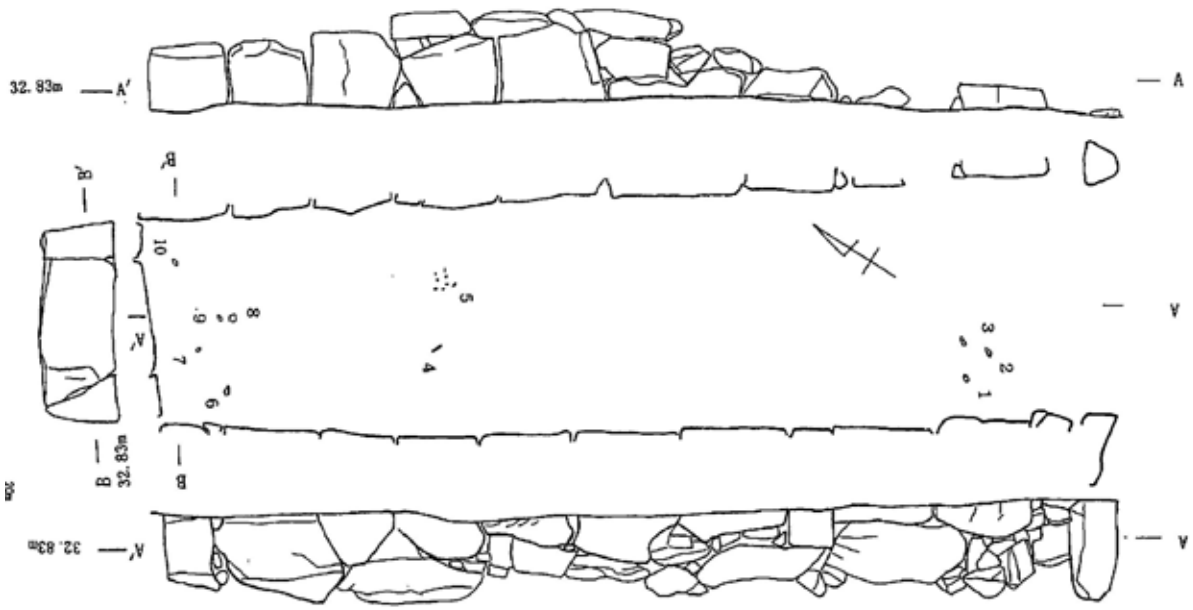
D 群
53
51
52
58
40
59
*60
C 群
38
39
37
36
35
34
32
31
28
30
27
25
21-3
21-2
29
23
24
21
61
61-2
22
B 群
10
14
13
6
3
1
4
2
9
7
5
12
A 群
西条廃寺
人塚
尼塚
行者塚
0
200m

西条古墳群位置図

図版２



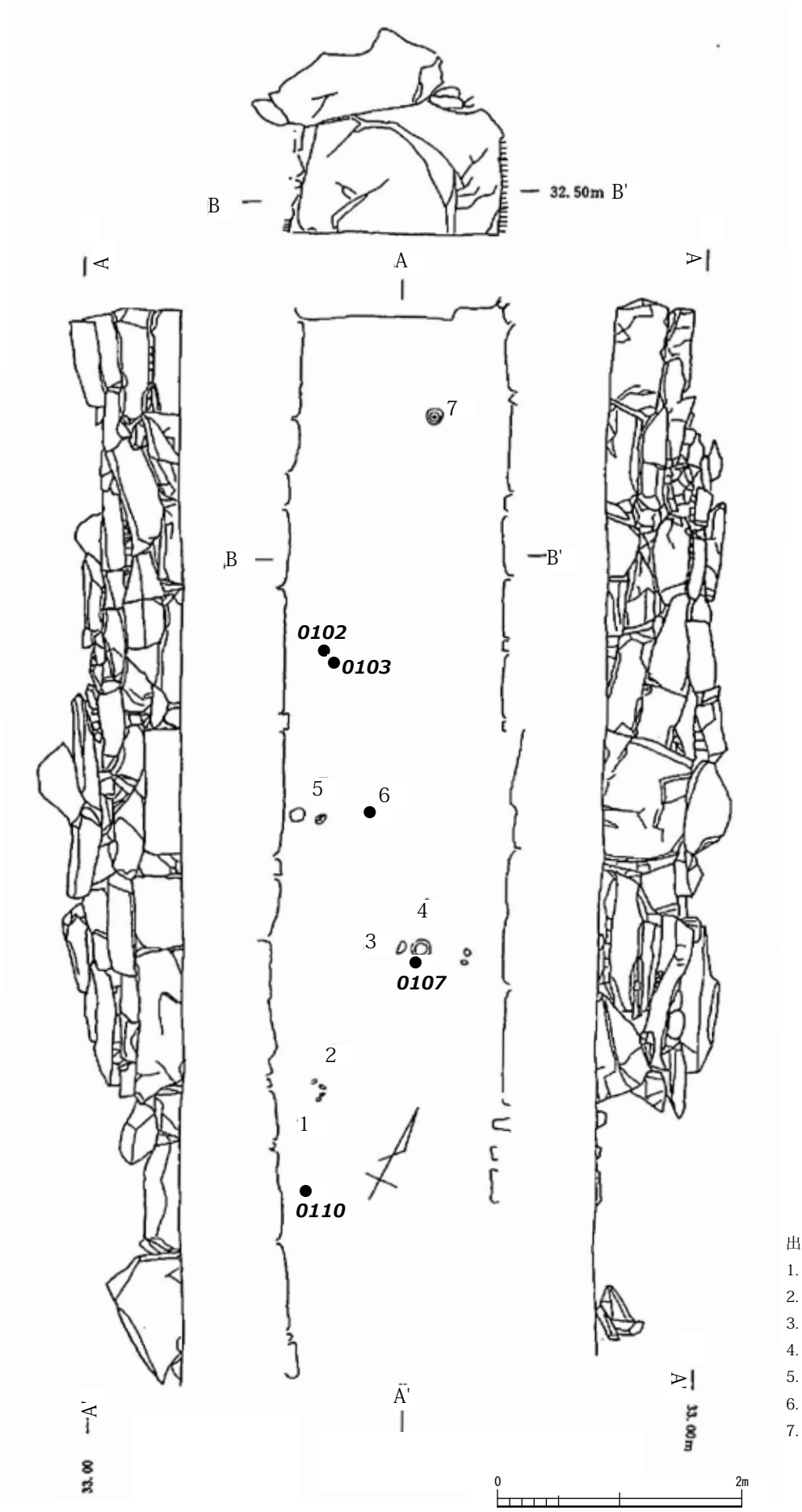
１～４号墳と周辺の地形測量図



出土遺物

1. 須恵器片
2. 土師器片
3. 須恵器片
4. 鉄釘
5. 人骨片
6. 鉄片
7. 須恵器片
8. 鉄片
9. 須恵器坏片
10. 恵器坏片

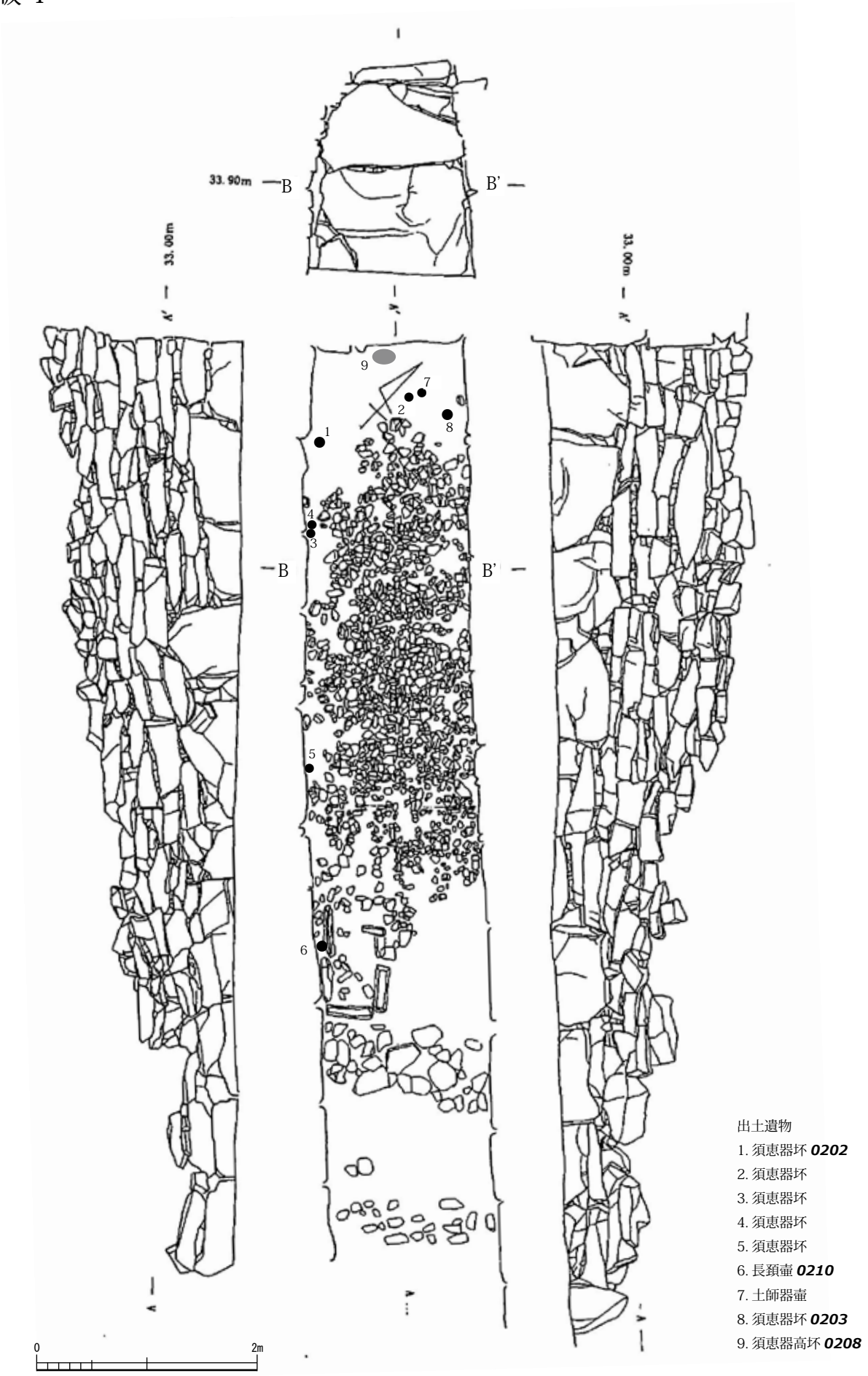
３号墳石室実測図



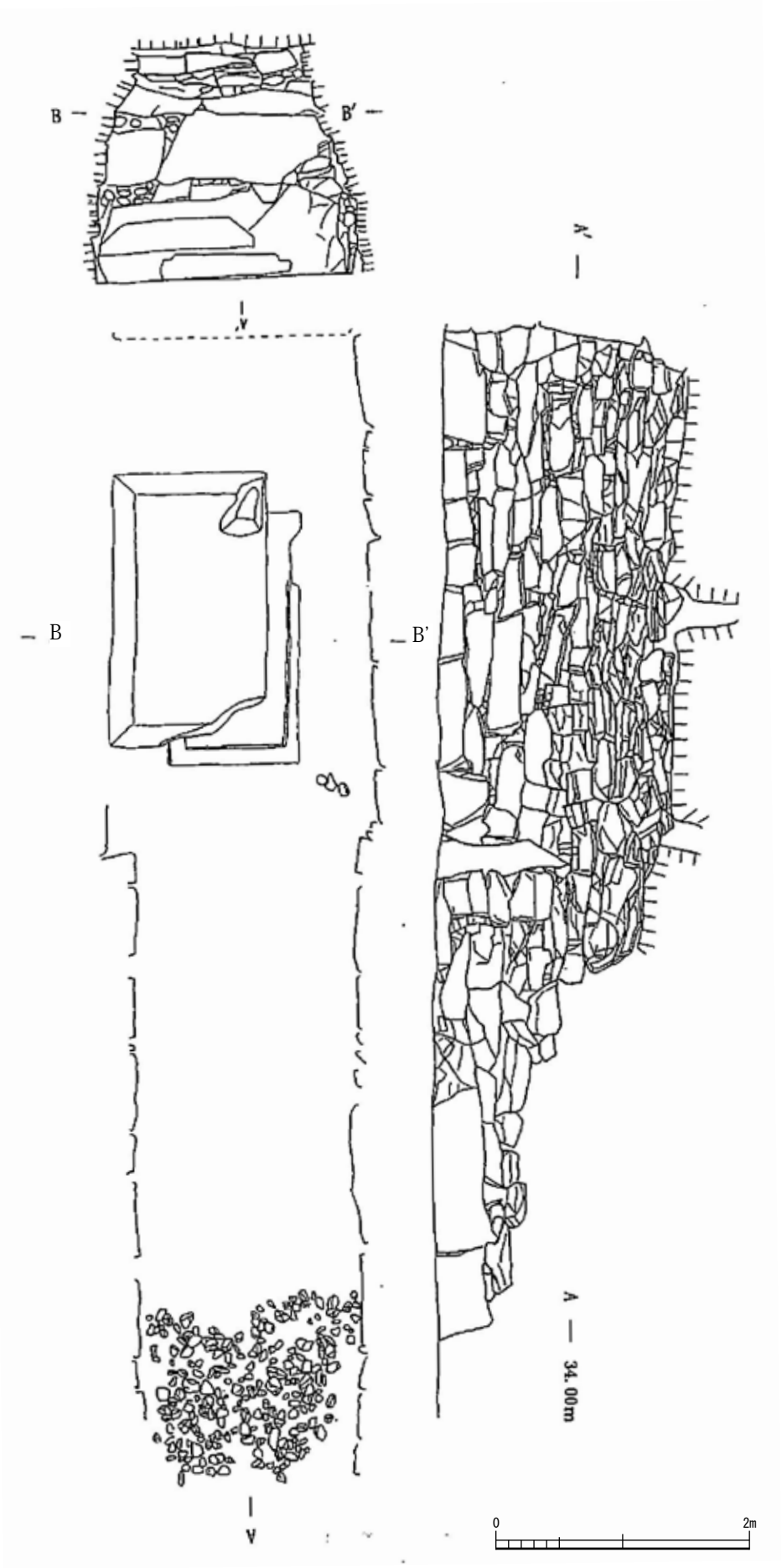
出土遺物
1. 長頸壺
2. 鉄鏃
3. 刀子
4. 坏
5. 須恵器片
6. 金環
7. 須恵器片

1号墳石室実測図

図版 4

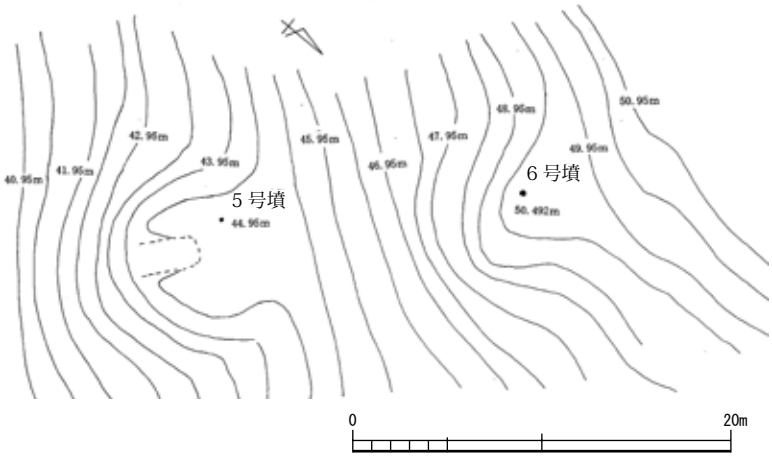


2号墳石室実測図



4号墳石室実測図

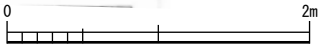
図版 6



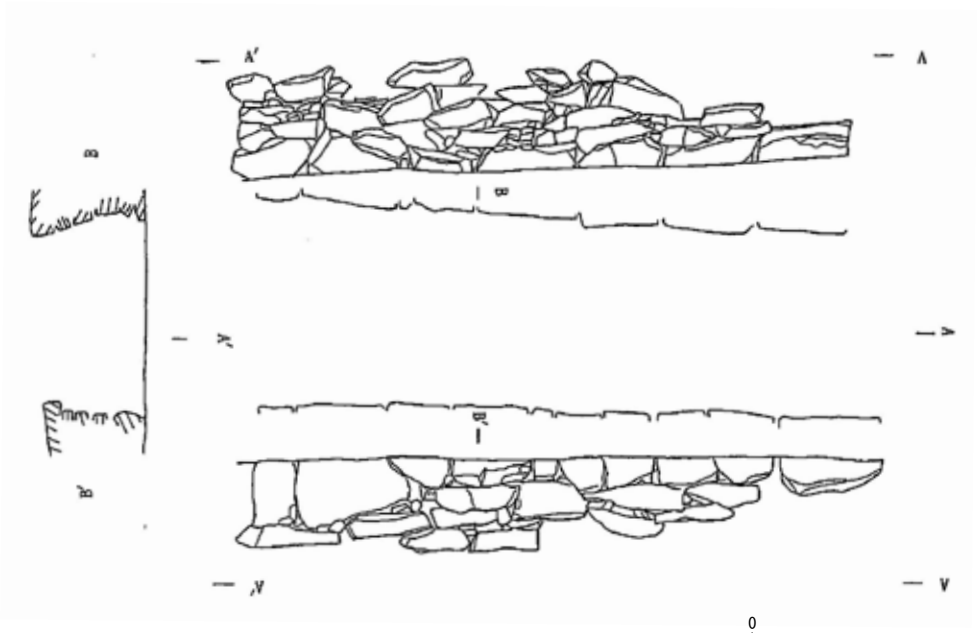
5・6号墳と周辺の地形測量図

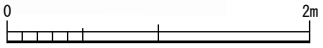
5号墳石材残存状況図

出土遺物
1. 土師器甕 ***0612***
2. 土師器椀 ***0611***
3. 須恵器坏 ***0609***
4. 須恵器坏 ***0603***
5. 須恵器平瓶 ***0608***
6. 須恵器坏 ***0604***
7. 須恵器坏 ***0601***
8. 須恵器坏 ***0607***
9. 須恵器坏
10. 土師器片
11. 鉄釘

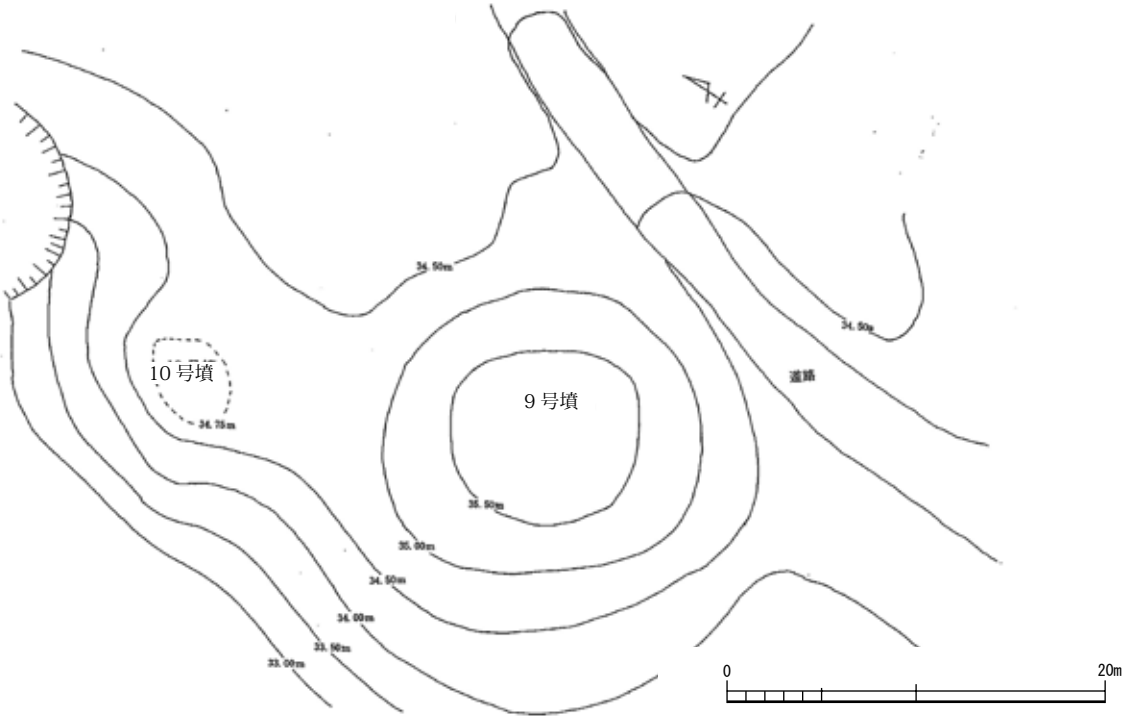


6号墳石室実測図

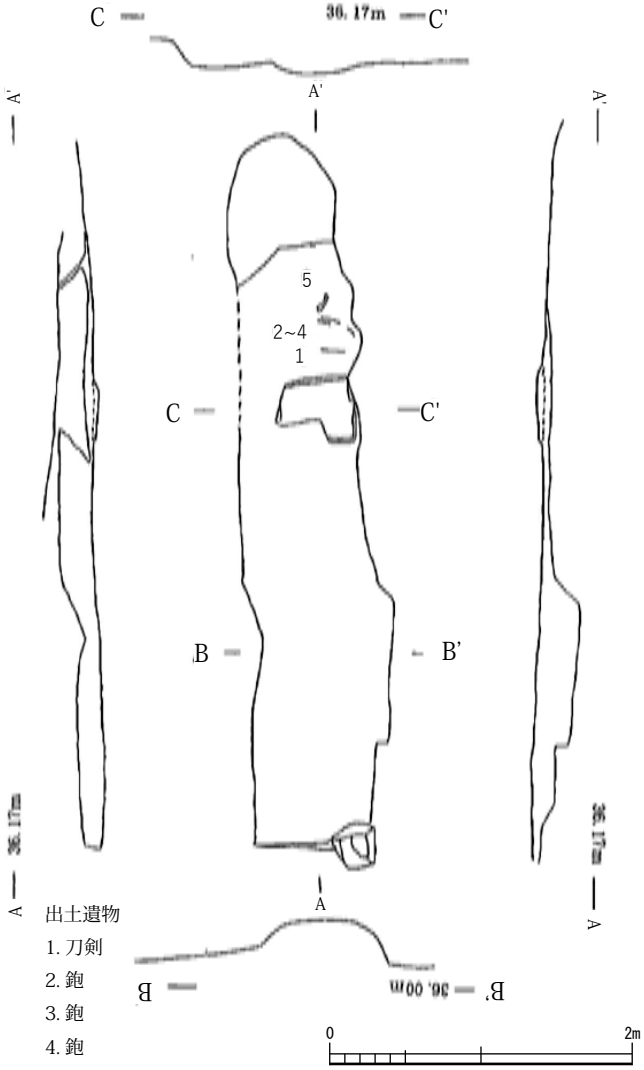




7号墳石室実測図

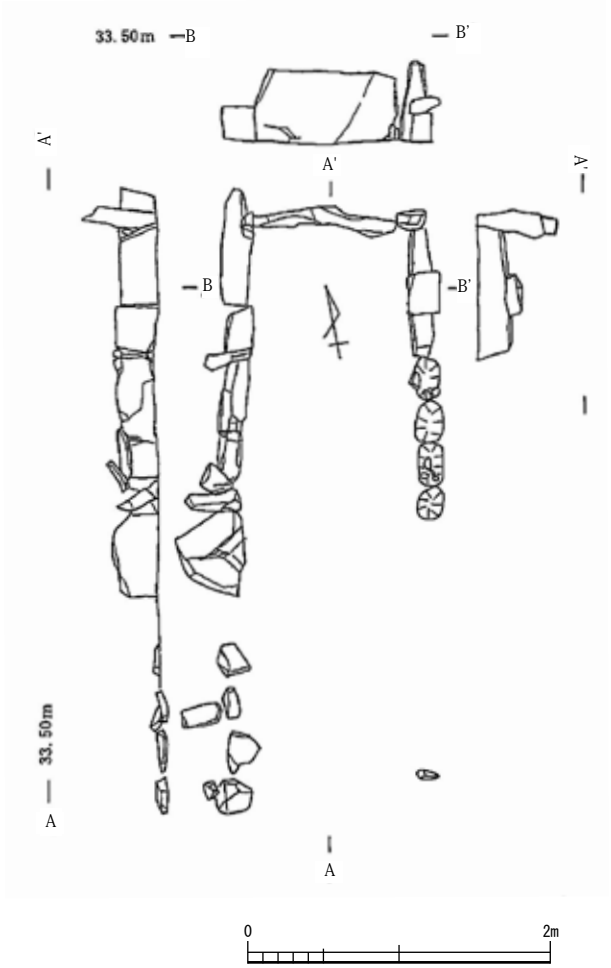


9・10 号墳と周辺の地形測量図



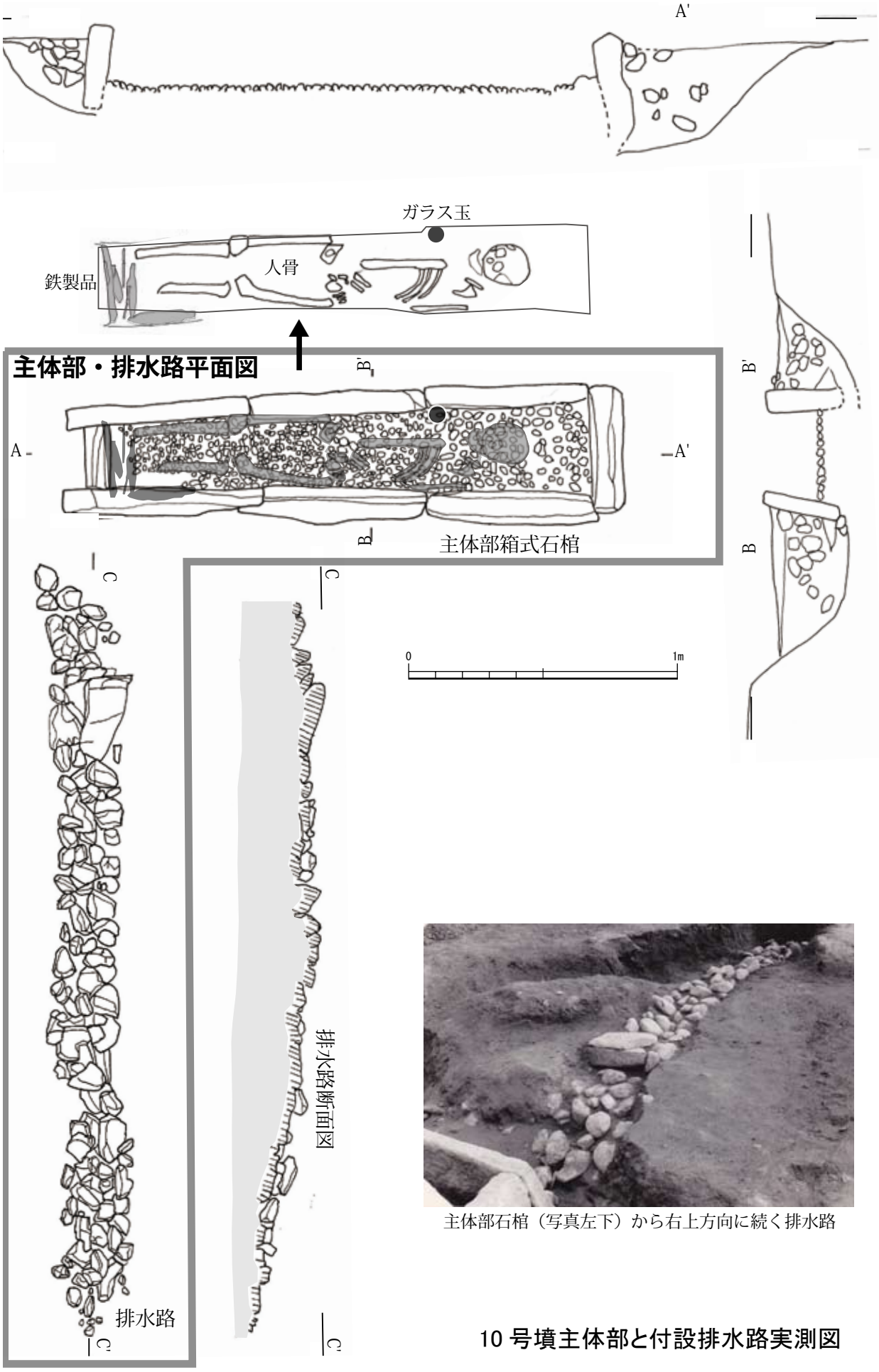
出土遺物
1. 刀剣
2. 鉋
3. 鉋
4. 鉋
5. 鎌

9号墳主体部実測図



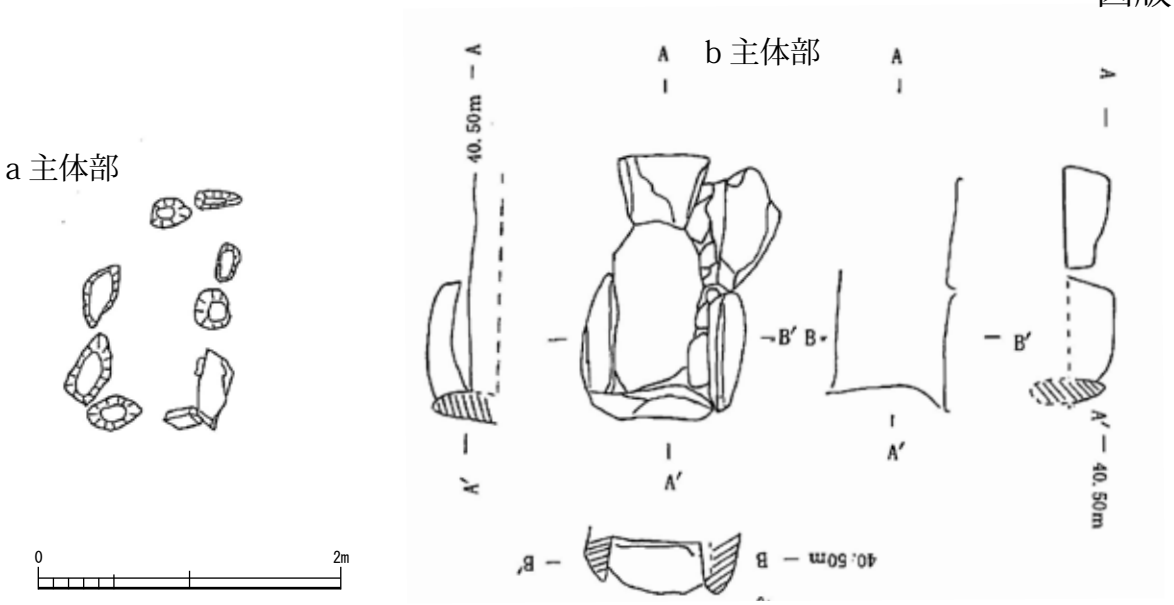
12 号墳石室実測図

図版 8

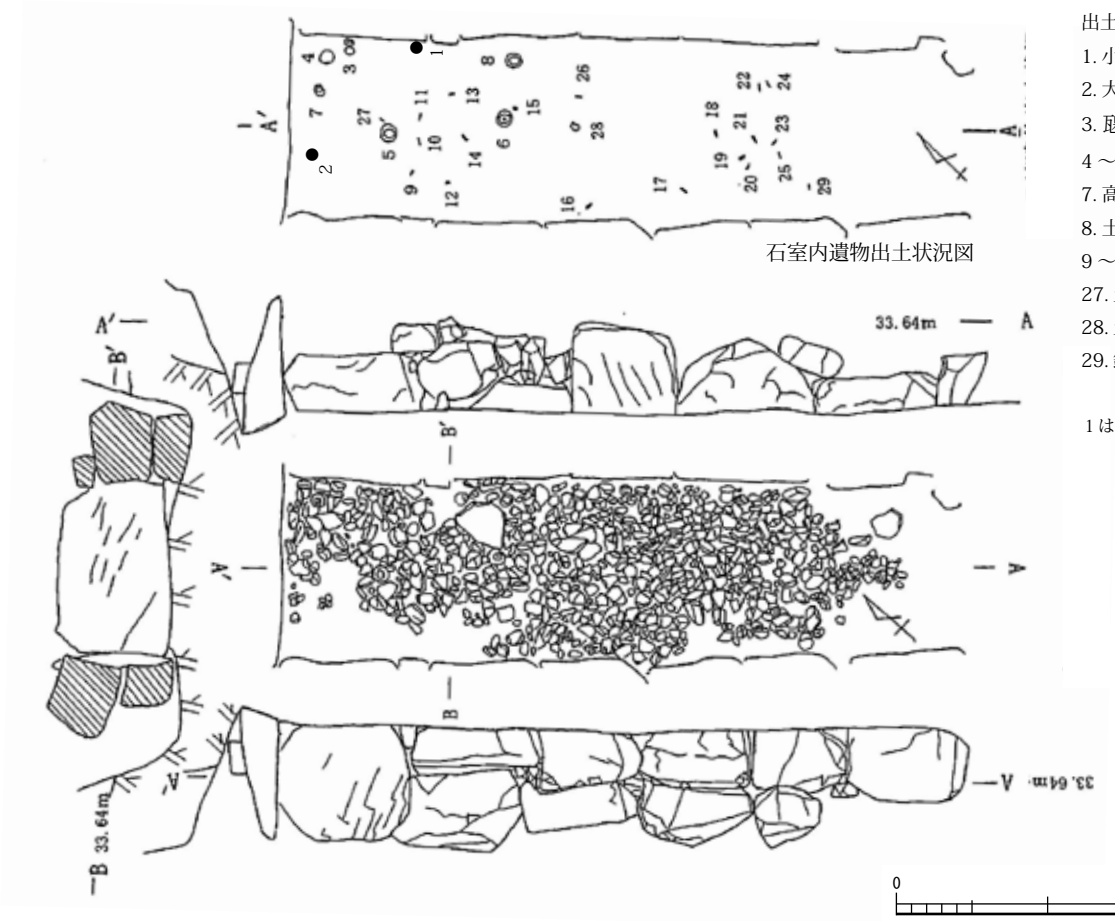


主体部石棺（写真左下）から右上方向に続く排水路

10 号墳主体部と付設排水路実測図



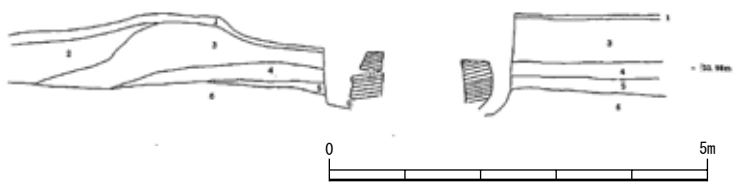
13 号墳 a・b 主体部実測図



出土遺物
1. 小型台付長頸壷
2. 大型台付短頸壷 ***1407***
3. 瓿 ***1406***
4 ～ 6. 蓋 ***1403 ～ 05***
7. 高坏 ***1401***
8. 土師器壷 ***1408***
9 ～ 26. 鉄釘
27. 土師器坏
28. 土師器片
29. 鉄釘

1 は盗難により現存せず

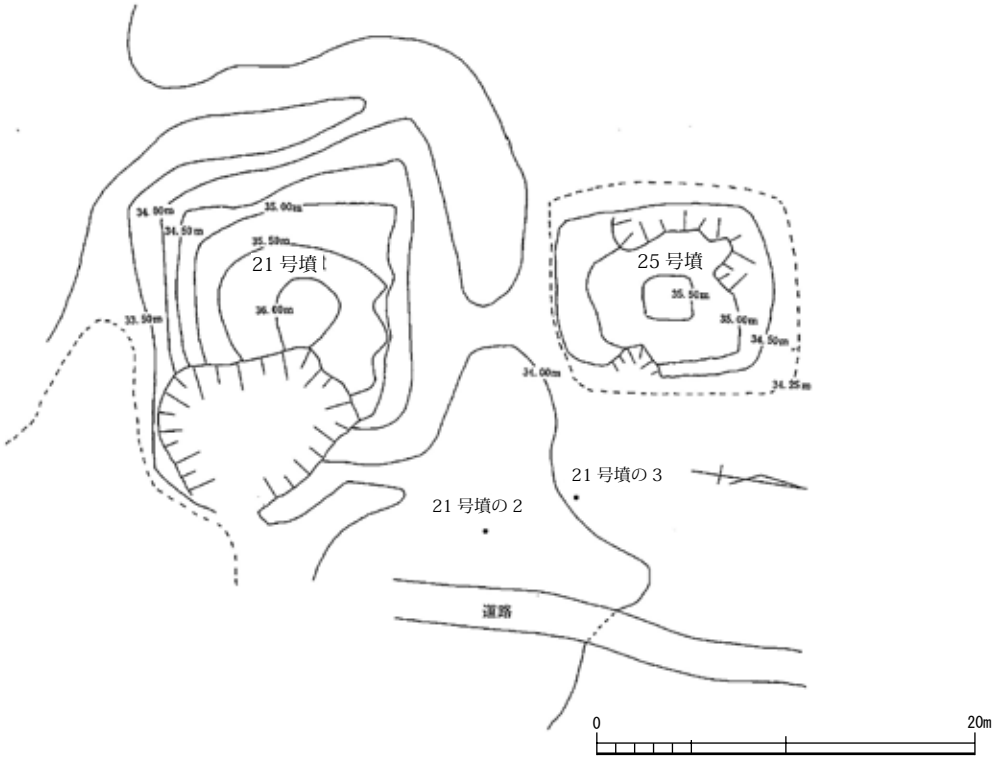
14 号墳石室実測図



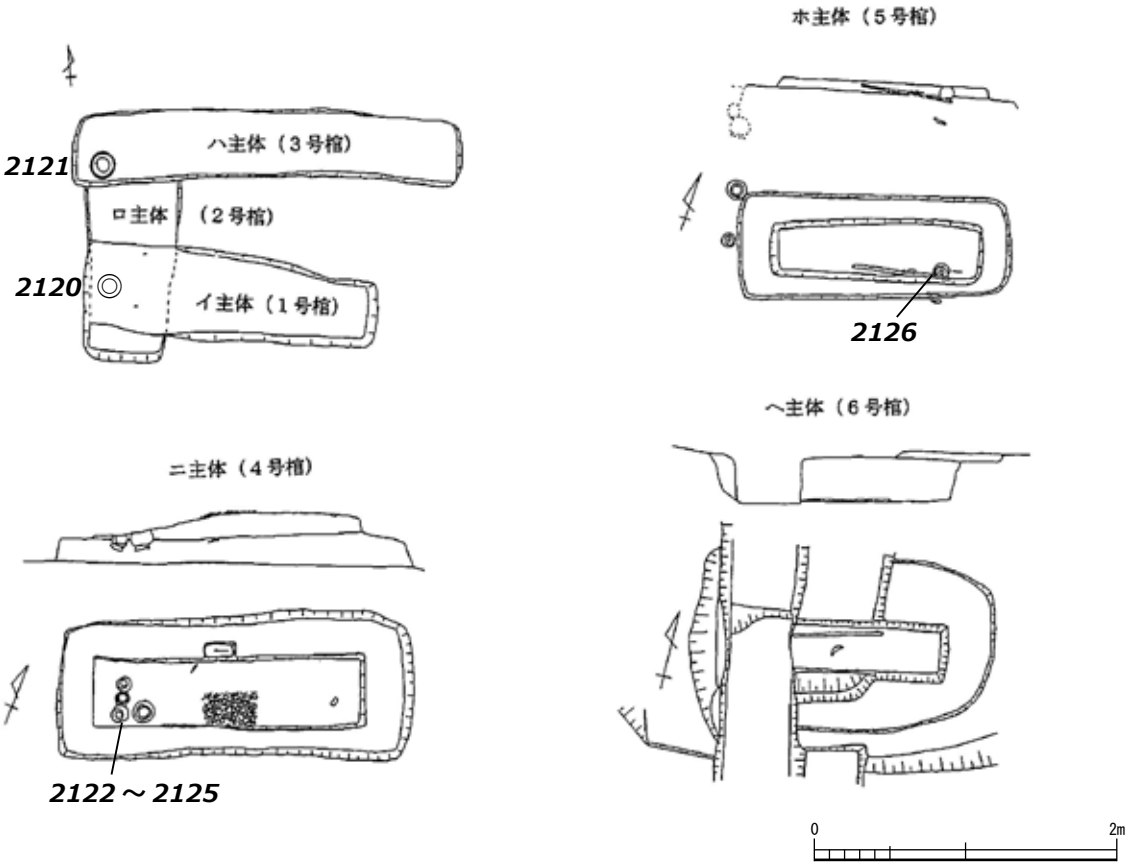
1. 表土
2. 黄褐色土層
3. 礫混じり黄褐色土層
4. 礫混じり茶褐色粘土様土層
5. 礫混じり地山を盛り上げた土層
6. 地山

14 号墳墳丘断面実測図

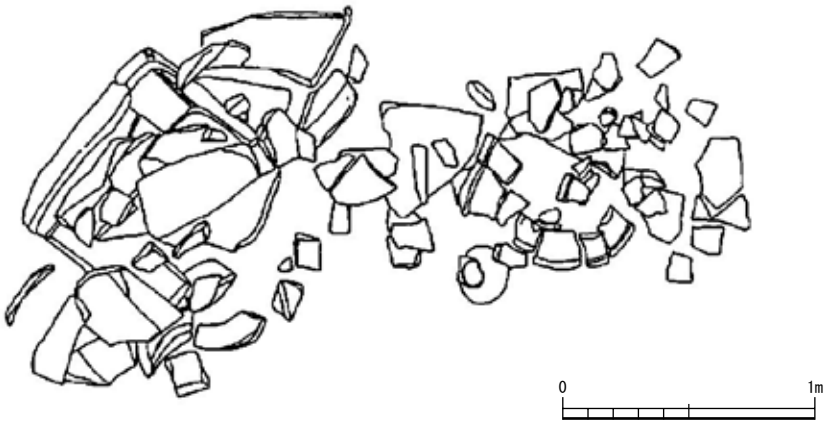
図版 10



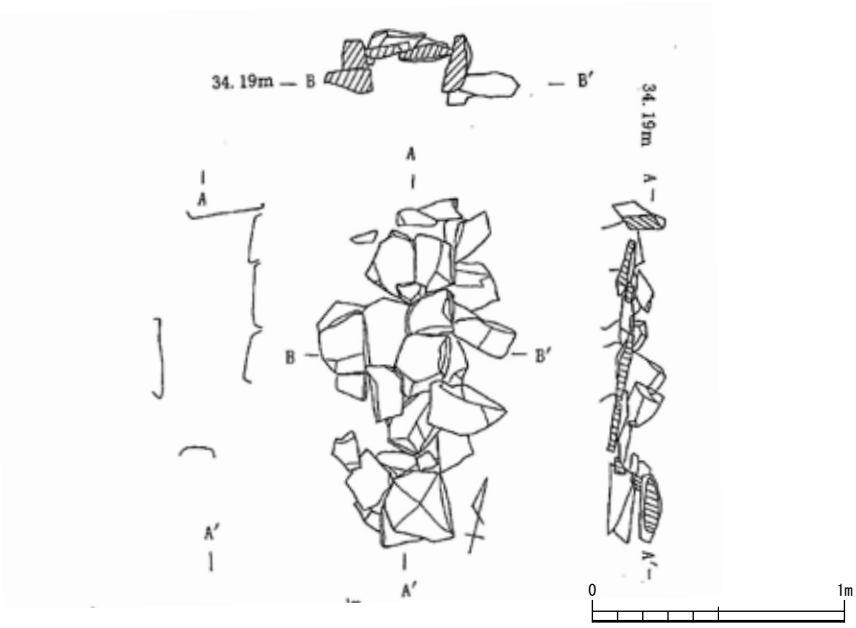
21・25 号墳と周辺の地形測量図



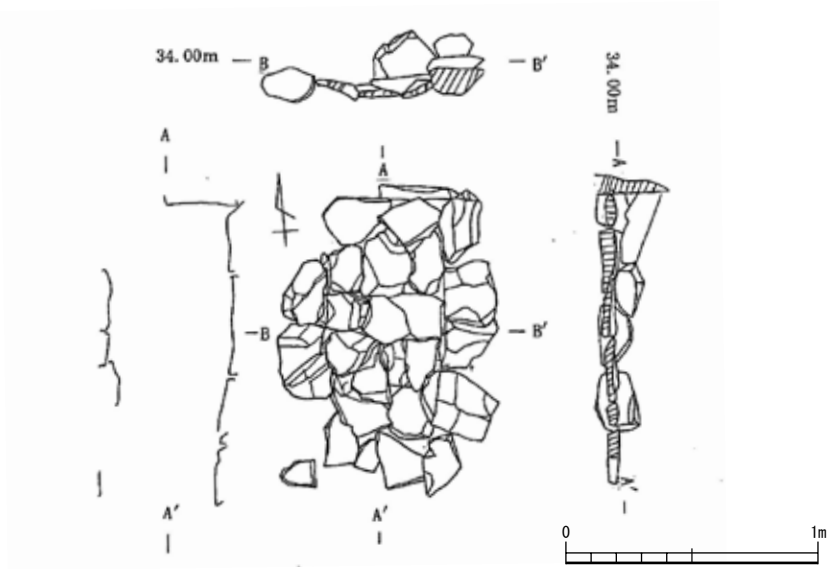
21 号墳主体部（イ～ヘ）検出状況図



21 号墳　家形埴輪他出土状況図



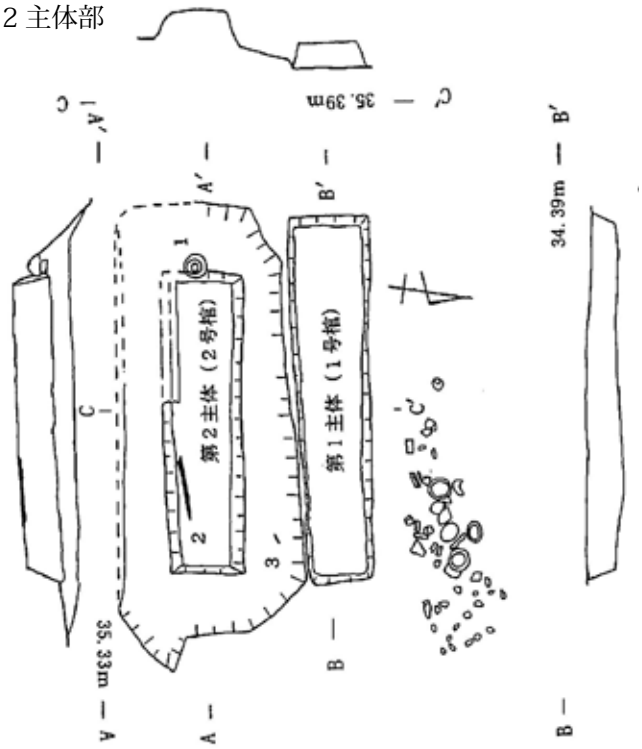
21 号墳の 2　小石室実測図



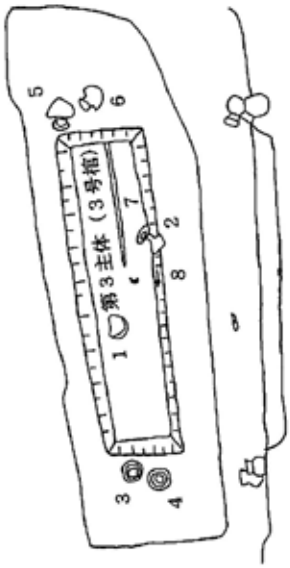
21 号墳の 3　小石室実測図

図版 12

第 1・2 主体部



第 3 主体部



0 2m

第 2 主体部出土遺物

1. 璉
2. 鉄剣

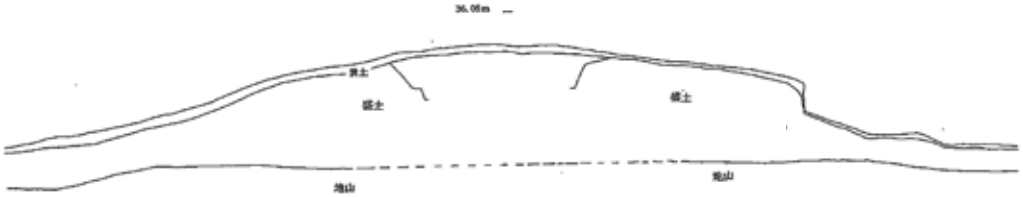
第 3 主体部出土遺物

1. 須恵器坏蓋 ***2521***
2. 土師器高坏
3.4. 須恵器壷 ***2523・2524***
5. 須恵器璉 **2522**
6. 土師器壷 ***2525***
7. 鉄刀

25 号墳主体部（1 ～ 3 木棺直葬）実測図

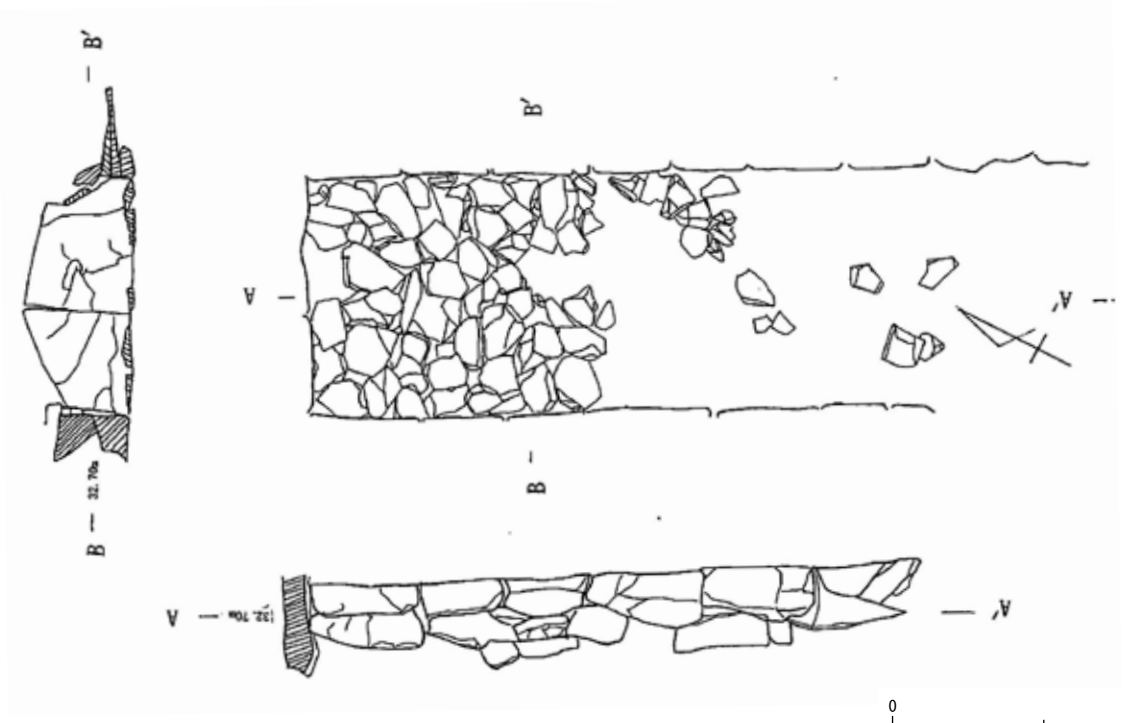
南北セクション図

東西セクション図

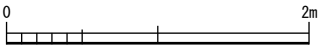


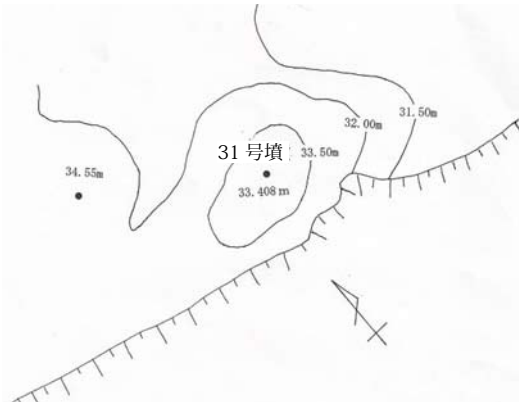
0 5m

25 号墳墳丘断面図

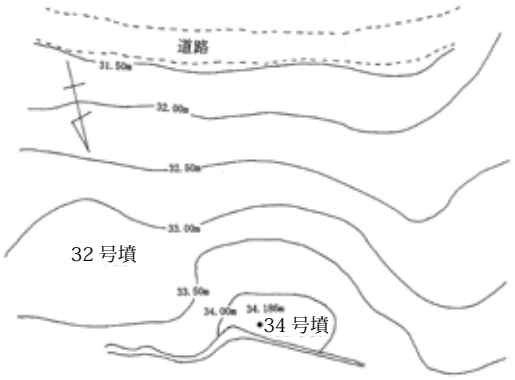


31 号墳石室実測図

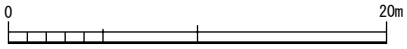


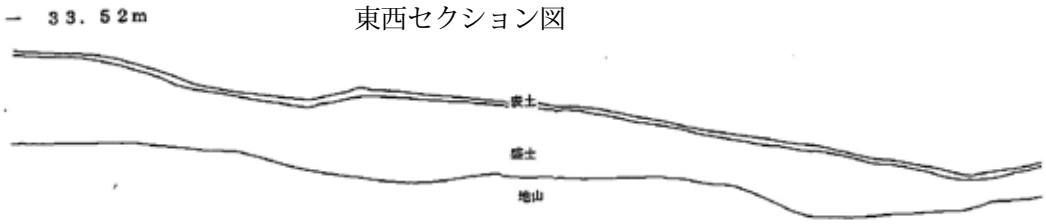


31 号墳墳丘測量図



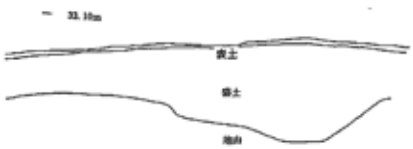
32・34 号墳墳丘測量図



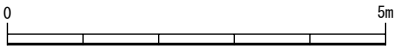


東西セクション図

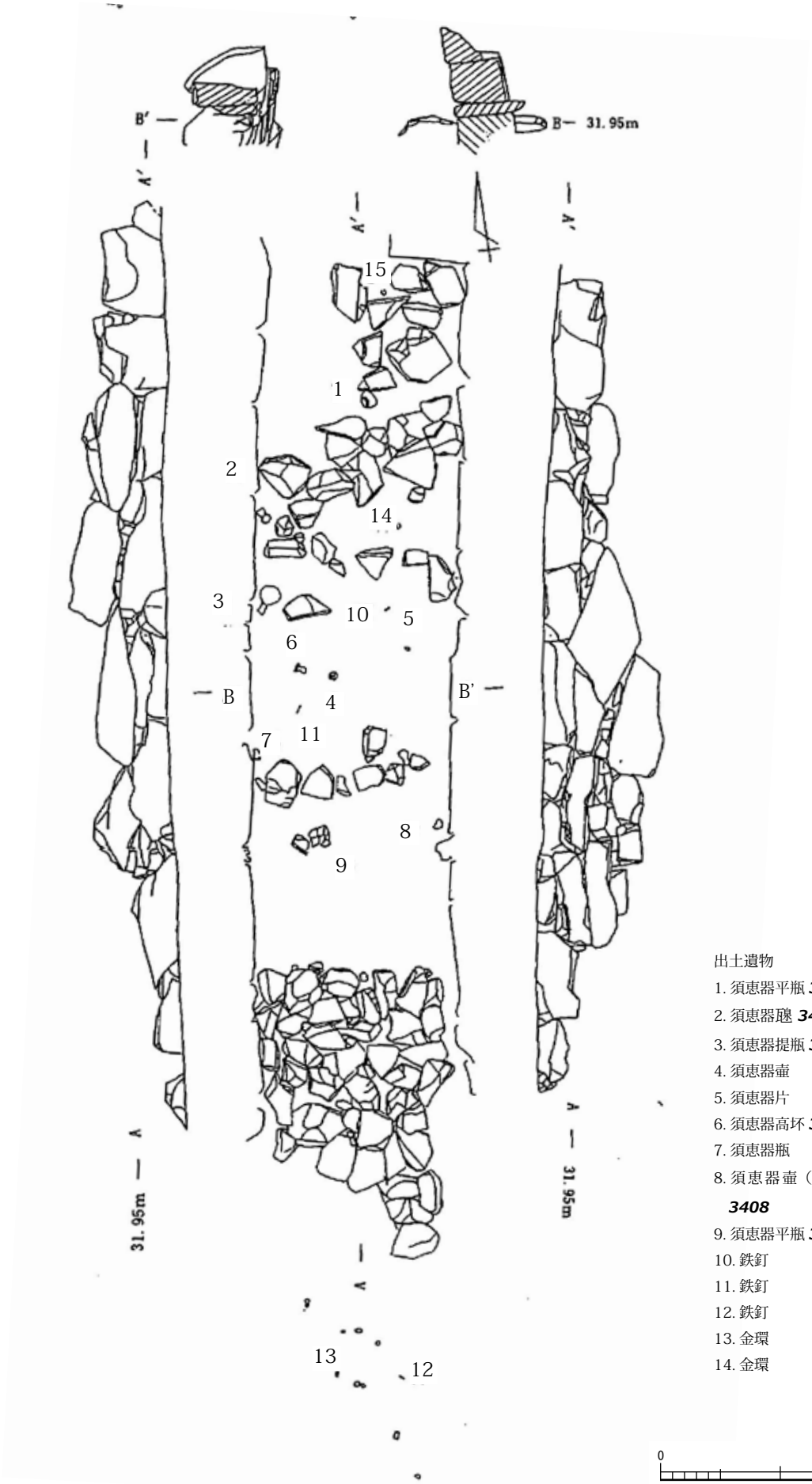
南北セクション図



34 号墳墳丘断面図



図版 14

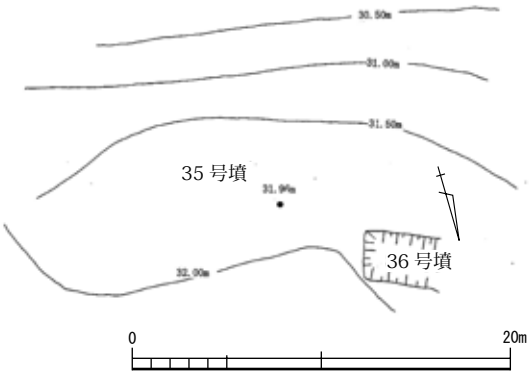


出土遺物

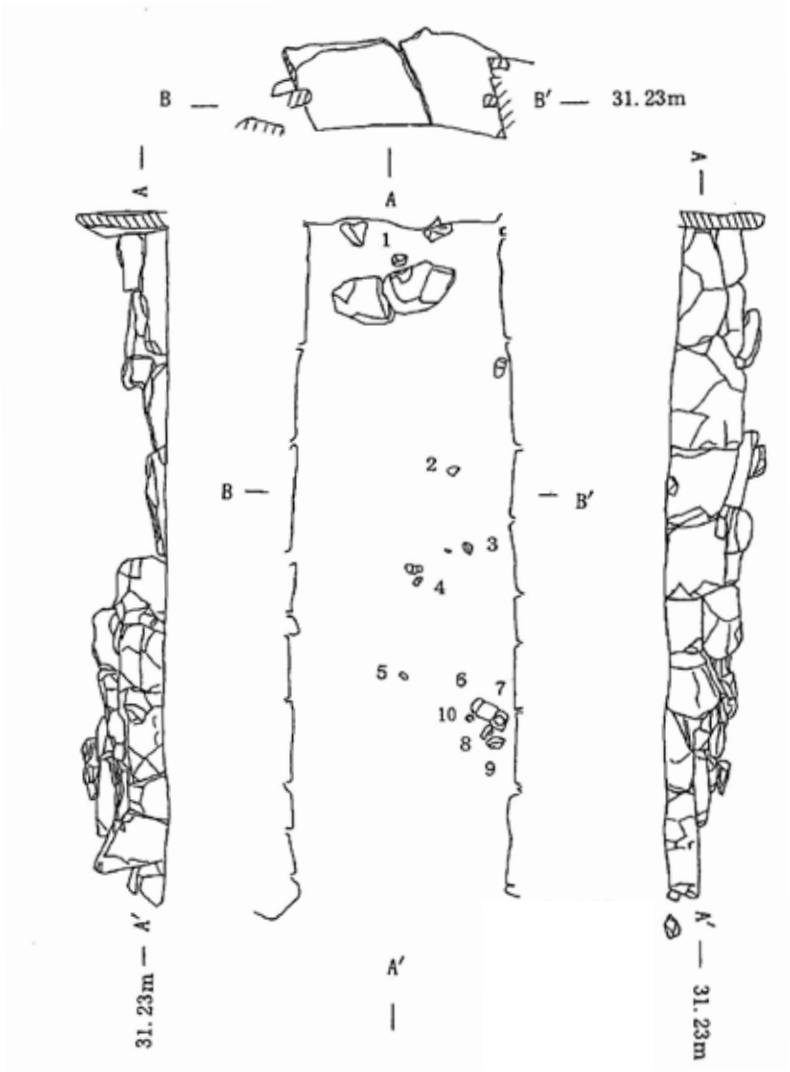
1. 須恵器平瓶 ***3409***
2. 須恵器𤮋 ***3406***
3. 須恵器提瓶 ***3411***
4. 須恵器壷
5. 須恵器片
6. 須恵器高坏 ***3405***
7. 須恵器瓶
8. 須恵器壷（𤮋？）
   3408
9. 須恵器平瓶 ***3410***
10. 鉄釘
11. 鉄釘
12. 鉄釘
13. 金環
14. 金環

0 2m

34 号墳石室実測図



35・36 号墳墳丘測量図

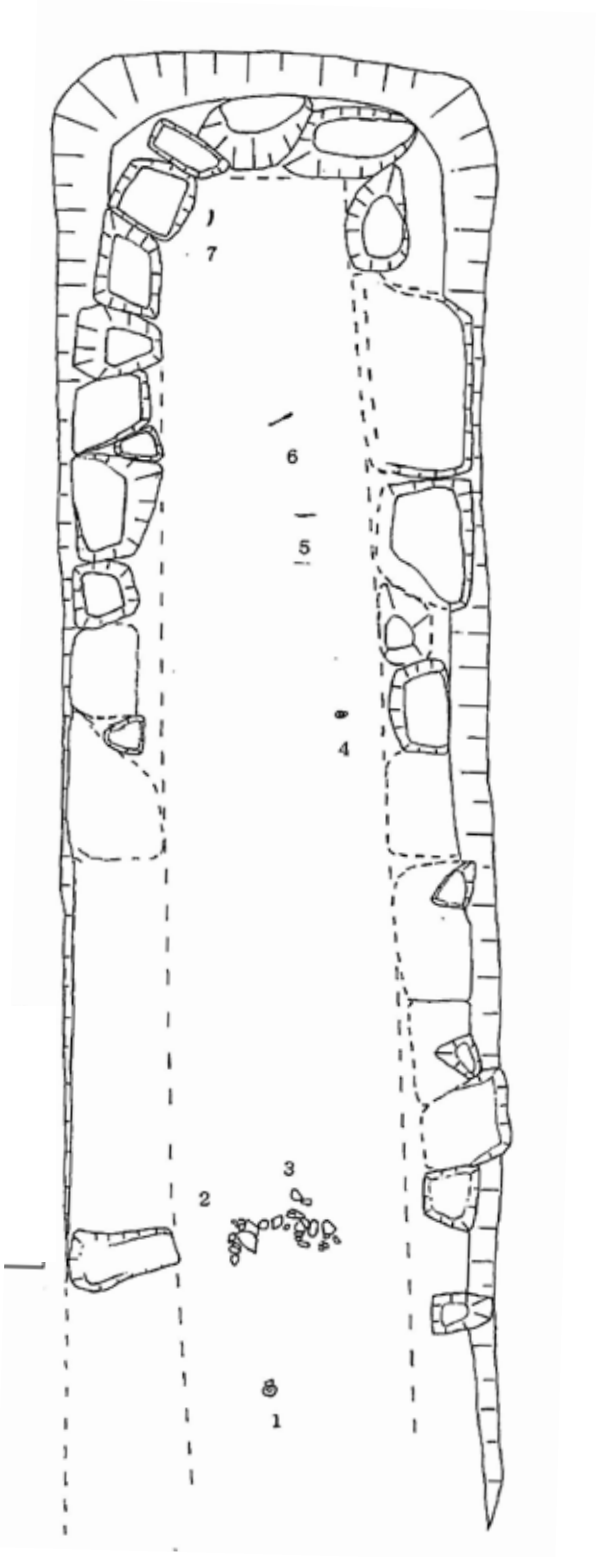


出土遺物

1. 須恵器 1 長頸壺 ***3501***
2. 須恵器 2 平瓶 or 短頸壺 ***3502***
3. 須恵器 3
4. 土師器 1
5. 土師器 2
6. 土師器 3
7. 土師器 4
8. 土師器 5
9. 土師器 6
10. 銀鐶

0 2m

35 号墳石室実測図



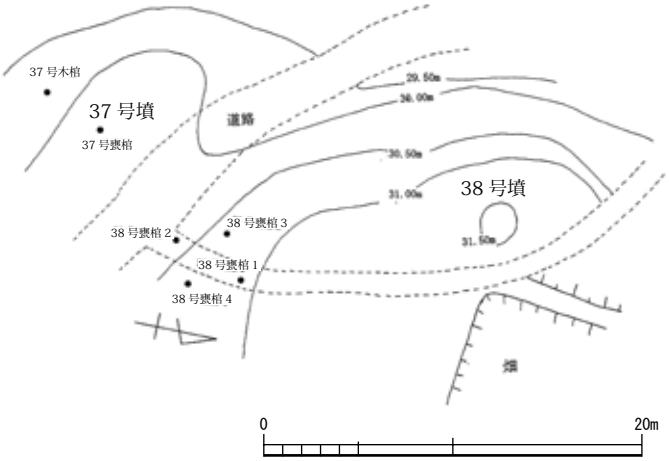
出土遺物

1. 須恵器高坏
2. 土師器
3. 須恵器
4. 須恵器高坏
5. 鉄釘
6. 鉄器
7. 鉄器

0 2m

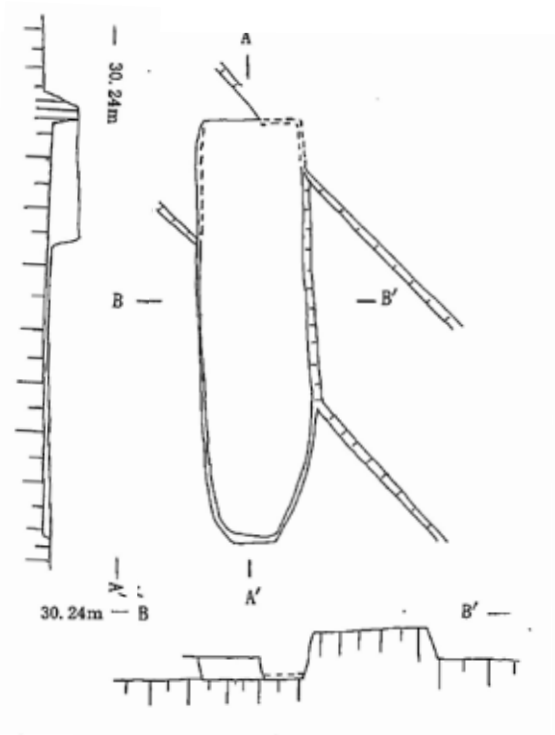
36 号墳石室実測図

図版 16

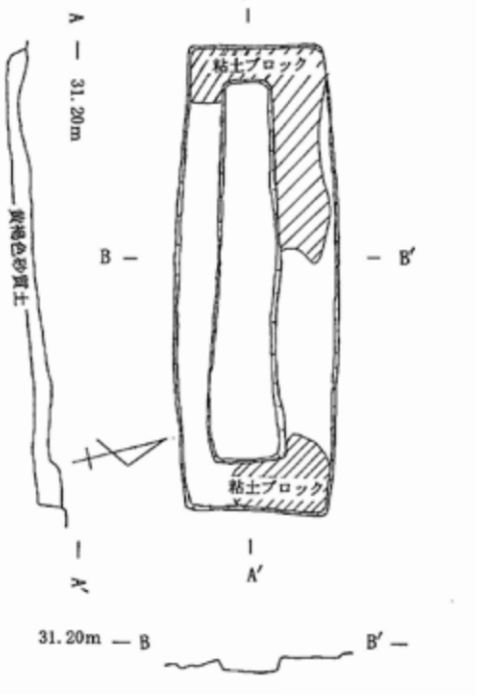


37・38 号墳墳丘測量図

38 号壷棺出土状況図



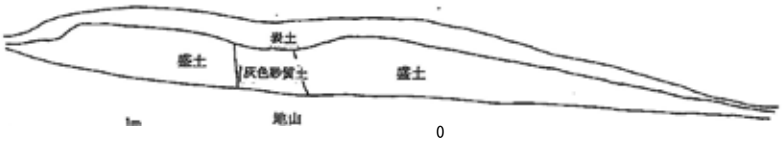
37 号墳主体部実測図

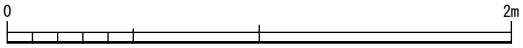


38 号墳主体部実測図

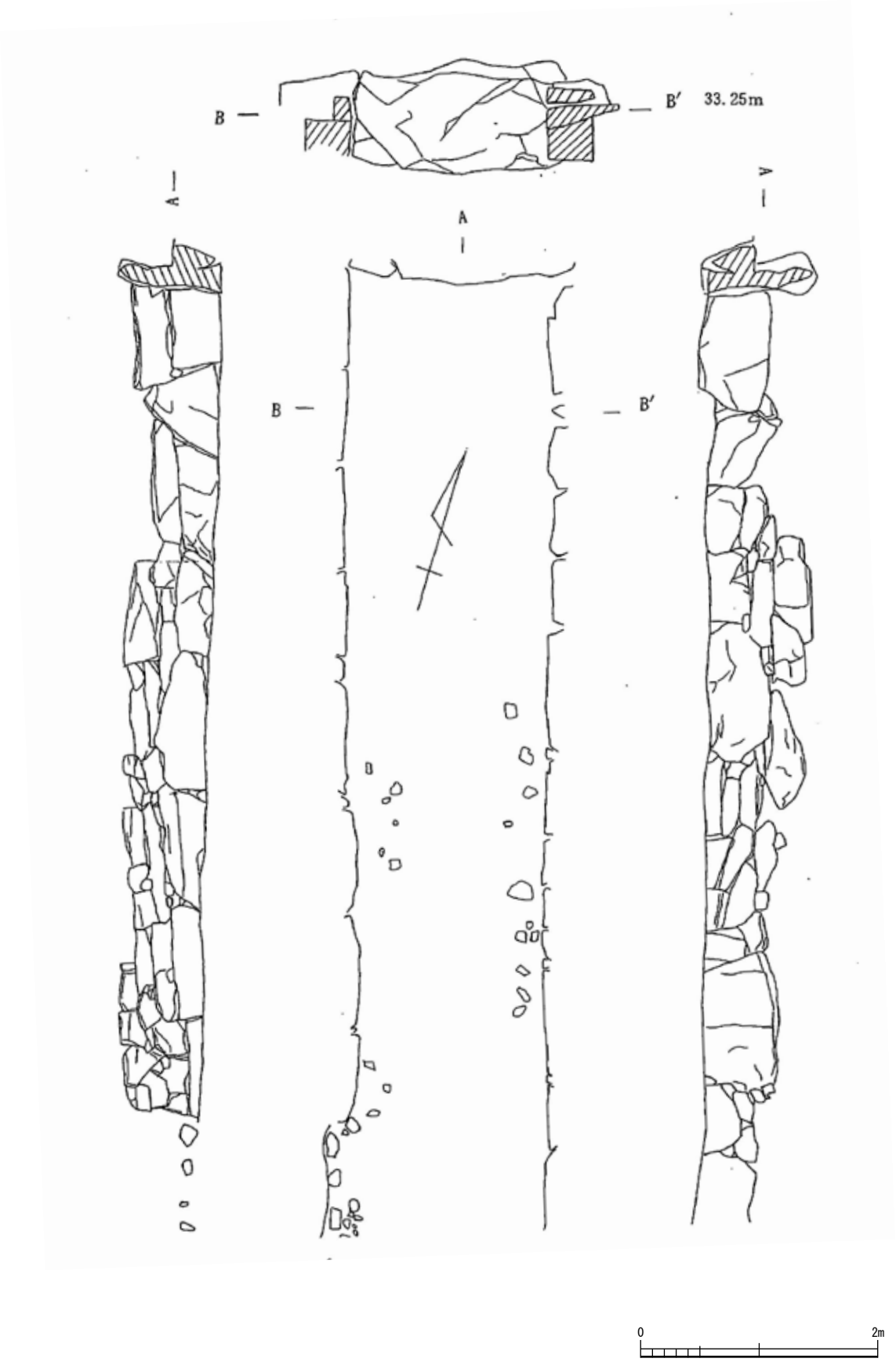
南北セクション図

東西セクション図



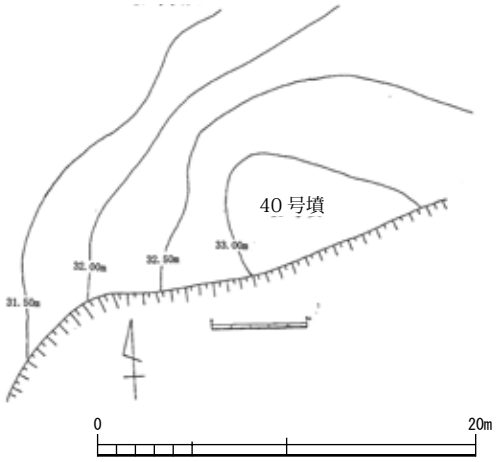


38 号墳墳丘断面図

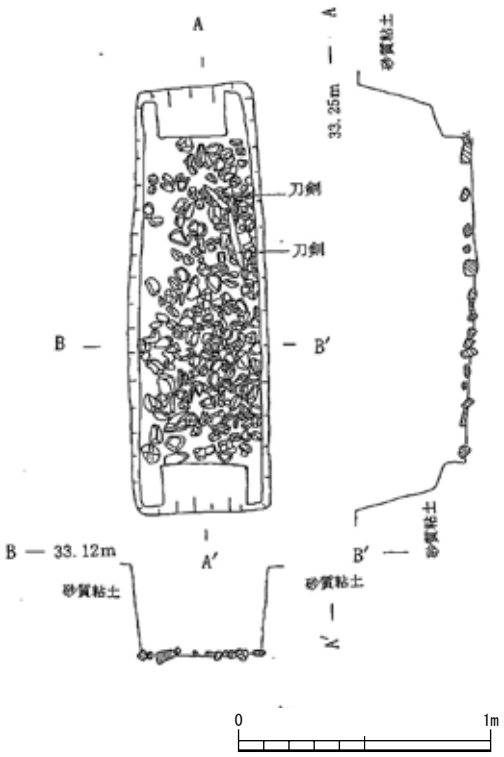


39 号墳石室実測図

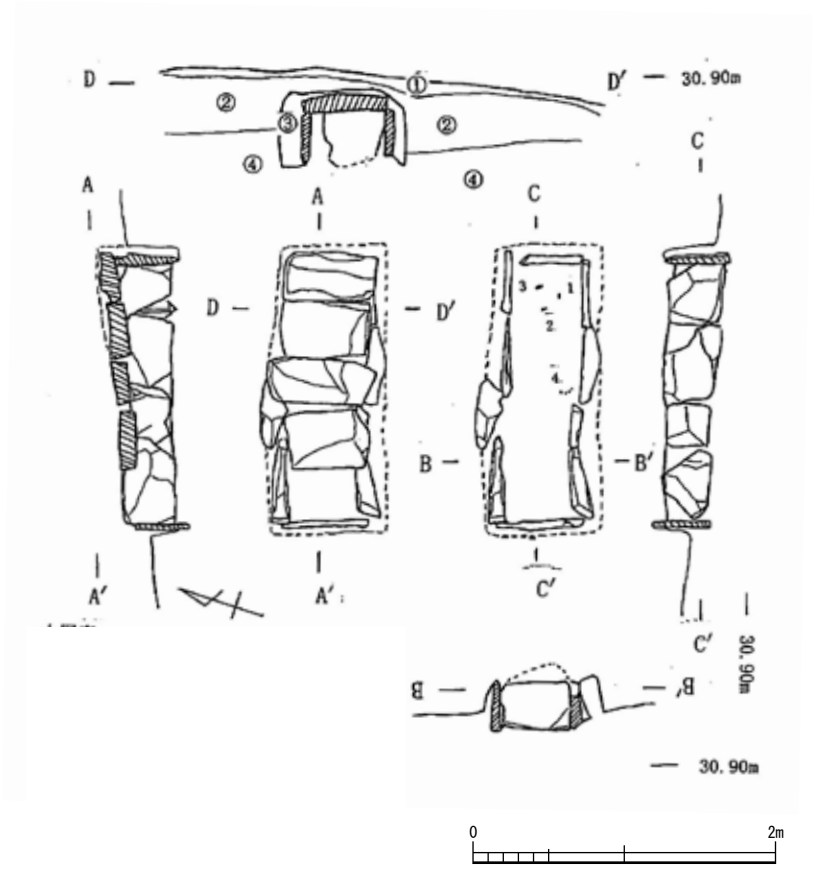
図版 18



40 号墳墳丘測量図



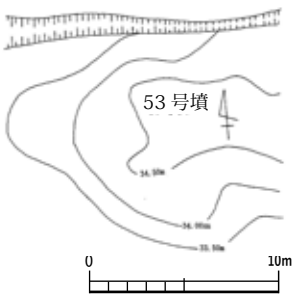
40 号墳主体部実測図



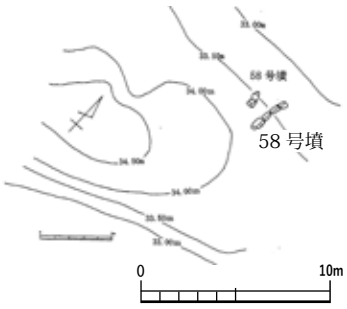
断面土層
①黒色土層（表土）
②赤褐色土層（礫混じり）
③黄褐色粘土層
（箱式石棺を取り巻く）
④地山

出土遺物
1. 管玉 1
2. 管玉 2
3. 管玉 3
4. 人骨片

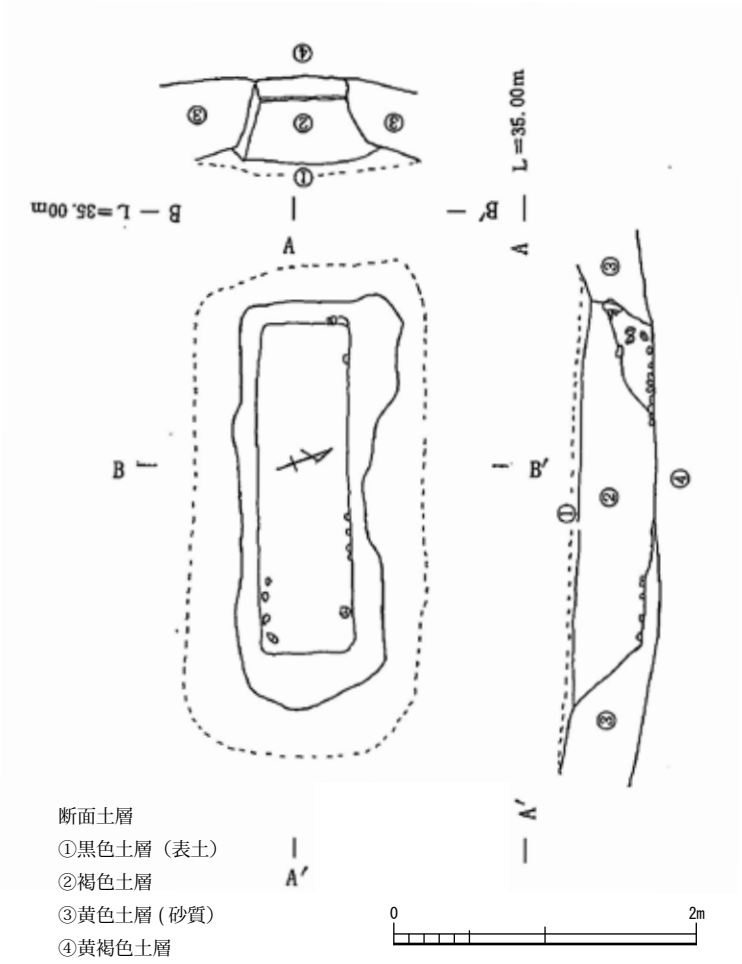
51 号墳主体部（箱式石棺）実測図



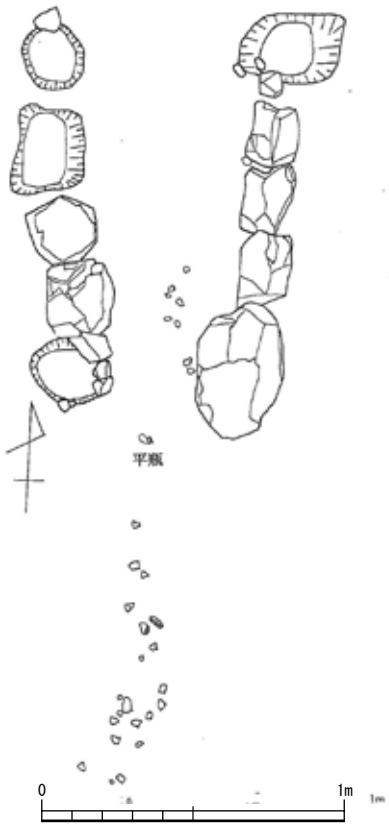
53 号墳墳丘測量図



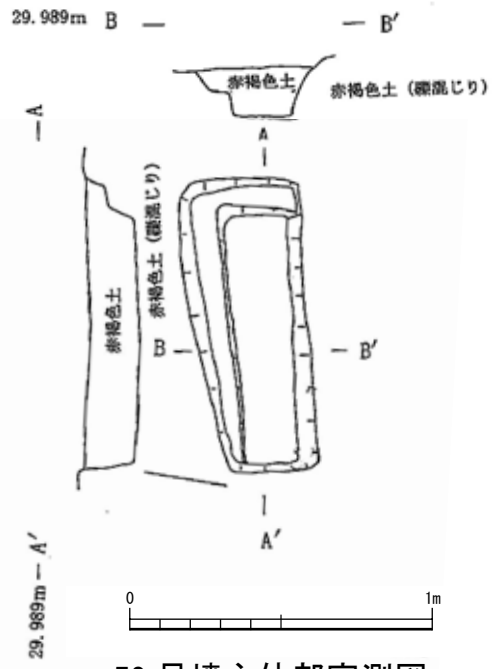
58 号墳墳丘測量図



53 号墳主体部実測図

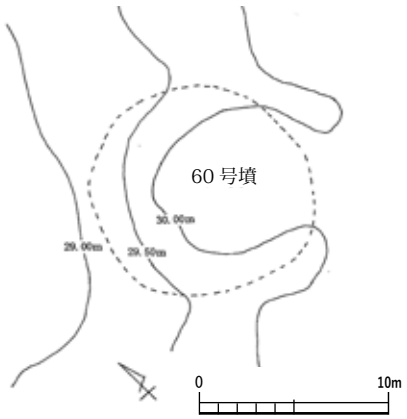


58 号墳石室実測図

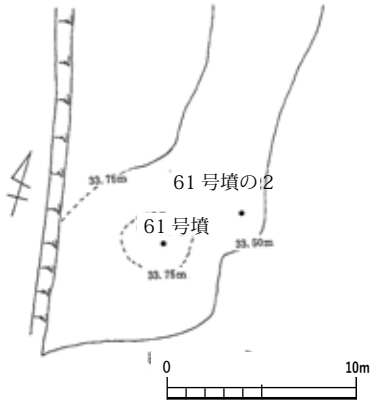


59 号墳主体部実測図

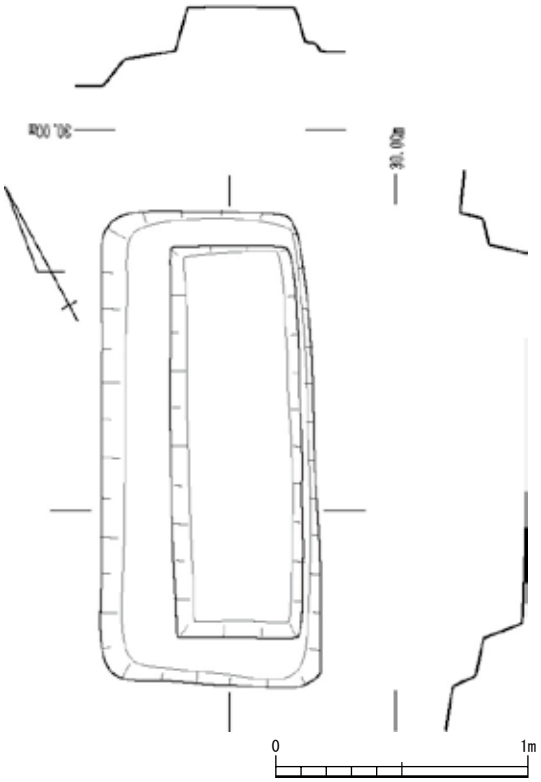
図版 20



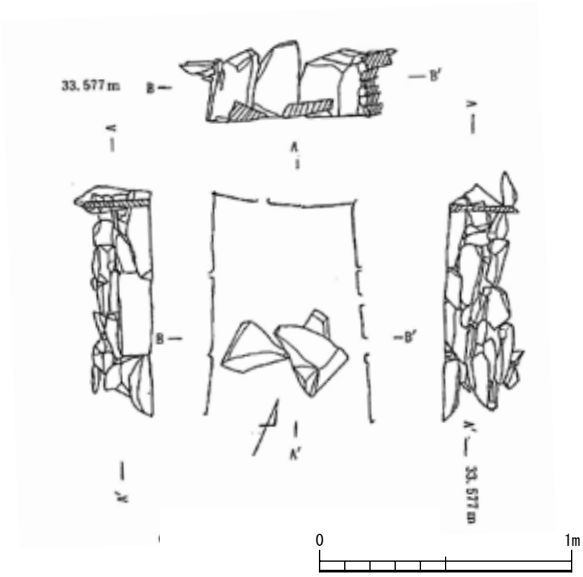
60 号墳墳丘測量図



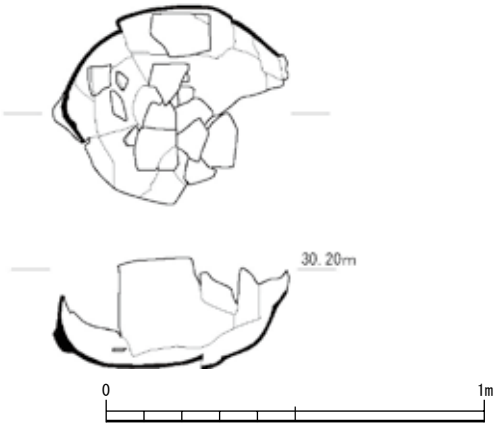
61・61 の 2 号墳墳丘測量図



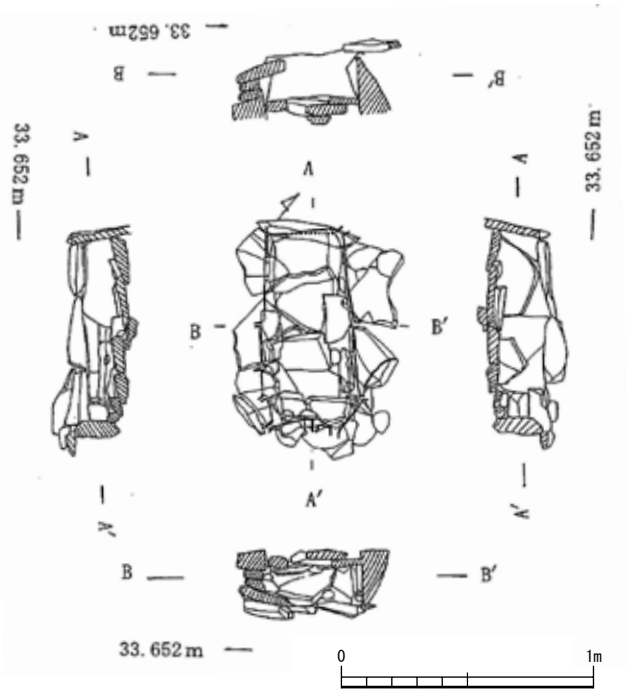
60 号墳主体部実測図



61 号墳小型石室実測図

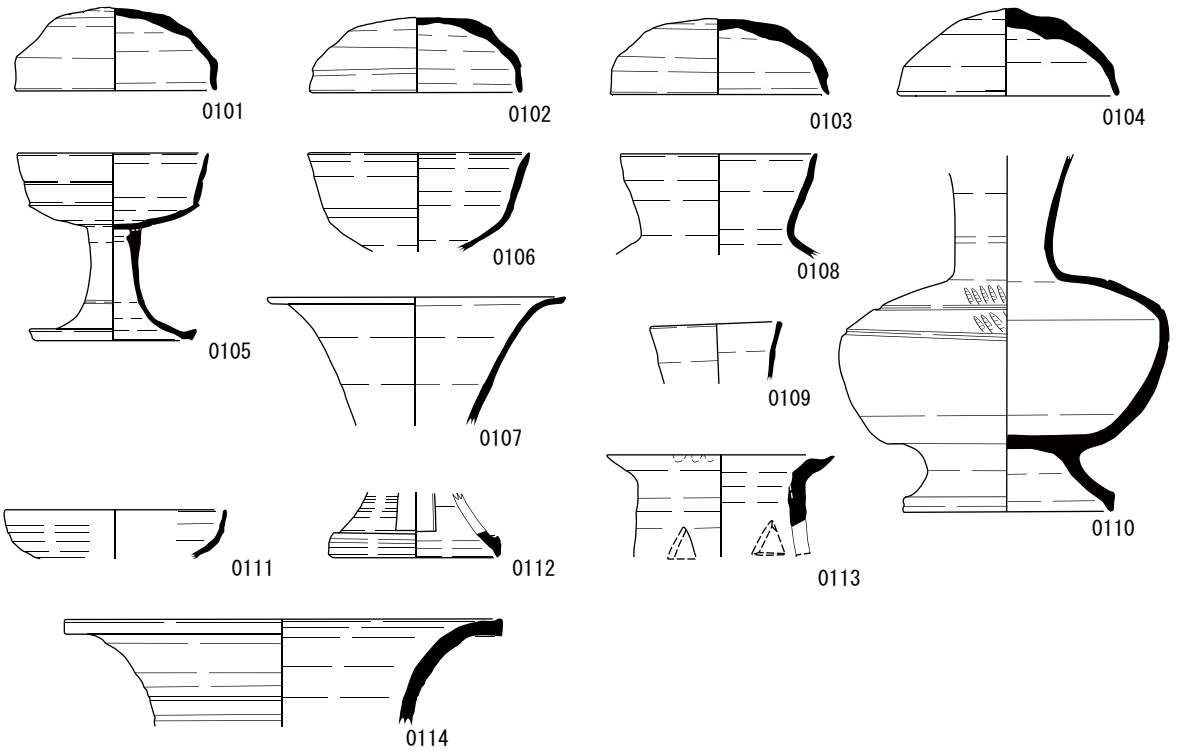


60 号墓土器棺出土状況実測図

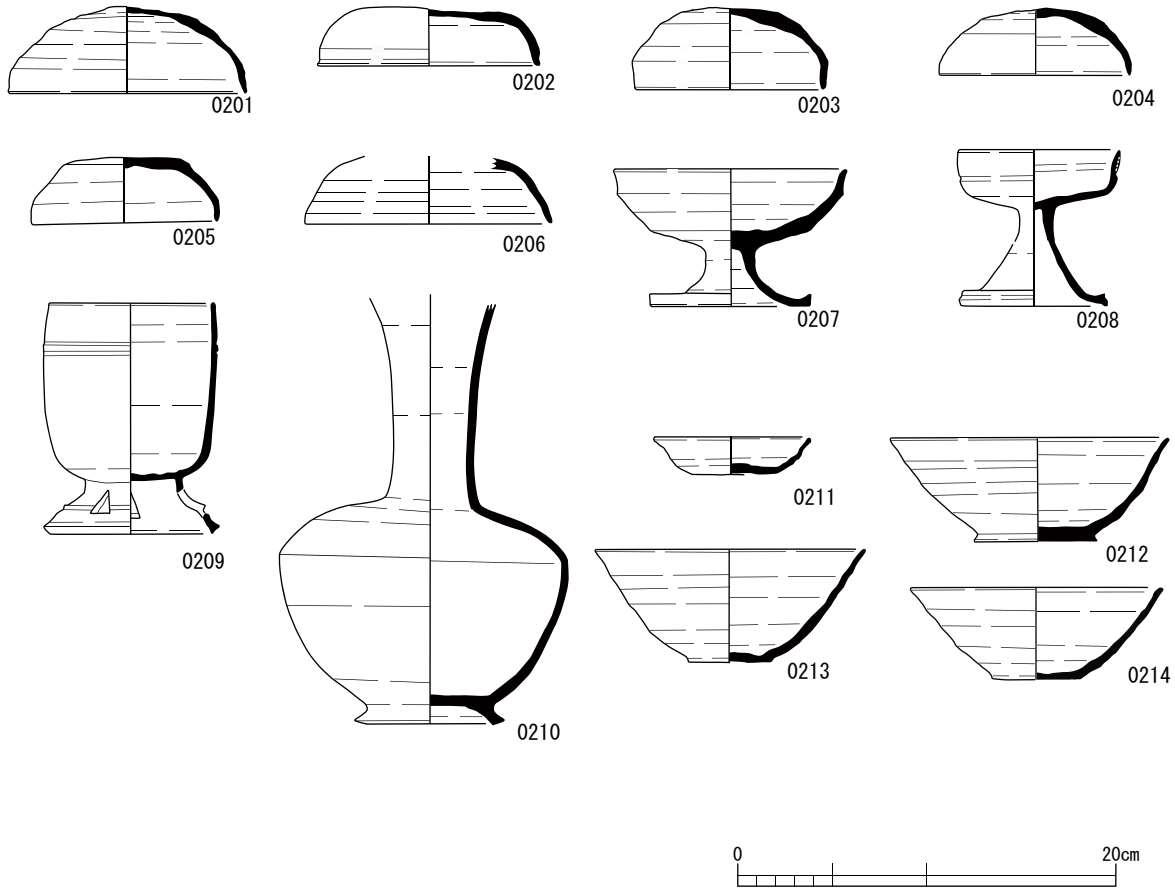


61 号墳の2 石棺実測図

１号墳



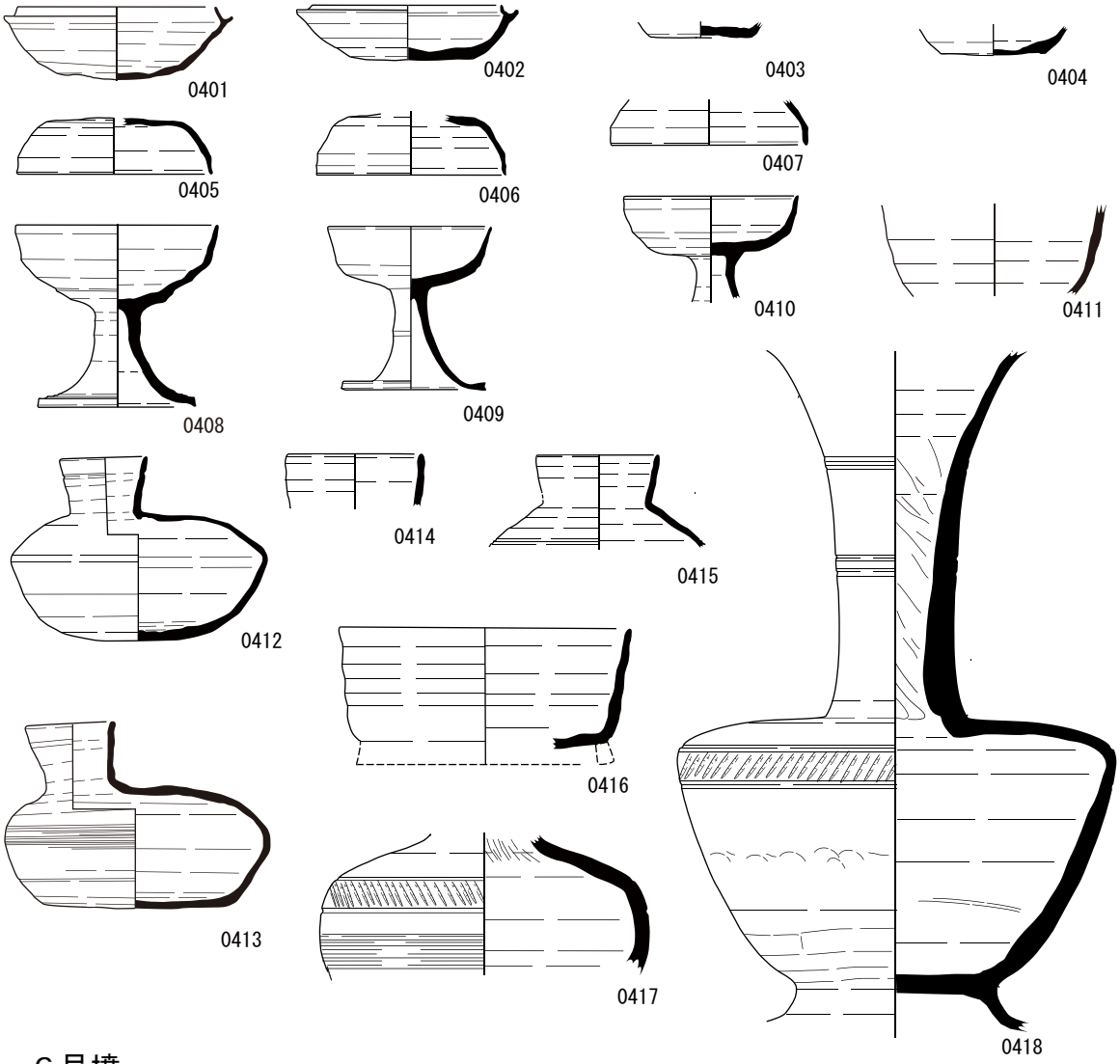
２号墳



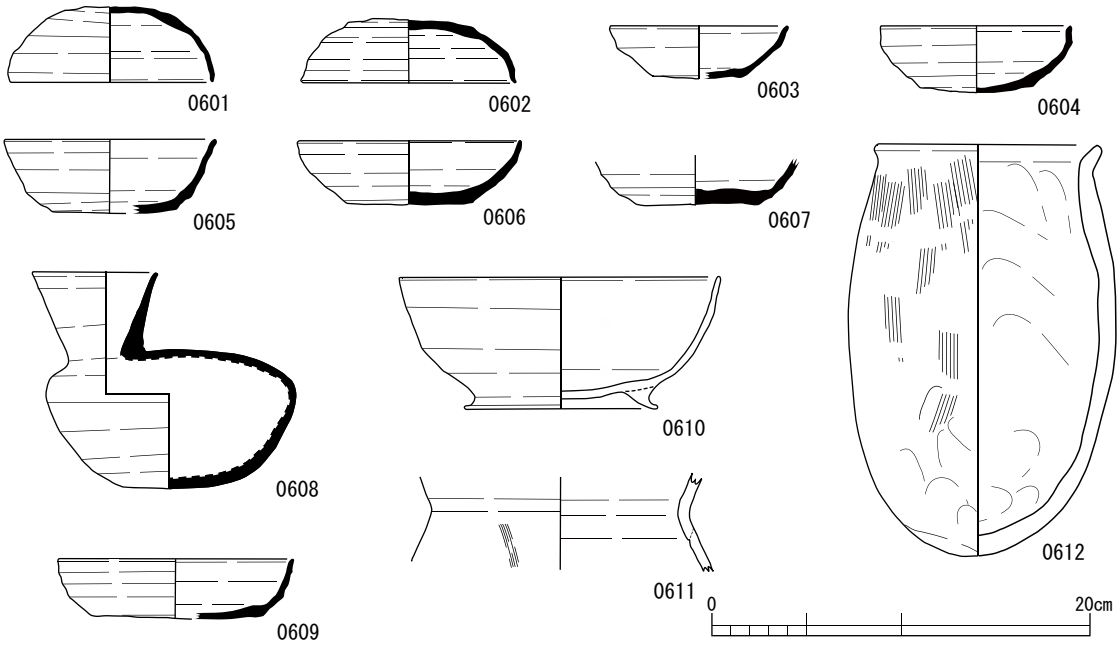
１・２号墳出土土器実測図

図版 22

４号墳

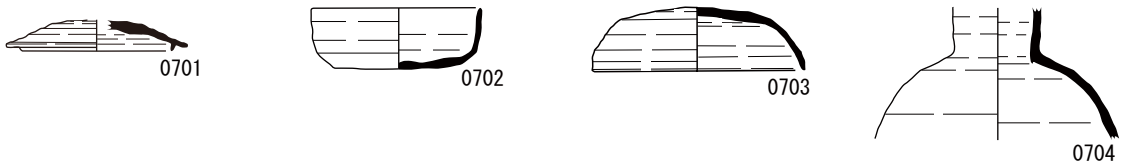


６号墳

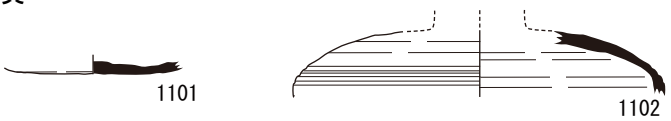


４・６号墳出土土器実測図

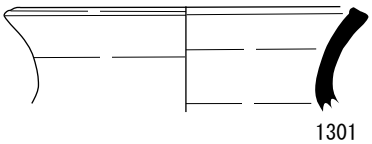
7 号墳



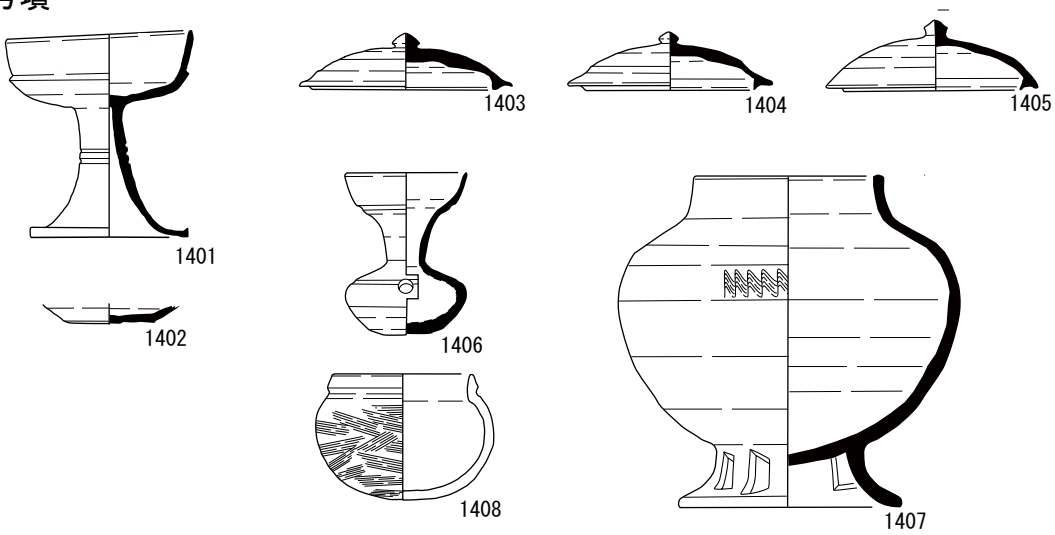
11 号墳

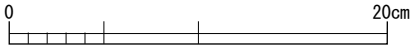


13 号墳



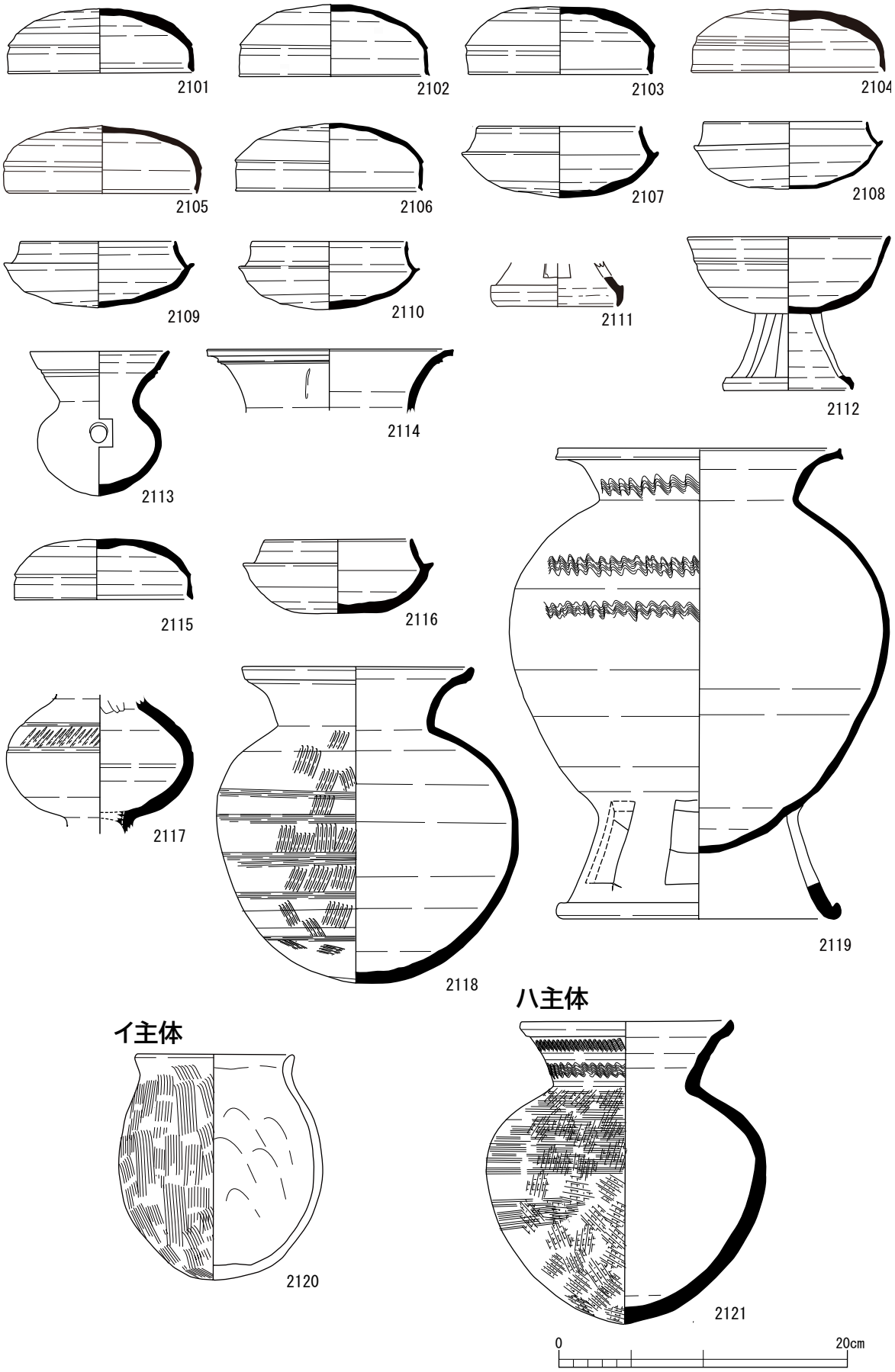
14 号墳



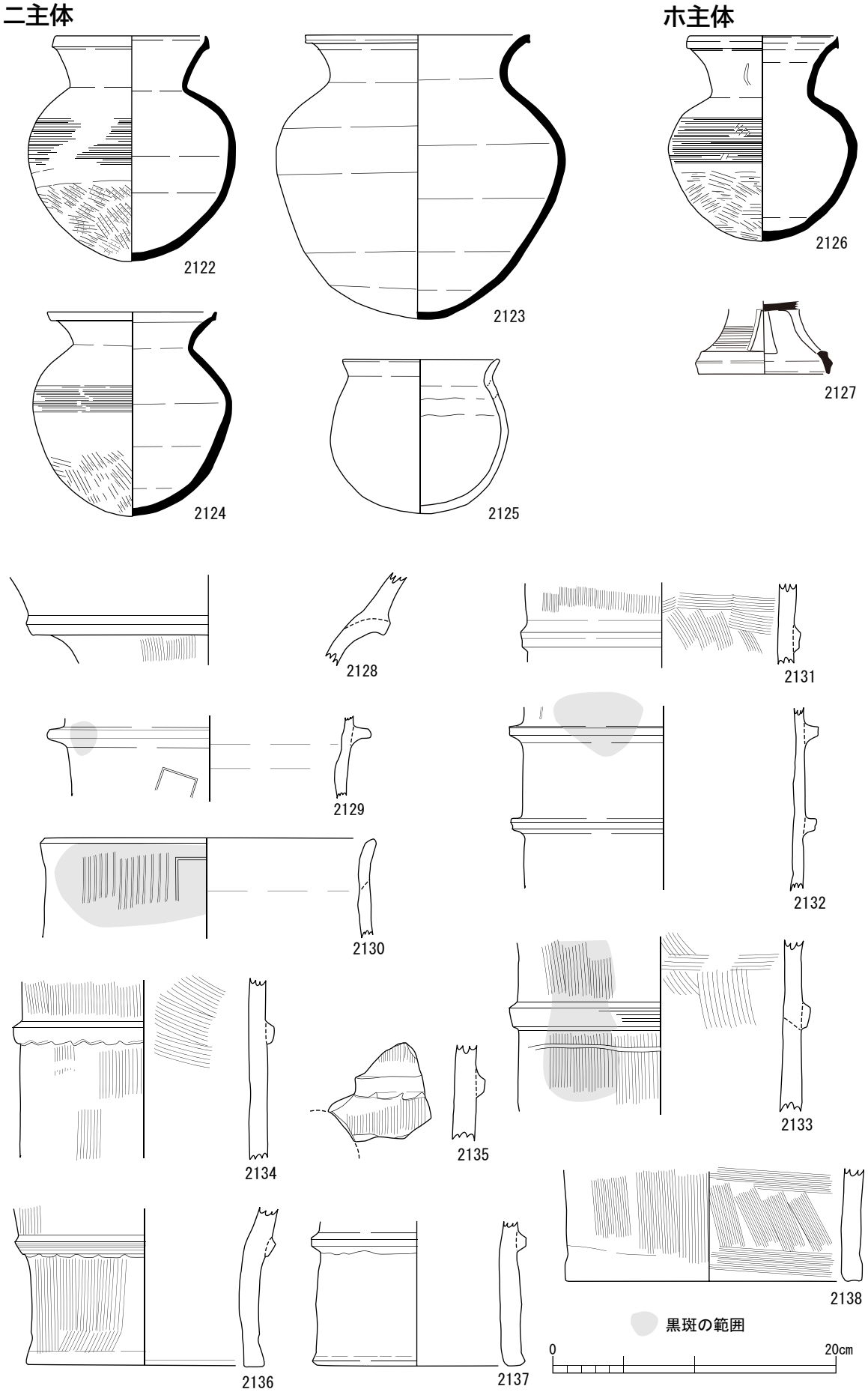


7・11・13・14 号墳出土土器実測図

土器群



21 号墳出土土器実測図 (1)

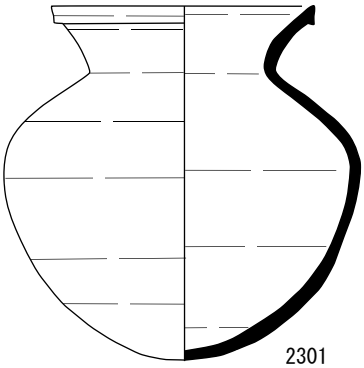


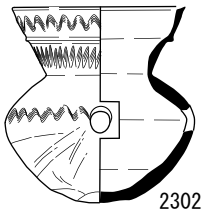
21 号墳出土土器・埴輪実測図 (2)

図版 26

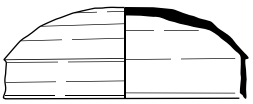
22 号墳

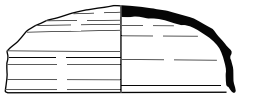
23 号墳

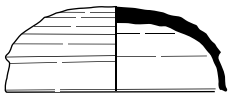


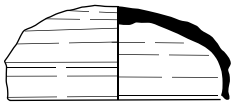


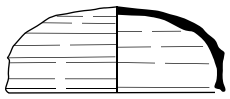
25 号墳土器群

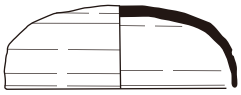


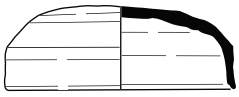


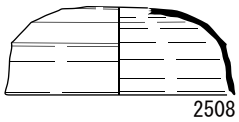


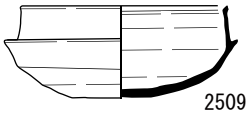


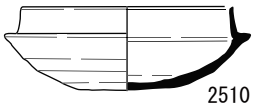


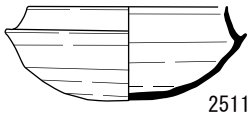


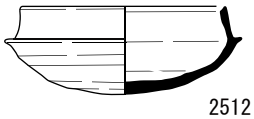


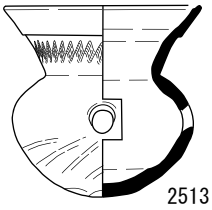




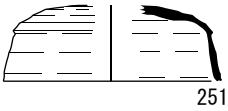


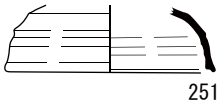


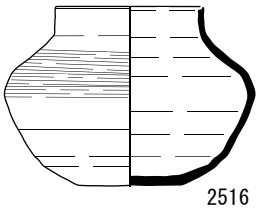


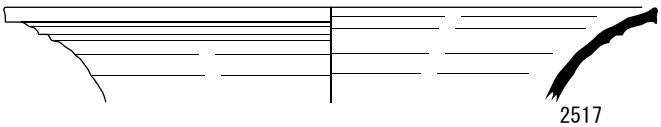


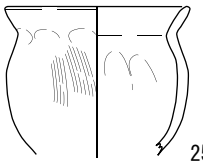
25 号墳封土

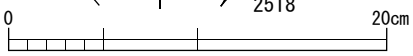






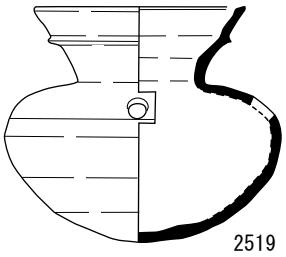




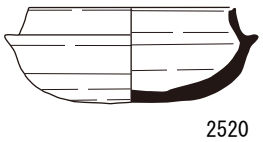


22・23・25(1) 号墳出土土器実測図

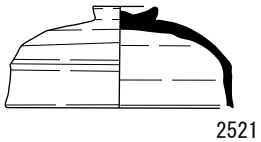
25 号墳第 2 主体



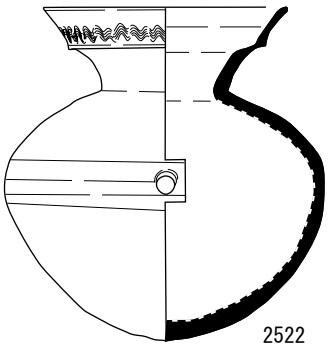
東西セクション

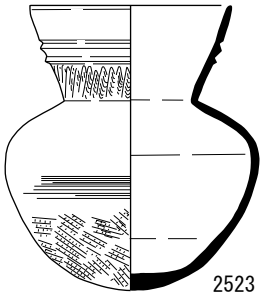


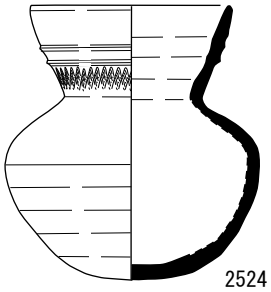
25 号墳第 3 主体 棺上部

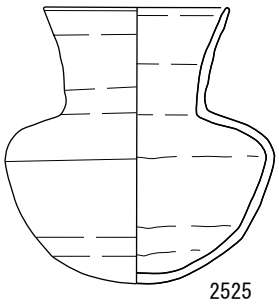


25 号墳第 3 主体 棺内

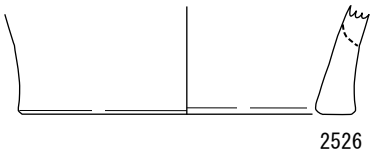


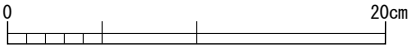






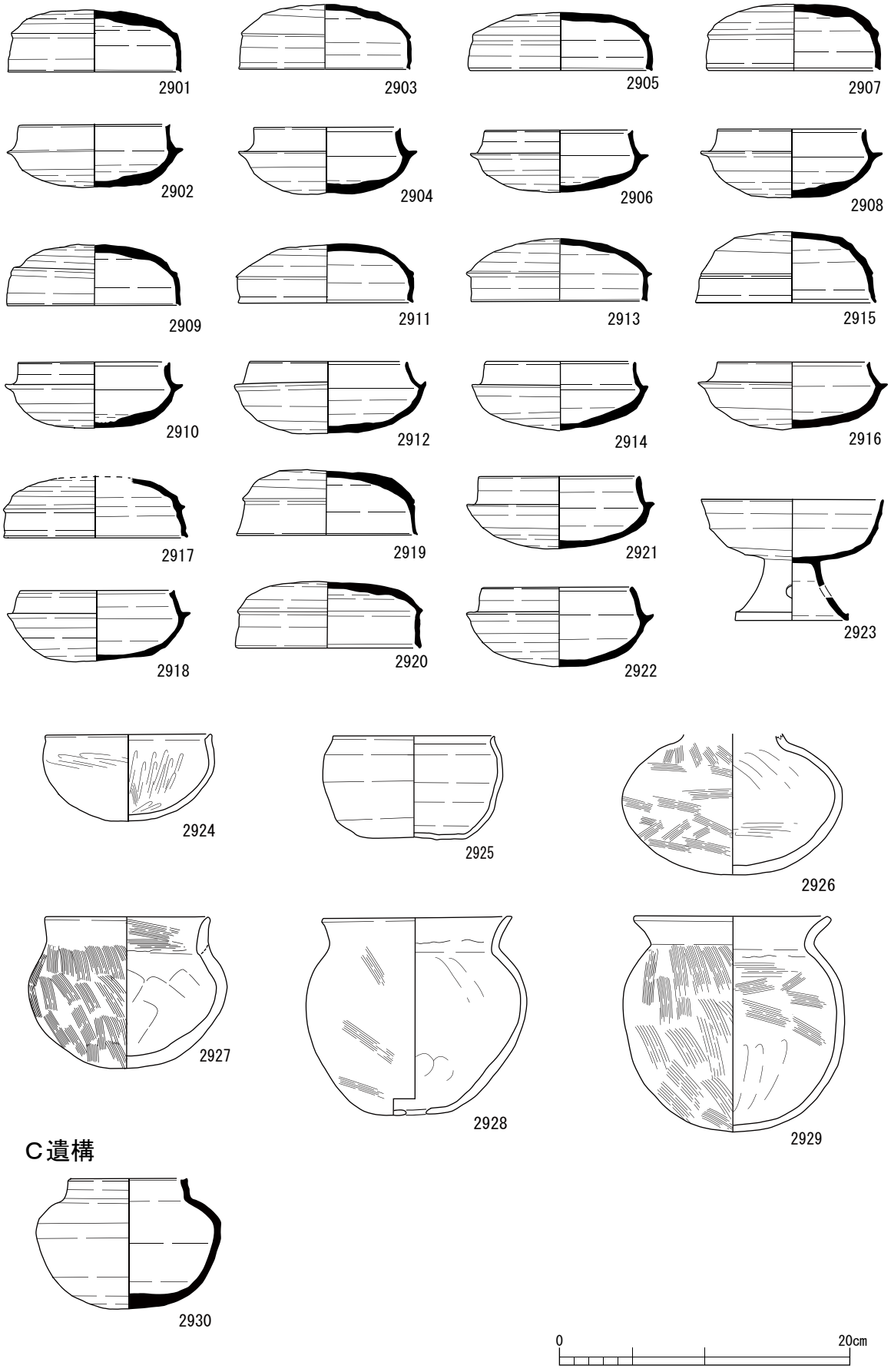
25 号墳封土



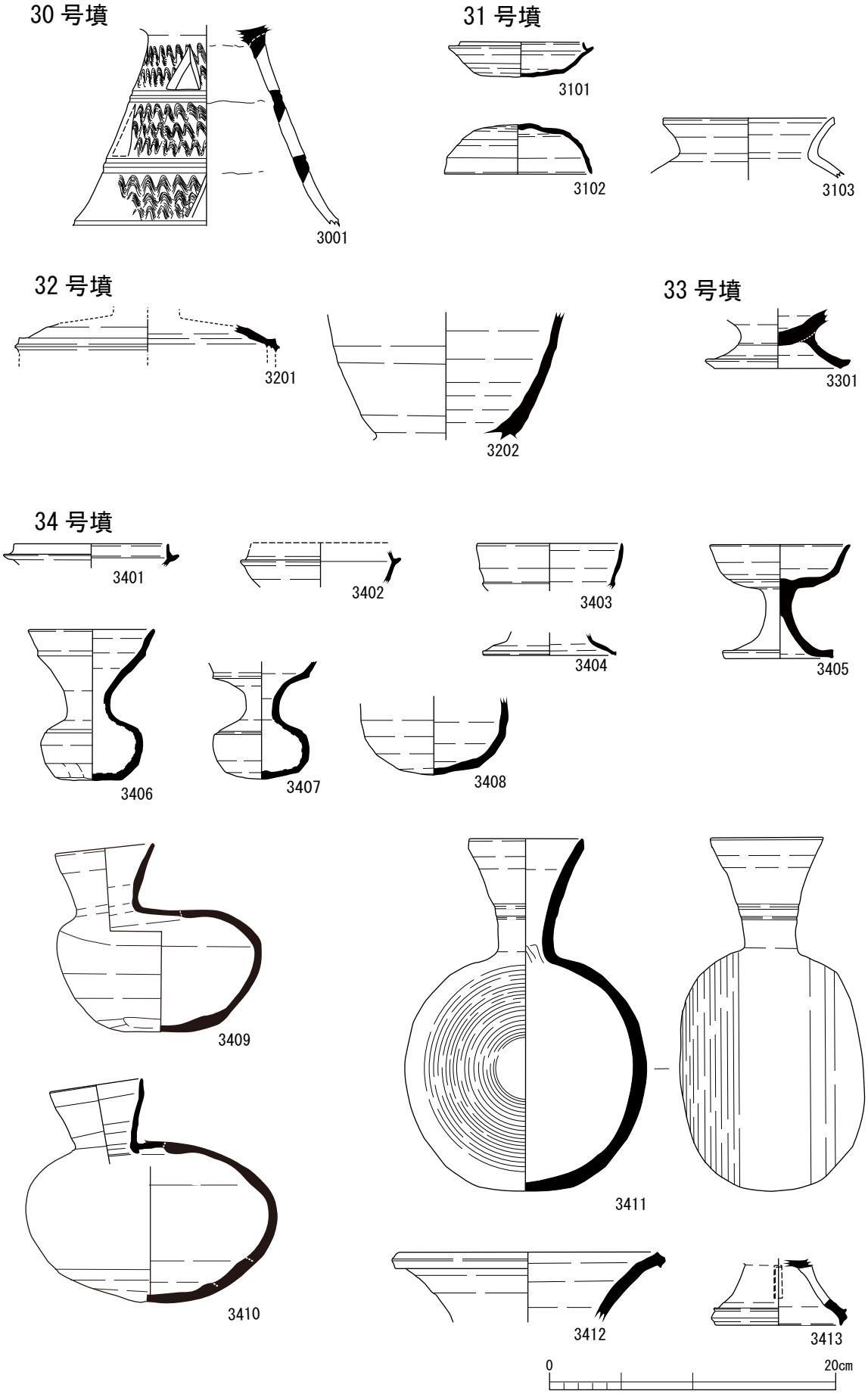


25 号墳 (2) 出土土器実測図

A遺構



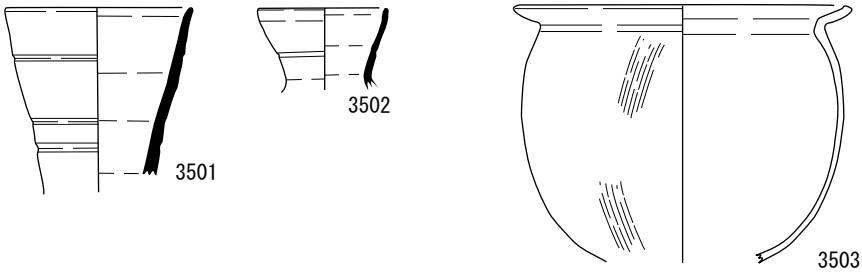
29 号墳出土土器実測図



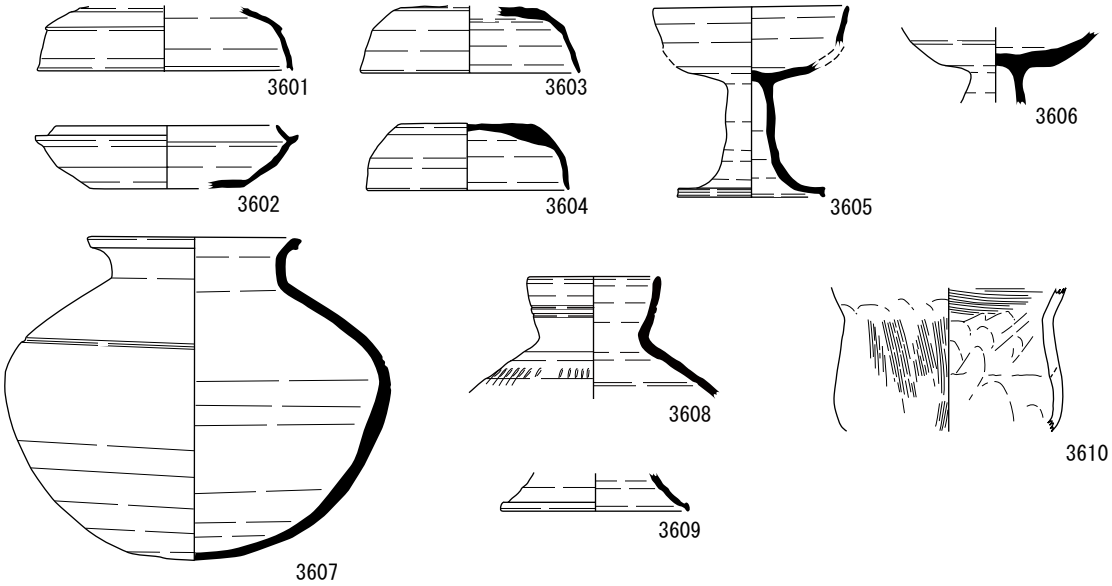
31・32・33・34 号墳出土土器実測図

図版 30

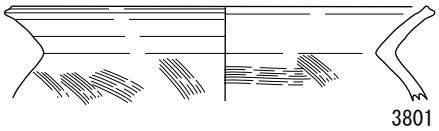
35 号墳



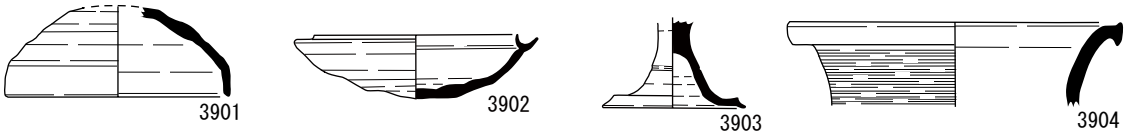
36 号墳



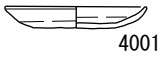
38 号墳

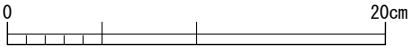


39 号墳



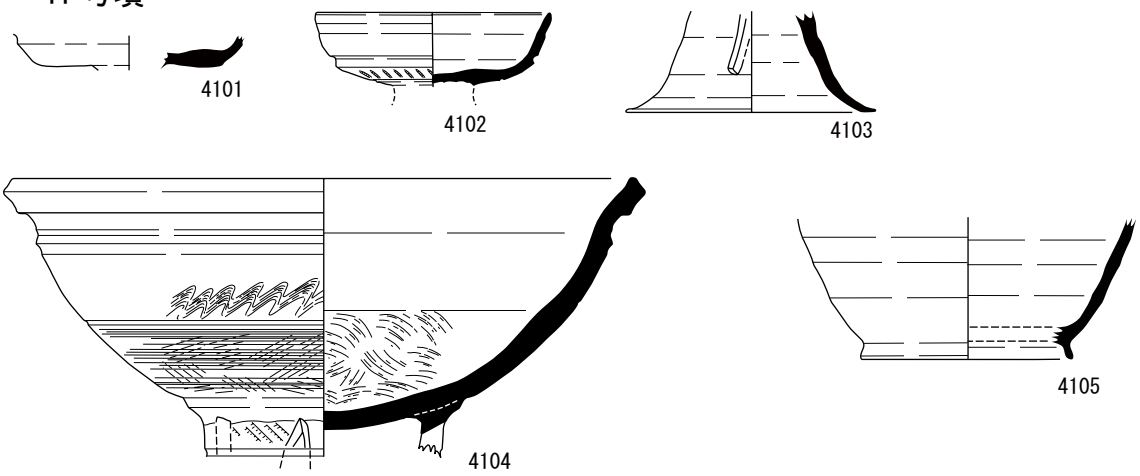
40 号墳



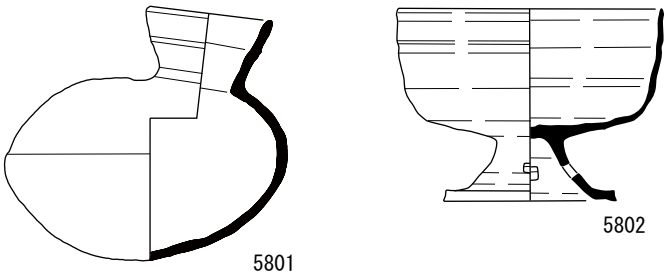


35・36・38・39・40 号墳出土土器実測図

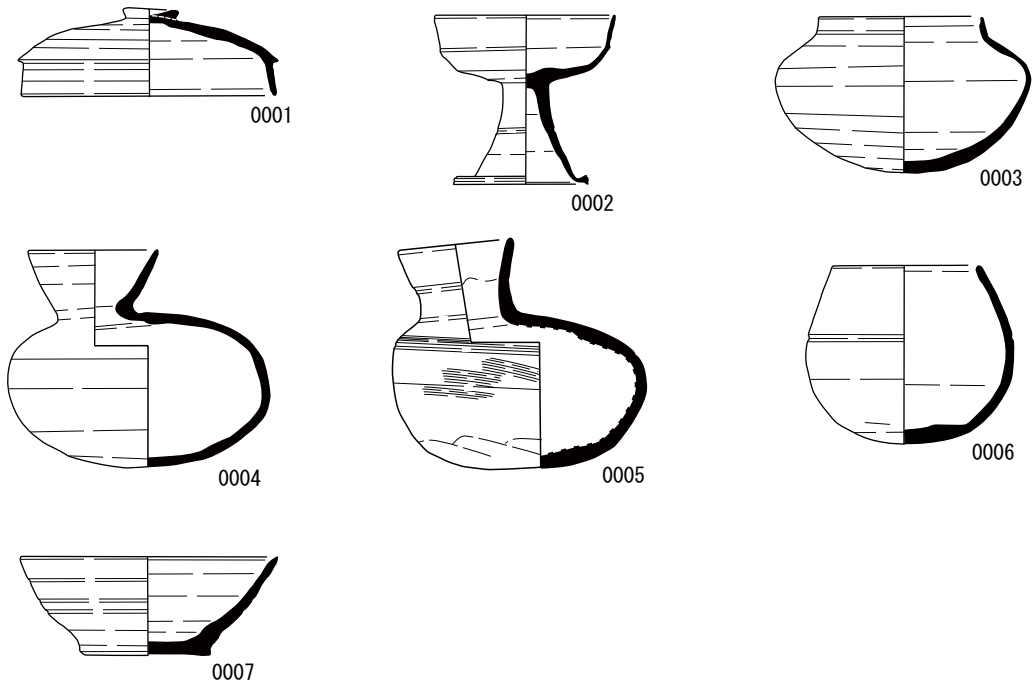
41 号墳

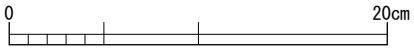


58 号墳

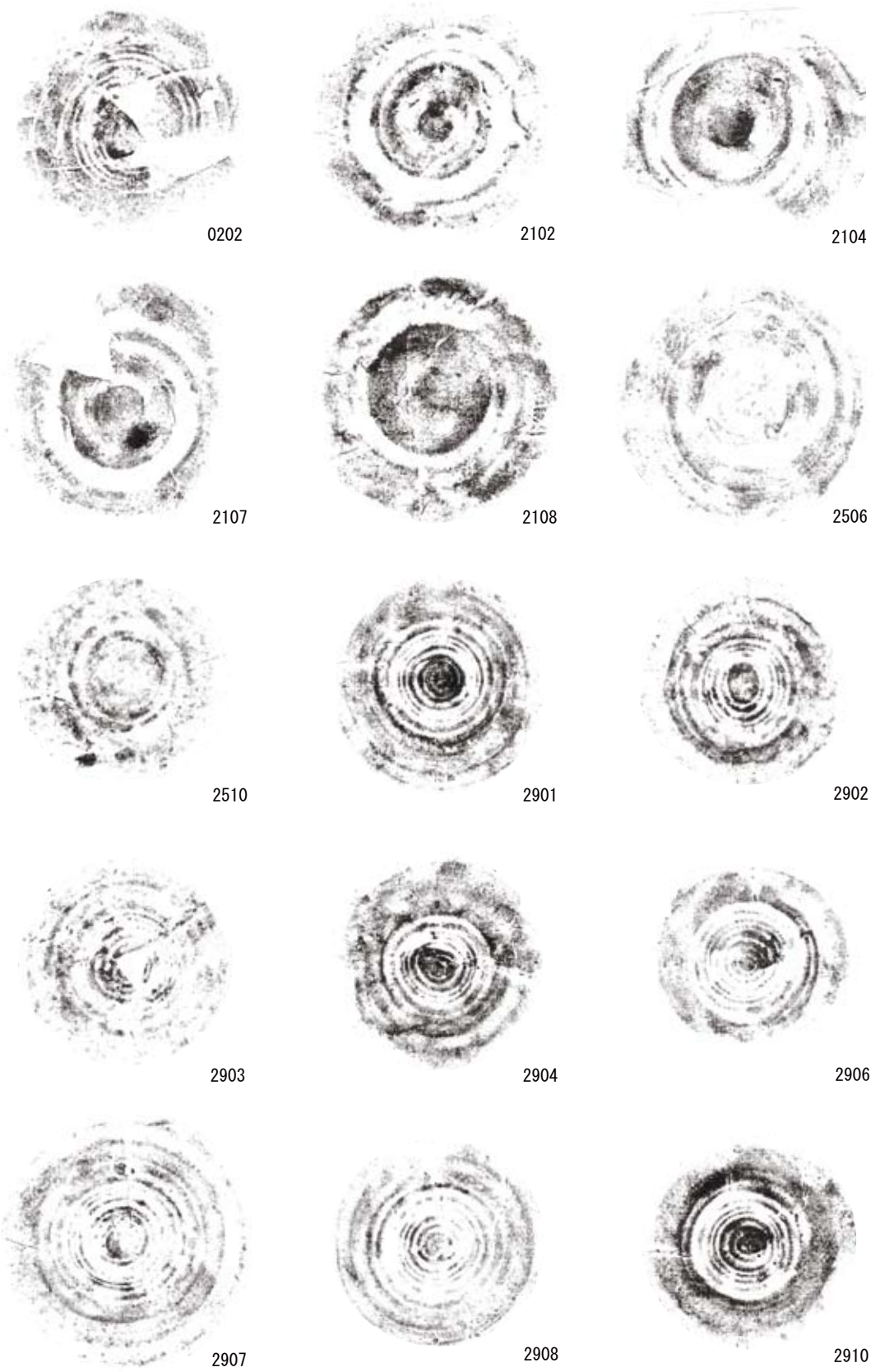


不明

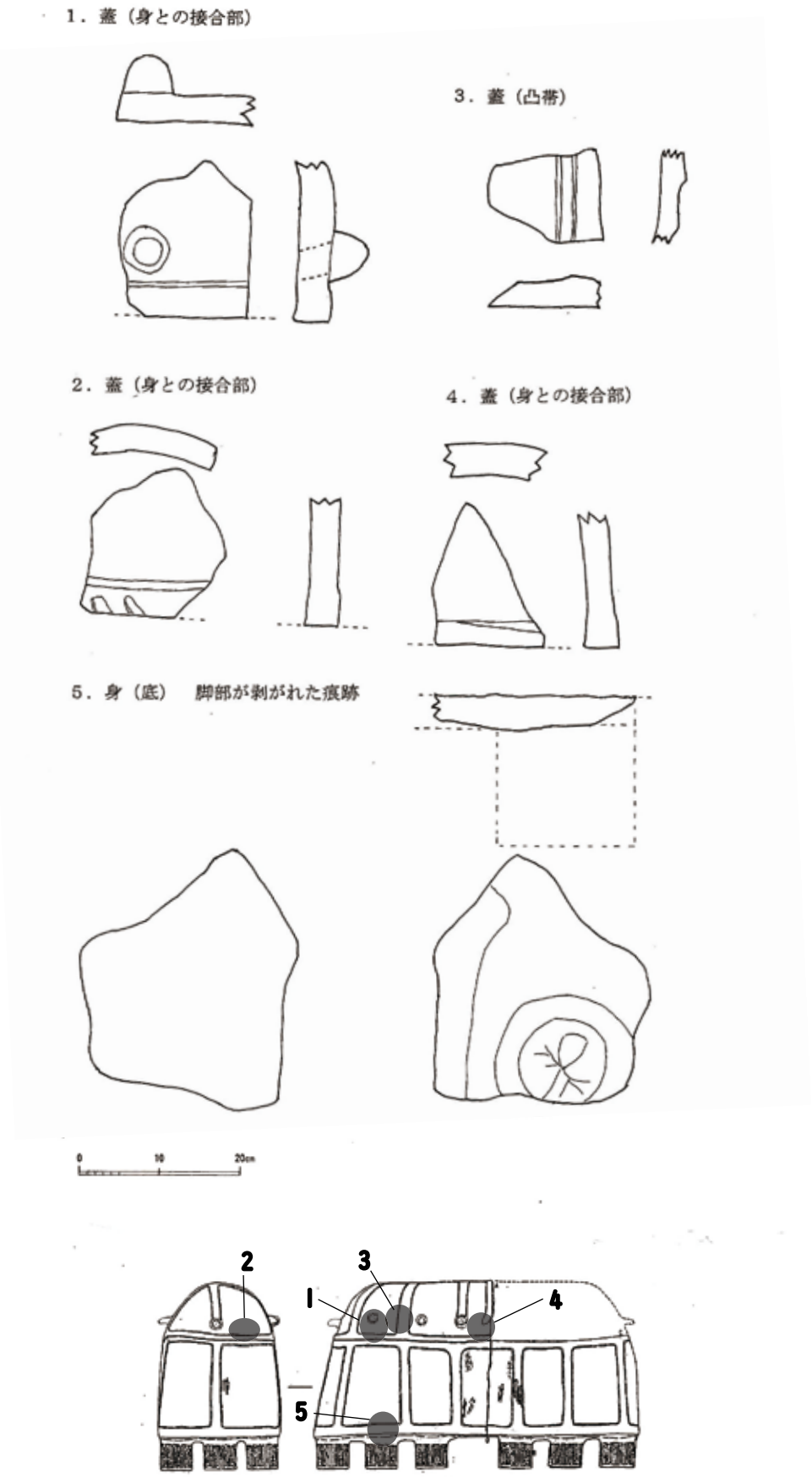




41・58 号墳・無注記土器実測図


0202
2102
2104
2107
2108
2506
2510
2901
2902
2903
2904
2906
2907
2908
2910
0
10cm

出土須恵器拓影

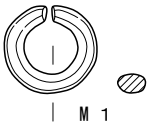


注１　岡山県埋蔵文化財発掘調査報告 44「塚の前古墳」２号陶棺　岡山県教育委員会文化課

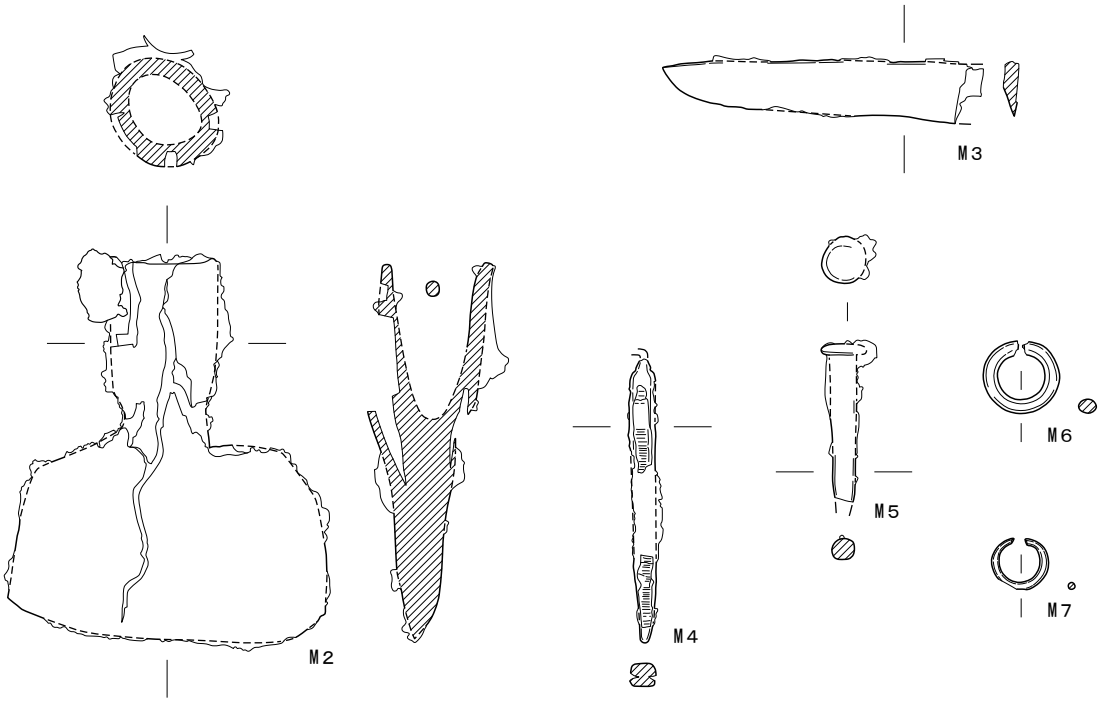
土師質亀甲形陶棺片実測図

図版 34

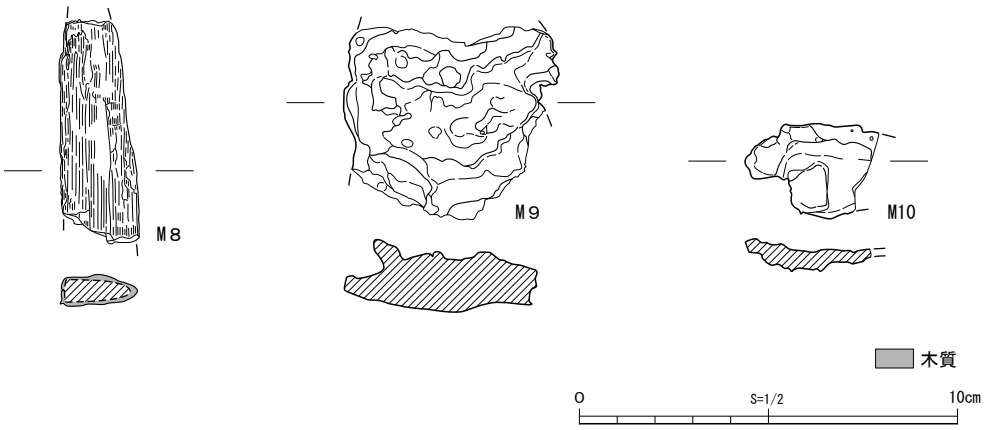
１号墳



２号墳

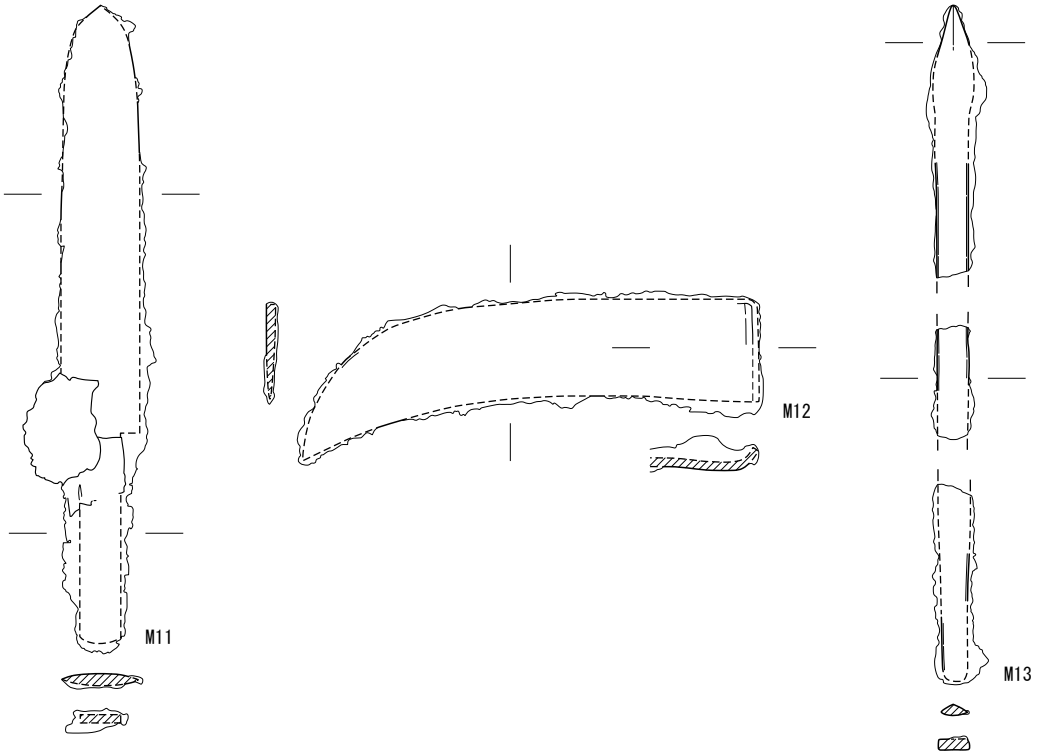


４号墳

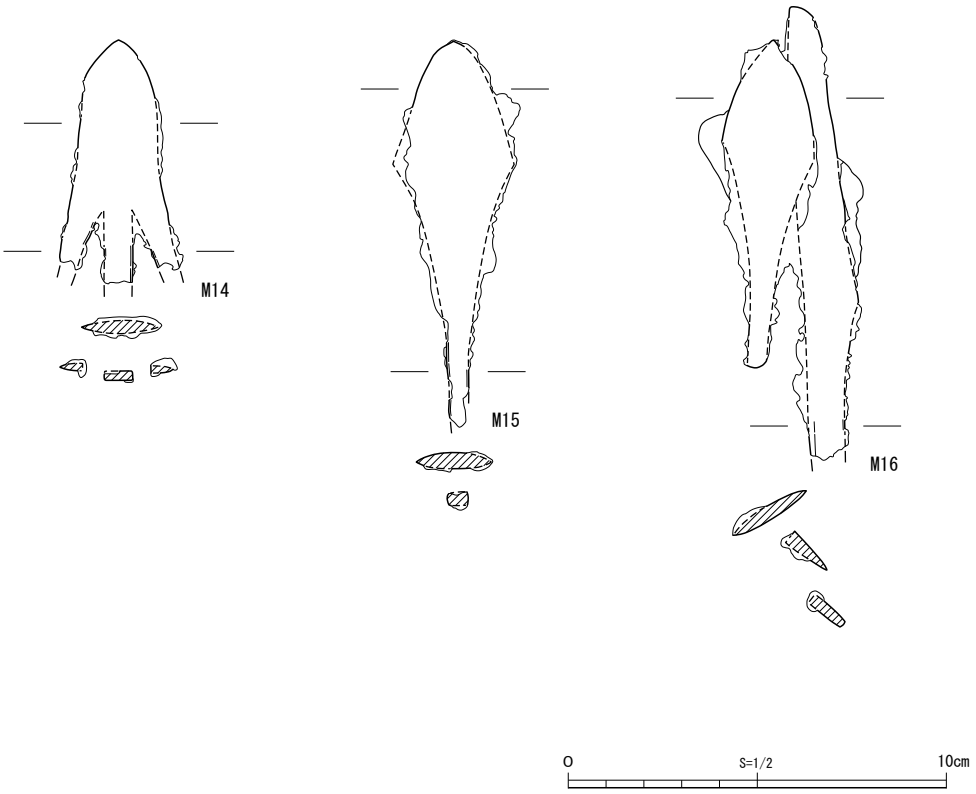


出土金属製品実測図（1）

９号墳



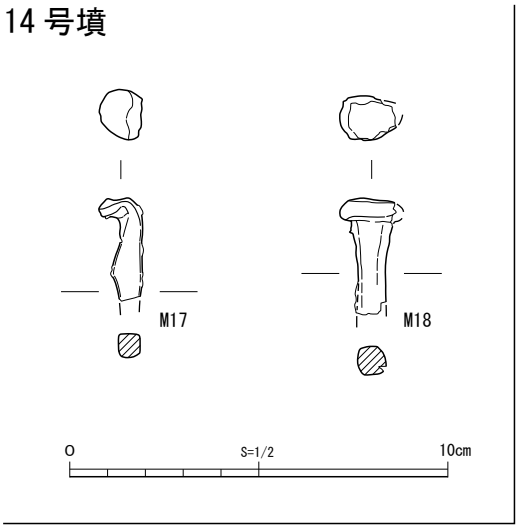
10 号墳



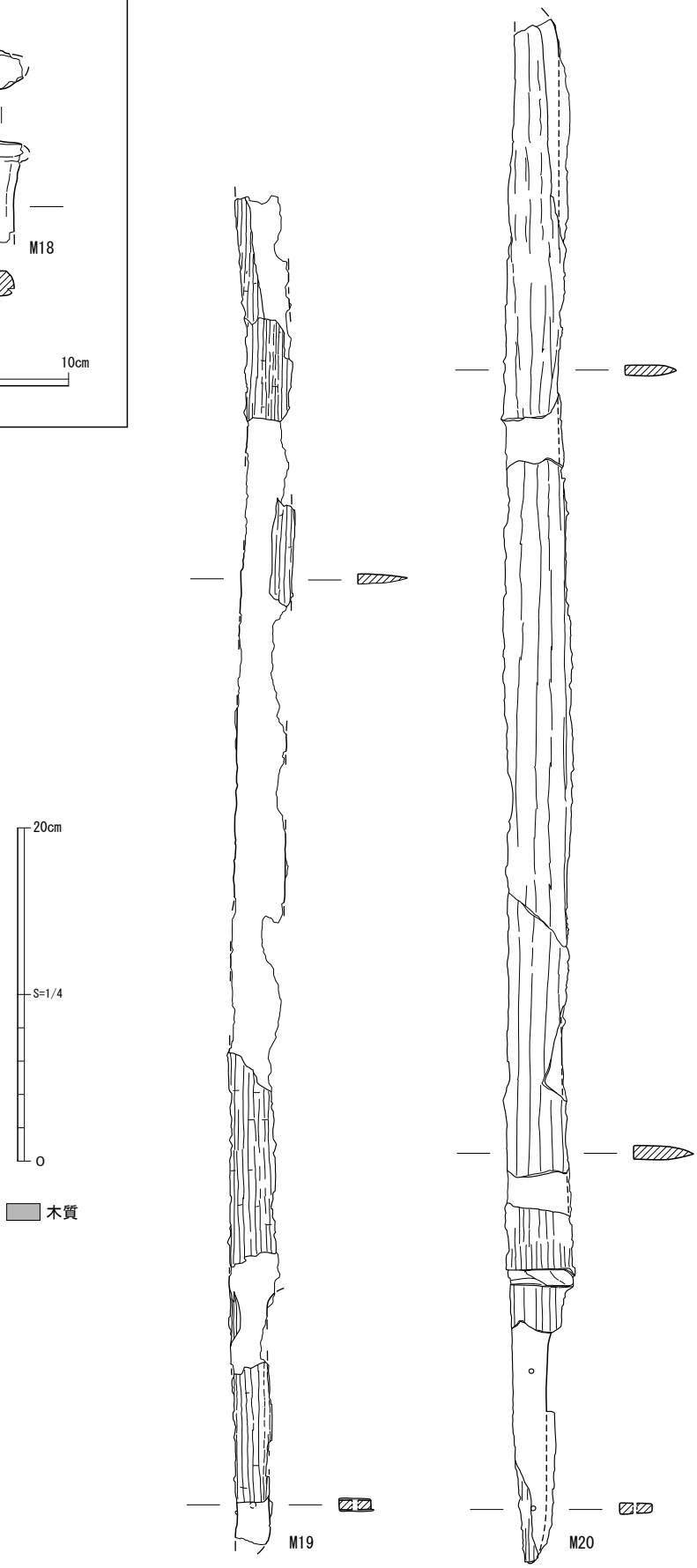
出土金属製品実測図（2）

図版 36

14 号墳

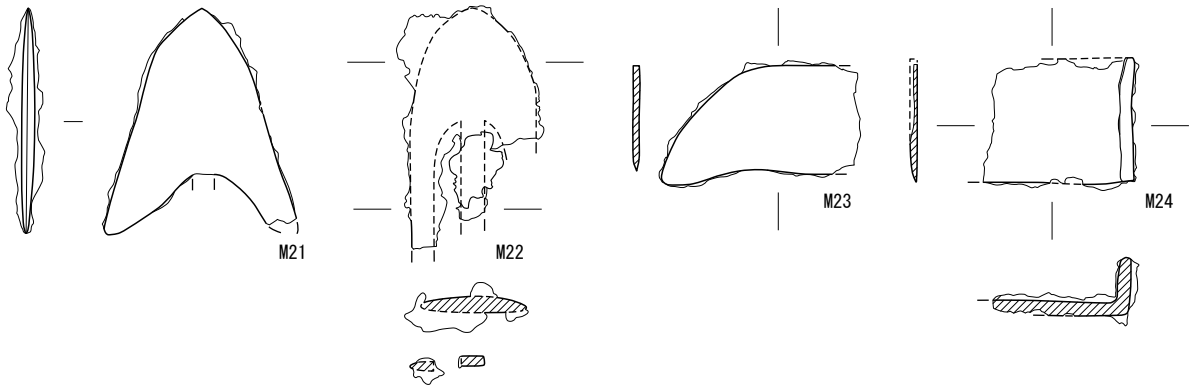


21 号墳

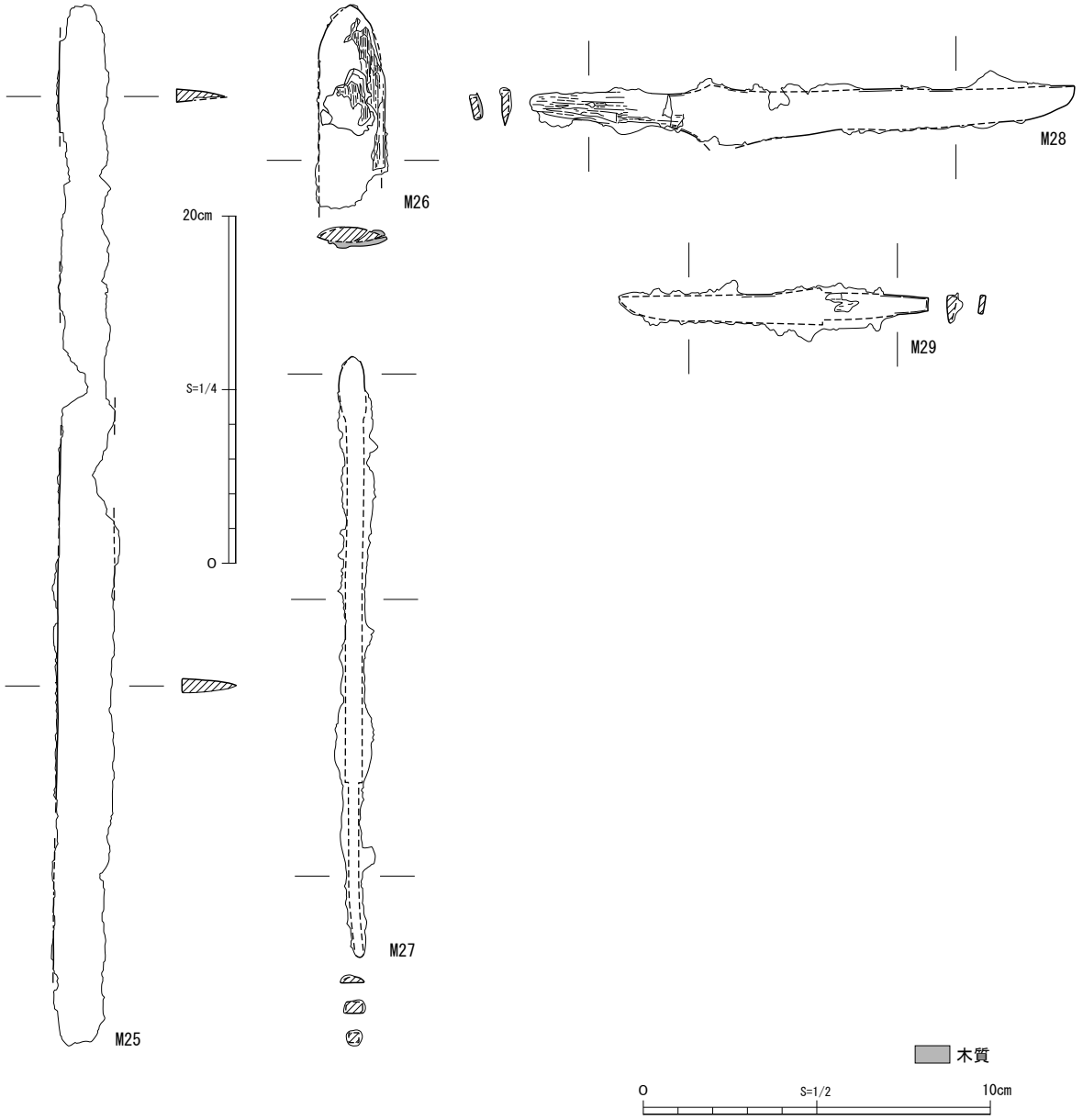


出土金属製品実測図（3）

23 号墳



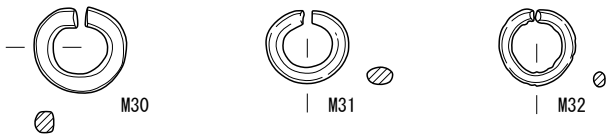
25 号墳



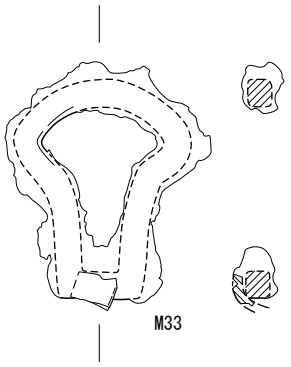
出土金属製品実測図（4）

図版 38

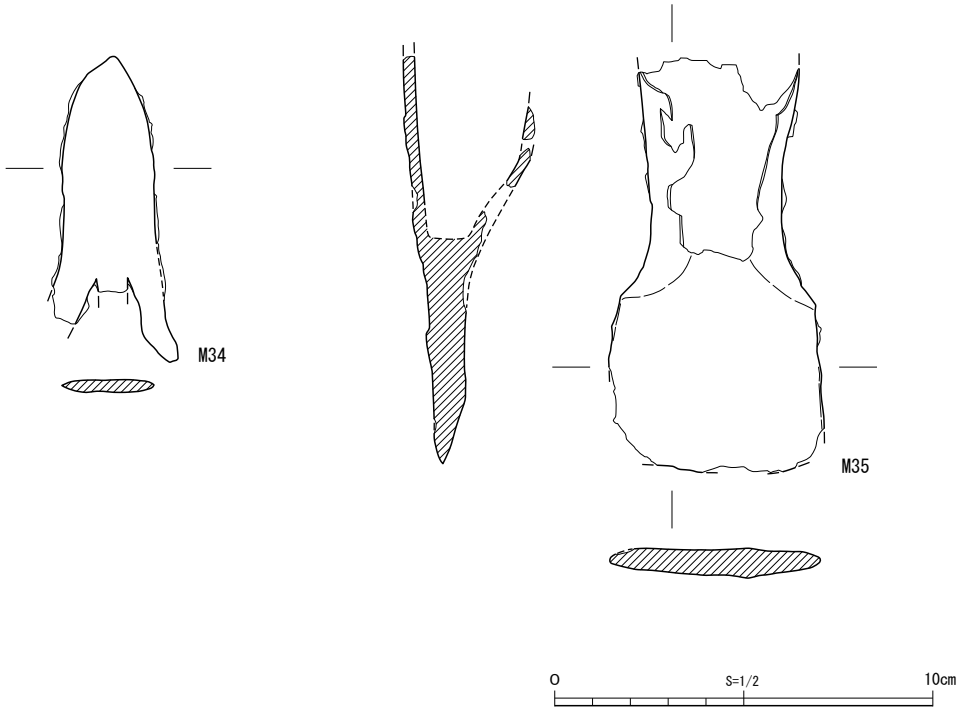
34 号墳



36 号墳

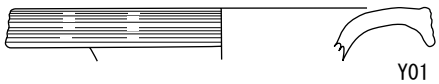


出土古墳不明

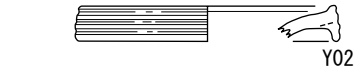


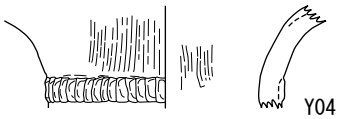
出土金属製品実測図（5）

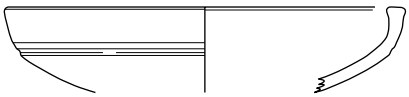
（4 号墳）

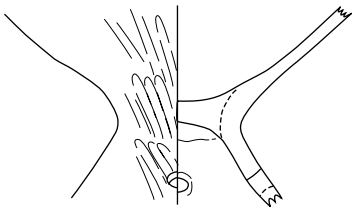


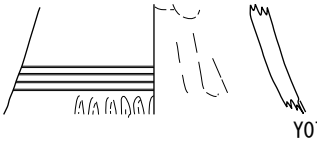
（21 号墳）

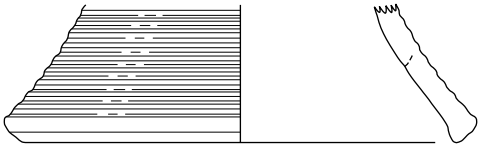




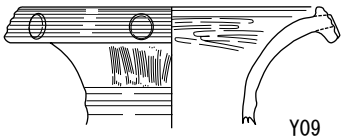


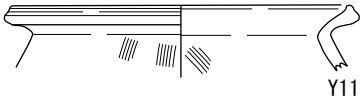


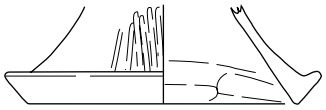




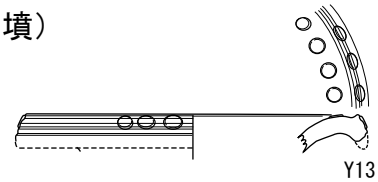
（23 号墳）

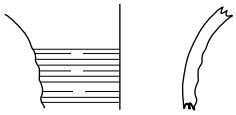


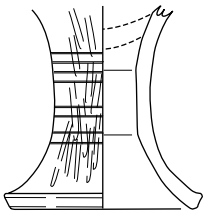


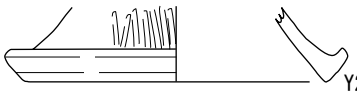


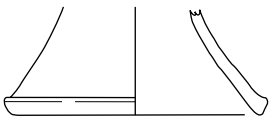
（25 号墳）

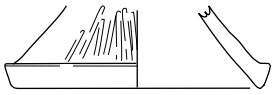








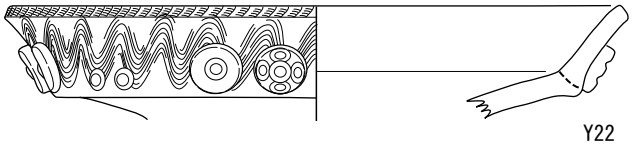


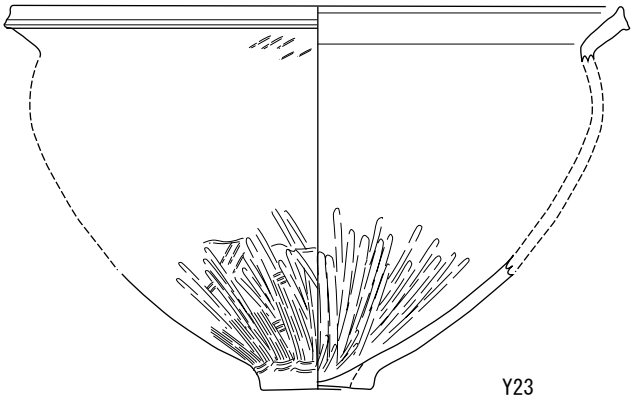


出土弥生中期土器実測図

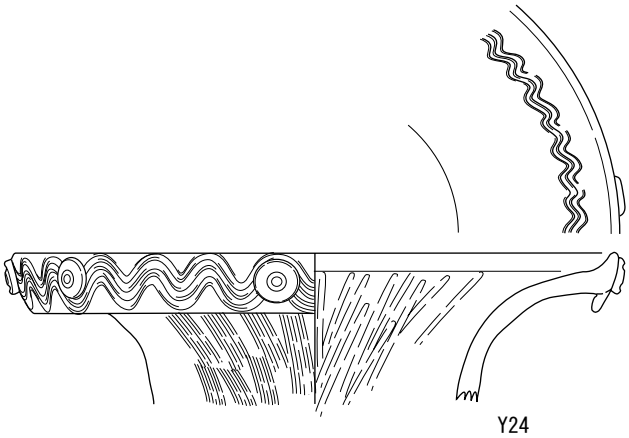
図版 40

32 号墓

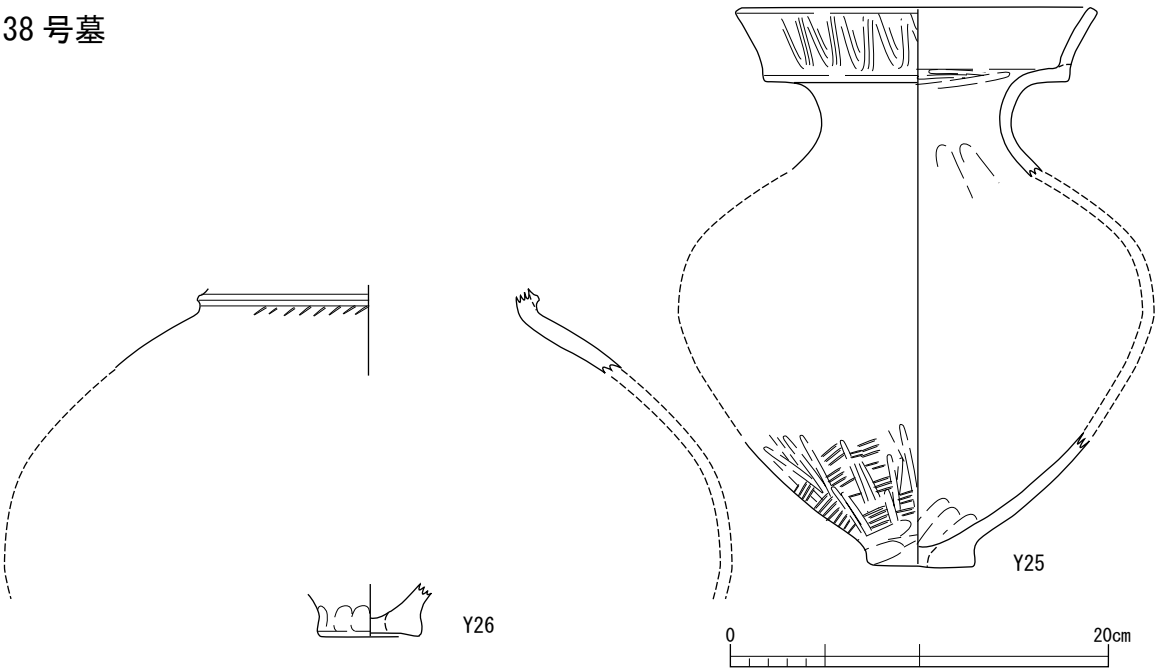




37 号墓



38 号墓



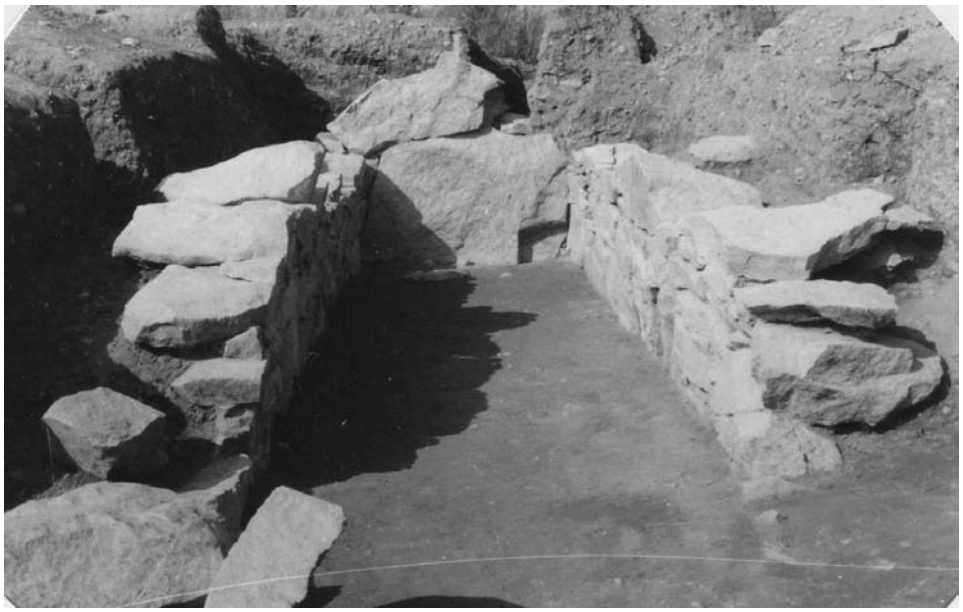
出土弥生後期土器実測図（1）

60 号墓

出土弥生後期土器実測図（2）

写真図版

1号墳石室

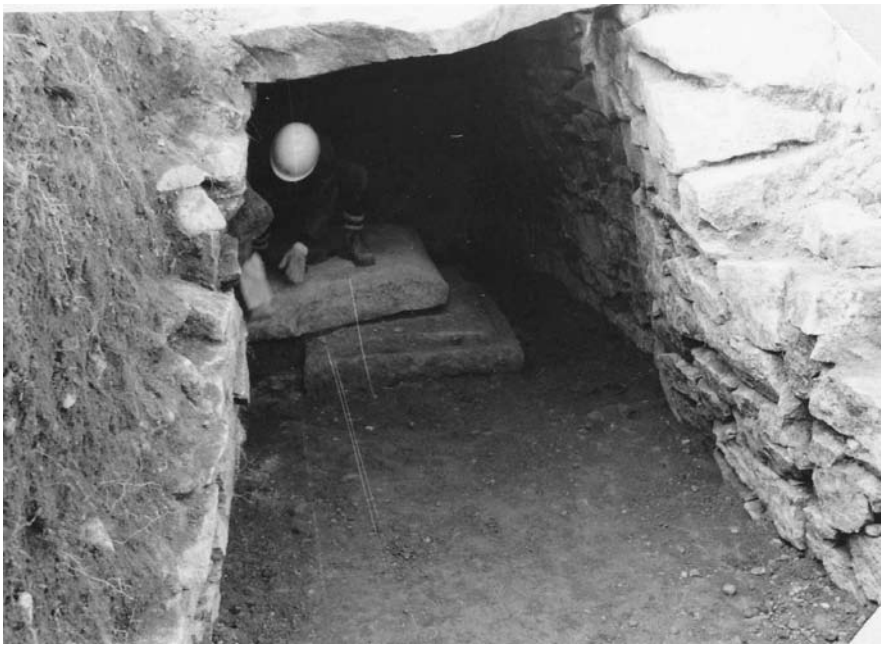


写真図版２

２号墳石室

３号墳石室

４号墳石室



写真図版 4

６号墳石室

7号墳石室

9号墳主体部

10号墳箱式石棺出土状況

10号墳箱式石棺人骨出土状況

写真図版 6

10 号墳箱式石棺人骨出土状況

石棺内鉄器出土状況

10 号墳付設排水路出土状況

12 号墳石室

13 号墳小石室

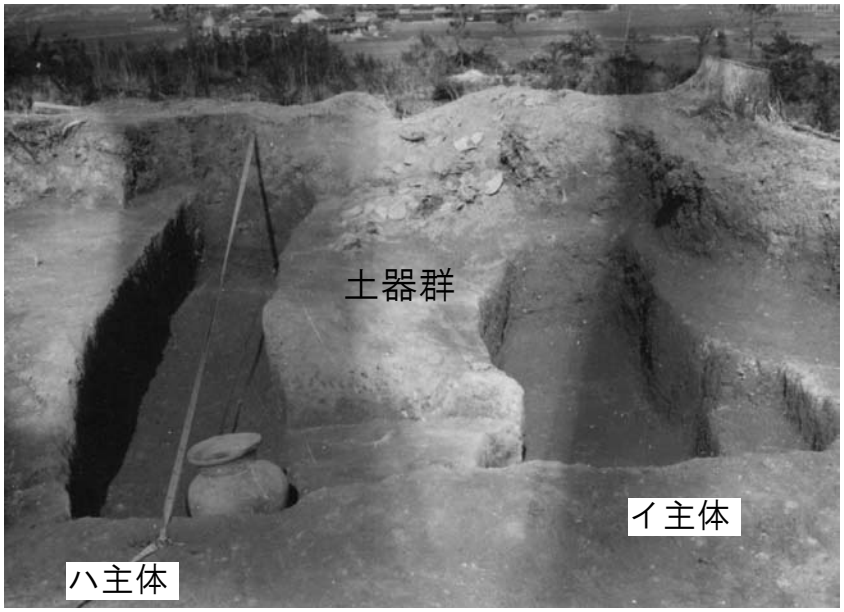
写真図版８

14 号墳石室

21 号墳主体部

21 号墳主体部

ハ主体



イ主体

21 号墳土器群出土状況

写真図版 10

21 号墳主体部と
家形埴輪出土状況

25 号墳第 3 主体

25 号墳第 1 主体と
土器群

31 号墳石室

34 号墳石室

写真図版 12

35 号墳石室

37 号墳壷棺
出土状況

39 号墳石室

40 号墳主体部

40 号墳主体部

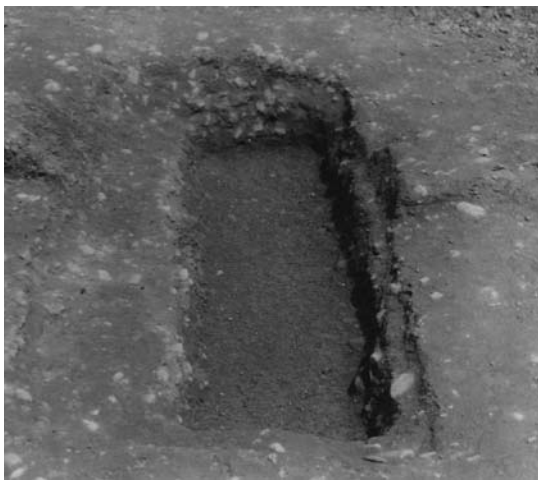
51 号墳箱式石棺

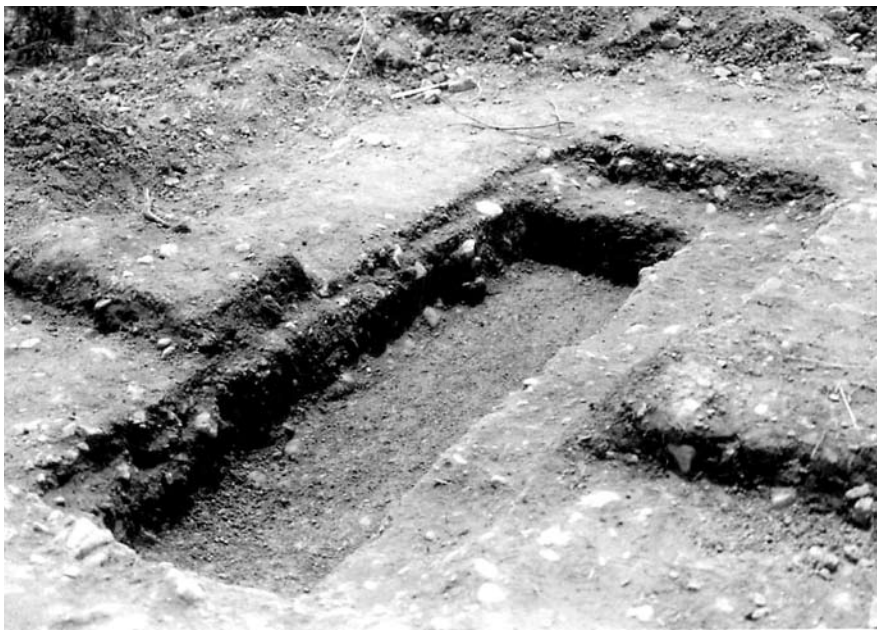
52 号墓主体部
検出状況

写真図版 14

52 号墓主体部小石槨

52 号墓壷棺出土状況





60 号墳主体部

1 号墳

2 号墳

6 号墳

14 号墳

58 号墳

34 号墳

写真図版 16

21 号墳

2101

2102

2105

2106

2107

2108

2109

2115

2113

2120

2125

2121

2126

21 号墳出土家形埴輪

23 号墳

写真図版 18

25 号墳

2501

2502

2503

2504

2505

2506

2509

2510

2521

2511

2512

2520

2519

2513

2525

2522

2523

2524

29 号墳

2901

2903

2907

2902

2904

2908

2909

2911

2913

2910

2912

2914

2915

2917

2920

2916

2918

2921

2928

2929

作業風景

2018.6.1 ～

土器洗（西条会館）　2018.10.26

木箱の遺物整理（西条会館）　2018.6.1

発掘調査日誌　2019.5.20

地元説明会 2019.1.12

地元説明会（西条会館）　2020.1.11

接合作業（西条会館）　2019.1.18

接合作業（西条会館）　2019.5.10

接合作業（陵北小学校）　2020.6.5

土器実測（西条会館）　2018.7.20

西条古墳群

兵庫県加古川市神野団地造成に伴う埋蔵文化財発掘調査

（1963 ～ 1964 年）の成果

発行日　2022 年 3 月 31 日

企画・編集　東播磨地域史懇話会考古部会

印刷　日坂印刷所

＊この調査研究は加古川市協働のまちづくり推進事業補助金を活用しての取組みです。